秋田県文化財調査報告書第436集

鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡
樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡

―高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書―

２００８・３

秋 田 県 教 育 委 員 会

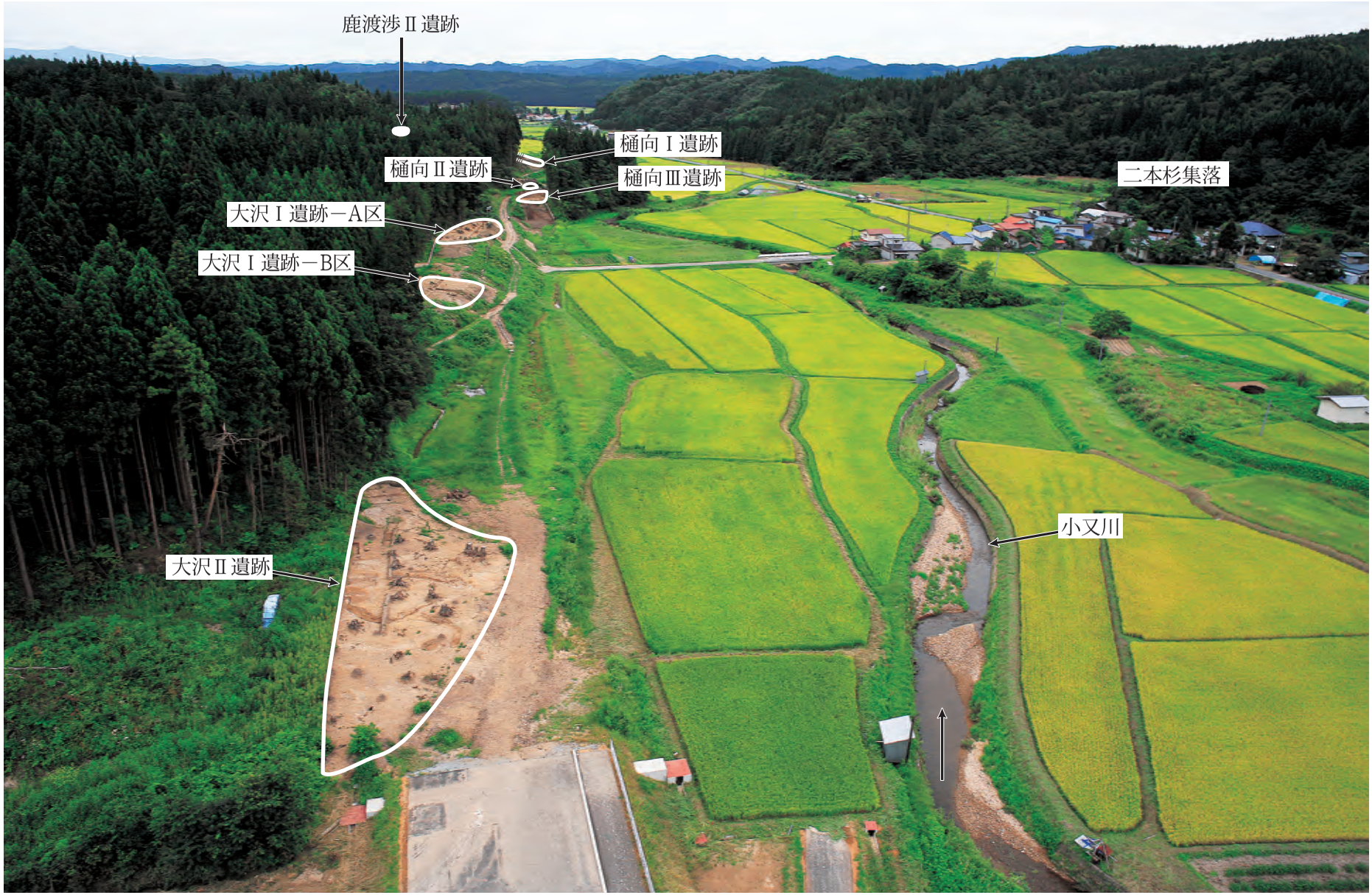
シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の
「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7㎝、凝灰岩。

鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡
樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡

―― 高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 ――

２００８・３

秋 田 県 教 育 委 員 会



上岩川地内遺跡群（南から）

参照図版

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田をめざす開発事業の根幹を成すものであります。本教育委員会では、これらの地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線の建設事業に先立って平成18年度に三種町において実施した鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、縄文時代の石器製作跡や原石採掘跡が検出され、縄文時代の頁岩を採取・加工した遺跡であることが明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました秋田県建設交通部、三種町教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申しあげます。

平成20年3月

秋田県教育委員会

教育長　根　岸　　均

例　言

1　本報告書は、平成18年度に行った高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線に係る三種町の鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡の発掘調査成果を収めたものである。

2　本遺跡の調査成果については、既にその一部が公表されているが、本報告書の内容を正式なものとする。

3　遺跡基本層序と遺構層序の土色表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』2002年版に拠った。

4　本書に使用した遺跡空中写真は、株式会社シン技術コンサルに委託したものである。

5　別編の「放射性炭素年代測定結果報告」は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

6　本報告書を作成するに当たり、次の方からご指導、ご助言を賜った。記して感謝申し上げる。

石川恵美子　　岡村道雄　　国武貞克　　栗山知士　　合地　信生　　斎藤　岳

秦　　昭繁　　三輪明美　　森先一貴（五十音順・敬称略）

7　執筆分担は次の通りである。編集は利部修が行った。

はじめに・遺跡の環境：菅原幹夫

鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡の第１章～第２章：利部修、菅原幹夫、今野沙貴子

樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡の第１章～第２章：利部修、菅原幹夫

各遺跡の第３章・別編の２：利部修

凡　例

1　本報告書に掲載した平面図(遺構実測図)に付した方位は、国家座標第Ⅹ系による座標北を示す。座標北と磁北との偏角はN―4°40′―Wである。

2　遺構番号は、種類ごとに下記の略記号を用い、遺構検出順に番号を付したが、後に遺構でないと判断したものは欠番とした。

ＳＸＱ：石器集中部　ＳＫＤ：原石採掘跡　ＳＲ：土器埋設遺構　ＳＮ：焼土遺構
ＳＷ：炭焼成遺構　ＳＫ：土坑　ＳＤ：溝跡　ＳＫＰ：柱穴様ピット
ＳＸ：性格不明遺構

3　遺構の実測図および遺物の実測図には、それぞれスケールを付して縮尺を表示した。遺構の縮尺は40分の１を基本としたが、大きな遺構は80分の１小さな遺構は20分の１で掲載した。石器の縮尺は２分の１を基本としたが、小さいものは原寸で掲載した。

4　挿図で遺構の切り合う場合は、新しい遺構を優先して示している。

5　石器の一欄表には、出土地・法量・重量などを示してある。

6　石器の展開図は、正面図・側面図・背面図・断面図を基本とするが、正面図の上と左に側面図などを配置した場合もある。また以上の流れに沿って、図の上位にアルファベットの小文字を付してある。石器観察表の備考にはそれを付記してある。

7　石器の表現は、自然面を点描、節理面を斜線、ガジリと石核の奥まった表現の一部は空白で表している。また、表裏面はすべてを実測、中間にある側面は強い稜線のみ実測することを基本とし、他の展開図で奥に見える剥離は省くなど、適宜工夫している。

8　頁岩の礫皮面下には、黄白色系や褐色系の色彩で風化が認められるため、本文ではその様子を風化相と表現する。

9　石器の数量は、トゥール以外について分割礫・剥片・石核・剥離原石としてカウントした。ただし、剥片の最も小さいものは５㎜前後までを含む。また、遺構内の原石はカウントして表記した。

10　多量に出土した石核を、両面体縁辺加工石核Ａ・Ｂ、凹面状石核Ａ・Ｂ、舟底状石核Ａ・Ｂ、その他の石核に分類し、分類基準を別編２で述べてある。また石器観察表の備考に、その他を除く石核の分類を示してある。

11　挿図に掲載した石器の番号は、遺跡ごとの連番にしてある。また接合石器については、接合資料Ａ～Ｃと記し個々の石器と区別した。土器については、番号の前にＤの文字を付してある。

目　次

巻頭図版
序
例言・凡例
目次
挿図・表・図版目次

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　調査に至る経過・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
　調査要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
遺跡の環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　遺跡の位置と立地・・・・・・・・・・・・・・・・・4
　遺跡の歴史的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・6

鹿渡渉Ⅱ遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・11
第１章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・13
　第１節　遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・13
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・13
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・14
　第４節　整理作業の方法と経過・・・・・・・・・・14
第２章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第１節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物・・・・・・15
　　１　石器集中部・・・・・・・・・・・・・・・・15
　第３節　時代不明の検出遺構・・・・・・・・・・・24
　　１　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・24
　第４節　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・24
第３章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

樋向Ⅰ遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・41
第１章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・43
　第１節　遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・43
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・43
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・44
　第４節　整理作業の方法と経過・・・・・・・・・・44
第２章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・45
　第１節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・45
　第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物・・・・・・45
　　１　石器集中部・・・・・・・・・・・・・・・・45
　　２　原石採掘跡・・・・・・・・・・・・・・・・57
　第３節　中世以降の検出遺構・・・・・・・・・・・58
　　１　炭焼成遺構・・・・・・・・・・・・・・・・58
　第４節　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・58
第３章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・78

樋向Ⅱ遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・85
第１章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・87
　第１節　遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・87
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・87
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・87
　第４節　整理作業の方法と経過・・・・・・・・・・88
第２章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・89
　第１節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・89
　第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物・・・・・・89
　　１　柱穴様ピット・・・・・・・・・・・・・・・89
　　２　性格不明遺構・・・・・・・・・・・・・・・89
　第３節　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・90
第３章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・96

樋向Ⅲ遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・99
第１章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・101
　第１節　遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・101
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・101
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・102
　第４節　整理作業の方法と経過・・・・・・・・・・102
第２章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・103
　第１節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・103
　第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物・・・・・・103
　　１　石器集中部・・・・・・・・・・・・・・・・103
　　２　原石採掘跡・・・・・・・・・・・・・・・・108
　　３　土器埋設遺構・・・・・・・・・・・・・・・112
　　４　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・114
　　５　焼土遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・115
　第３節　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・115
第３章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・134

大沢Ⅰ遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・141
第１章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・143
　第１節　遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・143
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・143
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・144
　第４節　整理作業の方法と経過・・・・・・・・・・144
第２章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・145
　第１節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・145
　第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物・・・・・・146
　　１　石器集中部・・・・・・・・・・・・・・・・146
　　２　柱穴様ピット・・・・・・・・・・・・・・・146
　第３節　中世以降の検出遺構・・・・・・・・・・・152
　　１　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・152
　　２　炭焼成遺構・・・・・・・・・・・・・・・・152
　　３　溝跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・153
　第４節　遺構外出土遺物・・・・・・・・・・・・・153
第３章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・154

大沢Ⅱ遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・157
第１章　発掘調査の概要・・・・・・・・・・・・・・159
　第１節　遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・159
　第２節　調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・159
　第３節　調査の経過・・・・・・・・・・・・・・・160
　第４節　整理作業の方法と経過・・・・・・・・・・160
第２章　調査の記録・・・・・・・・・・・・・・・・161
　第１節　基本土層・・・・・・・・・・・・・・・・161
　第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物・・・・・・161
　　１　原石採掘跡・・・・・・・・・・・・・・・・161
　　２　土器埋設遺構・・・・・・・・・・・・・・・161
　　３　土坑・・・・・・・・・・・・・・・・・・・162
　　４　焼土遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・162
　第３節　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・162
第３章　まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・169

別編・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・171
　１　放射性炭素年代測定結果報告・・・・・・・・・173
　２　石核の分類と剥片剥離技術について・・・・・・176

報告書抄録・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・179

挿図目次

第１図　県道４号能代五城目線と６遺跡・・・・・・・・２
第２図　６遺跡の位置・・・・・・・・・・・・・・・・４
第３図　６遺跡周辺の地質区分・・・・・・・・・・・・５
第４図　上岩川遺跡群の周辺遺跡・・・・・・・・・・・７

鹿渡渉Ⅱ遺跡
第１図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・16
第２図　Ａ・Ｂ区基本層位・・・・・・・・・・・・・・17
第３図　石器集中部(1)
　　（ＳＸＱ7･11･12･16･17･18）・・・・・・・・・19
第４図　石器集中部(2)
　　（ＳＸＱ19･26･29･38･39）・・・・・・・・・・21
第５図　石器集中部(3)・土坑
　　（ＳＸＱ40･57、ＳＫ49）・・・・・・・・・・・22
第６図　遺構内出土石器（1）・・・・・・・・・・・・26
第７図　遺構内出土石器（2）・・・・・・・・・・・・27
第８図　遺構内出土石器（3）・・・・・・・・・・・・28
第９図　遺構内出土石器（4)接合資料Ａ・・・・・・・29
第10図　遺構内出土石器（5)接合資料Ｂ・・・・・・・30
第11図　遺構内出土石器（6)接合資料Ｃ・・・・・・・31
第12図　遺構外出土石器（1）・・・・・・・・・・・・33
第13図　遺構外出土石器（2）・・・・・・・・・・・・34

樋向Ⅰ遺跡
第１図　遺構配置図（1）・・・・・・・・・・・・・・・46
第２図　遺構配置図（2）・基本層位・・・・・・・・・47
第３図　石器集中部（1）（ＳＸＱ1･2･4･5･6）・・・・・49
第４図　石器集中部（2）（ＳＸＱ7･9）・・・・・・・・50
第５図　石器集中部（3）
　　（ＳＸＱ10･12･14･15･18）・・・・・・・・・・52
第６図　原石採掘跡（1）（ＳＫＤ11）・・・・・・・・・54
第７図　原石採掘跡（2）（ＳＫＤ11）・・・・・・・・・55
第８図　炭焼成遺構（ＳＷ13）・・・・・・・・・・・・58
第９図　遺構内出土石器（1）・・・・・・・・・・・・62
第10図　遺構内出土石器（2）・・・・・・・・・・・・63
第11図　遺構内出土石器（3）・・・・・・・・・・・・64
第12図　遺構内出土石器（4）・・・・・・・・・・・・65
第13図　遺構内出土石器（5）・・・・・・・・・・・・66
第14図　遺構内出土石器（6）・・・・・・・・・・・・67
第15図　遺構内出土石器（7）・・・・・・・・・・・・68
第16図　遺構内出土石器（8）・・・・・・・・・・・・69
第17図　遺構内出土石器（9）・・・・・・・・・・・・70
第18図　遺構内出土石器（10）・・・・・・・・・・・・71
第19図　遺構内出土石器（11）・・・・・・・・・・・・72
第20図　遺構外出土石器（1）・・・・・・・・・・・・73
第21図　遺構外出土石器（2）・・・・・・・・・・・・74
第22図　遺構外出土石器（3）・・・・・・・・・・・・75
第23図　遺構外出土石器（4）・・・・・・・・・・・・76
第24図　遺構外出土石器（5）・・・・・・・・・・・・77

樋向Ⅱ遺跡
第１図　遺構配置図・基本層位・・・・・・・・・・・・91
第２図　柱穴様ピット・性格不明遺構
　　（ＳＫＰ4･6、ＳＸ1･2･8･9）・・・・・・・・・92
第３図　遺構内出土石器・・・・・・・・・・・・・・・94
第４図　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・95

樋向Ⅲ遺跡
第１図　遺構配置図・基本層位・・・・・・・・・・・104
第２図　石器集中部（1）（ＳＸＱ 1･2）・・・・・・・・104
第３図　石器集中部（2）（ＳＸＱ 3･4･5）・・・・・・・106
第４図　原石採掘跡（1）（ＳＫＤ 6）・・・・・・・・・107
第５図　原石採掘跡（2）（ＳＫＤ 7）・・・・・・・・・109
第６図　原石採掘跡（3）（ＳＫＤ 15･17･20）・・・・111
第７図　土器埋設遺構・焼土遺構・土坑
　　（ＳＲ16、ＳＮ 9、ＳＫ 11･13）・・・・・・・・113
第８図　遺構内出土土器・・・・・・・・・・・・・・・114
第９図　遺構内出土石器（1）・・・・・・・・・・・・118
第10図　遺構内出土石器（2）・・・・・・・・・・・・119
第11図　遺構内出土石器（3）・・・・・・・・・・・・120
第12図　遺構内出土石器（4）・・・・・・・・・・・・121
第13図　遺構内出土石器（5）・・・・・・・・・・・・122
第14図　遺構内出土石器（6）・・・・・・・・・・・・123
第15図　遺構内出土石器（7）・・・・・・・・・・・・124
第16図　遺構内出土石器（8）・・・・・・・・・・・・125
第17図　遺構内出土石器（9）・・・・・・・・・・・・126
第18図　遺構内出土石器（10）・・・・・・・・・・・・127
第19図　遺構内出土石器（11）・・・・・・・・・・・・128
第20図　遺構内出土石器（12）・・・・・・・・・・・・129
第21図　遺構内出土石器（13）・・・・・・・・・・・・130
第22図　遺構内出土石器（14）・・・・・・・・・・・・131
第23図　遺構外出土石器（1）・・・・・・・・・・・・132
第24図　遺構外出土石器（2）・・・・・・・・・・・・133

大沢Ⅰ遺跡
第１図　遺構配置図・・・・・・・・・・・・・・・・・147
第２図　基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・148
第３図　石器集中部・柱穴様ピット
　　（ＳＸＱ1･2･3･10、ＳＫＰ4）・・・・・・・・・149
第４図　炭焼成遺構（ＳＷ5･6･7･13）・・・・・・・・150
第５図　土坑・溝跡（ＳＫ14、ＳＤ11･12）・・・・・・151
第６図　遺構内出土石器・・・・・・・・・・・・・・・152
第７図　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・153

大沢Ⅱ遺跡
第１図　遺構配置図・基本層位・・・・・・・・・・・163
第２図　原石採掘跡（1）（ＳＫＤ2）・・・・・・・・・164
第３図　原石採掘跡（2）（ＳＫＤ5･7）・・・・・・・・165
第４図　土器埋設遺構・土坑・焼土遺構
　　（ＳＲ11、ＳＫ3･9･10、ＳＮ1）・・・・・・・166
第５図　遺構外出土石器・・・・・・・・・・・・・・・168

表目次

第１表　６遺跡の周辺遺跡一覧・・・・・・・・・・・・８

鹿渡渉Ⅱ遺跡
第１表　石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・25

樋向Ⅰ遺跡
第１表　石器観察表（1）・・・・・・・・・・・・・・・60
第２表　石器観察表（2）・・・・・・・・・・・・・・・61

樋向Ⅱ遺跡
第１表　石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・・93

樋向Ⅲ遺跡
第１表　石器観察表（1）・・・・・・・・・・・・・・・116
第２表　石器観察表（2）・・・・・・・・・・・・・・・117

大沢Ⅰ遺跡
第１表　石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・153

大沢Ⅱ遺跡
第１表　石器観察表・・・・・・・・・・・・・・・・・167

別編
第１表　放射性炭素年代測定
　　および暦年較正の結果・・・・・・・・・・176

図版目次

巻頭図版

鹿渡渉Ⅱ遺跡
図版１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
　１　Ａ区北側斜面風景（南から）
　２　緩斜面溝跡（東から）
図版２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38
　１　ＳＸＱ７石器出土状況（北から）
　２　ＳＸＱ11石器出土状況（東から）
　３　ＳＸＱ17石器出土状況（東から）
図版３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・39
　１　ＳＸＱ18石器出土状況（東から）
　２　ＳＸＱ19石器出土状況（北東から）
　３　ＳＸＱ38石器出土状況（東から）
図版４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・40
　１　ＳＸＱ29･40石器出土状況（南から）
　２　ＳＸＱ40石器出土状況（北から）
　３　ＳＫ49完掘（東から）

樋向Ⅰ遺跡
図版１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・79
　１　遺跡調査風景（南から）
　２　ＳＫＤ11断面（北東から）
図版２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・80
　１　ＳＫＤ11断面および周辺（北東から）
　２　ＳＫＤ11完掘（北西から）
　３　ＳＫＤ11完掘（南東から）
図版３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・81
　１　ＳＸＱ１石器出土状況（南から）
　２　ＳＸＱ２石器出土状況（北から）
　３　ＳＸＱ４石器出土状況（南西から）
図版４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・82
　１　ＳＸＱ５石器出土状況（北西から）
　２　ＳＸＱ６石器出土状況（南西から）
　３　ＳＸＱ７石器出土状況（東から）
図版５・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・83
　１　ＳＸＱ９断面（南から）
　２　ＳＸＱ10石器出土状況（北から）
　３　ＳＸＱ12石器出土状況（南西から）
図版６・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・84
　１　ＳＸＱ14石器出土状況（南から）
　２　ＳＸＱ18検出状況（南西から）
　３　ＳＷ13断面（南西から）

樋向Ⅱ遺跡
図版１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・97
　１　ＳＸ１断面（東から）
　２　ＳＸ２完掘（南から）
　３　ＳＸ８（西から）
図版２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・98
　１　ＳＸ８完掘（南から）
　２　ＳＫＰ４完掘（南東から）
　３　ＳＫＰ６完掘（南から）

樋向Ⅲ遺跡
図版１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・136
　１　遺跡全景（北から）
　２　ＳＫＤ６断面および完掘状況（西から）
図版２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・137
　１　ＳＸＱ２石器出土状況（西から）
　２　ＳＸＱ４石器出土状況（西から）
　３　ＳＸＱ４石器出土状況（西から）
図版３・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・138
　１　ＳＫＤ６確認状況（南西から）
　２　ＳＫＤ７調査風景①（東から）
　３　ＳＫＤ７調査風景②（西から）
図版４・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・139
　１　ＳＫＤ15断面（西から）
　２　ＳＫＤ17完掘（北から）
　３　ＳＫＤ17・20完掘（西から）
図版５・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・140
　１　ＳＲ16完掘（南西から）
　２　ＳＫ11完掘（南から）
　３　ＳＫ13断面（南から）

大沢Ⅰ遺跡
図版１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・155
　１　遺跡遠景（北東から）
　２　斜面Ａの頁岩検出状況（南東から）
図版２・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・156
　１　ＳＸＱ１石器出土状況（東から）
　２　ＳＷ５～７完掘（北東から）
　３　ＳＤ11調査風景（南東から）

大沢Ⅱ遺跡
図版１・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・170
　１　ＳＫＤ２・７断面（北西から）
　２　ＳＫＤ５完掘（南西から）
　３　ＳＲ11と周辺（南西から）

はじめに

調査に至る経過

県道４号能代五城目線は、能代市鰄渕字扇田地内を通る国道７号との交差点を起点とし、山本郡三種町を経由しながら南秋田郡五城目町富津内字富田地内を通る国道285号との交差点を終点とする。上岩川および下岩川地区にとっては、生活基盤を支える主要地方道であり、拡幅などの整備が順次実施されてきた。このため、平成18年度から始まる三種町上岩川地内における同整備事業に先立ち、平成16年度に秋田県山本地域振興局より秋田県教育委員会に対し埋蔵文化財の包蔵地の確認とその対応について依頼があった。これを受け、秋田県教育庁生涯学習課文化財保護室は、平成16年度に同整備事業路線内の遺跡分布調査を実施しその結果、鹿渡渉Ⅰ・鹿渡渉Ⅱ・樋向Ⅰ・樋向Ⅱ・樋向Ⅲ・大沢Ⅰ・大沢Ⅱの７遺跡を発見するに至った。これを踏まえ、秋田県教育委員会は今後の遺跡確認調査の必要性と、記録保存が必要な場合には発掘調査が必要である旨を秋田県山本地域振興局に回答した。

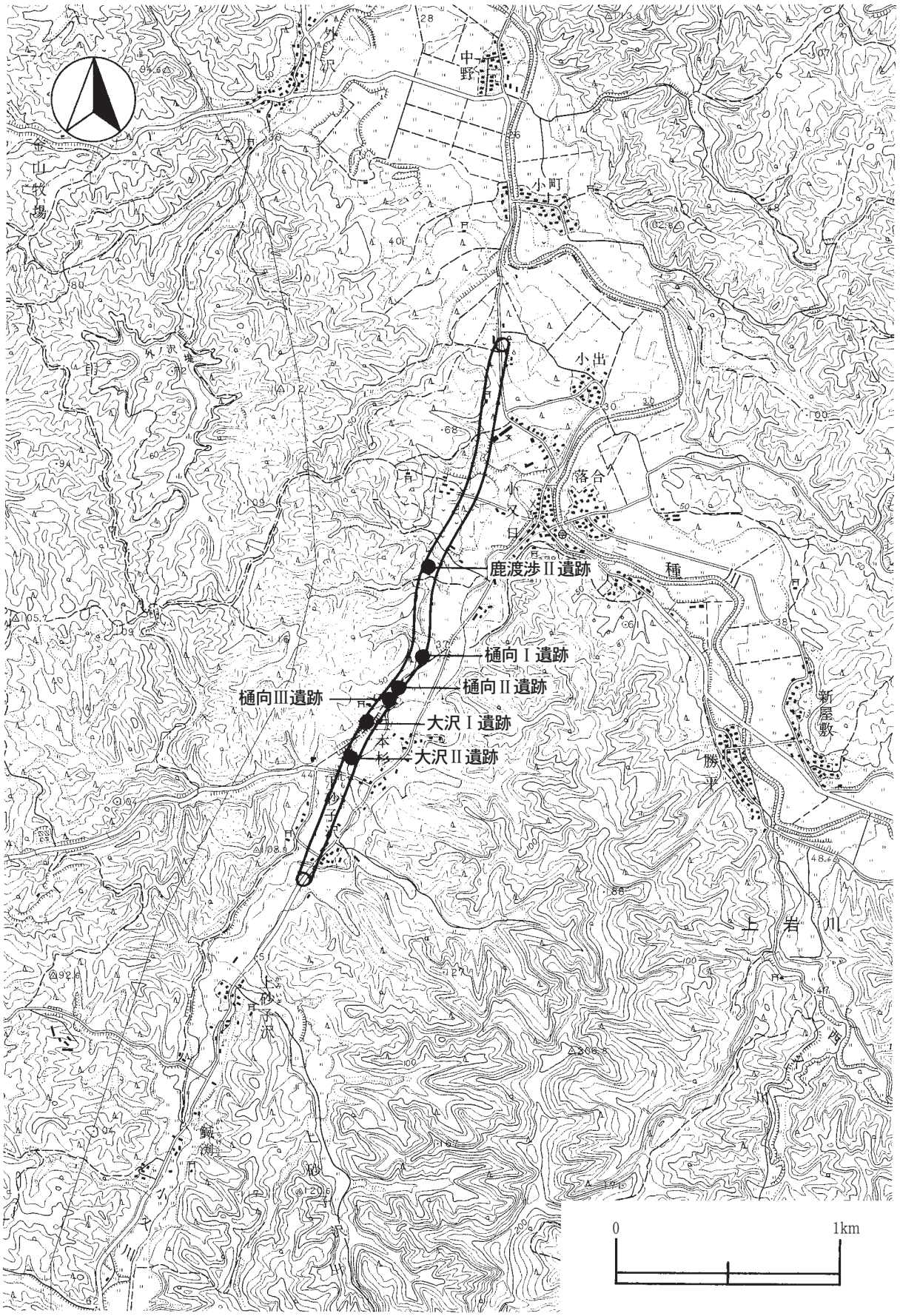
以上の経過を踏まえ、平成17年度に秋田県埋蔵文化財センターが前述の７遺跡について確認調査を実施した。その結果、遺構・遺物が検出されなかった鹿渡渉Ⅰ遺跡以外の６遺跡について平成18年６月より発掘調査を実施することとなった。

調査要項

遺　跡　名　鹿渡渉Ⅱ遺跡(かどわたりにいせき)遺跡略号：3ＫＤＷⅡ
所　在　地　秋田県山本郡三種町上岩川字鹿渡渉１－23外
調 査 期 間　平成18年６月７日～７月25日
調 査 面 積　1,730㎡
調査主体者　秋田県教育委員会

遺　跡　名　樋向Ⅰ遺跡(とよむかいいちいせき)遺跡略号：3ＴＭⅠ
所　在　地　秋田県山本郡三種町上岩川字樋向107外
調 査 期 間　平成18年７月26日～９月11日
調 査 面 積　3,300㎡
調査主体者　秋田県教育委員会

遺　跡　名　樋向Ⅱ遺跡(とよむかいにいせき)遺跡略号：3ＴＭⅡ
所　在　地　秋田県山本郡三種町上岩川字樋向32－１外
調 査 期 間　平成18年７月25日～９月11日
調 査 面 積　290㎡
調査主体者　秋田県教育委員会



第１図　県道４号能代五城目線と６遺跡

遺　跡　名　樋向Ⅲ遺跡(とよむかいさんいせき)遺跡略号：3ＴＭⅢ
所　在　地　秋田県山本郡三種町上岩川字樋向14－１外
調 査 期 間　平成18年7月25日～９月11日
調 査 面 積　950㎡
調査主体者　秋田県教育委員会

遺　跡　名　大沢Ⅰ遺跡(おおさわいちいせき)遺跡略号：3ＯＳⅠ
所　在　地　秋田県山本郡三種町上岩川字大沢156外
調 査 期 間　平成18年6月26日～７月21日
調 査 面 積　1,170㎡
調査主体者　秋田県教育委員会

遺　跡　名　大沢Ⅱ遺跡(おおさわにいせき)遺跡略号：3ＯＳⅡ
所　在　地　秋田県山本郡三種町上岩川字大沢105外
調 査 期 間　平成18年6月7日～6月23日
調 査 面 積　600㎡
調査主体者　秋田県教育委員会

調査担当者
平成18年度　利部　　修(秋田県埋蔵文化財センター南調査課長)
開田　猛夫(秋田県埋蔵文化財センター南調査課学芸主事)
菅原　幹夫(秋田県埋蔵文化財センター南調査課学芸主事)
今野沙貴子(秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査・研究員)
須田　亮平(秋田県埋蔵文化財センター南調査課調査・研究員)
平成19年度　利部　　修(秋田県埋蔵文化財センター南調査課長)
菅原　幹夫(秋田県埋蔵文化財センター南調査課学芸主事)

総務担当者
平成18年度　渡辺　　憲(秋田県埋蔵文化財センター総務課長)
柴田　卓也(秋田県埋蔵文化財センター総務課主任)
佐々木和幸(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)
平成19年度　佐藤　　康(秋田県埋蔵文化財センター総務課長)
千田　喜博(秋田県埋蔵文化財センター総務課主査)
佐々木和幸(秋田県埋蔵文化財センター総務課主事)

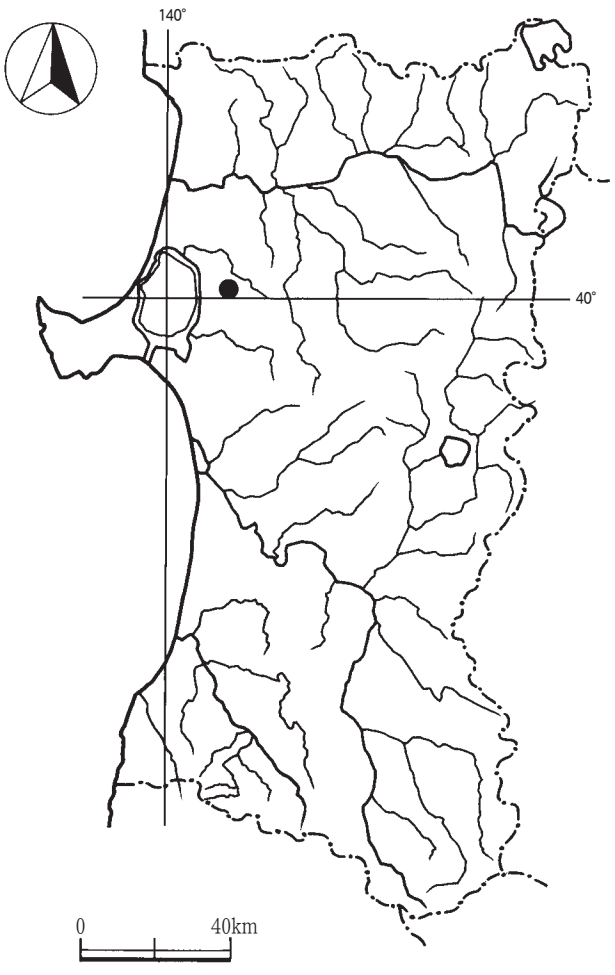
調査協力機関　秋田県山本地域振興局　三種町　三種町教育委員会

遺跡の環境

遺跡群の位置と立地

遺跡のある三種町は、北は能代市、東は上小阿仁村、南は男鹿市・大潟村・八郎潟町・五城目町に接し、東西約30㎞、南北約20㎞、面積248.09㎢で、琴丘町・山本町・八竜町の合併により平成17年3日20日誕生した町である。旧八郎潟の東岸に沿って南北に広がる低地の中央付近を、国道７号とＪＲ奥羽本線が南北に平行しており、上岩川地内遺跡群の６遺跡（鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡）はこのＪＲ奥羽線鹿渡駅より東約5.5kmに位置している。また、三種町は、秋田県北西部の出羽丘陵地域および日本海沿岸地域に位置し、東は奥羽脊梁山脈から分岐する太平山地に連なる七座山地－房住山山地、北は世界自然遺産に指定されている白神山地、西は日本海に面する地域である。

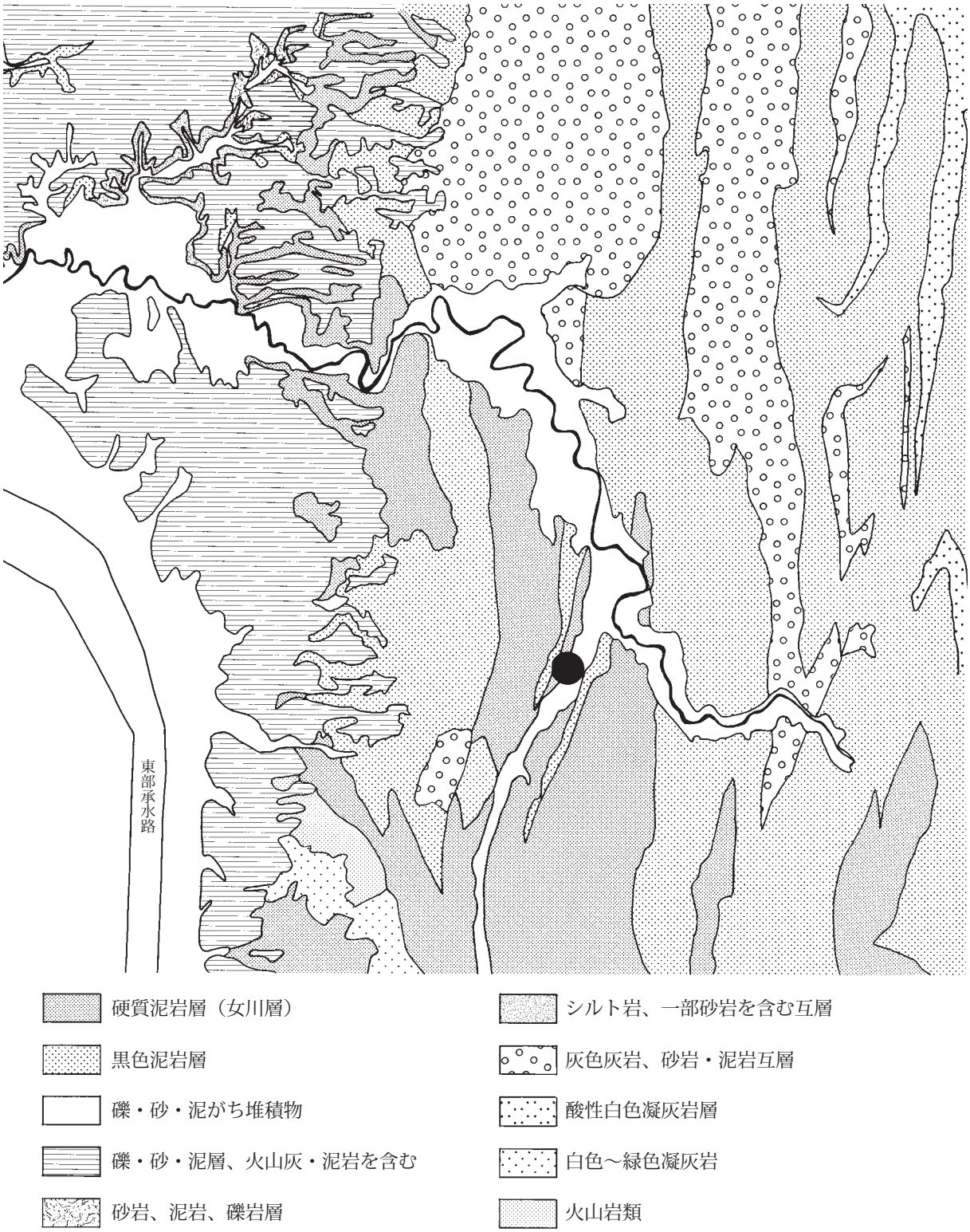
遺跡の立地する小又川低地の東側には、七座山(287.4m)から南南東に延びる山稜がある。また、この山稜とは田代川によって隔てられ、南西側に右雁行する房住山(409.2m)を最高点とする山稜がある。さらに、山地の南西端には高杉山(361.9m)を最高点とする山稜がある。これら３列の山稜は七座山背斜および房中山背斜と一致した背斜山稜である。山地を構成する地層は船川層が主体であり、上部七座凝灰岩部層が厚く発達している。



第２図　６遺跡の位置

この山稜部の小又川低地を挟んだ西側には、標高100～200mで定高性を有する丘陵部がある。この丘陵の北側にある石倉山(143.8m)から中央部にかけては標高100m前後でやや低く、南部は200m前後でやや高い。丘陵を構成する地層は、主として女川層・船川層・天徳寺層である。一般に、標高の高い地域では背斜構造が発達しており、女川層・船川層の泥岩から構成されている。標高の低い中央部では向斜構造が発達しており、より軟弱な天徳寺層および船川層の泥岩から構成されている。

この丘陵部の東側を流れる三種川は、房住山に源を発し、西流しながら落合集落か



第３図　６遺跡周辺の地質区分

ら下岩川地区までを北流し、その後西流して八郎湖東部承水路に注ぐ流路延長約52kmの三種町唯一の長大な河川である。この三種川の支流で五城目町境を源流として上岩川地区を北流し、落合地区で三種川と合流する小又川がある。この小又川の左岸丘陵から舌状に延びた台地縁辺部に、上岩川地内遺跡群の６遺跡（鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡）がある。

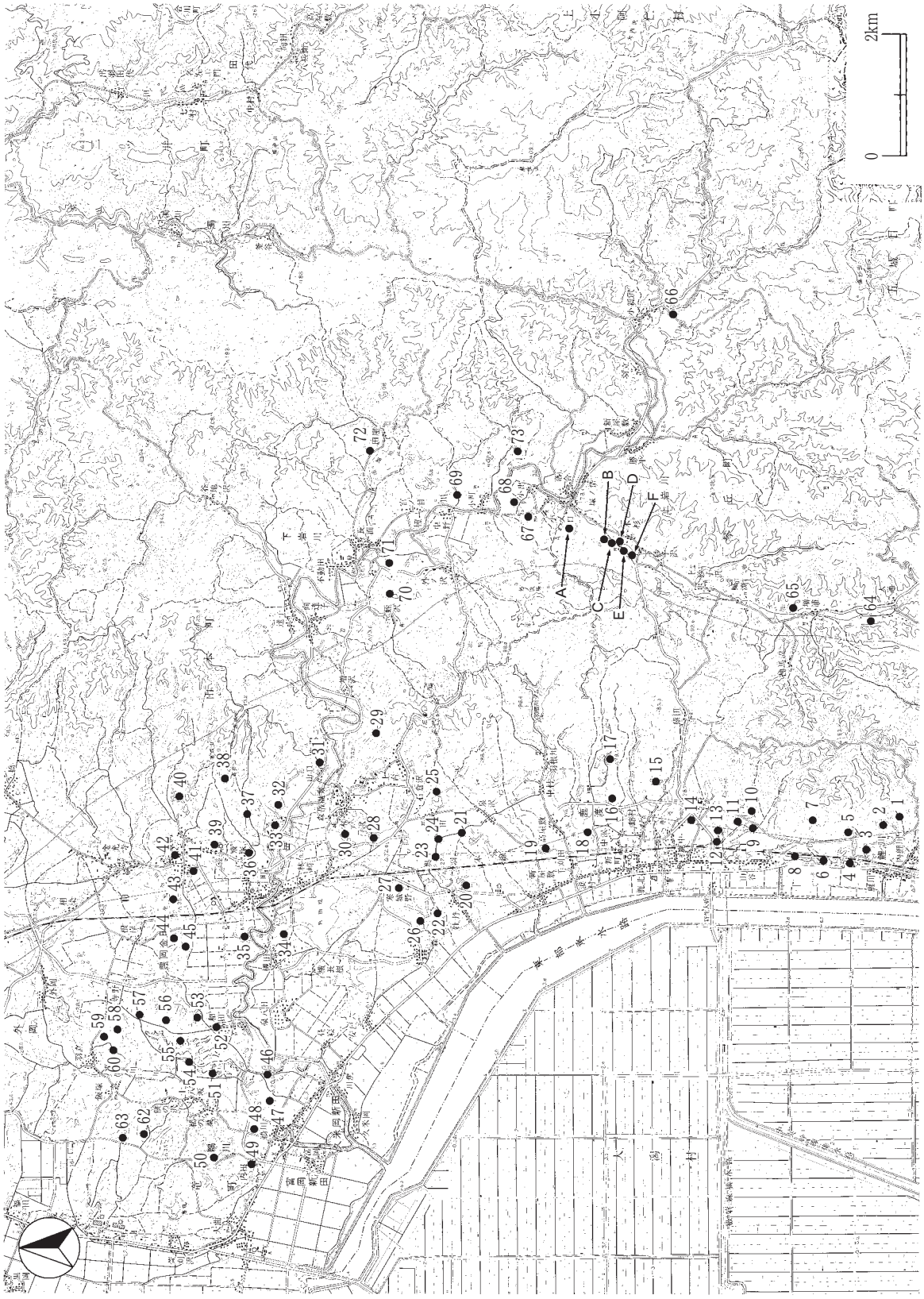
遺跡の歴史的環境

三種町の旧八郎潟東岸一帯は、旧石器時代から中世までの多くの遺跡が確認されている地域である。特に旧琴丘町域は1990年代以降の高速道路整備事業や、大規模ほ場整備事業に伴う発掘調査により、その調査結果から周辺地域を含めた当地域の歴史が徐々に明らかになってきた。

昭和58(1983)年、東北農政局の能代開拓建設事業に伴う此掛沢Ⅱ遺跡の調査が行われ、旧石器時代の遺物が出土した。米ヶ森型台形石器を中心に、ナイフ形石器や石刃がまとまって出土しており、当地域の旧石器時代の解明が大きく進んだ。平成6(1994)年には、長信田地区のほ場整備事業に伴って家の下遺跡(24)が調査された。出土した石器の量もさることながら、接合した個体数も多く、この時代の文化を知る上で貴重な資料となった。両遺跡とも、石器の原石となっている素材は珪質頁岩・泥岩・チャートなどの堆積岩であり、火山性の黒曜石も少量出土している。

平成10(1998)年にほ場整備事業に伴う狐森遺跡(11)の調査が行われた。さらに同遺跡では日本海沿岸東北自動車道建設事業に伴う調査も平成10・11(1998・1999)年にかけて実施され、縄文時代前期の円筒下層ａ式・ｂ式を主体とする土器の捨て場が検出されている。また、同遺跡からは縄文時代前期末葉・中期前葉・中期後葉・後期中葉・晩期後葉の遺構・遺物と、県内では出土例の希な擦文土器が出土しており、この場所をベースとした長期にわたる生活の様子が窺える遺跡である。平成10(1998)年に日本海沿岸東北自動車道建設事業に伴い調査された兵ヶ沢遺跡(９)は、狐森遺跡の南側に位置しており縄文時代前期中葉から後葉にかけての遺跡である。縄文時代後期の堂の下遺跡(２)の住居跡からは、先端部が折損しているが握部に細工の施された石棒が出土している。畑の整地中に、注口土器や壺が出土した高石野Ⅰ遺跡(旧高石野遺跡)(８)は、琴丘町教育委員会によって調査が行われた縄文時代晩期の遺跡である。出土した石製品は、頁岩が石鏃・石匙などに、凝灰岩が磨製石斧・石錘などに、泥岩と粘板岩は石棒・石刀などに加工されていた。

古代(平安時代)の製鉄遺跡としては、鋼精錬が行われていた可能性が高い泉沢中台遺跡(21)がある。この遺跡からは、約3トンにものぼる大量の鉄滓・鉄塊が出土し、外部から銑鉄の供給を受けて鋼材の製造がなされていたと考えられている。



第４図　上岩川遺跡群の周辺遺跡

第１表　６遺跡の周辺遺跡一覧

番号	遺　跡　名	所　　在　　地	時　代
1	小林	山本郡三種町鯉川字小林	平安・縄文
2	堂の下	山本郡三種町鯉川字堂の下	平安・縄文
3	真山野	山本郡三種町鯉川字真山野	縄文
4	陣場野	山本郡三種町鯉川字陣場野	縄文
5	中陣場	山本郡三種町鯉川字中陣場	平安・縄文
6	鯉川高石野	山本郡三種町鯉川字高石野	平安
7	高石野Ⅱ	山本郡三種町鹿渡字高石野	平安
8	高石野Ⅰ	山本郡三種町鹿渡字高石野	縄文
9	兵ヶ沢	山本郡三種町鹿渡字兵ヶ沢	平安
10	館の越	山本郡三種町鹿渡字狐森	中世
11	狐森	山本郡三種町鹿渡字狐森	旧石器・縄文
12	小瀬川家の上	山本郡三種町鹿渡字小瀬川家の上	平安・縄文
13	金仏	山本郡三種町鹿渡字金仏	平安
14	盤若台	山本郡三種町鹿渡字盤若台	平安
15	北牛渕	山本郡三種町鹿渡字北牛渕	縄文
16	諏訪長根	山本郡三種町鹿渡字諏訪長根	平安・縄文
17	古館城跡	山本郡三種町鹿渡字諏訪長根	中世
18	鬼沢口	山本郡三種町鹿渡字鬼沢口	縄文
19	宝竜前	山本郡三種町鹿渡字宝竜前	縄文
20	地蔵長根	山本郡三種町鹿渡字地蔵長根	縄文
21	泉沢中台	山本郡三種町鹿渡字泉沢中台	平安
22	古館堤頭Ⅰ	山本郡三種町森岳字古館堤頭	縄文
23	中の沢	山本郡三種町鹿渡字中の沢	縄文
24	家の下	山本郡三種町長信田字家の下	旧石器・縄文
25	長信田	山本郡三種町鹿渡字長信田家後	縄文
26	古館堤	山本郡三種町森岳字古館堤頭	縄文
27	古館堤頭Ⅱ	山本郡三種町森岳字古館堤頭	縄文
28	東堤沢	山本郡三種町森岳字東堤沢	縄文
29	木戸沢館	山本郡三種町森岳字木戸沢	平安・中世
30	木戸沢	山本郡三種町森岳字木戸沢	縄文
31	塚の岱	山本郡三種町森岳字牛沢	縄文
32	藤巻館	山本郡三種町森岳字館の沢	中世
33	関の台	山本郡三種町森岳字関の台	縄文
34	鳥矢場	山本郡三種町森岳字鳥矢場	縄文
35	小狭間館	山本郡三種町森岳字小狭間	中世
36	東飛塚館	山本郡三種町森岳字東飛塚	縄文・弥生
37	中台	山本郡三種町森岳字中台	縄文
38	ケゴ館	山本郡三種町森岳字上中沢	中世
39	東飛塚	山本郡三種町森岳字東飛塚	縄文
40	白間台	山本郡三種町豊岡金田字白間台	縄文
41	豊岡	山本郡三種町豊岡金田字田倉館	縄文
42	田の沢	山本郡三種町豊岡金田字田の沢	縄文
43	田倉館	山本郡三種町豊岡金田字田倉館	縄文
44	根岸Ⅰ	山本郡三種町豊岡金田字根岸	縄文
45	根岸Ⅱ	山本郡三種町豊岡金田字根岸	縄文
46	扇田谷地Ⅰ	山本郡三種町鵜川字扇田谷地	縄文
47	扇田谷地Ⅱ	山本郡三種町鵜川字扇田谷地	平安
48	新笹岡	山本郡三種町鵜川字新笹岡	縄文・中世
49	館の上館	山本郡三種町鵜川字館の上	平安
50	苗代沢台	山本郡三種町鵜川字苗代台	縄文
51	放龍	山本郡三種町鵜川字上大沢	縄文
52	和田部落	山本郡三種町豊岡金田字和田	縄文
53	和田Ⅲ	山本郡三種町豊岡金田字駒ヶ崎	縄文
54	上大沢	山本郡三種町豊岡金田字白間台	弥生
55	和田Ⅰ	山本郡三種町鵜川字上大沢	縄文
56	和田Ⅱ	山本郡三種町豊岡金田字駒ヶ崎	縄文
57	保竜Ⅴ	山本郡三種町豊岡金田字保竜	平安
58	保竜Ⅲ	山本郡三種町豊岡金田字保竜	平安
59	保竜Ⅰ	山本郡三種町豊岡金田字保竜	平安
60	保竜Ⅱ	山本郡三種町豊岡金田字保竜	平安
61	舞台沢Ⅱ	山本郡三種町鵜川字舞台沢	縄文
62	舞台沢Ⅰ	山本郡三種町鵜川字舞台沢	縄文
63	西増浦	山本郡三種町上岩川字西増浦	－
64	増浦	山本郡三種町上岩川字増浦	縄文
65	小新沢	山本郡三種町上岩川字谷地田	縄文
66	柏木岱	山本郡三種町上岩川字柏木岱	縄文
67	小出	山本郡三種町上岩川字下小出	－
68	刈初沢	山本郡三種町下岩川字刈初沢	縄文
69	百騎館	山本郡三種町下岩川字百騎台	中世
70	百騎台	山本郡三種町下岩川字百騎台	縄文
71	田谷	山本郡三種町下岩川字下添畑	縄文
72	小町	山本郡三種町下岩川字小町	縄文
73	向台	山本郡三種町上岩川字鹿渡渉	縄文
A	鹿渡渉Ⅱ	山本郡三種町上岩川字鹿渡渉	縄文
B	樋向Ⅰ	山本郡三種町上岩川字樋向	縄文
C	樋向Ⅱ	山本郡三種町上岩川字樋向	縄文
D	樋向Ⅲ	山本郡三種町上岩川字樋向	縄文
E	大沢Ⅰ	山本郡三種町上岩川字大沢	縄文
F	大沢Ⅱ	山本郡三種町上岩川字大沢	縄文

参考文献一覧

1　三種町ＨＰ

2　琴丘町史編さん委員会　『琴丘町史』　1990(平成２)年

3　琴丘町教育委員会　『高石野遺跡発掘調査概報』　1982(昭和58)年

4　地質調査所　地域地質研究報告　『森岳地域の地質』　1985(昭和60)年

5　地質調査所　地域地質研究報告　『羽後浜田地域の地質』　1985(昭和60)年

6　国安寛・柴田次雄　『郷土誌事典　秋田県』　1979(昭和54)年

7　秋田県農政部　『土地分類基本調査　森岳・羽後浜田』　1984(昭和59)年

8　秋田県教育委員会　『秋田県遺跡地図　山本地区版』　2002(平成14)年

9　秋田県教育委員会　『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡　発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第114集　1984(昭和59年

10　秋田県教育委員会　『家の下遺跡(2)　旧石器時代編－県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－』秋田県文化財調査報告書第275集　1998(平成10)年

11　秋田県教育委員会　『泉沢中台遺跡－県営ほ場整備事業(琴丘地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－』秋田県文化財調査報告書第276集　1998(平成10)年

12　秋田県教育委員会　『兵ヶ沢遺跡－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－』秋田県文化財調査報告書第296集　2000(平成12)年

13　秋田県教育委員会　『盤若台遺跡－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ－』秋田県文化財調査報告書第319集　2001(平成13)年

14　秋田県教育委員会　『狐森遺跡－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ｘ－』秋田県文化財調査報告書第345集　2002(平成14)年

15　秋田県教育委員会　『堂の下遺跡Ⅰ(旧石器時代－弥生時代篇)－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＶ－』秋田県文化財調査報告書第377集　2003(平成15)年

16　秋田県教育委員会　『龍門寺茶畑遺跡・向山遺跡－主要地方道本荘岩城線ふるさとづくり推進事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』秋田県文化財調査報告書第373集　2004(平成16)年

17　秋田県教育委員会　『堂の下遺跡Ⅱ(中世篇)－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸ－』秋田県文化財調査報告書第377集　2004(平成16)年

18　秋田県教育委員会　『小林遺跡Ⅱ－日本海沿岸東北自動車道建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅨ－』秋田県文化財調査報告書第376集　2004(平成16)年

19　秋田県教育委員会　『深渡遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅥ－』秋田県文化財調査報告書第407集　2006(平成18)年

20　秋田県教育委員会　『縄手下遺跡－一般国道７号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ＸⅦ－』秋田県文化財調査報告書第410集　2006(平成18)年

21　秋田県教育委員会　『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第413集　2006(平成18)年

22　秋田県埋蔵文化財センター　『秋田県埋蔵文化財センター年報』14　1990(平成7)年

23　秋田県ＨＰ(建設交通部　河川砂防課　河川表　二級河川より)

―― 鹿渡渉Ⅱ遺跡 ――

（３ＫＤＷⅡ）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観(第１図、巻頭図版)

本遺跡は小又川左岸にある低位段丘の縁辺にあり、標高は38～44mである。遺跡は当該地域で調査を行った６遺跡のうち最も北側に位置し、南西側には樋向Ⅰ遺跡がある。調査区は、長さ約125m×幅約22mの北東から南西にかけての細長い範囲である。その中央には、南東から北西へ林道が通じており調査区を二分することから、便宜的に北東側をＡ区、南西側をＢ区とした。

Ａ区からは13か所の石器集中部を検出しているが、これらは西側からの緩斜面および北側の比較的急な斜面にかけて位置する。Ａ区には西側からの緩斜面に沿うように、幅0.2～2.3m程の緩く蛇行した溝状を呈する小規模な自然地形をいくつか確認した。石器集中部と溝状の自然地形の前後関係などは不明瞭であった。石器集中部は、北側区域の斜面上位～下位にかけて見つかっているが、特にその西側からは多量の石器が出土した。

Ｂ区では南西端に土坑１基を検出したのみである。当調査区から出土した石器は、相対に北側が濃厚で中央部が散漫なあり方、南側は非常に少ない状況であった。

第２節　調査の方法(第１図)

発掘調査は、遺構や遺物を計画的に把握するためにグリッド法を採用した。つまり、調査区域の中央部にある工事路線内の中心杭(Ｘ＝6114.386、Ｙ＝－58809.443)を原点ＭＡ50として、国家座標第Ⅹ系の座標北を基準に各４m間隔のグリッド杭を設定した。グリッド杭には、東から西へ昇順するアルファベット２文字と、南から北に昇順する算用数字を組み合わせた記号を記入し、４m方眼の南東部隅(グリッド杭)をその方眼のグリッド名とした。東西は右文字のＡ～Ｔまでを一順ごとに繰り上げ、左文字を昇順させて表現する。これらを遺構や遺物の記録作業に役立てた。

調査に当たっては、Ｂ区南端際に農道が通じていることから、排土置き場を調査区北端の北側沢地１か所にせざるを得なかった。すなわち、Ａ区の調査を行って排土を沢地に集め、Ａ区終了後Ｂ区の調査を行って調査済みのＡ区に排土を集めた。そして、沢地の排土流出を防ぐための土留め柵を設置し、地域住民との問題が生じないように留意した。

石器集中部の調査は、基本的に石器の広がりを図化し、レベルの参考にするため必要に応じてエレベーションを作成し、遺物の標高を測定した。遺物の取り上げは、広がりの大きな場合はグリッドを４分割した２m四方の範囲で層ごとに取り上げた。ＳＸＱ38は狭い範囲に剥片が集中しており、この部分については土壌を採取し洗浄を行った後に石器を選別した。また、緩斜面や斜面地には浸食の痕跡と考えられる溝状の自然地形がいくつか見られた。

検出した遺構には、発見順にその略記号と番号を付した遺構名を与えた。ただし調査の進行に伴い、略記号を変更したり欠番にしたものもある。平面図や断面図などは1/20を基本に作成した。写真撮影は、35㎜カラーリバーサルフィルムと白黒ネガフィルムを使用した。

第３節　調査の経過

鹿渡渉Ⅱ遺跡は、2005年４月と ６月に秋田県教育委員会が、当該整備事業に係る路線内で分布調査を実施し確認した遺跡である。これを受けて、同年10月３日～同年10月14日まで秋田県埋蔵文化財センターが確認調査を実施し、2006年６月７日～ 同年７月25日にかけて発掘調査を実施した。

調査はＡ区の雑木撤去、ベルトコンベアーの設置などの準備作業を行ってから、南西側から北東側に向かって調査を開始した。南側では石器集中部とともに、西側緩斜面から延びる幅２m程の溝跡(自然地形)を検出した(図版１－２)。この後も、同じような方向で幅の狭い小規模な自然地形の溝跡が斜面も含んで全面的に確認され、それらの平面図も作図した。

６月21日、北側の北西部から多量の石器が出土し、ＳＸＱ19・39の ２つの石器集中部が重なっていることを確認した。６月29日には、さらに北側の緩斜面から裾部にかけて多量の石器が出土し、ＳＸＱ29を検出した。これらの流れ込んだ状況から、北側の調査区外河岸段丘面にまとまった石器製作跡の存在が推定された。

７月10日、北側斜面の東上位から出土していた重さ48.5kgの大型の頁岩原石を採集した。６つの当該調査遺跡のうち最大の原石である。

Ｂ区の調査は ７月４日から、ベルトコンベアーの移動、トレンチ埋土の除去作業を開始した。当該区域の排土は、北東端に隣接している林道を跨いだＡ 区を利用した。

林道の南西側には、それに接するように幅約５m程のやや大きな沢を、Ａ区検出の溝状の自然地形と同様の方向で検出した。小規模な溝状の自然地形はＢ区南側でもいくつか認められた。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、当該６遺跡について一括して行なった。出土した多量の遺物は、数点の土器を除けばすべて石器である。各遺跡ごとに遺構内・遺構外出土石器について、その種類を識別し数量を数え挙げることにした。

石器は定形石器・剥片・石核などに分けられるが、自然石(遺構外は除く)・分割礫なども石器と共にカウントの対象にした。調査中における小さな石器と自然石の分別は、効率化を妨げるので主として整理作業の洗浄後に行い、５㎜前後の削片も拾い上げた。数量の把握には約半年余りを費やしている。また、並行して石器集中部出土石器を中心に接合作業を行った。

遺構の平面図や断面図・エレベーション図などは、組み合わせて第２原図としトレースした。遺跡内から出土した定形石器は極力掲載し、紙面の制約から接合石器や石核は、製作技術の理解を深めるため典型的な形態のものを選別して掲載した。

定形石器・石核の実測に当たっては、個々の石器についてその製作の過程を観察しながら進めていった。また、一部を委託して実測・トレース作業の迅速化を図った。報告書掲載遺物は、その法量を測定し一覧表にまとめた。整理済みの資料は、報告書掲載ごとにまとめてあるが、掲載遺物以外の資料も取り出し易いように収蔵している。

第２章　調査の記録

本遺跡からはＡ区より石器集中部13か所、Ｂ区より土坑１基を検出した。Ａ区は北側斜面と南側の緩斜面に分けられる。南側緩斜面では、石器集中部がいくつか検出されたが石器の数量は少ない。これに対して北端斜面裾部と北側緩斜面際には多量の石器が出土し、調査区外の北西部緩斜面に石器製作跡が想定される。Ａ区緩斜面より南にあるＢ区では、石器の出土は希薄で石器製作は行われていなかった。

第１節　基本土層(第２図)

基本土層は地形を理解するために長い範囲を選定した。緩斜面と斜面には、西側の高位面から続く溝状の自然地形が随所に見られる。

Ⅰ―ａ層　黒褐色土。表土。地山粒を少量含む。粘性弱、締まり中。
Ⅰ―ｂ層　暗褐色土。表土。地山粒・礫を少量、炭化物を微量含む。粘性中、締まり強。
Ⅱ層　黒褐色土。石器出土層。礫を微量に含む。粘性弱、締まり強。
Ⅲ層　黒色土。石器出土層。砂礫少量含む。粘性弱、締まり強。
Ⅳ―ａ層　にぶい黄褐色土。石器出土層。砂礫多量に含む。粘性強、締まり強。
Ⅳ―ｂ層　暗褐色土。炭化物粒少量・礫多量に含む。粘性強、締まり強。
Ⅴ層　黄褐色土。地山。礫少量、頁岩の原石を含む。粘性強、締まり強。

第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物

１　石器集中部

ＳＸＱ７(第３図、図版2－1)

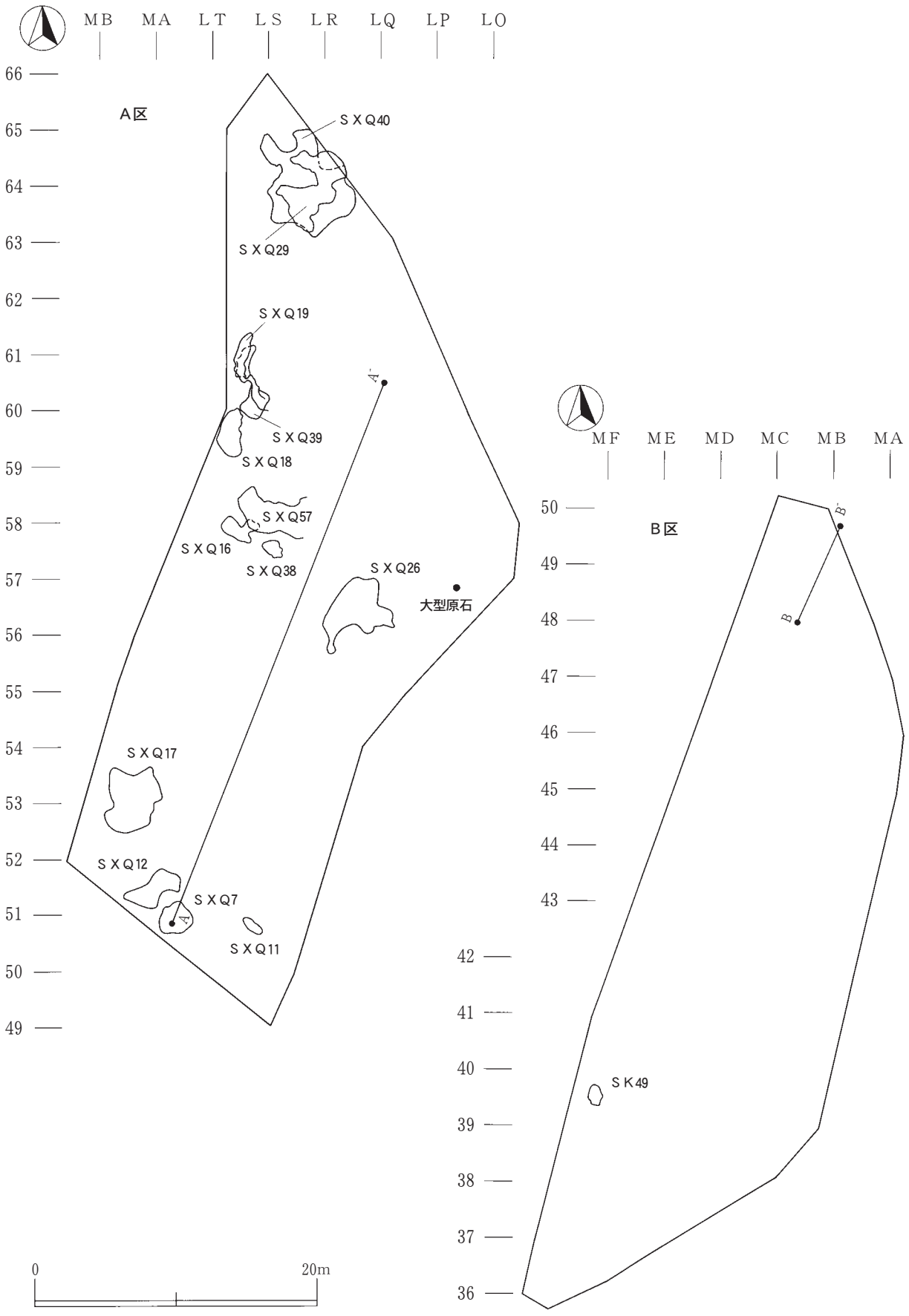
Ａ区南端のＬＴ50・51グリッドに位置し、Ⅳ－ａ層上面で検出した。北西にはＳＸＱ12が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は直径2.2mの略円形の範囲を示し、垂直分布では0.4mの高低差がある。石器の総数は148点で、すべて剥片である。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ11(第３図、図版2－2)

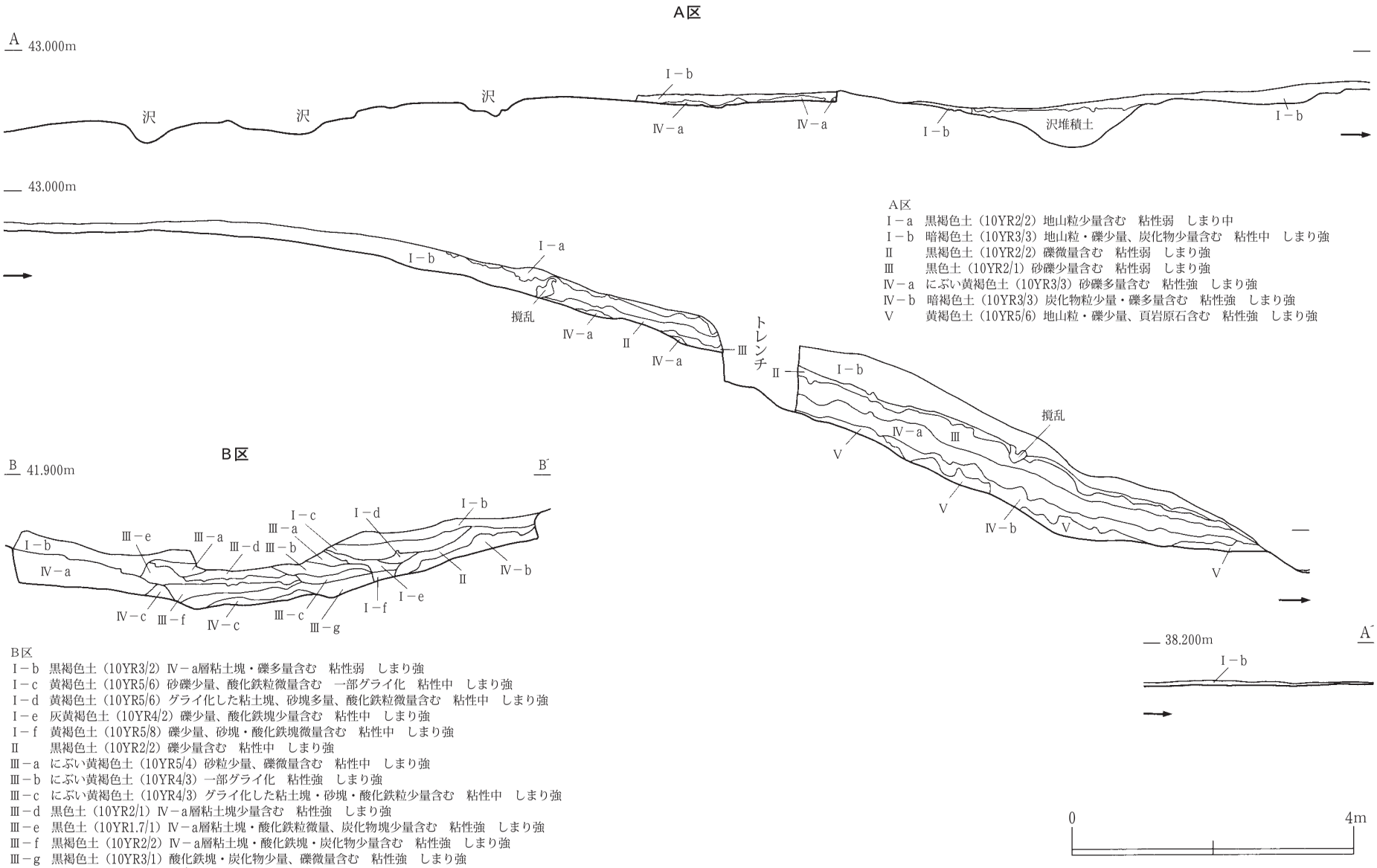
Ａ区南端のＬＳ50グリッドに位置し、Ⅳ－ａ層上面で検出した。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸1.6m×短軸0.5mの楕円形の範囲を示し、垂直分布では0.15mの高低差がある。石器の総数は47点で、すべて剥片である。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ12(第３図)

Ａ区南端のＬＴ・ＭＡ51グリッドに位置し、Ⅳ－ａ層上面で検出した。南東にはＳＸＱ７が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状


MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
A区
SXQ40
SXQ29
SXQ19
SXQ39
SXQ18
SXQ57
SXQ16
SXQ38
SXQ26
大型原石
SXQ17
SXQ12
SXQ7
SXQ11
A
A'
0
20m
MF
ME
MD
MC
MB
MA
50
49
48
47
46
45
44
43
42
41
40
39
38
37
36
B区
B
B'
SK49

第１図　遺構配置図



A区
Ⅰ－a　黒褐色土（10YR2/2）地山粒少量含む　粘性弱　しまり中
Ⅰ－b　暗褐色土（10YR3/3）地山粒・礫少量、炭化物少量含む　粘性中　しまり強
Ⅱ　黒褐色土（10YR2/2）礫微量含む　粘性弱　しまり強
Ⅲ　黒色土（10YR2/1）砂礫少量含む　粘性弱　しまり強
Ⅳ－a　にぶい黄褐色土（10YR3/3）砂礫多量含む　粘性強　しまり強
Ⅳ－b　暗褐色土（10YR3/3）炭化物粒少量・礫多量含む　粘性強　しまり強
Ⅴ　黄褐色土（10YR5/6）地山粒・礫少量、頁岩原石含む　粘性強　しまり強

B区
Ⅰ－b　黒褐色土（10YR3/2）Ⅳ－a層粘土塊・礫多量含む　粘性弱　しまり強
Ⅰ－c　黄褐色土（10YR5/6）砂礫少量、酸化鉄粒微量含む　一部グライ化　粘性中　しまり強
Ⅰ－d　黄褐色土（10YR5/6）グライ化した粘土塊、砂塊多量、酸化鉄粒微量含む　粘性中　しまり強
Ⅰ－e　灰黄褐色土（10YR4/2）礫少量、酸化鉄塊少量含む　粘性中　しまり強
Ⅰ－f　黄褐色土（10YR5/8）礫少量、砂塊・酸化鉄塊微量含む　粘性中　しまり強
Ⅱ　黒褐色土（10YR2/2）礫少量含む　粘性中　しまり強
Ⅲ－a　にぶい黄褐色土（10YR5/4）砂粒少量、礫微量含む　粘性中　しまり強
Ⅲ－b　にぶい黄褐色土（10YR4/3）一部グライ化　粘性強　しまり強
Ⅲ－c　にぶい黄褐色土（10YR4/3）グライ化した粘土塊・砂塊・酸化鉄粒少量含む　粘性中　しまり強
Ⅲ－d　黒色土（10YR2/1）Ⅳ－a層粘土塊少量含む　粘性強　しまり強
Ⅲ－e　黒色土（10YR1.7/1）Ⅳ－a層粘土塊・酸化鉄粒微量、炭化物塊少量含む　粘性強　しまり強
Ⅲ－f　黒褐色土（10YR2/2）Ⅳ－a層粘土塊・酸化鉄塊・炭化物少量含む　粘性強　しまり強
Ⅲ－g　黒褐色土（10YR3/1）酸化鉄塊・炭化物少量、礫微量含む　粘性強　しまり強
Ⅳ－a　にぶい黄褐色土（10YR5/4）礫微量含む　粘性強　しまり強
Ⅳ－b　暗褐色土（10YR3/3）炭化物粒微量・礫多量含む　粘性中　しまり強
Ⅳ－c　灰黄褐色土（10YR5/2）酸化鉄塊多量、炭化物粒少量含む　粘性強　しまり強

第２図　Ａ・Ｂ区基本層位

態は長軸4.1m×短軸2.2mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.35mの高低差がある。石器の総数は28点で、すべて剥片である。他に原石１点が出土した。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ16(第３図)

Ａ区中央西よりのＬＳ57・58グリッドに位置し、Ⅱ層中位で検出した。ＳＸＱ57と重複しそれよりも古く、南東にＳＸＱ38が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸2.6m×短軸1.7mの楕円形に張り出し部が付属した形状の範囲を示し、垂直分布では0.4mの高低差がある。石器の総数は147点で、石核３点・剥片144点である。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ17(第３図、図版2－3)

Ａ区南端のＭＡ52・53、ＬＴ53グリッドに位置し、Ⅱ層中位で検出した。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸5.25m×短軸4.3mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.6mの高低差がある。石器の総数は328点で、石核12点・剥片312点・分割礫２点・剥離原石２点である。他に原石が １点出土した。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ18(第3・6図、図版3－1)

Ａ区中央北西よりのＬＳ59・60グリッドに位置し、Ⅱ層中位で検出した。北東にはＳＸＱ39が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸3.45m×短軸1.85mの半円状の範囲を示し、垂直分布では0.4mの高低差がある。石器の総数は697点で、石核６点・剥片691点である。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、石核(１) のみである。

石核１はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に連続的な剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。

ＳＸＱ19(第４図、図版3－2)

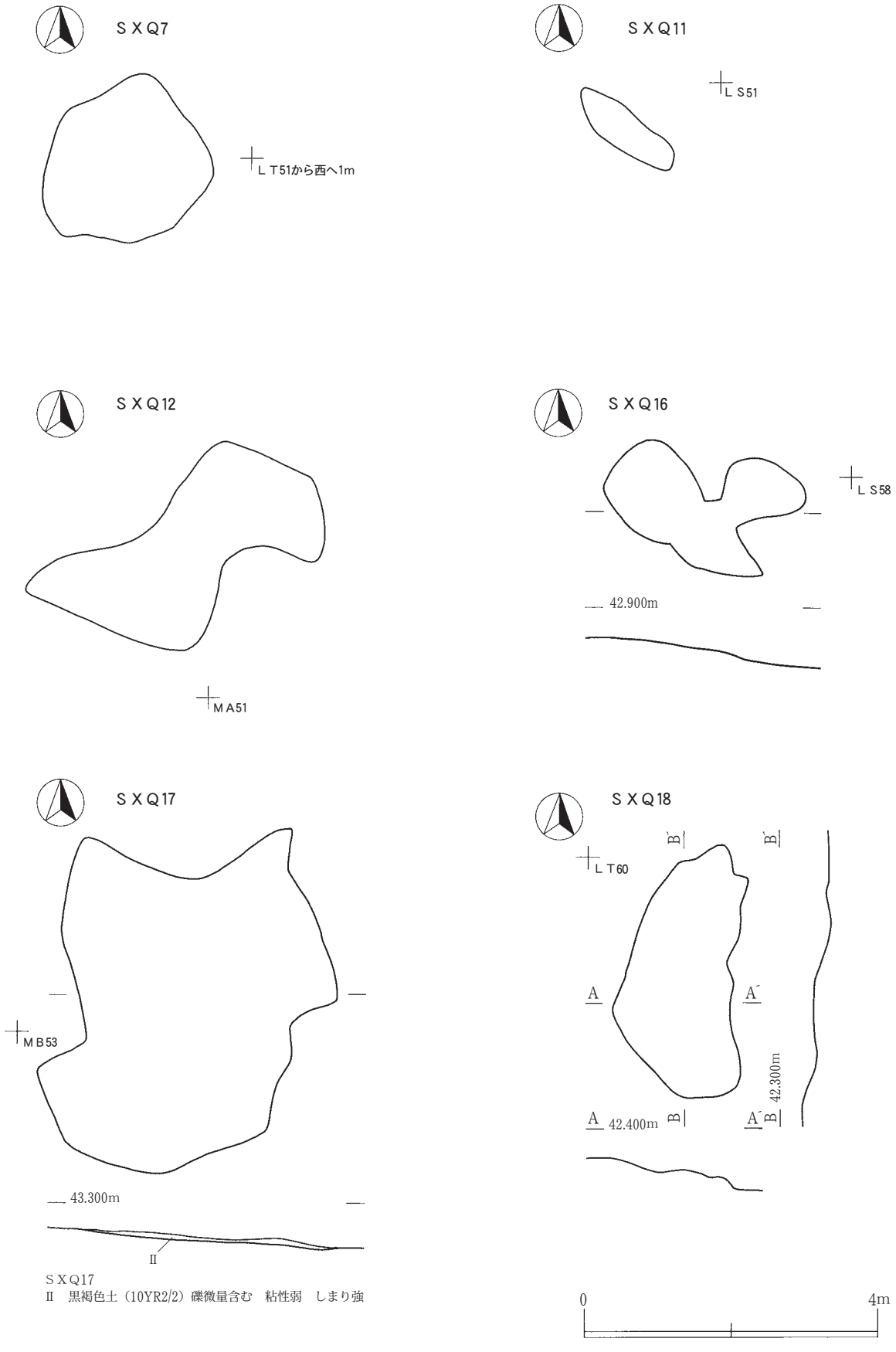
Ａ区中央北西よりのＬＳ60・61グリッドに位置し、Ⅲ層中位で検出した。ＳＸＱ39と重複しそれよりも新しく、南西にはＳＸＱ18が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は、長軸5.4m×短軸2.1mの南北に細長く蛇行した範囲を示し、垂直分布では0.3mの高低差がある。調査区の西側境界断面にも石器が観察でき、調査区外にも石器集中部が広がっている。石器の総数は632点で、石核15点・剥片615点・分割礫２点である。他に原石が ２点出土した。石器製作跡の石器が沢状地形にまとまって流れ込んだものと判断される。

ＳＸＱ26(第４図)

Ａ区中央南東よりのＬＱ55・56・57、ＬＰ56、ＬＲ56 グリッドに位置し、Ⅳ－ａ層上面で検出した。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸6.25m×短軸4.65mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.8mの高低差がある。石器の総数は77点で、石核２点・剥片75点である。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ29(第４・6・７図、図版4－1)

Ａ区北端のＬＱ・ＬＲ63、ＬＱ・ＬＲ64グリッドに位置し、Ⅲ層中位で検出した。ＳＸＱ40と重複しそれよりも新しい。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸5.8m×短軸4.3mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.6mの高低差がある。



第３図　石器集中部（１）（ＳＸＱ７・１１・１２・１６・１７・１８）

急斜面直下にあり、斜面からの原石・石器の崩落と判断されるものも一部に含む。また、流水による影響も考えられる。東側の側溝断面にも石器が観察でき、本来調査区外にも石器集中部が広がっていたのが、側溝やその東にある水田の掘削などで消滅したものと推定される。石器の総数は1,600点で、スクレイパー 1点・石核25点・剥片1,560点・剥離原石14点である。他に原石が 8点出土した。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、スクレイパー(4)・石核(2・3)と接合資料Cである。

スクレイパーの4は裏面下位に主要剥離面が観察されることから、表面側の自然面右端に打点をもつ剥片に剥片剥離を施し、表面の左側縁と下端を調整している。

石核の2はd面右下が最終の剥離面と考えられ、同面側が分割面と考えられる。d面は節理面のようであり自然面と区別しにくい。3はe面が最終の剥離面と考えられる。c面で連続して剥片剥離を行ってから、a面の剥離を連続的に施す。

接合資料Cは本遺構の石核2点と剥片7点、SXQ40の石核1点と剥片11点、SXQ39の剥片1点で構成される。詳細はSXQ40の接合資料Cを参照してもらいたい。

SXQ38(第4・7・9・10図、図版3－3)

A区中央西よりのLR57グリッドに位置し、斜面際窪地のⅣ－a層上面で検出した。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。遺構調査中に削片が顕著に認められたので、土壌をすべて採取し洗浄を行った。石器の分布状態は長軸1.2m×短軸1.1mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.25mの高低差がある。石器の総数は13,101点で、石核26点・剥片13,072点・分割礫2点・剥離原石1点である。石器製作跡と考えられるが、削片をまとめて遺棄した遺構の可能性もある。

掲載した石器は石核(5)と接合資料A・Bである。

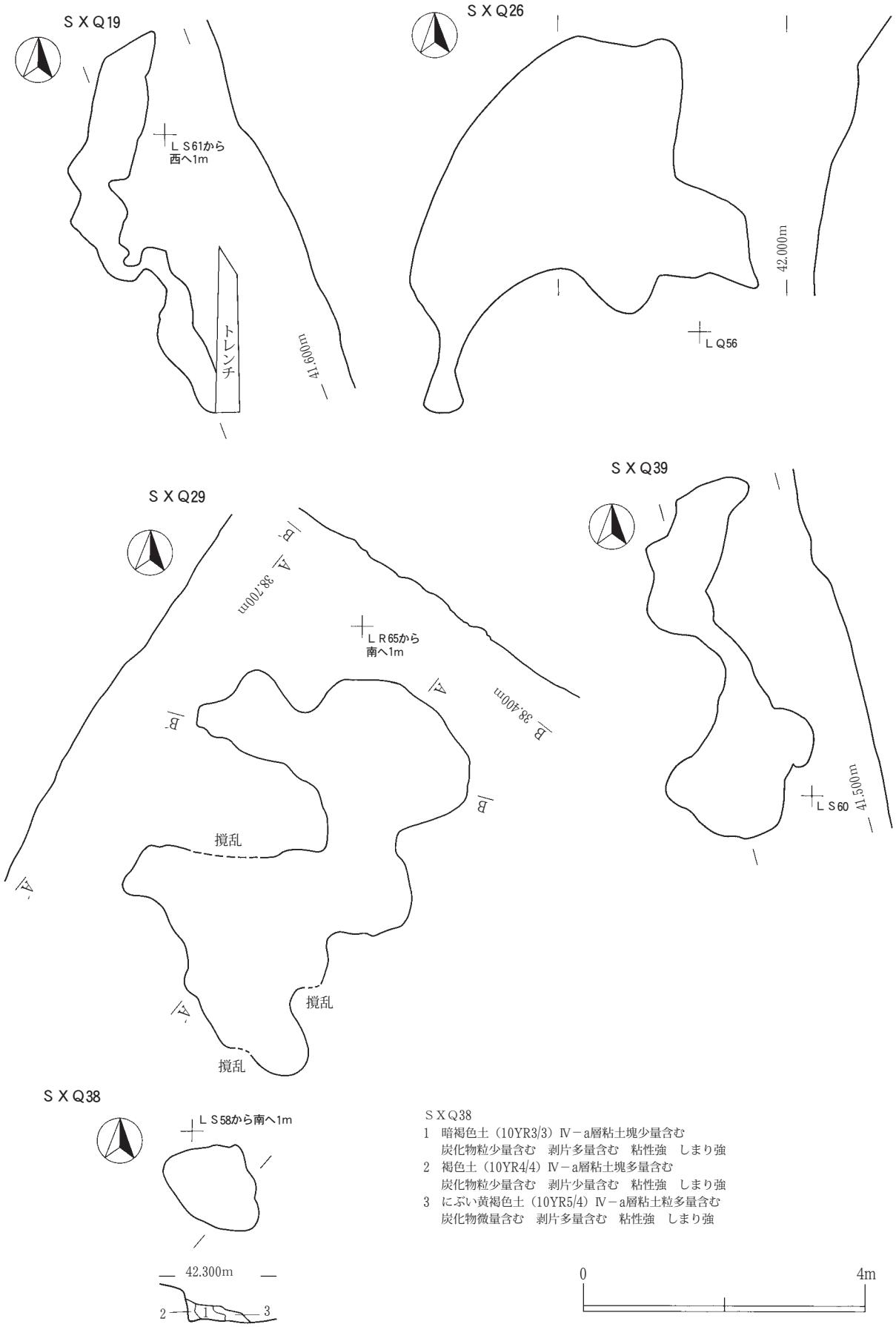
5は片側が湾曲した薄手の礫を素材にして、一側縁に交互の剥離を行っている。a面の剥離面は茶色に風化している。両面体縁辺加工石核B に分類する。

接合資料Aは23点の石器が接合したもので、本遺構の分割礫1点と剥片18点、SXQ57の剥片4点で構成される。扁平な自然礫から分割礫(第9図－1)をはずし、1を除いた分割礫から、2→3→4…→13の順番で連続した剥片剥離を行っている。c面の観察から、礫の風化相は左側では薄く右側では厚くなっており、風化相を取り除き中央の良質な石核を得るために剥片剥離を行っていたことが理解される。

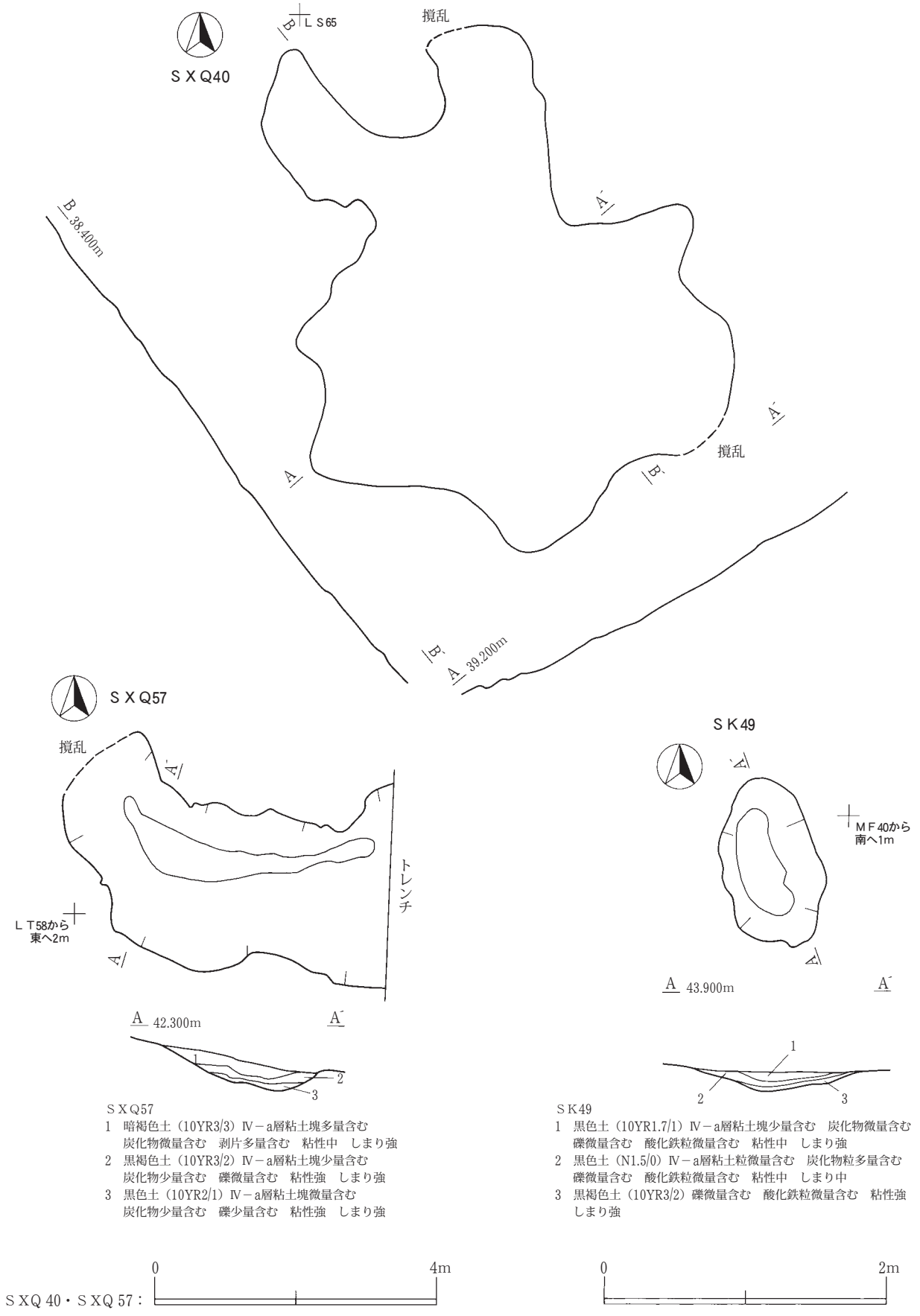
接合資料Bは25点の石器が接合したもので、本遺構の石核1点・剥片18点、SXQ57の石核1点・剥片3点、遺構外の剥片2点で構成される。やや扁平な厚みをもつ自然礫から、大きめな剥片を連続的に剥離している。c面の観察から、礫の風化相は両面共に 1 ～ 2㎝と厚いことから、ここでも風化相を取り除き中央の良質な石核を得るために剥片剥離を行っていた。

SXQ39(第4・7・11図)

A区中央北西よりのLS59～61、LR60グリッドに位置し、Ⅳ－a層上面で検出した。SXQ19と重複しそれよりも古く、南西にはSXQ18が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸5.15m×短軸2.25mの2つの範囲が連結したような範囲を示し、垂直分布では0.25mの高低差がある。調査区の西側境界断面にも石器が観



第４図　石器集中部（２）（ＳＸＱ19・26・29・38・39）



第５図　石器集中部（３）・土坑（ＳＸＱ 40・57、ＳＫ 49）

察でき、調査区外にも石器集中部が広がっている。石器の総数は8,514点で、石核74点・剥片8,434点･分割礫１点･剥離原石５点である。他に原石が１点出土した。石器製作跡の石器が斜面にまとまって流れ込んだ状況と判断された。

掲載した石器は石核（６・７）のみである。

６はａ面側が最終剥離面で、同面で連続的に剥片剥離を行っている。これ以前にａ面を除いた部分に全面的な剥離を施す。凹面状石核Ｂに近い。７はａ面上縁の中央に小さな剥離が観察され、ノッチを意識した可能性もある。それ以前に、縁辺の一側縁に交互の剥離を行っていることから、両面体縁辺加工石核Ｂと捉えておく。

接合資料Ｃは本遺構の剥片１点、ＳＸＱ40の石核１点と剥片11点、ＳＸＱ29の石核２点と剥片７点で構成される。詳細はＳＸＱ40の接合資料Ｃを参照してもらいたい。

ＳＸＱ40（第５・7・8・11図、図版４－１・２）

Ａ区北端のＬＱ・ＬＲ・ＬＳ63、ＬＱ・ＬＲ・ＬＳ64グリッドに位置し、Ⅳ－ａ層上面で検出した。ＳＸＱ29と重複しそれよりも古い。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸8m×短軸6.5mの不整形の範囲を示し、垂直分布では約１mの高低差がある。急斜面直下にあり、斜面からの原石・石器の崩落と判断されるものも一部に含む。
また流水による影響も考えられる。東側の側溝断面にも石器が観察でき、本来調査区外にも石器集中部が広がっていたのが、側溝やその東にある水田の掘削などで消滅したものと推定される。石器の総数は3,328点で、石核50点･剥片3,247点･分割礫22点･剥離原石９点である。他に原石が47点出土した。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は石核（８～10）と接合資料Ｃである。

８はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続的に剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に連続的な剥離を施す。ｂ面に礫皮面を残していることから、自然礫を素材にしたものと考えられる。凹面状石核Ｂに分類する。９はｂ面に最終の剥離面をもち、やや厚みのある楕円形扁平礫の一先端部を交互に剥離している。ｃ面の剥離面は茶色に風化している。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。10はやや厚みのある楕円形扁平礫の両面に、全面的な剥離を行う。ａ面の上位先端とｂ面の下位先端に、小さな調整を施す。両面体縁辺加工石核Ａ に分類する。

接合資料Ｃは22点の石器が接合したもので、本遺構の石核１点と剥片11点、ＳＸＱ29の石核２点と剥片７点、ＳＸＱ39の剥片１点で構成される。やや扁平な自然礫から、大きめな剥片を連続的に剥離している。14′を除いて、1→2→3・・・21の順番で連続した剥片剥離を行っている。ｃ面の観察から、礫の風化相は左側が1㎝程と厚く、右側は5㎝程である。風化相を取り除き良質な石核を得ようとしている。18は石核で、石篦を意図した可能性がある。

ＳＸＱ57（第５・８・10図）

Ａ区中央西よりのＬＲ57・58、ＬＳ57・58グリッドに位置し、Ⅳ－ａ層上面で検出した。ＳＸＱ16と重複しそれよりも新しく、南にＳＸＱ38が隣接している。古い風倒木の撹乱を受け、東側はトレンチで掘削された。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は現存長軸5.15m×短軸3.35mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.65mの高低差がある。石器の総数は1,790点で、石核58点・剥片1,718点・分割礫13点・剥離原石１点である。他に原石が

１点出土した。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、石核(11・12)のみである。

石核の11はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ｂ面下端にａ面側からの剥離を施す。凹面状石核Ａに分類する。12はｃ面で、連続的な剥片剥離を行う。同面中央下端に僅かに分割面が認められる。凹面状石核Ａに分類する。

接合資料Ｂは、本遺構の石核１点・剥片３点、ＳＸＱ38の石核１点・剥片18点、遺構外の剥片２点で構成される。詳細はＳＸＱ38の接合資料Ｂを参照してもらいたい。

第３節　時代不明の検出遺構

１　土坑

ＳＫ49(第５図、図版4－3)

Ｂ区南西側ＭＦ39グリッドに位置し、Ⅳ－ａ層上面で検出した。平面形は長軸1.22m×短軸0.72mの不整楕円形で、深さ0.17mである。剥片が１点出土した。

第４節　遺構外出土遺物(第12・13図)

石器の総数は6,890点で、石鏃２点・スクレイパー １点・二次加工ある剥片１点・石核188点・剥片6,658点・分割礫12点・剥離原石28点である。他に原石が49点出土した。

掲載した石器は、石鏃(13・14)・スクレイパー(15)・石核(16～20)である。

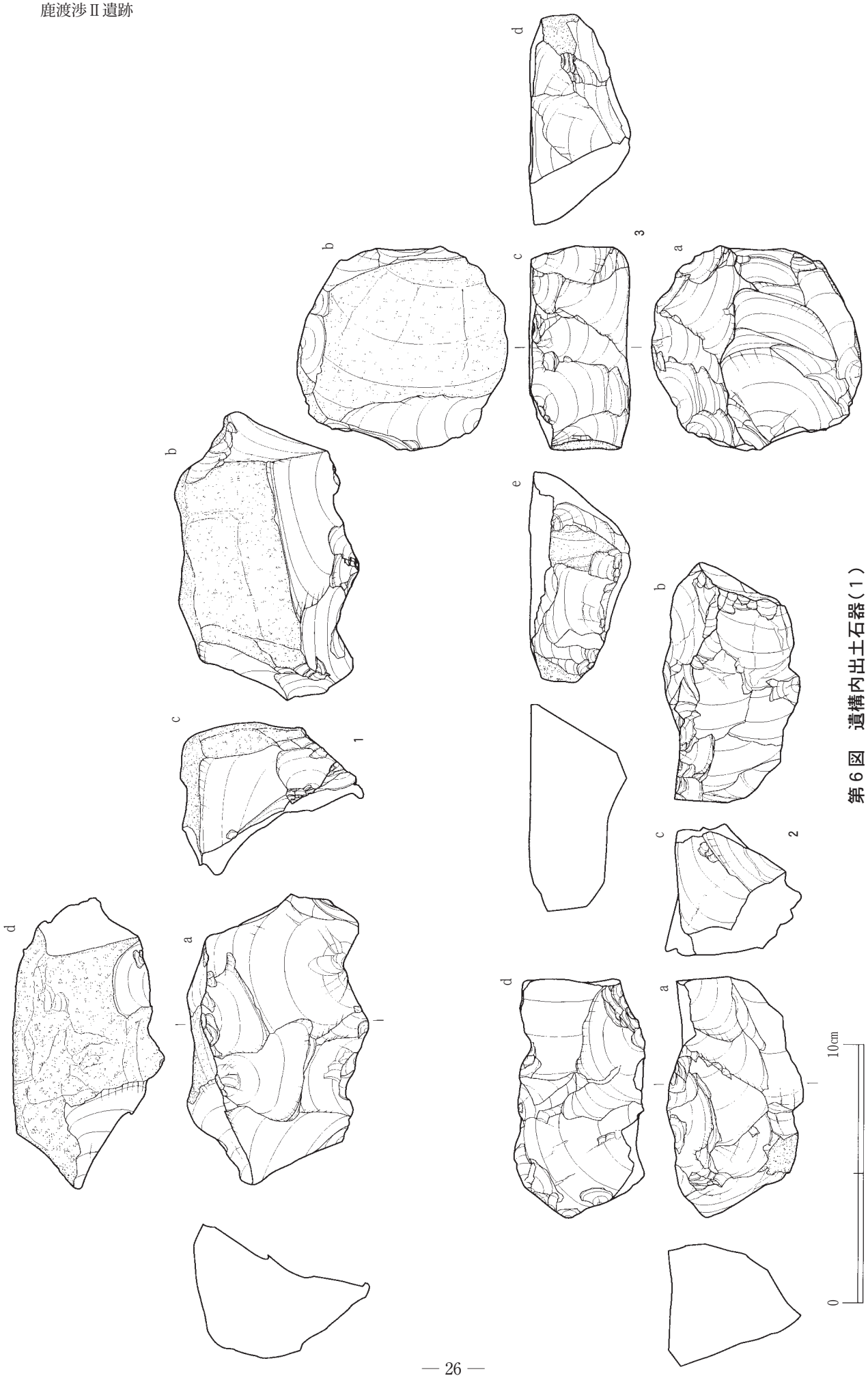
石鏃の13は有茎石鏃で、表裏面に丁寧な調整を施す。14は裏面に主要剥離面を残し、薄い剥片を得た後、縁辺部に調整を施す。スクレイパーの15は縦長剥片の両側縁に細かく丁寧な調整を施し、両側縁がノッチ状を呈している。

石核の16はａ面に最終の剥離面をもち、同面で分割面(ｄ面)からの連続した剥片剥離を行う。舟底状石核Ａに分類する。17はａ面に最終の剥離をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ｂ面にやや細かな調整を連続的に施す。石核を利用してスクレイパーにした可能性もある。凹面状石核に近い。18はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を施す。これ以前に、ａ面側からｂ面側に連続的な剥片剥離を施す。ａ面左下に分割面(節理面)が確認できる。凹面状石核Ｂに分類する。19はｄ面に最終の剥離をもち、ａ面上位で連続した剥片剥離を行う。全体に三角錐状の形状を呈する。20はａ面の上端に分割面をもち、主としてそこを打点面にした剥片剥離を施す。

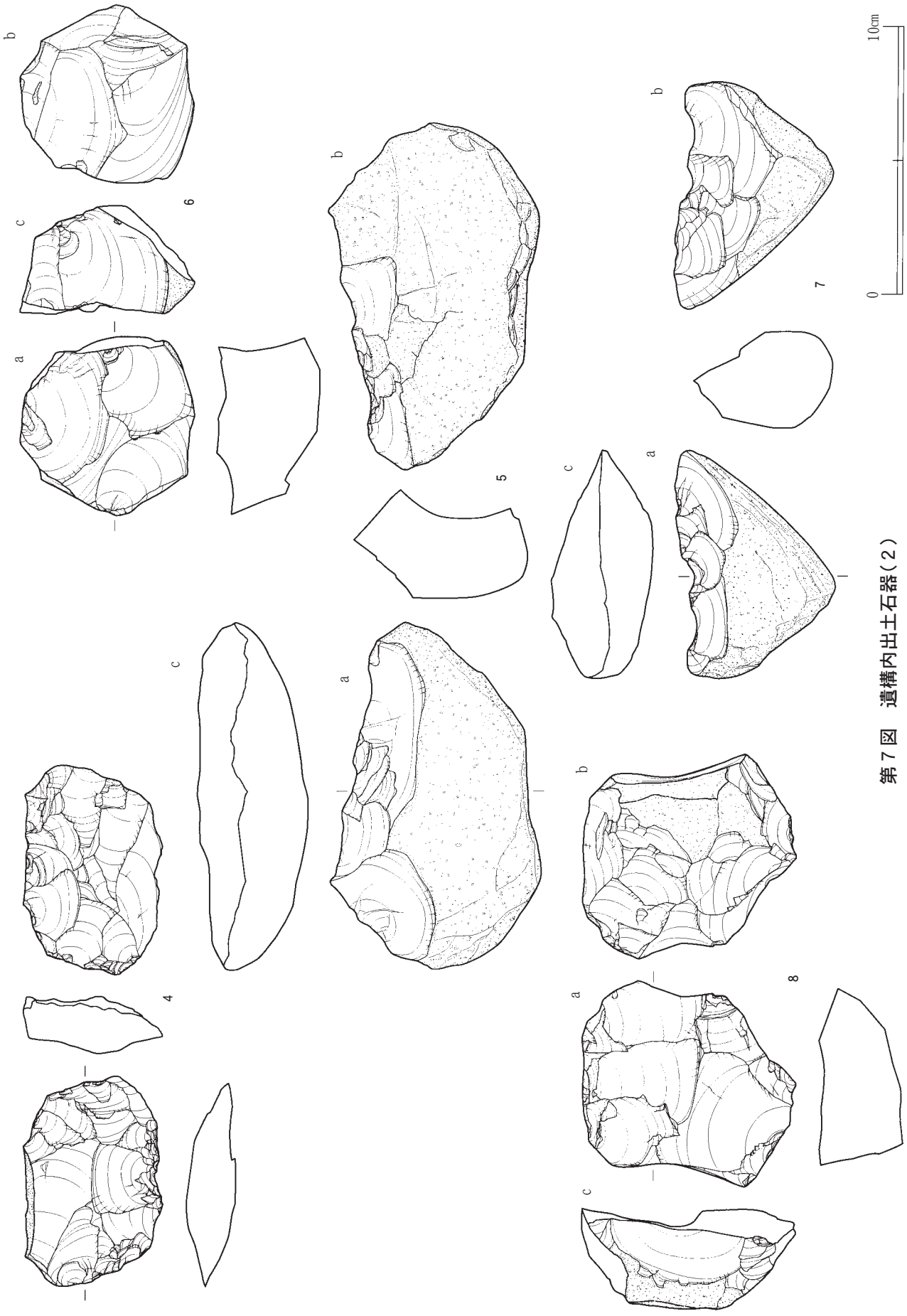
第１表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	出土位置	層 位	器　種	石 質	長さ・幅・厚さ(㎜)	重量(g)	備　　考
1	6	ＳＸＱ18	（Ⅱ）	石核	頁岩	113 ・ 71 ・ 59	338.9	ａ～ｄ面　凹面状石核Ｂ
2	6	ＳＸＱ29	Ⅲ	石核	頁岩	94 ・ 53 ・ 52	260.9	ａ～ｄ面
3	6	ＳＸＱ29	（Ⅲ）	石核	頁岩	82 ・ 80 ・ 39	310.6	ａ～ｅ面
4	7	ＳＸＱ29	（Ⅲ）	スクレイパー	頁岩	79 ・ 52 ・ 22	80.4	
5	7	ＳＸＱ38	（Ⅳ－ａ）	石核	頁岩	130 ・ 79 ・ 42	379.0	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
6	7	ＳＸＱ39	（Ⅳ－ａ）	石核	頁岩	67 ・ 65 ・ 41	169.5	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂに近い
7	7	ＳＸＱ39	（Ⅳ－ａ）	石核	頁岩	86 ・ 60 ・ 38	148.4	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
8	7	ＳＸＱ40	（Ⅳ－ａ）	石核	頁岩	80 ・ 77 ・ 38	229.3	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
9	8	ＳＸＱ40	（Ⅳ－ａ）	石核	頁岩	91 ・ 84 ・ 56	527.1	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
10	8	ＳＸＱ40	（Ⅳ－ａ）	石核	頁岩	121 ・ 109 ・ 55	597.3	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ａ
11	8	ＳＸＱ57	Ⅰ	石核	頁岩	81 ・ 72 ・ 32	219.1	ａ～ｄ面　凹面状石核Ａ
12	8	ＳＸＱ57	Ⅰ	石核	頁岩	63 ・ 41 ・ 32	59.5	ａ～ｄ面　凹面状石核Ａ
13	12	ＬＯ59	－	石鏃	頁岩	39 ・ 19 ・ 5	2.2	
14	12	13トレンチ	－	石鏃	頁岩	24 ・ 16 ・ 3	1.0	
15	12	ＬＱ61	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	94 ・ 60 ・ 28	130.3	
16	12	表採	－	石核	頁岩	87 ・ 45 ・ 33	88.9	ａ～ｄ面　舟底状石核Ａ
17	12	ＬＳ65	Ⅰ	石核	頁岩	86 ・ 73 ・ 36	233.3	ａ～ｃ面　凹面状石核に近い
18	12	ＬＯ57	Ⅱ	石核	頁岩	126 ・ 100 ・ 31	375.1	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
19	13	ＬＲ51	Ⅳ	石核	頁岩	84 ・ 74 ・ 61	342.6	ａ～ｄ面
20	13	ＬＱ56	Ⅰ	石核	頁岩	91 ・ 81 ・ 69	542.4	ａ～ｄ面
接合資料Ａ	9	ＳＸＱ38 ＳＸＱ57	Ⅰ・Ⅳ Ⅳ－ｂ他	－	頁岩	205 ・ 157 ・ 48	1072.0	
接合資料Ｂ	10	ＳＸＱ38 ＳＸＱ57 ＬＲ57	Ⅰ・Ⅳ－ｂ 他	－	頁岩	227 ・ 221 ・ 83	2761.8	
接合資料Ｃ	11	ＳＸＱ29 ＳＸＱ39 ＳＸＱ40	Ⅲ他	－	頁岩	302 ・ 244 ・ 65	2780.2	

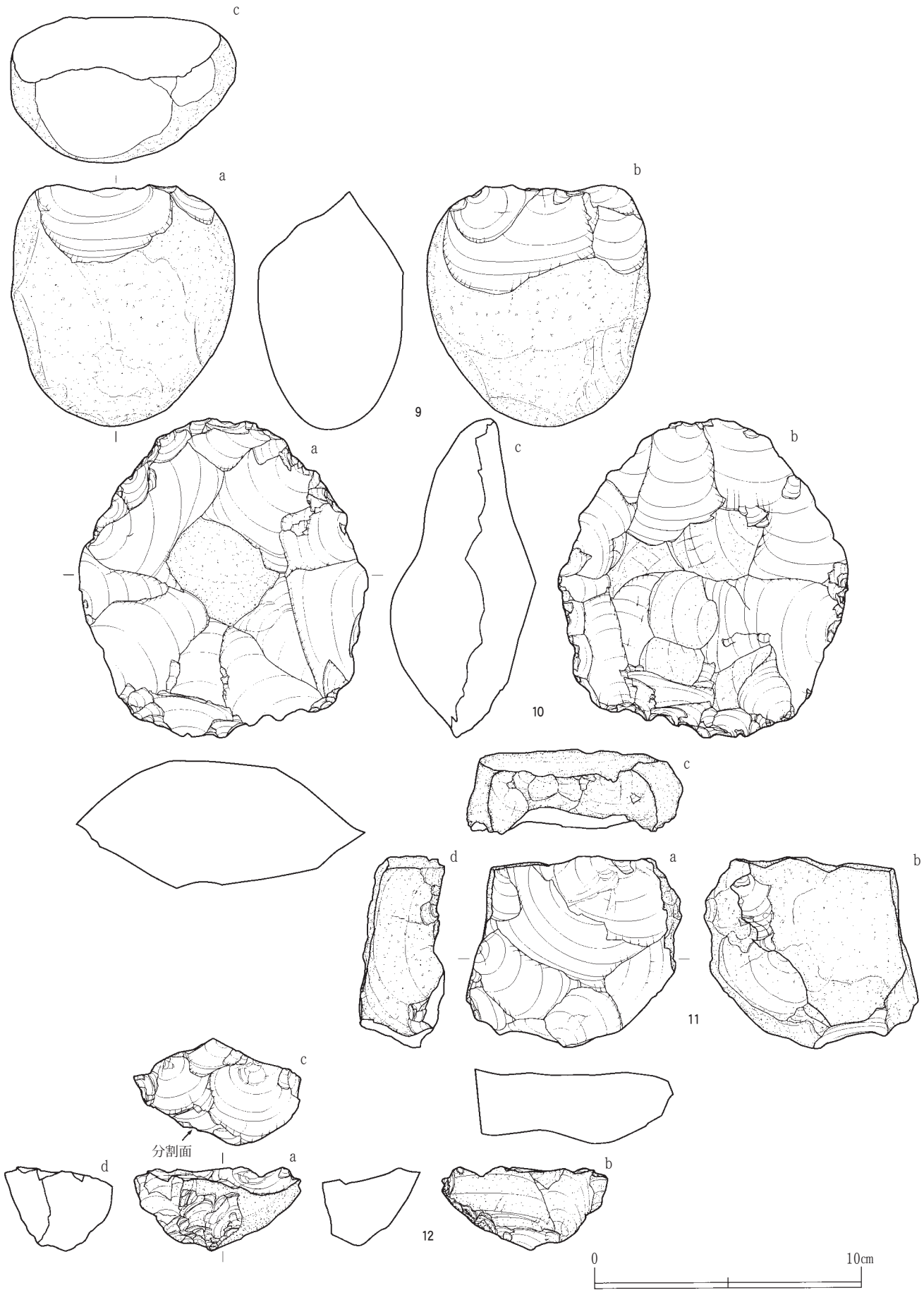
（　）内は遺構確認層



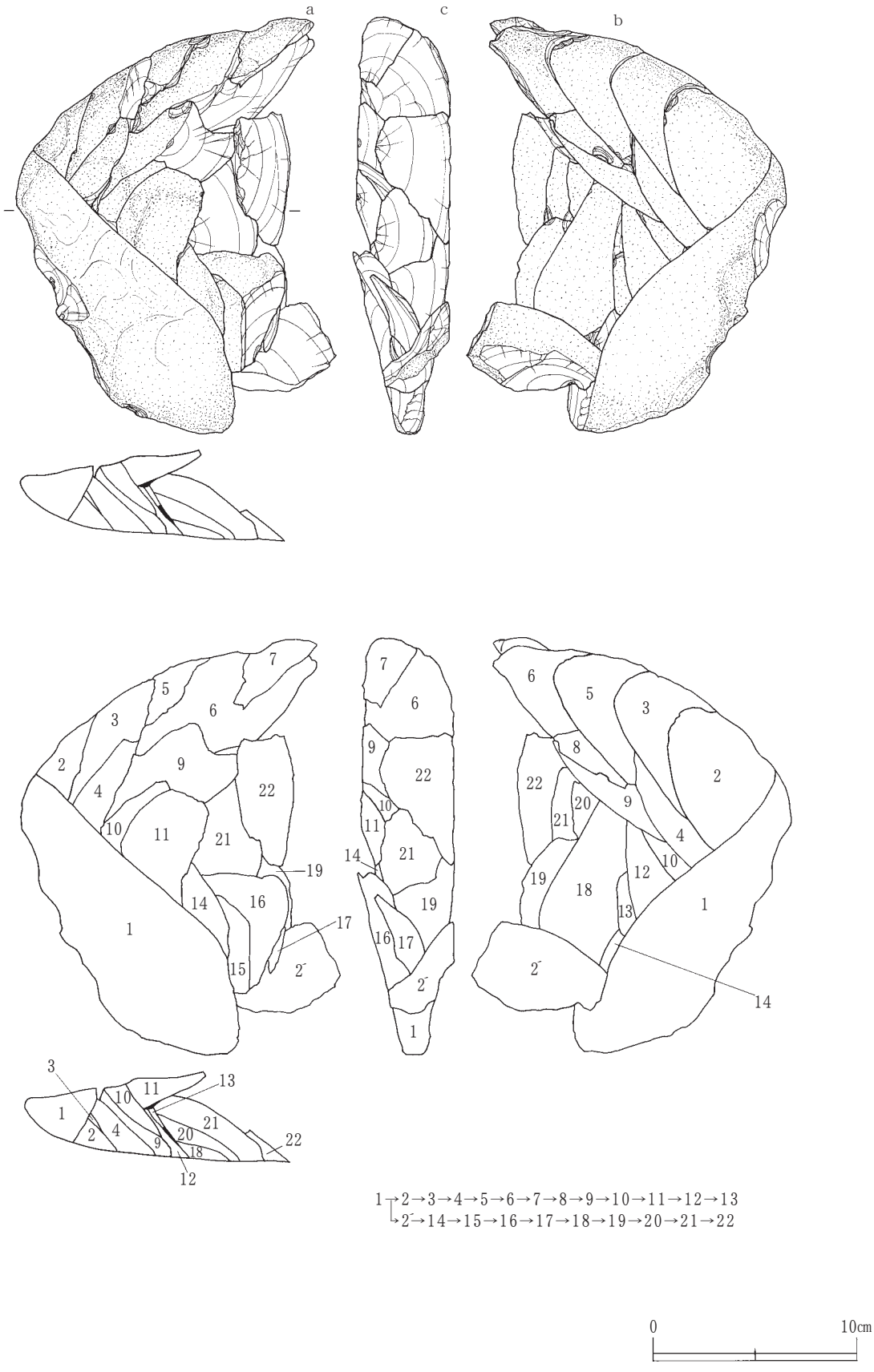
第６図　遺構内出土石器（１）



第７図　遺構内出土石器（２）

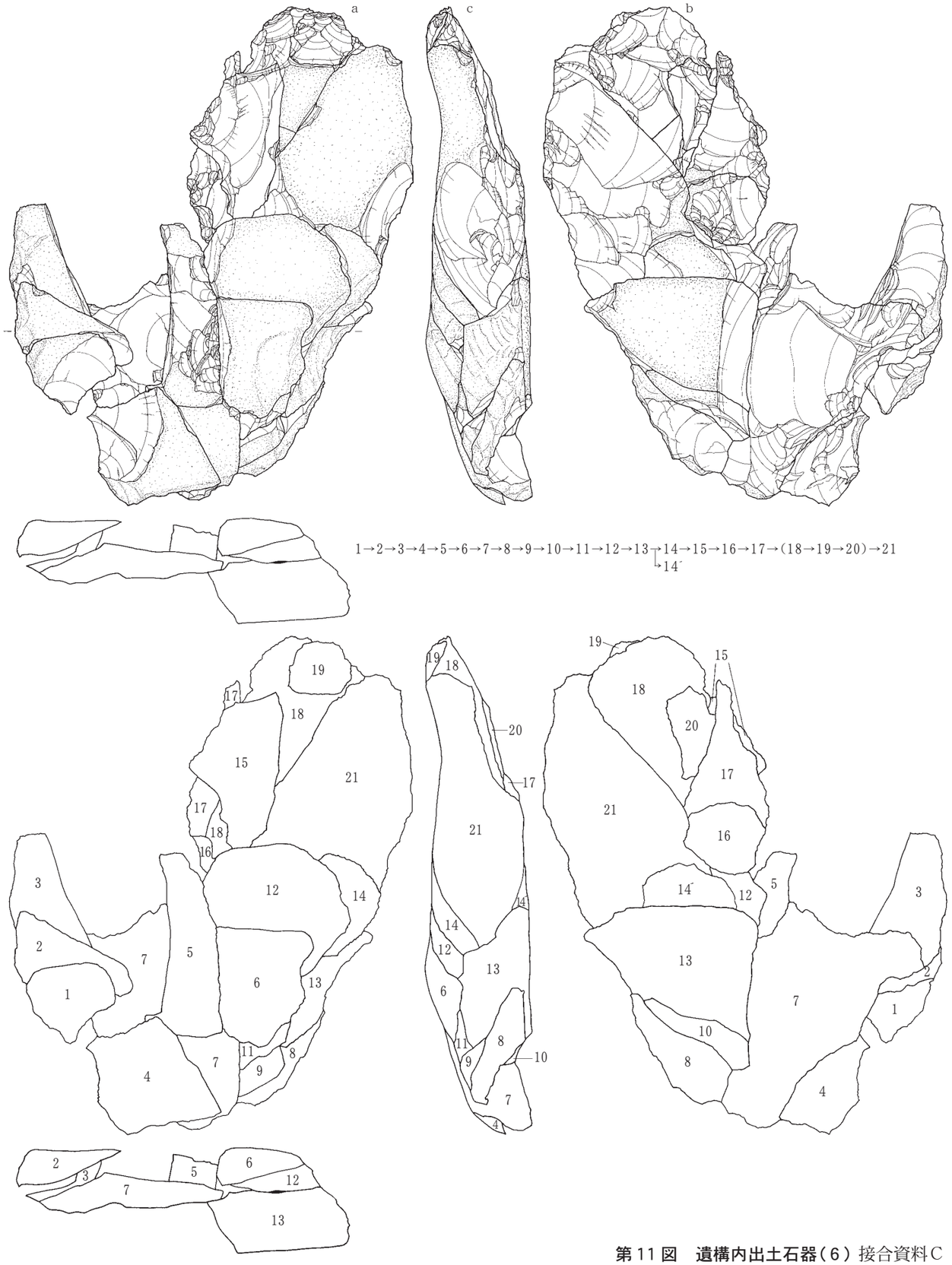


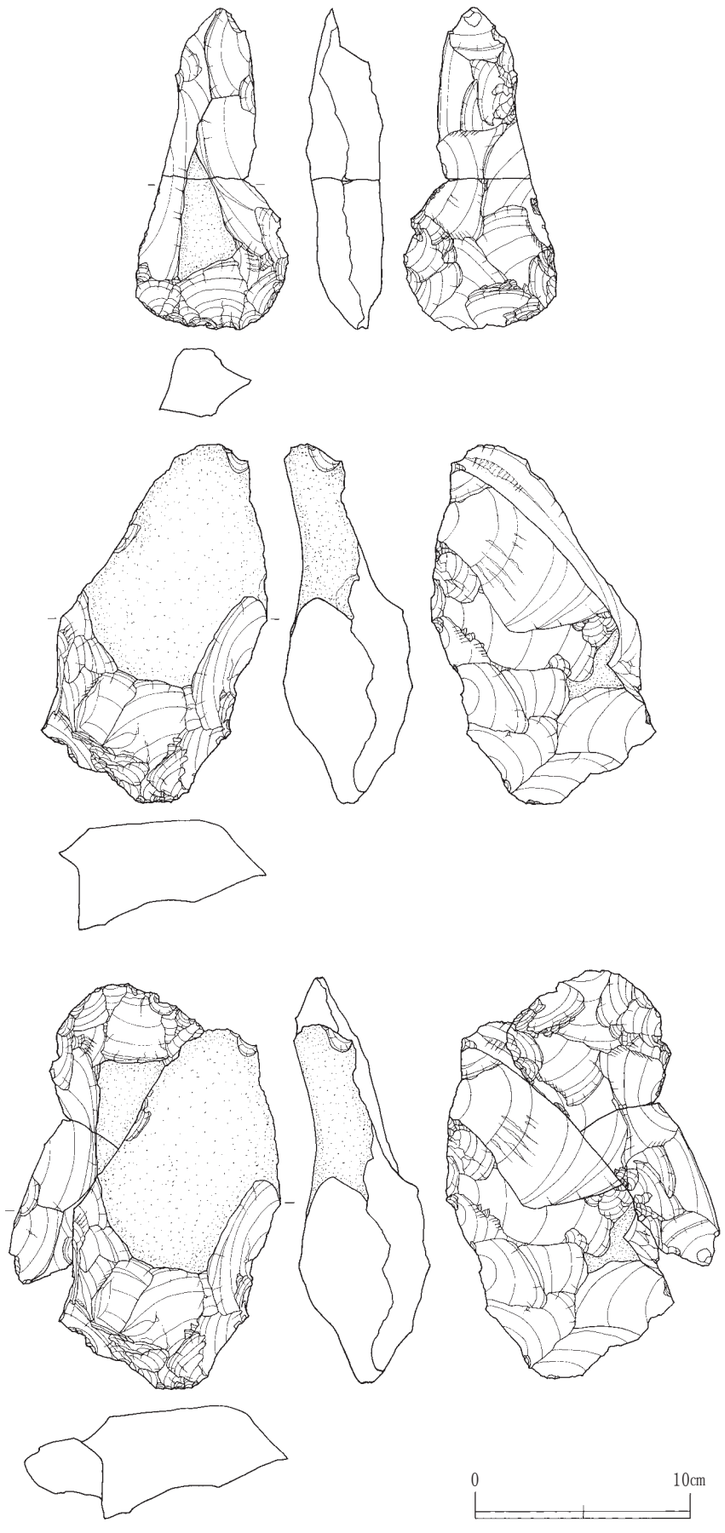
第８図　遺構内出土石器（３）



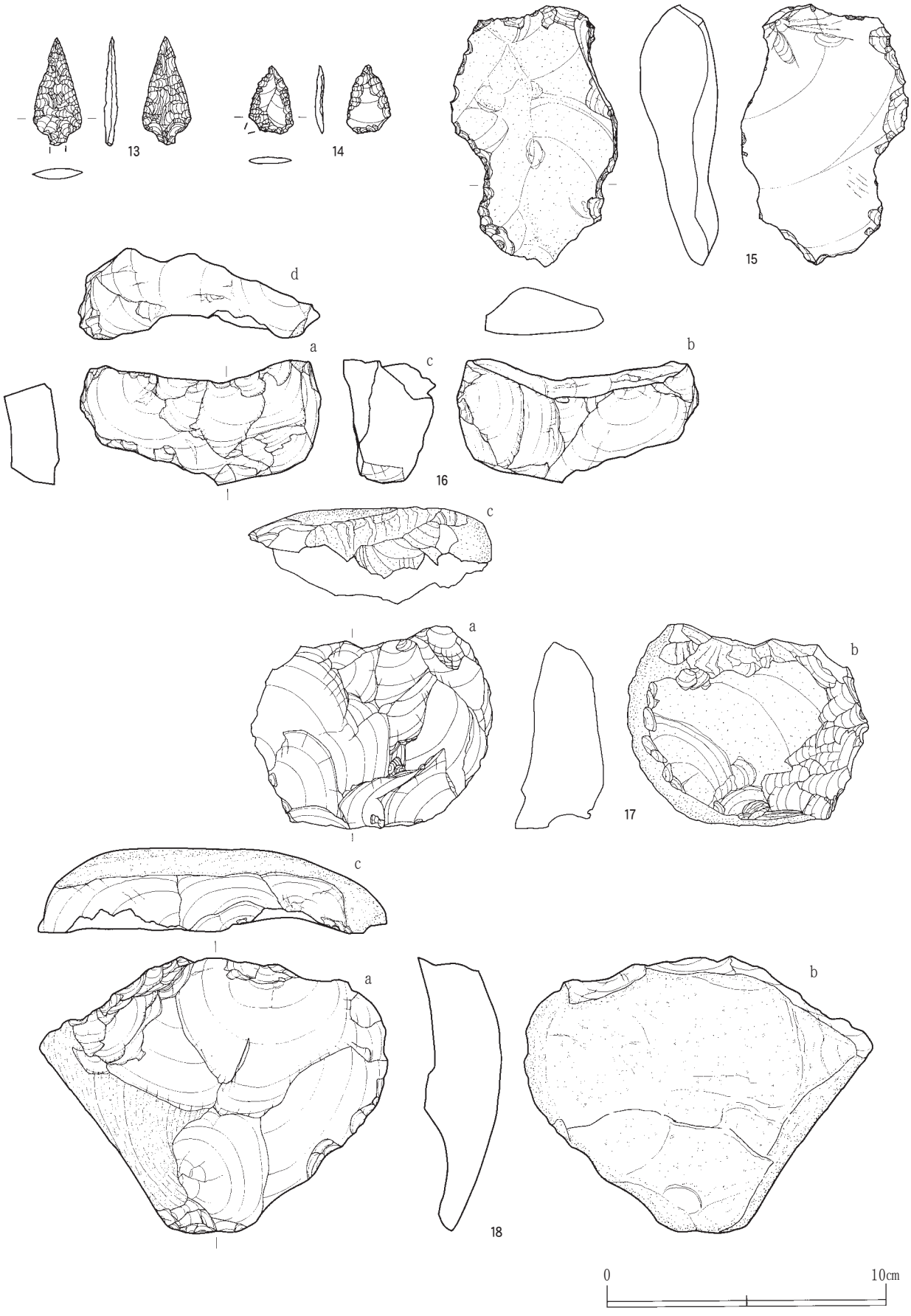
第９図　遺構内出土石器（４）接合資料Ａ

第10図　遺構内出土石器（5）接合資料B

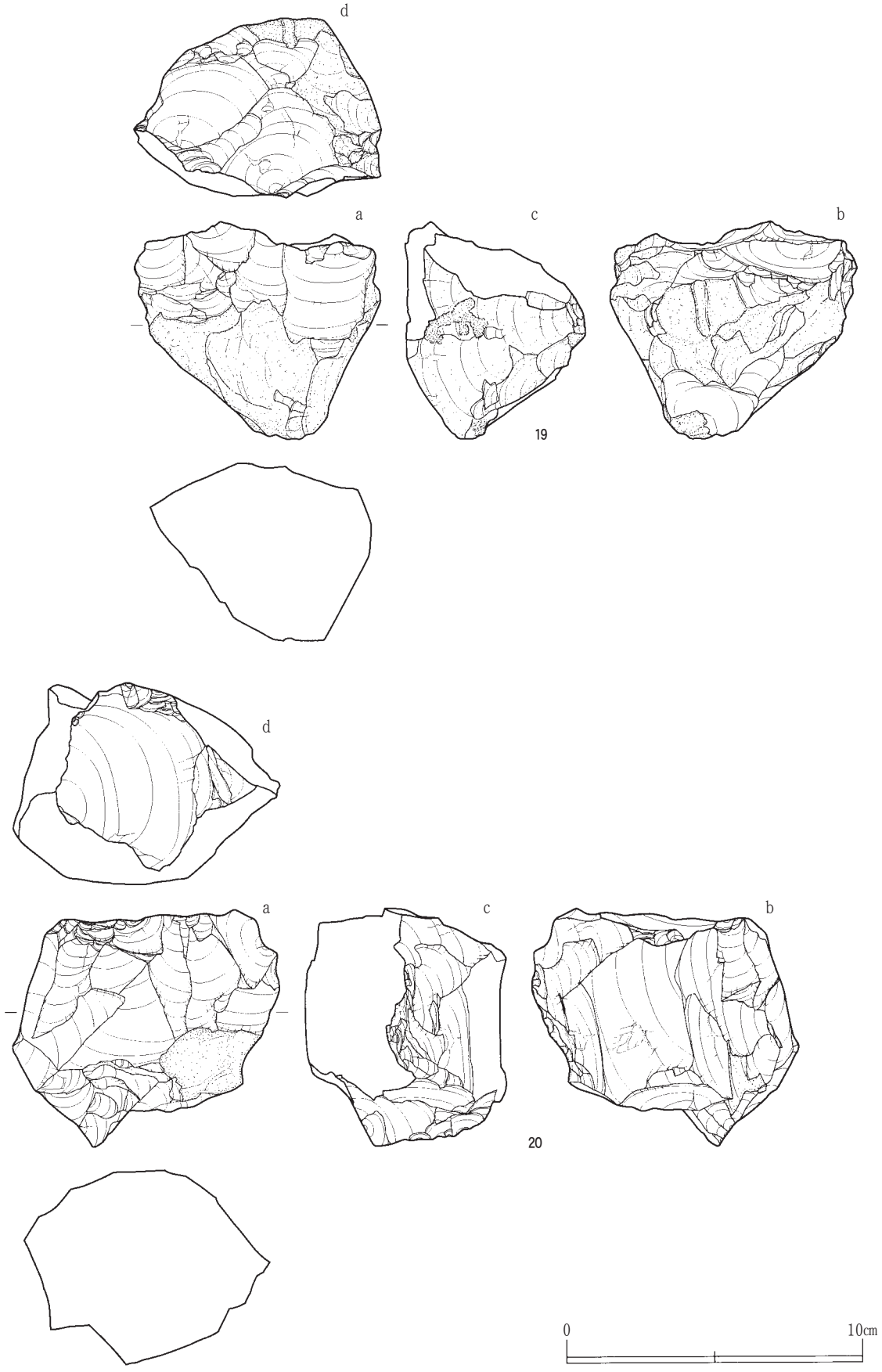




第 11 図　遺構内出土石器（６）接合資料Ｃ



第 12 図　遺構外出土石器（１）



第 13 図　遺構外出土石器（2）

第３章　まとめ

鹿渡渉Ⅱ遺跡は、上岩川遺跡群の中で最も北に位置している。遺跡からは、ＳＸＱ７・11・12・16・17・18・19・26・29・38・39・40・57の13か所の石器集中部、ＳＫ 49の土坑１基を検出した。石器の総数は37,328点で、石器集中部を含む遺構内が30,438点、遺構外が6,890点である。石鏃・スクレイパー・石核・剥片・分割礫・剥離原石が出土した。

石器集中部が検出されたのは、北側Ａ区からだけで、しかも南側平坦部は希薄で北側斜面裾部と同緩斜面際に多くの石器が出土した。北側斜面際から裾部にかけては、ＳＸＱ18・39・19・29・40が検出されたが、これら５か所は、ＳＸＱ26以南の石器集中部と比較して石器の出土量が極端に多い。このことは、調査対象外となっている地区も含んで北側斜面側とこの付近の平坦面で、石器製作の作業が頻繁に行われていたことを示すものである。

本遺跡では原石採掘跡は確認されていないが、多くの原石が当区域に集められたことは疑いない。それでは、当遺跡の原石はどのようにして得られたものであろうか。原石を採掘してから、原石採掘地の石器製作に至る工程を示せば、原石採掘（Ａ段階）→原石被覆土除去・洗浄（Ｂ段階）→石器製作（Ｃ段階）が思考される。鹿渡渉Ⅱ遺跡の岩石採取法は、原石採掘跡が未確認であるが、調査区北端には沢地が発達していることから、沢地の南斜面際の露頭から原石を得たと想定するのが妥当ではないだろうか。先の作業工程のＡ・Ｂ段階をほぼ同一地区で行ったものと考えられる。一部は斜面で、一部は斜面に近い平坦部でＣ段階の作業を行ったと考えられる。

先に、幅２ｍ程の溝跡（自然地形）がＡ区南側で西から東にかけて延びていることは述べてある。このＬＲ54グリッドでは、表土下から約１ｍ余り下の底面付近より10～20㎝の頁岩原石が数点地山に食い込んで出土していた。溝覆土中でも確認している。この付近に、頁岩の原石が包含されていることが確かめられたことを付記しておく。

一方、当遺跡出土資料には接合資料がいくつか認められる。そのうち、良好な資料については接合資料Ａ～Ｃを掲載した。接合資料Ａは、ＳＸＱ38の石核１点・剥片18点とＳＸＱ57の剥片４点が接合した。ＳＸＱ38とＳＸＱ57は近接しており、ＳＸＱ57はＳＸＱ38より低いレベルに存在するので、ＳＸＱ38の石器がＳＸＱ57に流れたことも想定されるが、発掘の所見では、ＳＸＱ38のまとまりは良好で、ＳＸＱ38とＳＸＱ57の同時期が示唆される。接合資料Ｂは、ＳＸＱ38の石核１点・剥片18点とＳＸＱ57の石核１点・剥片３点が接合したが、両者の関係は同様の所見である。

接合資料Ｃは、ＳＸＱ29の石核２点・剥片７点とＳＸＱ39の剥片１点とＳＸＱ40の石核１点・剥片11点が接合した。ＳＸＱ29・40は重複関係に捉えたが、比較的多くの接合関係が認められる点と斜面の裾部に当たることから、両遺構は本来一遺構の可能性がある。ＳＸＱ39の剥片はＳＸＱ29・40に接合する。ＳＸＱ39からＳＸＱ29・40に流れ込んだことも考えられなくはないが、それらの中間辺りの調査区境界断面に、石器が多く観察される状況からその西側平坦からＳＸＱ29・40とＳＸＱ38へ同時期に流れ込んだことも想定される。

さて、ＳＸＱ40からは興味ある接合資料が得られている。長さ21㎝×幅15㎝×厚さ4.5㎝で、縦・横の断面はレンズ状を呈している。５点の資料が接合したもので、扁平な自然礫縁辺の全域に間を開

けながら剥片剥離を15回行っている。５点のうちの１点は、打点からの縦の長さ約４㎝×幅約5.5㎝の剥片で、これを剥離した際に、同時に長さ15.5㎝×幅13㎝の大きな資料も含む４点の大型の石材に分割されてしまったものである。その結果、剥片剥離作業を断念している。断面の薄さと大きさからして、おそらく石槍を製作しようとした可能性がある。原石獲得→石器製作→失敗・廃棄の過程が読み取れる良好な資料である。

また、本遺跡から出土した石核には両面体縁辺加工石核・凹面状石核・舟底状石核が出土している。両面体縁辺加工石核の剥片剥離技術は、後期旧石器以来の石槍や両面加工石器に一般的に認められる剥片剥離技術である。本遺跡においては、自然礫の分割によってすぐに風化相を判断し良質の剥片を得る剥片剥離技術を示す凹面状石核や舟底状石核の存在が特筆される(別編２)。

本遺跡を含む上岩川遺跡群の石材はほとんどが頁岩である(註１)。秋田県における石材原産地遺跡の調査は、羽後町七高山修験遺跡に次いで２例目である。七高山修験遺跡の調査は、中世以来信仰を集めたとされる標高303.6mの七高山とそれに関わる修験関連遺跡の調査で、平成２年10月～11月にかけて実施された(註２)。合計567㎡のトレンチ調査で、頁岩の原石(岩石)のある場所で剥片が採取されていたことが確認できた遺跡である。調査では、土坑・焼土遺構・柱穴様ピットなどの他、
縄文土器(中～晩期)・弥生土器・打製石斧・敲石・石核・剥片などが出土し、縄文時代中期から弥生時代にかけての頁岩原産地遺跡として評価されている(羽後町教育委員会1991)。本遺跡は、七高山修験遺跡と同様に頁岩を主とした石材原産地遺跡であるが、時代は樋向Ⅲ遺跡出土の石器の特徴と出土土器から、縄文時代前期～中期の時期を想定したい。

註１　東北地方における頁岩の分布範囲は、秦昭繁氏によって精力的に進められている。その研究成果によれば、北は北海道を含む青森県下北半島の大間崎海岸から、南は新潟県中里村を含む福島県山都町原川や福島市松川・摺上川までを想定している(秦1995・2003)。

註２　山頂付近の石材原産地遺跡として、最近注目されている遺跡に栃木県矢板市の高原山黒曜石原産地遺跡群がある。高原山山頂付近の石器包含層の露出した６地点より、石槍・角錐状石器・掻器・石核・端部整形刃器などが出土し、後期旧石器時代全般を通じて黒曜石が採取されていたと考えられている(田村・国武2006)

引用・参考文献

羽後町教育委員会　『七高山修験遺跡詳細分布調査』羽後町文化財調査報告書第10集　1991(平成３)年
田村　隆・国武貞克　「高原山黒曜石原産地遺跡群の発見」『旧石器研究』第２号　日本旧石器学会　2006(平成18)年
秦　昭繁　「山形県における珪質頁岩分布と地域内の石材流通」『福島考古』第36号　福島考古学会　1995(平成７)年
秦　昭繁　「東北地方の珪質頁岩石材環境」『月刊考古学ジャーナル』No.499　ニュー・サイエンス社　2003(平成15)年

1　A区北側斜面風景（南から）

2　緩斜面溝跡（東から）

1　ＳＸＱ７石器出土状況（北から）

2　ＳＸＱ１１石器出土状況（東から）

3　ＳＸＱ１７石器出土状況（東から）

1　ＳＸＱ18石器出土状況（東から）

2　ＳＸＱ19石器出土状況（北東から）

3　ＳＸＱ38石器出土状況（東から）

1　ＳＸＱ29・40石器出土状況（南から）

2　ＳＸＱ40石器出土状況（北から）

3　ＳＫ49完掘（東から）

―― 樋向Ⅰ遺跡 ――

（３ＴＭＩ）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観(第１・２図、図版１－１、巻頭図版)

本遺跡は小又川左岸にある低位段丘の縁辺にあり、標高は38～43mである。遺跡は当該地域で調査を行った６遺跡のうち､北から２番目に当たり北に鹿渡渉Ⅱ遺跡が南西には樋向Ⅱ遺跡が位置する。調査区は、長さ約170m×幅約20mの北東から南西にかけて細長い範囲で、北東側と南西側が高く中央から北東にかけては比較的平坦である。この西側から東側にかけては緩く傾斜し、この東端は多くの石器を含み、１m程の段差になっている。

遺跡では石器集中部が13か所確認できたが、これらは調査区北東端で西側の高い平坦部に２か所、その南の西から東に傾斜した沢部に１か所、これに近接した南西部に径１m前後の小さな範囲で１か所検出した。また調査区南西端側の高所付近で１か所検出したが、最も集中していたのは調査区中央部であり、８か所の石器集中部が見つかっている。このうちＳＸＱ19は、縄文時代よりも新しい層に包含されていたもので、流れ込みと判断し範囲を遺構配置図に示した。調査区中央部は特に西側で削平が著しく、縄文時代の石器集中部には、本来多くの石器が包蔵されていたと考えられる。またＳＸＱ19は東側の低位面にあり、削平を免れたⅡ・Ⅲ層に多量の石器が包含されていた。

調査区南西端の高所より東側に傾斜する斜面上位で、原石採掘跡と考えられる遺構を検出した。土坑底面からは、頁岩の原石が数点まとまって出土した。

第２節　調査の方法(第1・2図、図版1－1)

発掘調査は、遺構や遺物を計画的に把握するためにグリッド法を採用した。つまり、調査区域の中央部にある工事路線内の中心杭(Ｘ＝5681.474、Ｙ＝－58875.932)を原点ＭＡ50として、国家座標第Ⅹ系の座標北を基準に各４m間隔のグリッド杭を設定した。グリッド杭には、東から西へ昇順するアルファベット２文字と、南から北に昇順する算用数字を組み合わせた記号を記入し、４m方眼の南東部隅(グリッド杭)をその方眼のグリッド名とした。東西は右文字のＡ～Ｔまでを一順ごとに繰り上げ、左文字を昇順させて表現する。これらを遺構や遺物の記録作業に役立てた。

調査に当たっては、調査区北東端の北にある沢地を排土置き場とし、ここに調査区北側半分の排土を集めた。さらに、調査区南側の排土は調査済みの調査区北東側に集めた。沢地の排土置き場には、排土流失を防ぐための土留め柵を設置し、地域住民との間に問題が生じないように留意した。

検出した遺構には、発見順に遺構の略記号と番号を付した遺構名を与え、図面や写真・遺物取り上げの整理に役立てた。ただし調査の進行に伴い、遺構の性格が異なって略記号を変更したり、欠番になったものもある。平面図や断面図などは1/20を基本にした。写真撮影は､35㎜カラーリバーサルフィルムや白黒ネガフィルムを使用した。また、遺跡の立地を広範な地形から理解するために、空中写真撮影も活用している。遺物は、遺構名・グリッド名・出土層位・出土年月日などを記載して取り上げた。また、発掘調査時に遺物洗浄も行っている。

第３節　調査の経過

樋向Ⅰ遺跡は、2005年４月と ６月に秋田県教育委員会が、当該整備事業に係る路線内で分布調査を実施し確認した遺跡である。これを受けて、同年10月 ３日～同年10月14日まで秋田県埋蔵文化財センターが確認調査を実施し、2006年 ７月26日～ 同年 ９月11日にかけて発掘調査を実施した。

調査は、調査区を ２分した北側の雑木撤去、ベルトコンベアー設置などの諸準備を行った後に、確認調査トレンチの埋土除去と共に、北東側から南側に向かって調査を開始した。

７月27日、北東側の西北端で多量の剥片石器が出土し、ＳＸＱ１・２の2つの石器集中部を検出した。そこからは石匙や石篦が出土し、石器製作跡を予想させるものであった。

その後南側へ調査を進め、８月中旬には中央部で直径10 ～ 20cm 大の原石と剥片石器を多量に含むＳＸＱ４・５・６・７・15を検出した。この区域は、削平によってⅡ・Ⅲ層が失われており、表土を除去したⅣ 層上面で近接した状態で確認された。さらに東側には、Ⅱ・Ⅲ層を主体にＳＸＱ19が検出され、剥片石器・石核・原石が大量に出土した。

８月22日、トレンチ埋土除去中に土坑状の落ち込みを検出し、調査を進めた結果、原石採掘跡ＳＫＤ11を検出するに至った。その広がりは ７m× ９m、深さは1.8m程度であり、いくつかの土坑が連結したような様相であった。周辺の精査も丹念に行ったが、他の原石採掘跡は検出できなかった。
埋土の掘り上げや排土の搬出には、予想以上の労力を費やしたが、９月 ５日には完掘写真を終了し周辺部も含んだ調査を終了した。

９月 ９日、樋向Ⅲ遺跡と共に県民を対象にした遺跡見学会を開催し、９月11日には調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、当該６遺跡について一括して行った。出土した多量の遺物は数点の土器を除けばすべて石器である。石材原産地遺跡の性格を具体的に提示するのに、各遺跡ごとに遺構内・遺構外出土石器について、その種類を識別し数量を数え挙げることにした。

石器は定形石器・剥片・石核などに分けられるが、自然石(遺構外は除く)・分割礫なども石器と共にカウントの対象にした。調査中における小さな石器と自然石の分別は、効率化を妨げるため発掘現場では行わず整理の洗浄作業後に行い、５㎜前後の剥片も拾い上げた。また、並行して石器集中部出土石器を中心に接合作業を行った。

遺構の平面図や断面図・エレベーション図などは、組み合わせて第２原図としトレースした。遺跡内から出土した定形石器は極力掲載し、紙面の制約から石核は、製作技術の理解を深めるため典型的な形態のものを選別して掲載した。

定形石器の実測に当たっては、個々の石器についてその製作過程を観察しながら進めていった。また、一部を委託して実測・トレース作業の迅速化を図った。報告書掲載遺物は、その法量を測定し一覧表にまとめた。整理済みの資料は、報告書掲載ごとにまとめてあるが、掲載遺物以外の資料も取り出し易いように収蔵している。

第２章　調査の記録

本遺跡からは石器集中部13か所、原石採掘跡１か所、炭焼成遺構１基を検出した。調査区の地形は、北東端と南西側が高くその間は全体になだらかな状態である。最も石器集中部が集中するのは、南西側の高まりから緩く傾斜した調査区中央部に当たっている。

第１節　基本土層(第２図)

調査区は総体に、西側から東側にかけて緩く傾斜し南北両端を除く範囲は東端が大きく削平されている。したがって、削平を受けていない東側堆積土の厚い所を考慮した地点を選定した。

Ⅰ層　黒褐色土。表土。砂礫を少量含む。粘性中、締まり強。

Ⅱ層　黒色土。暗褐色土塊を微量、礫を少量含む。粘性中、締まり強。

Ⅲ層　暗褐色土。褐色粘土塊・砂礫を少量含む。炭化物を微量含む。粘性中、締まり強。

Ⅳ層　にぶい黄褐色土。褐色粘土塊を多量、礫を微量含む。粘性強、締まり強。

Ⅴ層　褐色土。地山。砂礫を多量に含む。粘性強、締まり強。

第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物

１　石器集中部

ＳＸＱ１(第３・９図、図版３－１)

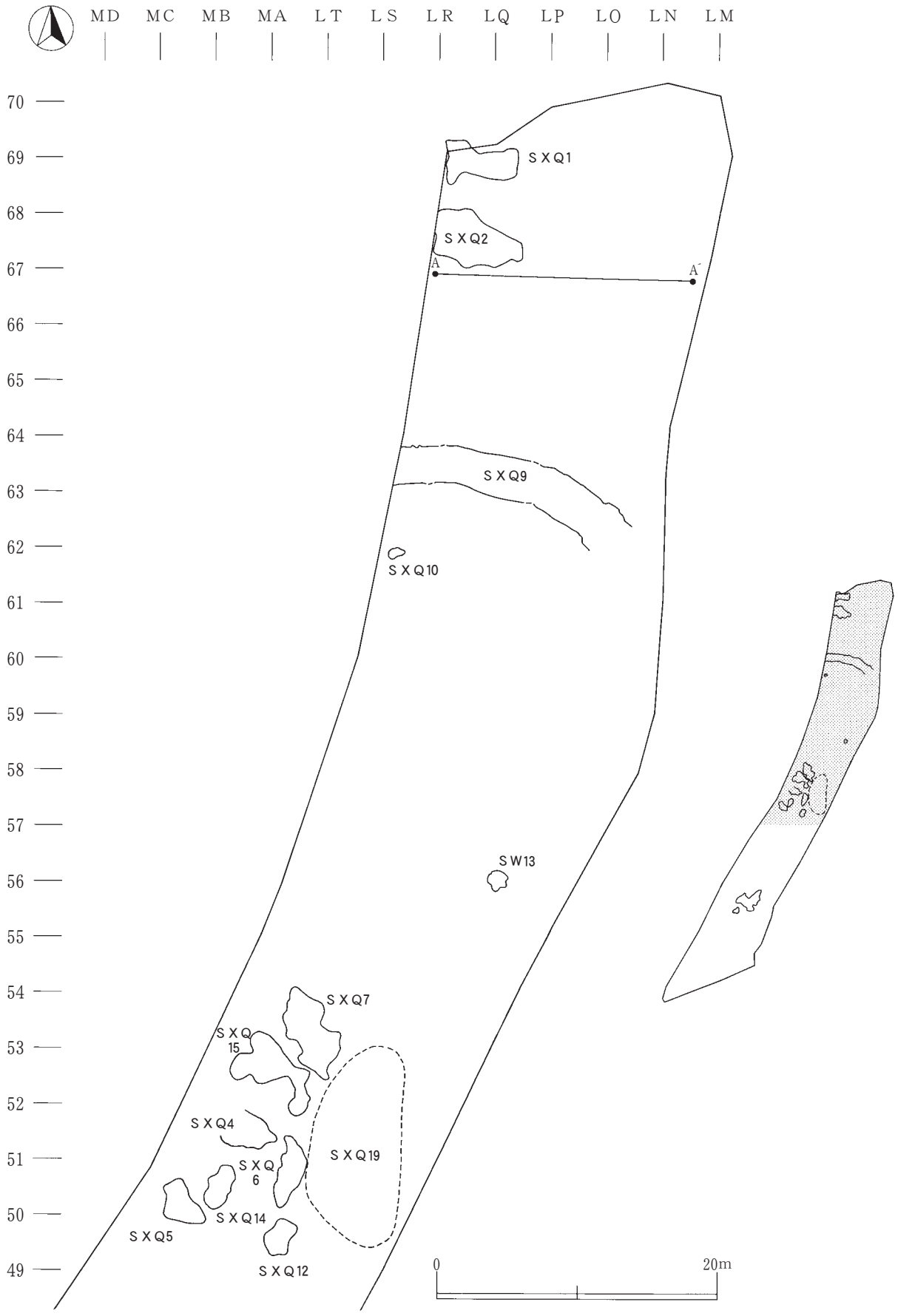
調査区北端のＬＰ・ＬＱ68、ＬＰ・ＬＱ69グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。南にはＳＸＱ２が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸5.15m×短軸3.2mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.45mの高低差がある。調査区西側境界断面にも石器が観察でき、北側斜面際に石器が集中していたことから、調査区外にも石器集中部が広がっている。本来北側にも広がっていたものと推定される。石器の総数は600点で、石篦１点・石匙１点・石核18点・剥片579点・剥離原石１点である。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、小型の石篦(１)・石匙(２)である。

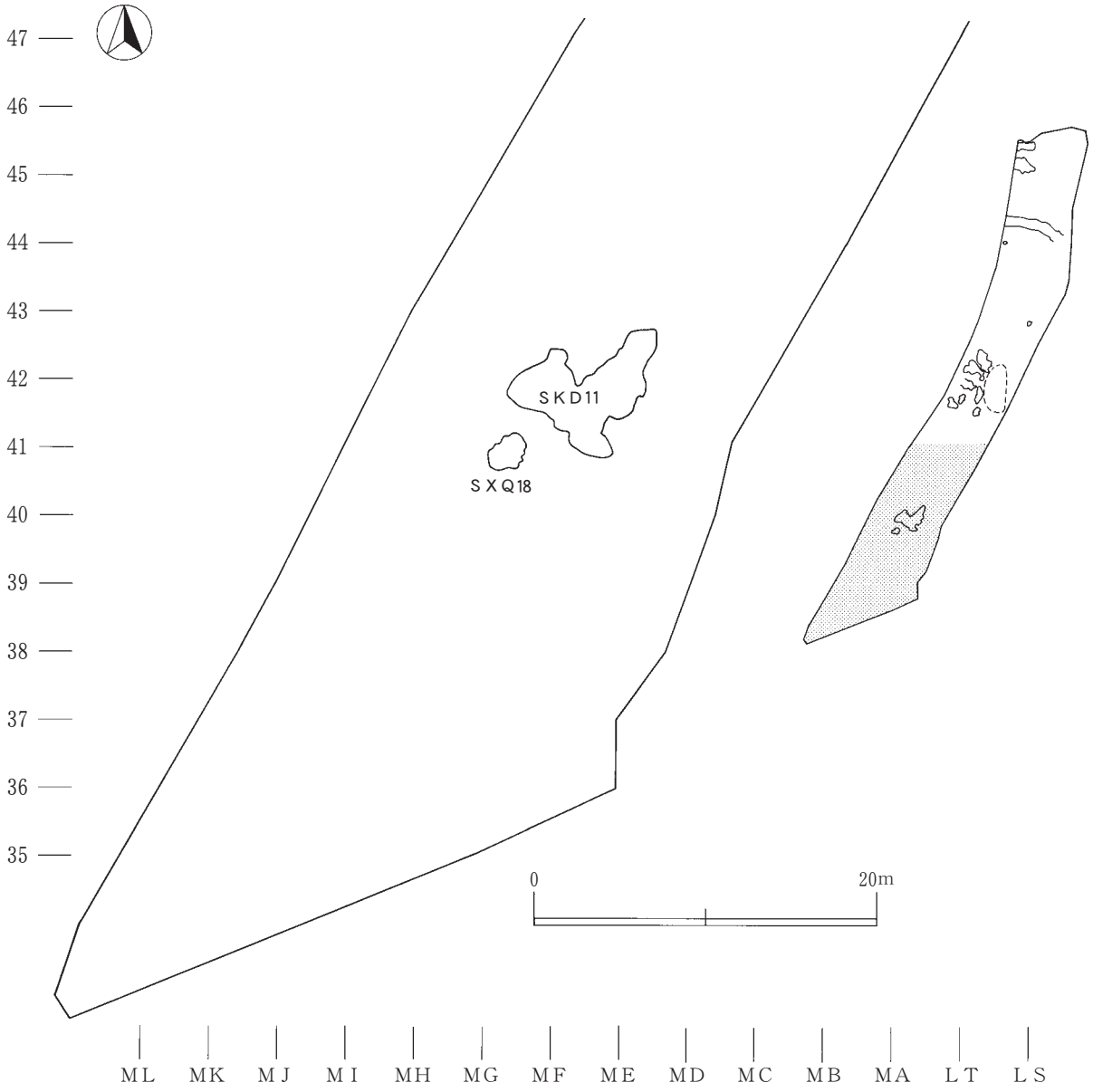
石篦の１は、表面の刃部が平坦な二等辺三角形を呈した面に粗い調整を施す。裏面には主要剥離面を残す。尖端が丁寧に調整されており、錐として使用した可能性もある。石匙の２は、縦長剥片を素材にして両側縁に調整を施している。表面に自然面を残す。

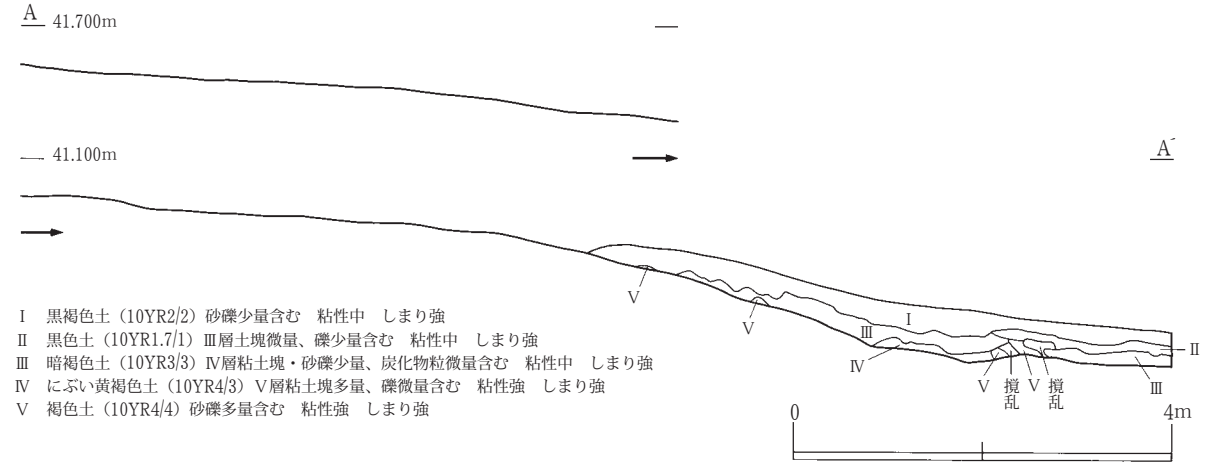
ＳＸＱ２(第３図、図版３－２)

調査区北端のＬＰ・ＬＱ・ＬＲ67、ＬＱ68グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。北にはＳＸＱ１が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸6.8m×短軸4.95m の不整形の範囲を示し、垂直分布では0.65mの高低差がある。石器の総数は552点で、石核１点・剥片550点・剥離原石１点である。他に原石が３点出土した。石器製作跡と考えられる。


MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
LM
70
69
68
67
66
65
64
63
62
61
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
SXQ1
SXQ2
A
A´
SXQ9
SXQ10
SW13
SXQ7
SXQ 15
SXQ4
SXQ19
SXQ 6
SXQ14
SXQ5
SXQ12
0
20m

第１図　遺構配置図（１）





Ⅰ　黒褐色土（10YR2/2）砂礫少量含む　粘性中　しまり強
Ⅱ　黒色土（10YR1.7/1）Ⅲ層土塊微量、礫少量含む　粘性中　しまり強
Ⅲ　暗褐色土（10YR3/3）Ⅳ層粘土塊・砂礫少量、炭化物粒微量含む　粘性中　しまり強
Ⅳ　にぶい黄褐色土（10YR4/3）Ⅴ層粘土塊多量、礫微量含む　粘性強　しまり強
Ⅴ　褐色土（10YR4/4）砂礫多量含む　粘性強　しまり強

第２図　遺構配置図（２）・基本層位

ＳＸＱ４（第３図、図版３－３）

調査区中央のＭＡ・ＬＴ51グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。北にはＳＸＱ15、南にはＳＸＱ６・ＳＸＱ14が隣接している。西側はトレンチで掘削された。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸3.85m×短軸2.8mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.3mの高低差がある。石器の総数は838点で、二次加工ある剥片１点・石核６点・剥片807点・分割礫22点・剥離原石２点である。他に原石が11点出土した。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ５（第３・９図、図版４－１）

調査区中央南西よりのＭＢ49・50グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。東にＳＸＱ14 が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸3.95m×短軸2.75mの略楕円形の範囲を示し、垂直分布では0.2mの高低差がある。石器の総数は2,322点で、石鏃１点・両面加工石器１点・二次加工ある剥片１点・石核29点・剥片2,274点・分割礫３点・剥離原石13点である。他に原石が25点出土した。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、石鏃（３）・両面加工石器（４）である。

石鏃の３は、基部が大きく窪んだ凹基式で表裏面に丁寧な調整を施す。両面加工石器４は裏面の中央に礫皮面を残しているが、全体に丁寧な調整を施す。石槍の素材の可能性が考えられる。

ＳＸＱ６（第３図、図版４－２）

調査区中央のＬＴ50・51グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。東にＳＸＱ19南にＳＸＱ12が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸5.15m×短軸2.2mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.2mの高低差がある。石器の総数は439点で、石核12点・剥片411点・分割礫10点・剥離原石６点である。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ７（第４図、図版４－３）

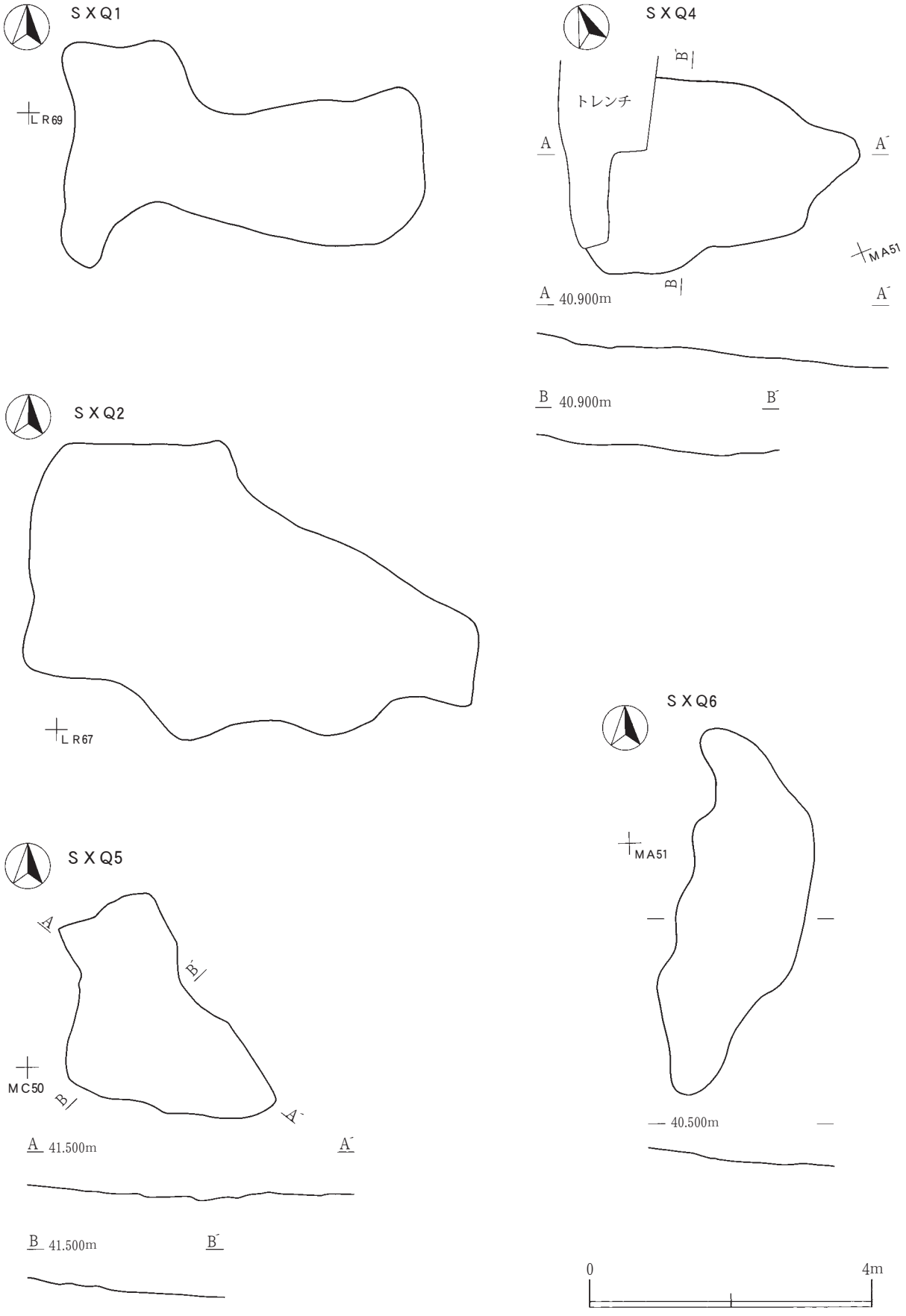
調査区中央のＬＳ・ＬＴ52、ＬＳ・ＬＴ53、ＬＴ54 グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。南西にＳＸＱ15、南東にＳＸＱ19が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸6.95m×短軸3.45mの上下が広がる不整形の範囲を示し、垂直分布では0.4mの高低差がある。石器の総数は1,577点で、ノッチ １点・二次加工ある剥片１点・石核16点・剥片1,552点・分割礫７点である。他に原石が ２点出土した。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ９（第４・９～12図、図版５－１）

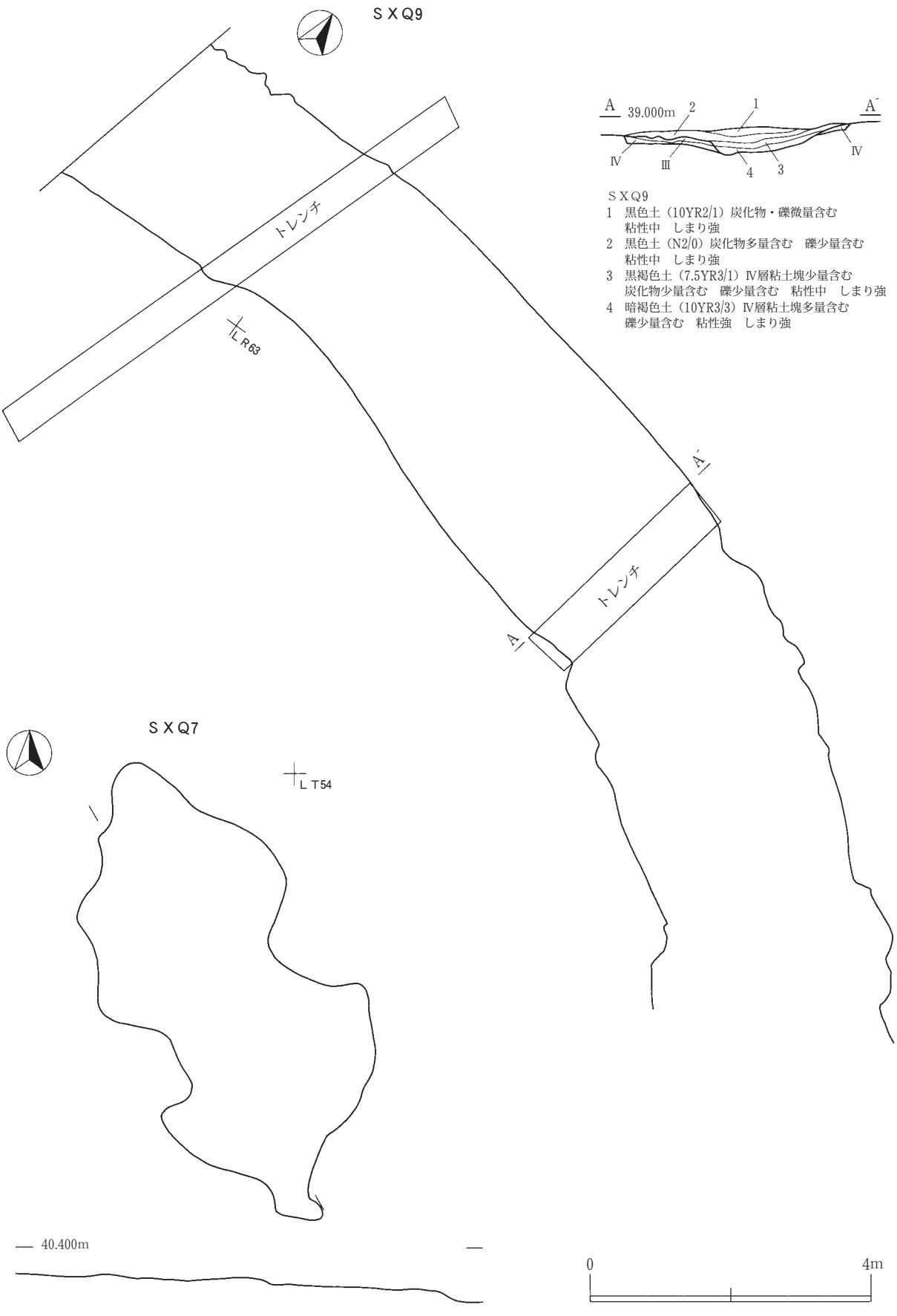
調査区の北側ＬＮ～ＬＱ62、ＬＯ～ＬＲ63グリッドに位置し、沢地で出土した。南西にＳＸＱ10が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸17m×短軸3.2mの不整形の範囲を示し、垂直分布では約2.5mの高低差がある。本石器集中部は、沢状の地形に石器がある程度まとまって出土したもので、石器製作跡とは考えにくいが捨て場の可能性も否定できない。したがって遺構として扱っておく。石器の総数は6,348点で、二次加工ある剥片２点・石核81点・剥片6,256点・分割礫５点・剥離原石４点である。他に原石が10点出土した。

掲載した石器は石核（５～17）のみである。

石核の５はａ面に最終の剥離面をもち、やや分厚い両面体状の礫の一側縁で連続して剥片剥離を



第３図　石器集中部（１）（ＳＸＱ１・２・４・５・６）



第４図　石器集中部（２）（ＳＸＱ７・９）

行う。ａ面の左下端に敲打痕と思われる痕跡がある。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。６はａ面に連続した剥片剥離を施す。７はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。凹面状石核に近い。８はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続した剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に連続的な剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。９はｂ面に最終の剥離面をもち、両面体状の礫の一側縁に連続した剥片剥離を行う。ａ面左上端に細かな剥離を施す。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。10はａ面右上が最終の剥離面と考えられる。剥離面に節理面のある粗悪な分割礫を素材にしている。11はａ面に最終の剥離面をもち、同面で分割面（ｄ面）からの連続した剥片剥離を行う。舟底状石核Ａに分類する。12はａ面に最終の剥離面をもち、同面で分割面（ｄ面）からの連続した剥片剥離を行う。ｄ面左側に化石化した痕跡を留める。舟底状石核Ａに分類する。13はａ・ｂ両面で剥片剥離を行う。ａ面では、ｃ面の平坦な礫皮面を打面にしている。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。14は、ａ面かｂ面下位の剥離面が最終の剥離面である。礫皮面を含む６面体の分割礫を素材にしている。15はａ面下位とｄ面下位のどちらかに最終の剥離面をもつ。16はａ面に連続した剥片剥離面をもち、本来同面右側に連続するが折損した。ｂ面は節理面で化石化した痕跡を留める。17はａ面左下方に最終の剥離面をもち、ｂ面では連続して剥片剥離を行う。ｃ面は平坦な礫皮面である。ｂ面下端中央やや左上に化石化した痕跡を僅かに留める。

ＳＸＱ10（第５・13図、図版５－２）

調査区北側のＬＲ61グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。北東にＳＸＱ９が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸1.2m×短軸0.7mの略楕円形の範囲を示し、垂直分布では0.15mの高低差がある。石器の総数は659点で、石核１点・剥片657点・剥離原石１点である。石器製作跡と考えられるが、まとめて捨てた可能性も考慮される。

掲載した石器は石核（18）のみである。

18はａ面に最終の剥離面をもち、同面で分割面（ｄ面）からの連続した剥片剥離を行う。舟形状石核Ａに分類する。

ＳＸＱ12（第５図、図版５－３）

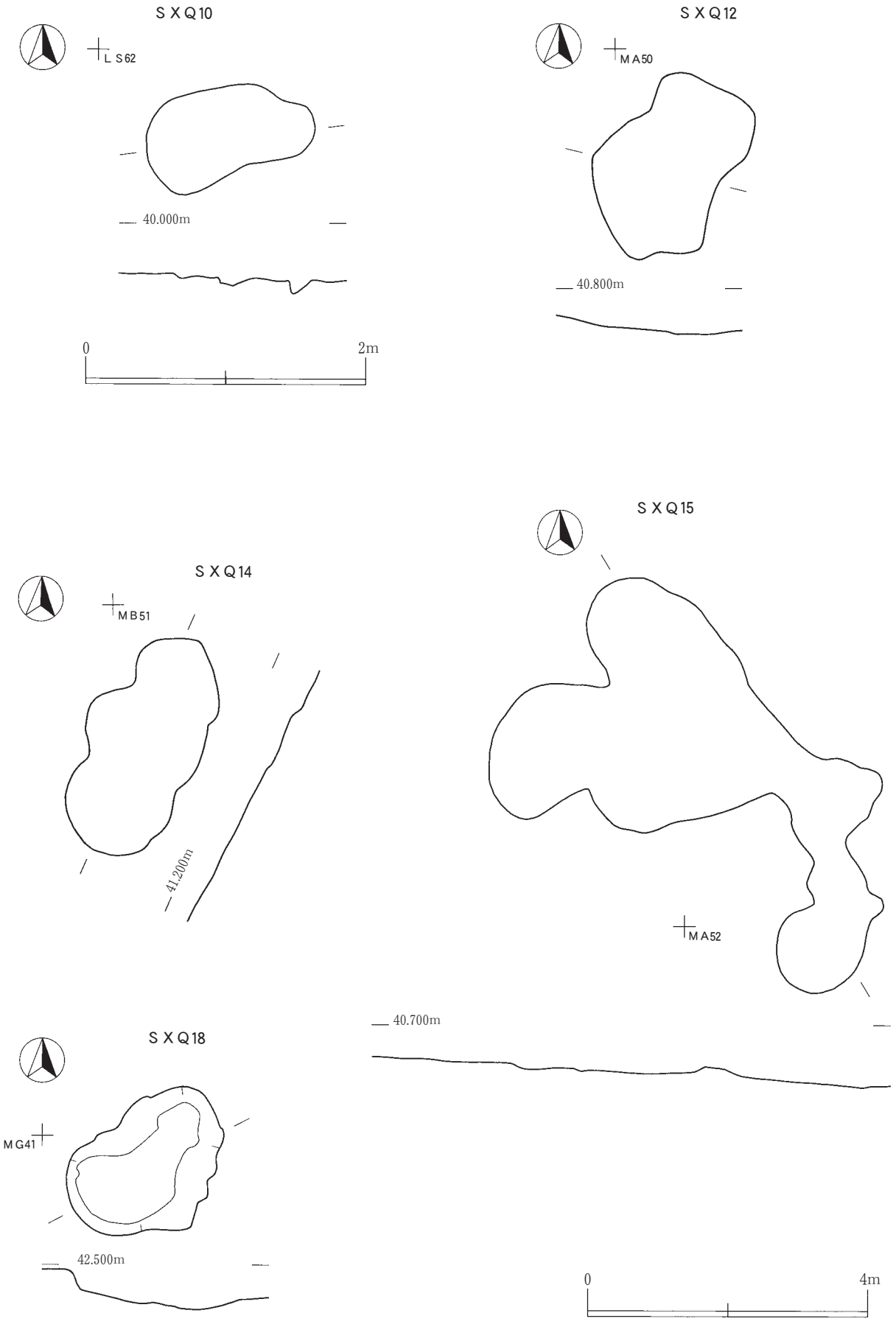
調査区中央のＬＴ・ＭＡ49グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。北にＳＸＱ６、北東にＳＸＱ19が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸2.75m×短軸２mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.2mの高低差がある。石器の総数は108点で、石核２点・剥片105点・剥離原石１点である。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ14（第５・13図、図版６－１）

調査区中央南西よりのＭＡ・ＭＢ50グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。北東にＳＸＱ４、南西にＳＸＱ５が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸3.3m×短軸1.75mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.25mの高低差がある。石器の総数は238点で、石核２点・剥片233点・分割礫２点・剥離原石１点である。他に原石が４点出土した。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は石核（19）である。

19は扁平な両面体状の礫の片側側縁で連続した剥片剥離を行う。ｂ面右上位側辺に微細な剥離痕



第５図　石器集中部（３）（ＳＸＱ10・12・14・15・18）

跡を認める。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。

ＳＸＱ15(第５図)

調査区中央のＬＴ51・52・53、ＭＡ52・53グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。北東にＳＸＱ７、南西にＳＸＱ４が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は、長軸6.1m×短軸3.95mで北西側が広がる範囲を示し、垂直分布では0.4mの高低差がある。石器の総数は993点で、石核８点・剥片960点・分割礫18点・剥離原石７点である。他に原石が12点出土した。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ18(第５・13・14図、図版６－２)

調査区南側のＭＦ40・41グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。北東にＳＫＤ11が隣接している。石器は風倒木の窪みと考えられる落ち込みから多量に、その周辺からは僅かに出土した。落ち込みの規模は、長軸2.4m×短軸1.95m深さ0.55mの不整形の範囲を示す。石器の総数は2,064点で、石核28点・剥片2,018点・分割礫13点・剥離原石５点である。他に原石が１点出土した。石器製作跡と考えられるが、風倒木の落ち込みが埋没する過程で石器が流入した可能性もある。

掲載した石器は石核(20 ～ 22)である。

20はａ・ｃ面に剥離面をもち、ａ面で連続した剥片剥離を行う。分割礫を素材にしている。ｄ面中央には歪な挟雑物を含んだ凹凸面がある。21 はｃ面に最終の剥離面をもち、ａ面で連続した剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。22はｂ面に最終の剥離面をもち、両面体状の礫の片側側縁に連続的な剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。

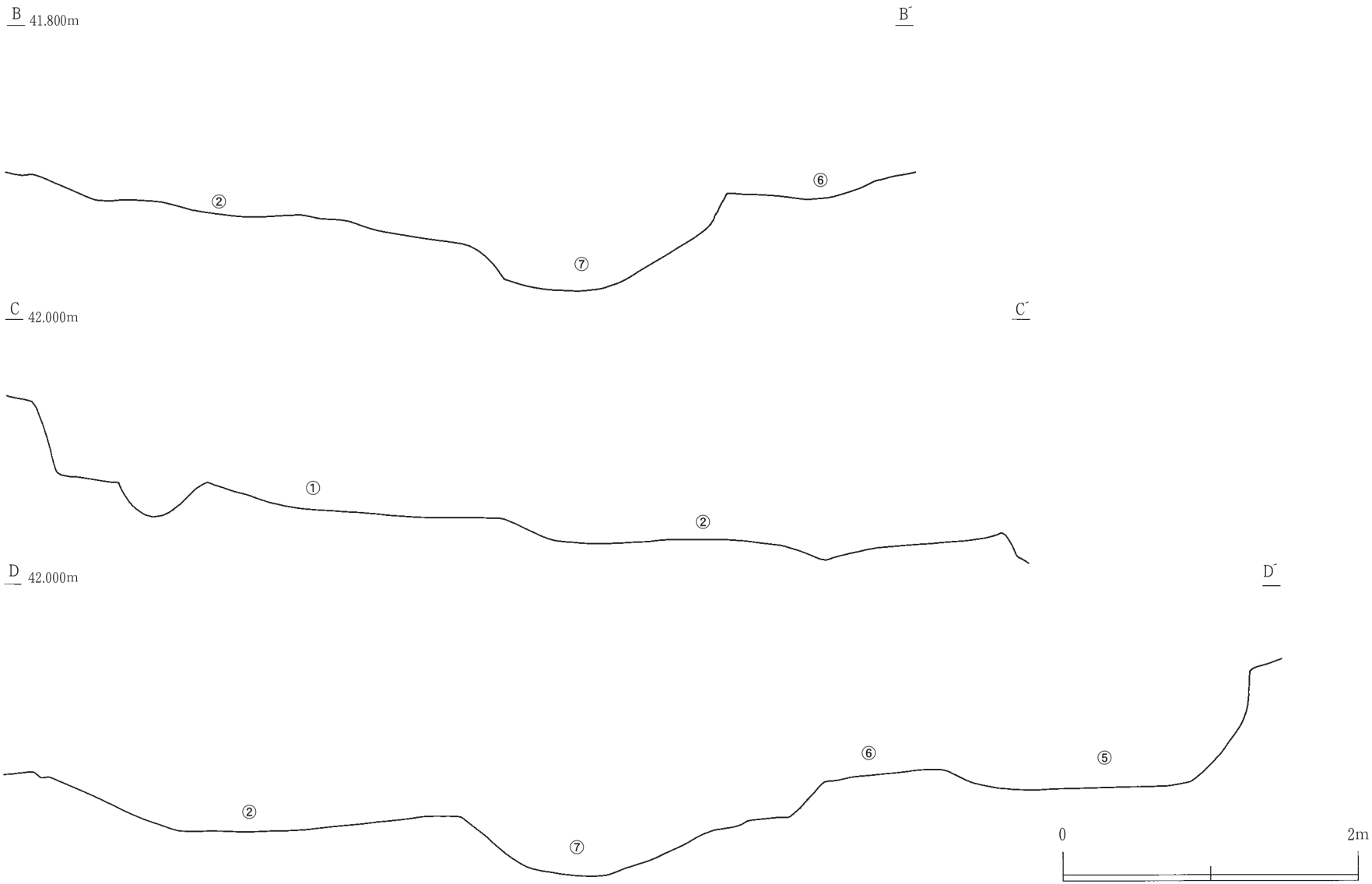
ＳＸＱ19(第１・14 ～ 18図)

調査区中央のＬＲ～ＬＴ49、ＬＲ～ＬＴ50、ＬＲ～ＬＴ51、ＬＲ～ＬＴ52グリッドに位置し、Ⅱ・Ⅲ層で出土した。西側にＳＸＱ７・ＳＸＱ15・ＳＸＱ４・ＳＸＱ６が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は、長軸14.4m× 短軸6.6mの不整楕円形を示している。石器の総数は6,185点で、石鏃１点・スクレイパー３点・ノッチ２点・両面加工石器２点・二次加工ある剥片２点・石核300点・剥片5,747点・分割礫64点・剥離原石64点である。他に原石が58点出土した。本来はⅣ層縄文時代の石器製作跡の石器群と考えられ、新しい時期に西側から流れ込んだものと思われる。したがって、石器製作跡とはいえない。

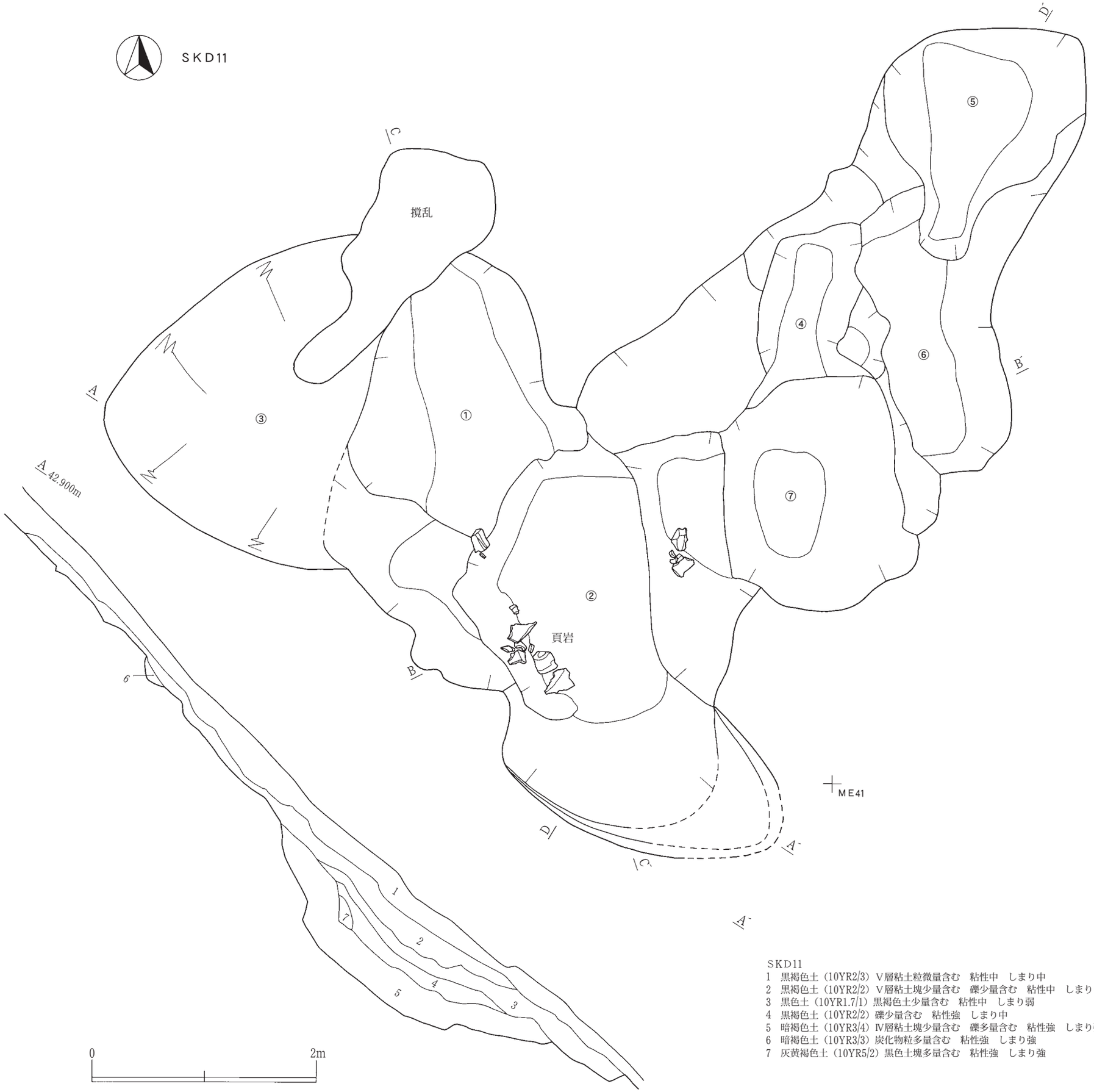
掲載した石器は、石鏃(23)・スクレイパー(24～26)・ノッチ(27)・両面加工石器(28・29)・石核(30～41)である。

石鏃の23は表面の上半側縁と裏面上半に細かな調整を施す。裏面に主要剥離面を留める。スクレイパーの24は裏面の右側に丁寧な調整を施し、左側に２つの剥離面をもつ。25は表面の右側尖端を中心に丁寧な調整を施す。同面の左側縁に折損面がある。26は表面左下位に細かく丁寧な調整を施す。ノッチの27は扁平な礫を交互に剥離し刃部状を作り出し、その中央に急角度の剥離を施す。

両面加工石器の28は扁平な礫の表・裏両面に、粗く連続した剥片剥離を行う。石槍の素材を意図したと考えられる。29は扁平な礫の表・裏両面に、連続した剥片剥離を行う。表・裏面左側縁中央に細かな調整を認めるが、打面調整と判断される。石槍の素材を意図したと考えられる。30はａ面に最終の剥離面をもち、主としてａ面で連続した剥片剥離を行う。これ以前にｂ面側にａ面側からの



第６図　原石採掘跡（１）（ＳＫＤ１１）



SKD11
1　黒褐色土（10YR2/3）Ⅴ層粘土粒微量含む　粘性中　しまり中
2　黒褐色土（10YR2/2）Ⅴ層粘土塊少量含む　礫少量含む　粘性中　しまり中
3　黒色土（10YR1.7/1）黒褐色土少量含む　粘性中　しまり弱
4　黒褐色土（10YR2/2）礫少量含む　粘性強　しまり中
5　暗褐色土（10YR3/4）Ⅳ層粘土塊少量含む　礫多量含む　粘性強　しまり強
6　暗褐色土（10YR3/3）炭化物粒多量含む　粘性強　しまり強
7　灰黄褐色土（10YR5/2）黒色土塊多量含む　粘性強　しまり強

第７図　原石採掘跡（２）（ＳＫＤ１１）

剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。31はａ面中央上位かｂ 面右上位が最終の剥離面で、適宜ａ・ｂ両面で剥片剥離を行う。32はａ面中央上位とｂ面左側縁に最終の剥離面をもつ。扁平な両面体状の礫の片側側縁を中心に、連続して剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。33はａ面に最終の剥離面をもち、やや分厚い両面体状の礫の側縁で剥片剥離を行う。ｂ面右上の剥離を行ってから、ａ面で連続した剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。34はａ面に最終の剥離面をもつ。主としてａ面の全体に連続した剥片剥離を行う。ｂ面でも連続的な剥離を施す。ａ面右下端に節理面と思われる剥離面が認められる。凹面状石核に近い。35はやや分厚い両面体状の礫の一部(ａ面下端)を除く両面に、連続した剥片剥離を行う。ａ面下端には交互剥離を施すが、中心部が細かな段状をなす粗悪な状態である。ａ・ｂ面の剥離面はほとんどが茶色に風化している。両面体縁辺加工石核Ａに分類する。36はａ面に最終の剥離面をもち、やや分厚い両面体状の礫の縁側に剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。37はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前にａ面側からｂ面側に剥離を施す。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。38はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前にａ面側からｂ面側に剥離を施す(ｂ面縁辺の幅の狭い剥離)。凹面状石核Ｂ に分類する。39は、ａ面左に主要剥離面のある剥片から数片の剥片を得ている。40はａ面に最終剥離面をもち、ａ・ｂ面で連続して剥片剥離を行う。ｄ面が分割面で分割礫を素材にしていることが分かる。舟底状石核に近い。41はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側へ連続的に剥離を施す(ｂ面縁辺の幅の狭い剥離)。凹面状石核Ｂに分類する。

２　原石採掘跡

ＳＫＤ11(第６・７・19図、図版１－２、図版２)

調査区南側のＭＥ40、ＭＤ～ ＭＦ41、ＭＤ～ＭＦ42グリッドに位置し、Ⅳ層上面で暗褐色土の範囲を検出した。南西にＳＸＱ18が隣接している。本遺構は、土坑状の落ち込みが重複・連結したような様子を示し、仮に北西―南東方向に延びる西側土坑群と北東―南西に延びる東側土坑群と呼称すれば､それらが南側で連結したような｢Ｖ｣字状を呈する｡前者は長さが約7.2m×幅が北西側で約3.6m､後者は長さが約5.8m×幅が南西側で約3.4mである。挿図中の土坑状の落ち込みには、便宜上①～⑦の番号を付したが、これ以外にも落ち込みと見られる壁を削除された平坦面が確認できる。西側土坑群で底面が最も高いのが③で、③→①→②の順で低くなる。東側土坑群で底面が最も高いのが⑤で、⑤・⑥→④→⑦の順で低くなる。土坑状の落ち込みは、⑦が最も低く②との差は約0.5mである。⑦の底面は擂り鉢状を呈するが、その他は緩やかな底面である。本遺構が最初に確認された暗褐色土の広がりは、およそ②・⑦の落ち込みの範囲に対応する。平面が楕円形の③を除く①・②と④～ ⑦は、不整方形状の形態が目立ち長軸がほぼ南北を前後しているが､本遺構が平坦部直下の斜面地に立地し、等高線が南西―北東―北西方向と回り込むことと連動していると理解される。②の底面には、頁岩の原石が数個まとまっていたし、他の場所では地山に頁岩が認められた。このような状況と、地山中に良質の粘土層が存在しないことなどから、本遺構を原石採掘跡と考えるのが妥当である。石器の総数は836点で、石鏃１点・ノッチ １点・石核36点・剥片793点・分割礫２点・剥離原石３点である。他に原石が44点出土した。

掲載した石器は、石鏃(42)・ノッチ(43)・石核(44 ～ 46)である。

石鏃の42は基部が僅かに窪む形態である。表面の主要剥離面から小さな横長剥片を利用していることが分かる。両面に微細な調整を施す。ノッチの43は、横長剥片の底辺に裏面からの剥離を施し刃部を形成する。

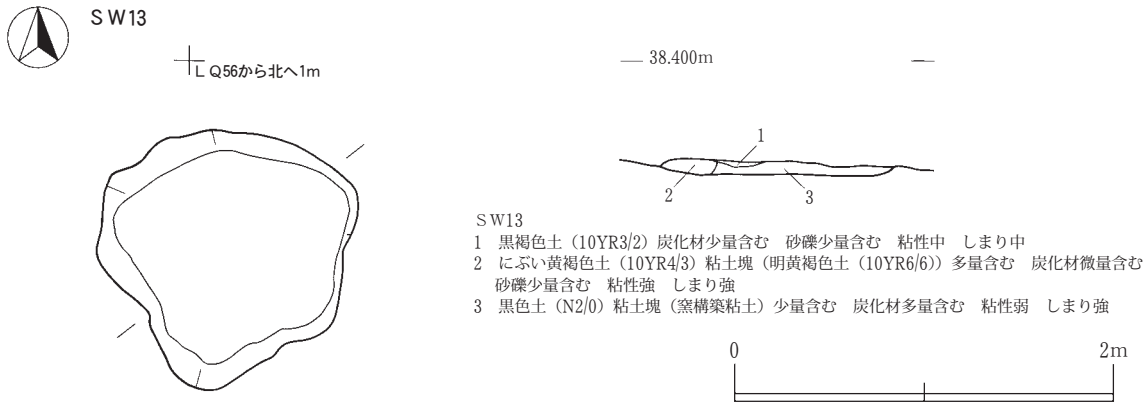
石核の44はａ・ｂ面に剥離面をもち、両面で連続して剥片剥離を行ったものと考えられる。ｂ面が主要剥離面と考えられ、その剥片を素材にしたと思われる。45はｄ面に最終の剥離面をもち、縦長剥片を主として剥離しているようである。46はａ面中央部に礫皮面下の風化相が確認できることから、両面体の自然礫を素材として利用していることが分かる。ａ面下端を除く全面に、剥片剥離を連続して行う。

第３節　中世以降の検出遺構

１　炭焼成遺構

ＳＷ13(第８図、図版６－３)

調査区中央北東のＬＰ・ＬＱ55、ＬＰ・ＬＱ56グリッドに位置し、Ⅱ層で炭化物混じりの黒色土として検出した。平面形は直径約1.35mの円形で、深さ0.1mである。炭焼成遺構と考えられる。剥片が３点出土した。形態などから、平安時代とは考えにくいので、中世以降と考えておきたい。



第８図　炭焼成遺構(ＳＷ13)

第４節　遺構外出土遺物(第20～24図)

出土した石器の総数は26,634点で、石槍１点・両面加工石器１点・石斧１点・スクレイパー ９点・ノッチ ４点・二次加工ある剥片17点・石核970点・剥片25,589点・分割礫16点・剥離原石26点である。他に原石が ８点出土した。

掲載した石器は、石槍(47)・両面加工石器(48)・石斧(49)・スクレイパー(50 ～ 58)・ノッチ(59

～ 61)・石核(62 ～ 72)である。

石槍の47は、表面下端に平坦な斜めの剥離をもち尖端部側が折損したもので、断面は三角形状を呈する。48の両面加工石器は、全面に粗い調整を行ってから表面側縁に細かな調整を施す。石槍の製作過程で折損したものと考えられる。石斧の49は分銅形である。片側が甲高の自然礫を素材にして、その長い両側縁に大きな抉り状の剥離を行ってから、窪み部に細かな調整を施す。刃部の両端は刃部状の形になるように粗い加工を施す。スクレイパーの50は、横長の剥片の一側縁に細かな調整を施す。51は横長剥片の両側縁にやや粗い調整を施す。裏面を主要剥離面とする剥片を素材にしている。52は表面左上位に微細な剥離が観察され、使用痕の可能性がある。53は、横長剥片の一側縁にやや粗い均一な調整を施す。54は横長剥片が折損しており、表面右側縁に丁寧な調整を施す。55は剥片の端部から一側縁にかけて､直線的な丁寧な調整を施す。調整は幅の狭い細長い剥離が目立つ。56は横長剥片を縦長状に加工し、表面の両側縁下方側と下端左側に丁寧な調整を施す。57は、節理面に沿って剥がれた素材の一側縁に丁寧な剥離を施す。58は表面に最終の剥離をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に表面側から裏面側に剥離を施す(裏面縁辺の剥離)。この時点では凹面状石核と考えるが、表面の縁辺全域に細かな調整を施すことから、スクレイパーとしての機能が考えられる。内面は特にトロトロして光沢があり、ポリッシュの痕跡と考えられる。59のノッチは、横長剥片の一側縁(裏面) に窪み状の調整を施す。60は横長剥片の上辺と下辺に、それぞれ 2つずつの窪み状の剥離を施す。61は横長剥片の素材を利用して、裏面上位右に窪み状の剥離を施す。

石核の62は分厚い両面体状の礫を素材にして、ａ・ｂ面の全体に連続して剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ａに分類する。63は扁平な両面体状の礫を素材にして、ａ・ｂ面の全体に連続して剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ａに分類する。64 は、小さく扁平な両面体状の礫を素材にして、側縁を中心に連続した剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。65はａ面に最終の剥離面をもち、分厚い両面体状の礫の縁辺に連続した剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。66はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前にａ面側からｂ面側に剥離を施す(ｂ面左下方)。ｂ面は分割面と考えられる。凹面状石核Ｂに分類する。67はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。ａ面下端は風化剥離面と考えられ、分割面と判断される。凹面状石核Ａに分類する。68はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に､ａ面側からｂ面側に剥離を施す。凹面状石核Ｂ に分類する。69は両面体状の礫を素材にして､ａ・ｂ両面に連続した剥片剥離を行う。凹面状石核に近い。70はａ面中央に最終の剥離面をもち、連続して剥片剥離を行ったのち、折損している。ｂ面の自然面とａ面左上位の自然面下の風化面から、両面体状礫を素材にしたと考えられる。71はｄ面が平坦な舟底状の石核で、ａ面左側縁とｂ面右側縁では細長い縦長剥片を剥離している。ｄ面でも細長い剥片を得ている。72はａ面上位に最終の剥離面をもち、多面的な剥片剥離を行う。分割礫の縁辺を利用したと考えられる。

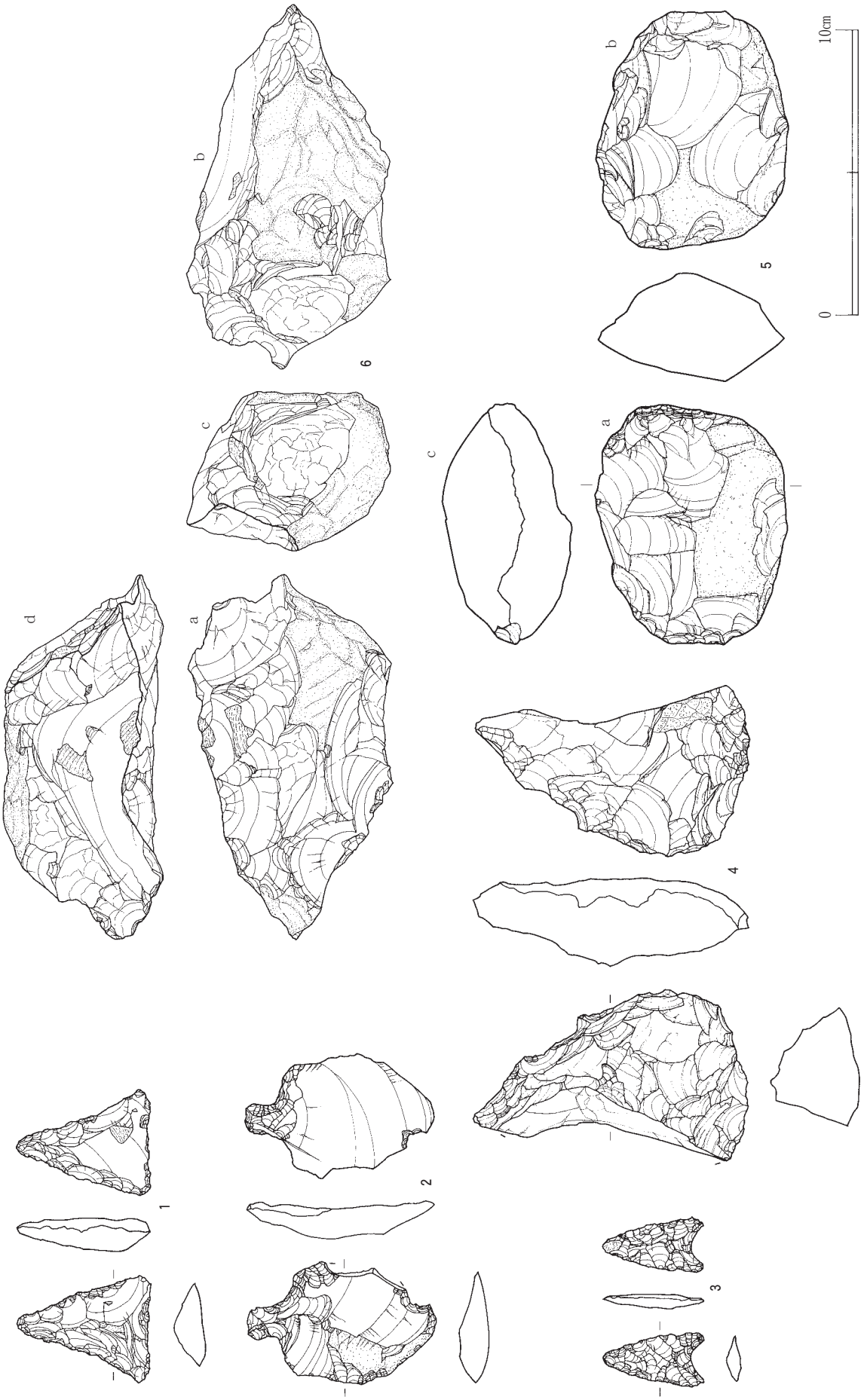
第１表　石器観察表（１）

遺物番号	挿図番号	出土位置	層 位	器　種	石 質	長さ・幅・厚さ(㎜)	重量(g)	備　　考
1	9	ＳＸＱ１		石篦	頁岩	47 ・ 38 ・ 12	13.9	
2	9	ＳＸＱ１	Ⅰ	石匙	頁岩	66 ・ 44 ・ 13	24.1	
3	9	ＳＸＱ５		石鏃	頁岩	35 ・ 19 ・ 5	2.5	
4	9	ＳＸＱ５		両面加工石器	頁岩	91 ・ 60 ・ 31	135.3	
5	9	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	84 ・ 68 ・ 46	249.3	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
6	9	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	128 ・ 72 ・ 56	460.4	ａ～ｄ面
7	10	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	90 ・ 84 ・ 46	230.4	ａ～ｃ面　凹面状石核に近い
8	10	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	84 ・ 57 ・ 29	107.9	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
9	10	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	113 ・ 99 ・ 44	334.4	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
10	10	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	85 ・ 56 ・ 52	201.8	ａ～ｃ面
11	11	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	90 ・ 48 ・ 24	84.9	ａ～ｄ面　舟底状石核Ａ
12	11	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	86 ・ 38 ・ 33	83.6	ａ～ｄ面　舟底状石核Ａ
13	11	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	120 ・ 72 ・ 40	359.9	ａ～ｄ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
14	11	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	66 ・ 62 ・ 42	209.6	ａ～ｄ面
15	12	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	76 ・ 48 ・ 36	104.9	ａ～ｄ面
16	12	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	78 ・ 67 ・ 53	279.7	ａ～ｄ面
17	12	ＳＸＱ９	沢覆土	石核	頁岩	111 ・ 87 ・ 58	468.2	ａ～ｄ面
18	13	ＳＸＱ10	(Ⅳ)	石核	頁岩	95 ・ 36 ・ 27	95.2	ａ～ｄ面　舟底状石核Ａ
19	13	ＳＸＱ14	(Ⅳ)	石核	頁岩	84 ・ 68 ・ 28	144.0	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
20	13	ＳＸＱ18	(Ⅳ)	石核	頁岩	153 ・ 77 ・ 68	970.2	ａ～ｄ面
21	14	ＳＸＱ18	(Ⅳ)	石核	頁岩	54 ・ 46 ・ 19	42.7	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
22	14	ＳＸＱ18	(Ⅳ)	石核	頁岩	119 ・ 70 ・ 40	344.6	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
23	14	ＳＸＱ19	Ⅱ	石鏃	頁岩	56 ・ 35 ・ 12	20.1	
24	14	ＳＸＱ19	Ⅱ	スクレイパー	頁岩	88 ・ 46 ・ 29	91.8	
25	14	ＳＸＱ19	Ⅱ	スクレイパー	頁岩	51 ・ 37 ・ 23	38.3	
26	14	ＳＸＱ19	Ⅱ	スクレイパー	頁岩	51 ・ 43 ・ 17	29.5	
27	14	ＳＸＱ19	Ⅱ	ノッチ	頁岩	87 ・ 77 ・ 23	115.7	
28	15	ＳＸＱ19	Ⅱ	両面加工石器	頁岩	223 ・ 89 ・ 45	819.1	
29	15	ＳＸＱ19	Ⅱ	両面加工石器	頁岩	139 ・ 92 ・ 33	379.5	
30	16	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	97 ・ 78 ・ 32	249.4	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
31	16	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	73 ・ 65 ・ 30	112.9	ａ～ｄ面
32	16	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	116 ・ 68 ・ 40	286.9	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
33	16	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	113 ・ 96 ・ 47	376.9	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
34	17	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	61 ・ 58 ・ 27	88.2	ａ～ｃ面　凹面状石核に近い
35	17	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	93 ・ 86 ・ 47	376.3	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ａ
36	17	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	113 ・ 90 ・ 59	450.3	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
37	17	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	113 ・ 77 ・ 51	380.0	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
38	18	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	98 ・ 84 ・ 25	180.9	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
39	18	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	114 ・ 47 ・ 40	188.2	ａ～ｄ面

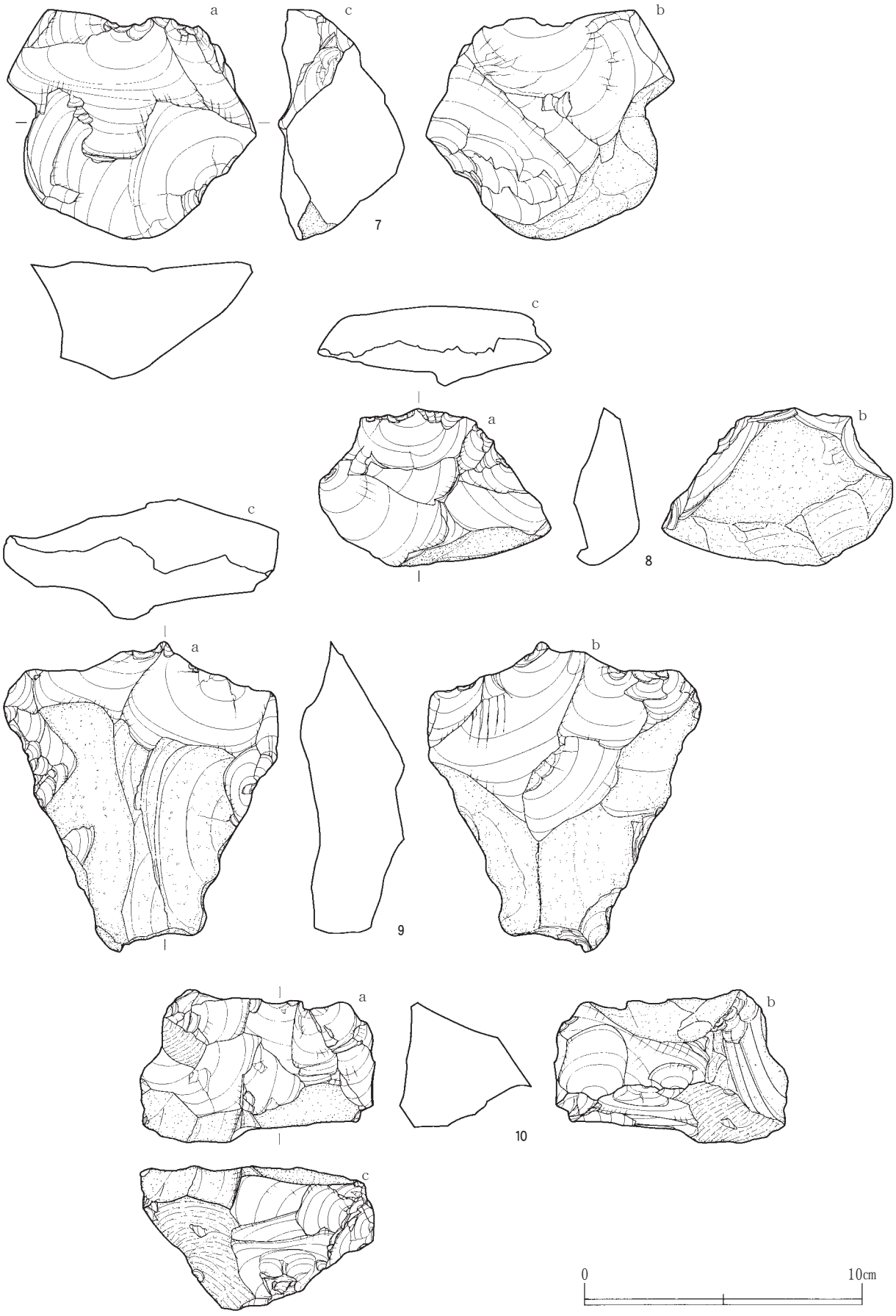
(　)内は遺構確認層

第２表　石器観察表（２）

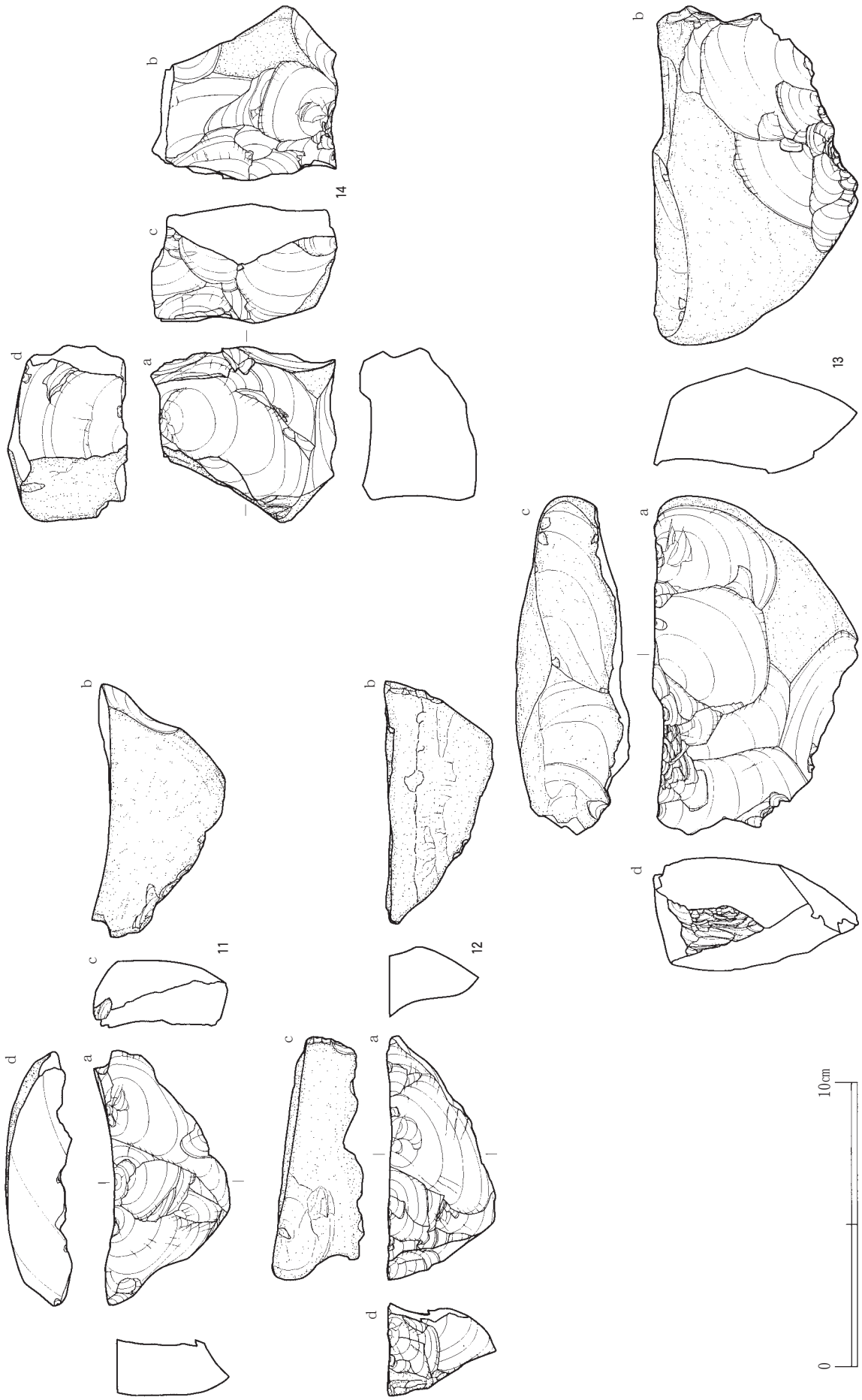
遺物番号	挿図番号	出土位置	層 位	器　種	石 質	長さ・幅・厚さ(㎜)	重量(g)	備　　考
40	18	ＳＸＱ19	Ⅱ	石核	頁岩	78 ・ 52 ・ 44	147.3	ａ～ｄ面　舟底状石核に近い
41	18	ＳＸＱ19	Ⅳ	石核	頁岩	109 ・ 72 ・ 49	378.6	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
42	19	ＳＫＤ11	覆土	石鏃	頁岩	20 ・ 14 ・ 3	0.8	
43	19	ＳＫＤ11	覆土	ノッチ	頁岩	103 ・ 70 ・ 18	99.6	
44	19	ＳＫＤ11	覆土	石核	頁岩	68 ・ 54 ・ 24	88.1	ａ～ｄ面
45	19	ＳＫＤ11	覆土	石核	頁岩	70 ・ 57 ・ 48	203.4	ａ～ｆ面
46	19	ＳＫＤ11	Ⅳ	石核	頁岩	97 ・ 79 ・ 40	246.6	ａ～ｃ面
47	20	ＬＯ67	Ⅰ	石槍	頁岩	69 ・ 31 ・ 20	43.7	
48	20	ＬＴ49	Ⅰ	両面加工石器	頁岩	70 ・ 56 ・ 16	44.5	
49	20	ＭＦ40	Ⅰ	石斧	頁岩	119 ・ 67 ・ 37	239.0	
50	20	８トレンチ	－	スクレイパー	頁岩	91 ・ 40 ・ 24	82.6	
51	20	ＬＭ68	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	77 ・ 38 ・ 20	56.7	
52	20	ＬＯ62	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	77 ・ 43 ・ 23	61.2	
53	20	ＬＯ64	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	82 ・ 44 ・ 16	56.7	
54	20	ＭＡ52	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	69 ・ 51 ・ 21	81.5	
55	21	ＬＰ68	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	42 ・ 33 ・ 12	16.4	
56	21	ＬＳ57	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	75 ・ 62 ・ 19	72.4	
57	21	ＭＢ51	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	108 ・ 98 ・ 29	178.6	
58	21	８トレンチ	－	スクレイパー	頁岩	80 ・ 66 ・ 20	91.3	
59	21	ＭＤ44	Ⅰ	ノッチ	頁岩	53 ・ 45 ・ 18	28.7	
60	21	ＬＴ56	Ⅰ	ノッチ	頁岩	67 ・ 41 ・ 15	27.5	
61	21	ＬＯ62	Ⅰ	ノッチ	頁岩	88 ・ 28 ・ 28	134.7	
62	22	ＬＳ51	Ⅱ	石核	頁岩	89 ・ 77 ・ 47	287.6	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ａ
63	22	ＬＴ48	Ⅰ	石核	頁岩	110 ・ 80 ・ 29	195.2	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ａ
64	22	ＭＢ47	Ⅰ	石核	頁岩	81 ・ 61 ・ 30	155.3	両面体縁辺加工石核Ｂ
65	22	ＭＣ50	Ⅰ	石核	頁岩	94 ・ 79 ・ 54	418.3	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
66	23	ＬＯ62	Ⅰ	石核	頁岩	95 ・ 84 ・ 27	205.8	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
67	23	21トレンチ	－	石核	頁岩	72 ・ 68 ・ 31	126.3	ａ～ｃ面　凹面状石核Ａ
68	23	ＭＡ53	Ⅰ	石核	頁岩	117 ・ 85 ・ 28	240.4	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
69	23	ＬＮ63	Ⅰ	石核	頁岩	111 ・ 77 ・ 43	276.7	ａ～ｄ面　凹面状石核に近い
70	24	18トレンチ	－	石核	頁岩	125 ・ 56 ・ 48	306.5	ａ～ｄ面
71	24	ＬＮ66	Ⅰ	石核	頁岩	53 ・ 42 ・ 22	48.1	ａ～ｄ面
72	24	ＭＦ44	Ⅰ	石核	頁岩	85 ・ 71 ・ 64	423.2	ａ～ｅ面



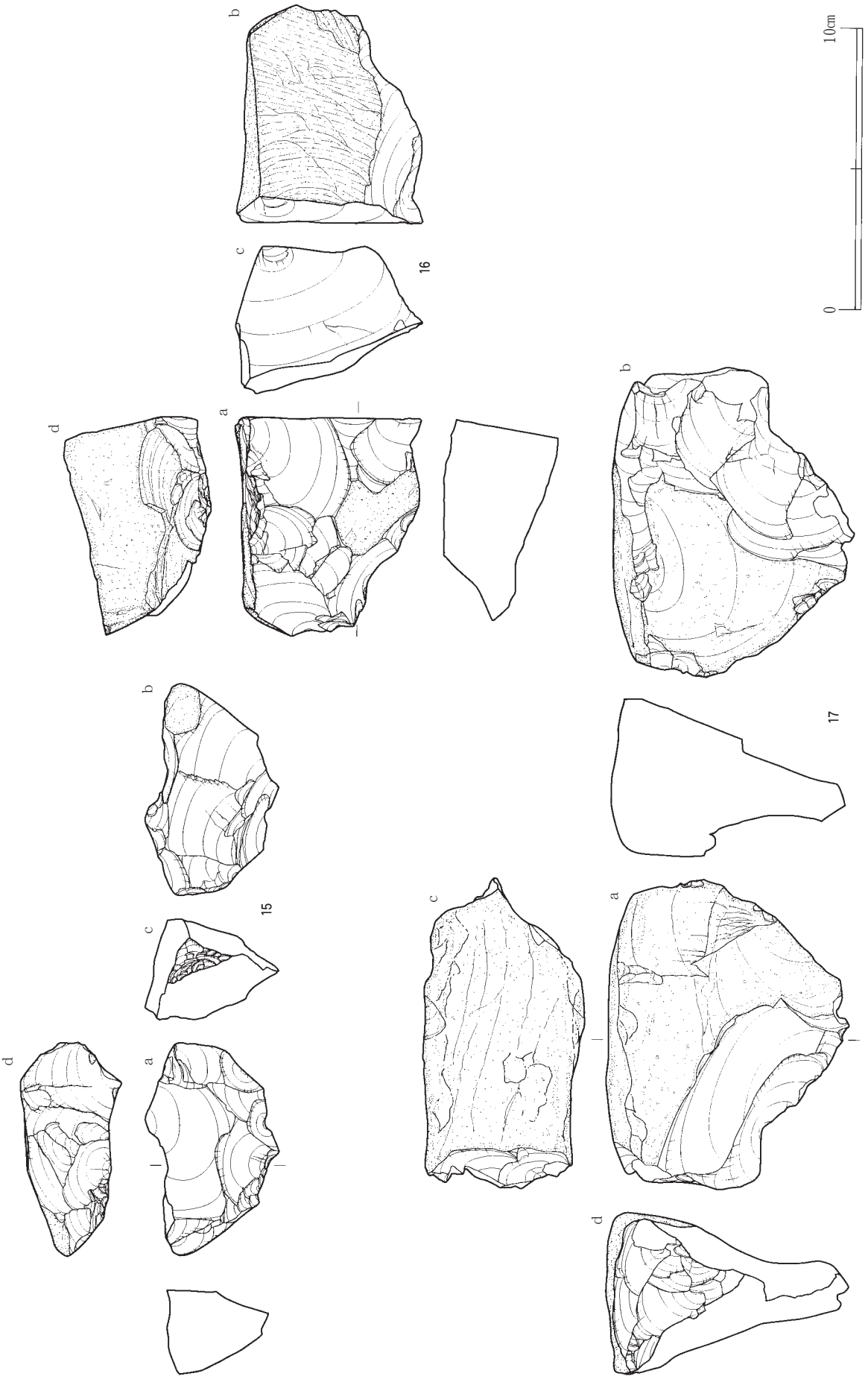
第９図　遺構内出土石器（１）



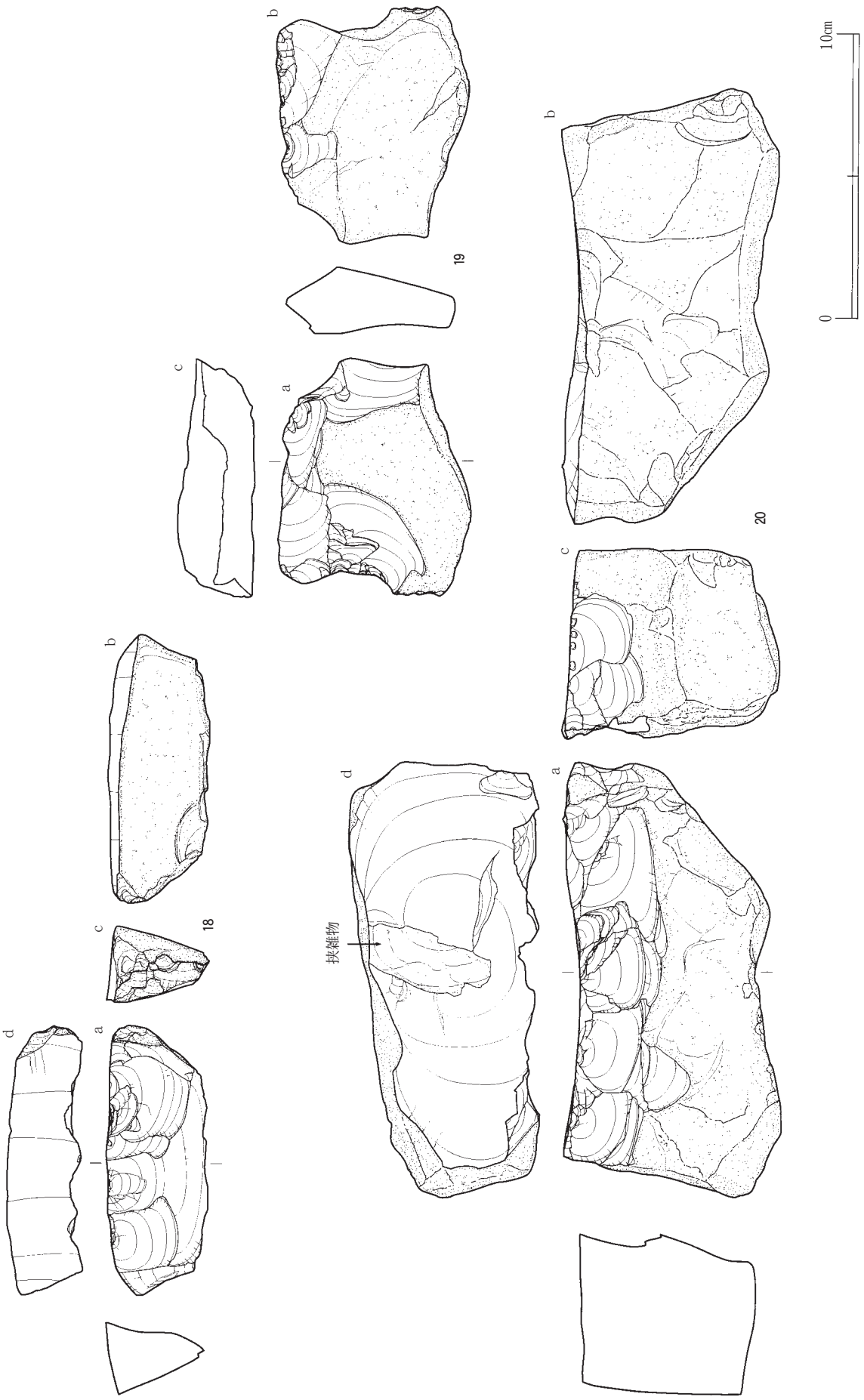
第 10 図　遺構内出土石器（２）



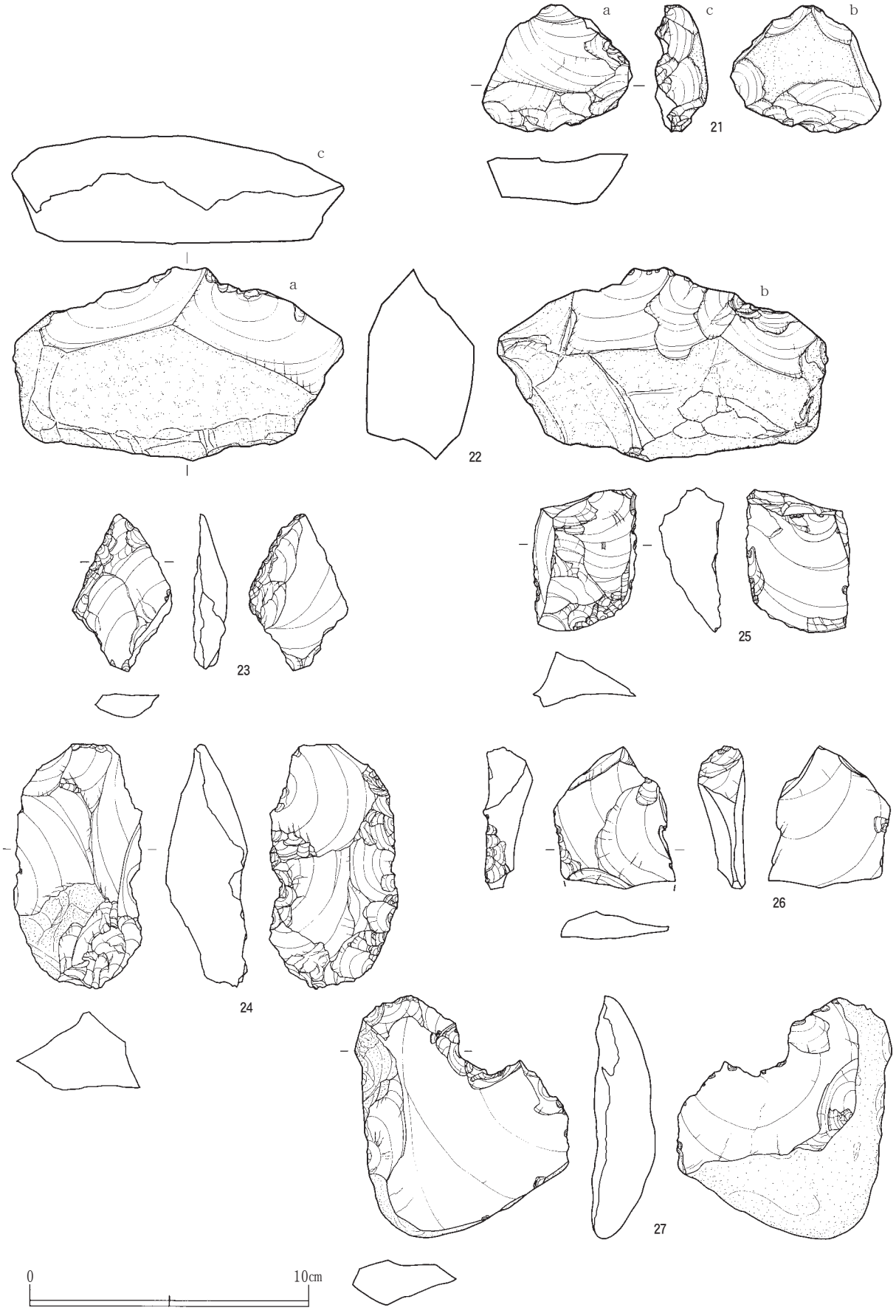
第 11 図　遺構内出土石器（3）



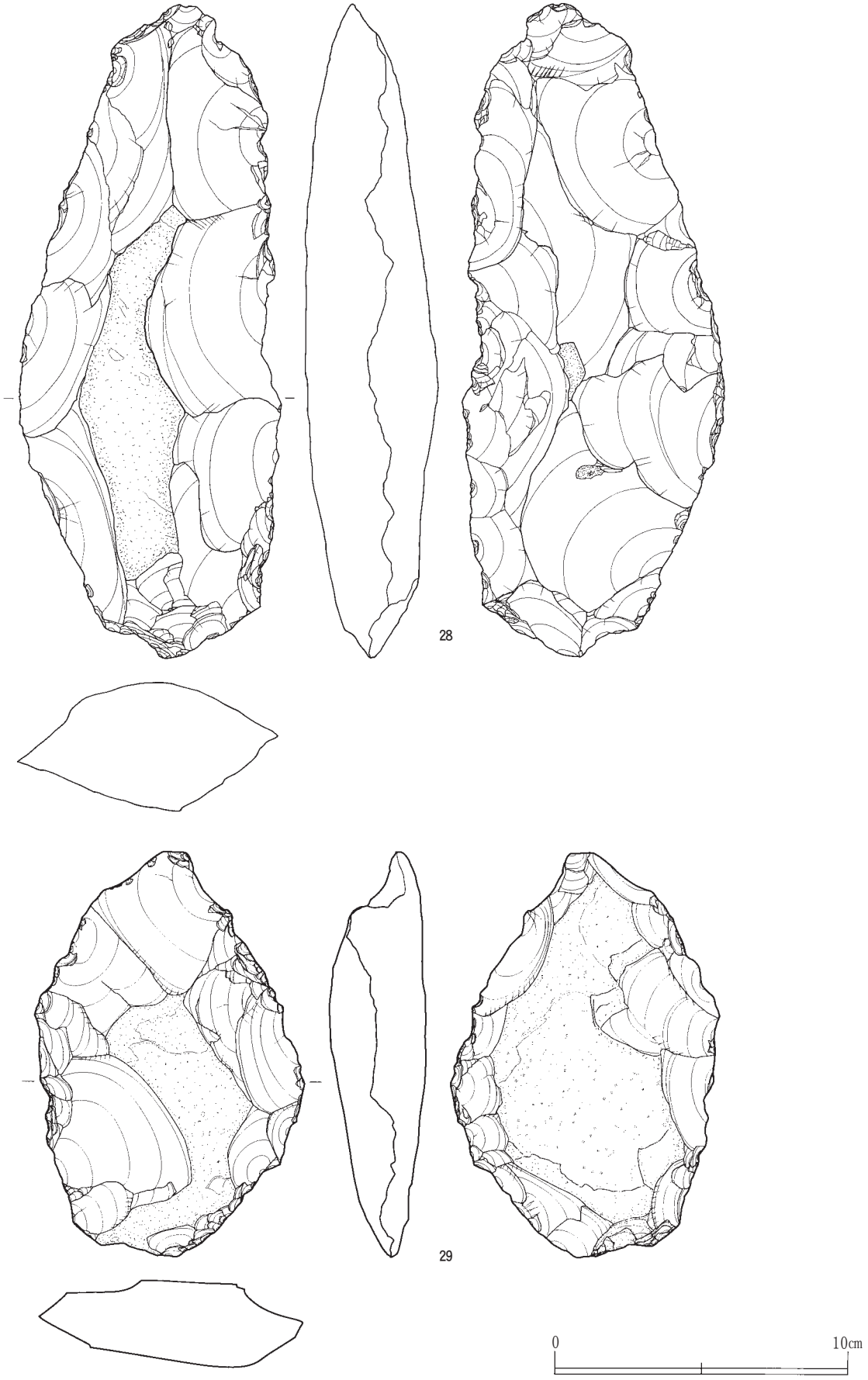
第 12 図　遺構内出土石器（４）



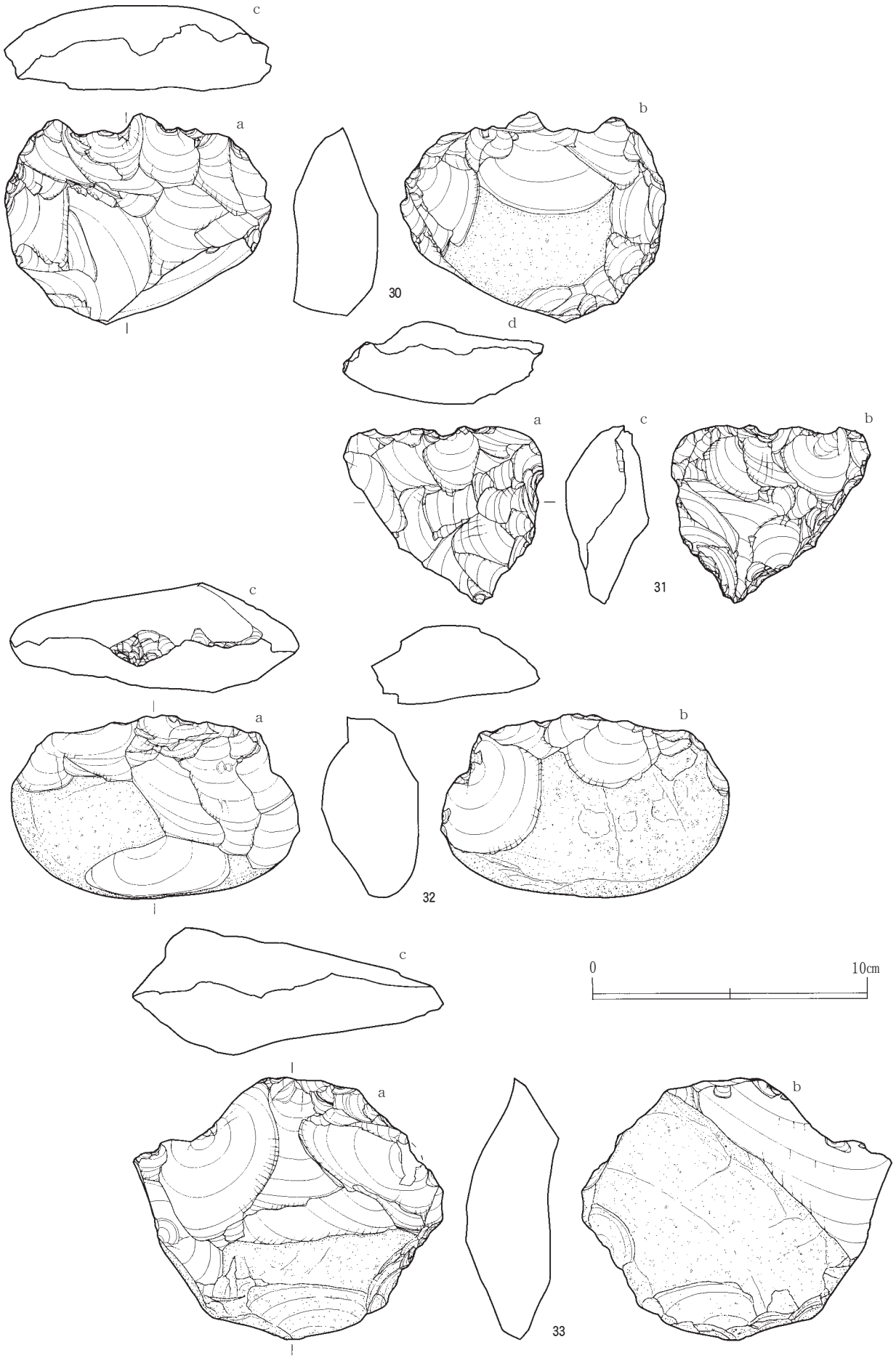
第13図　遺構内出土石器(5)



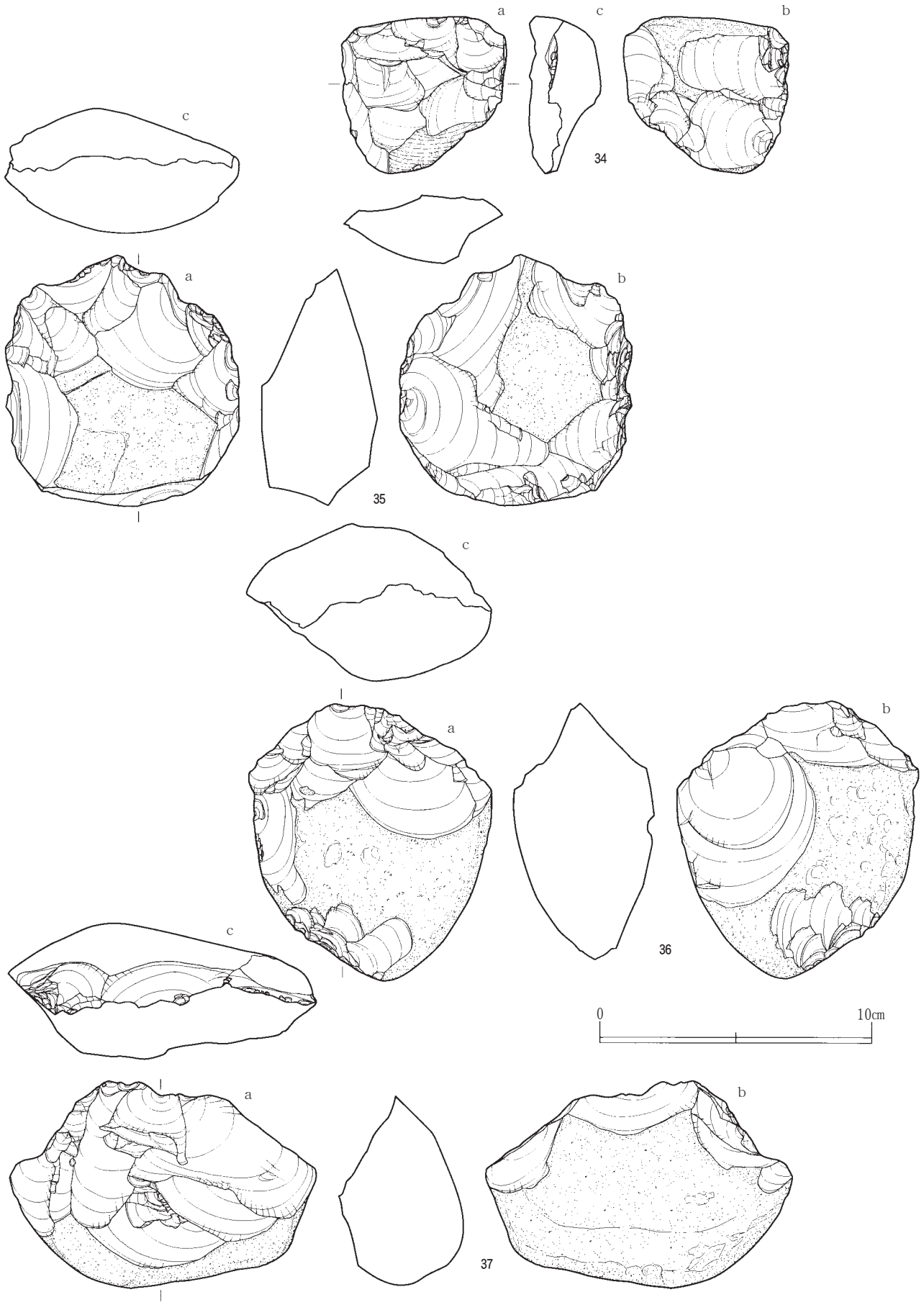
第 14 図　遺構内出土石器（６）



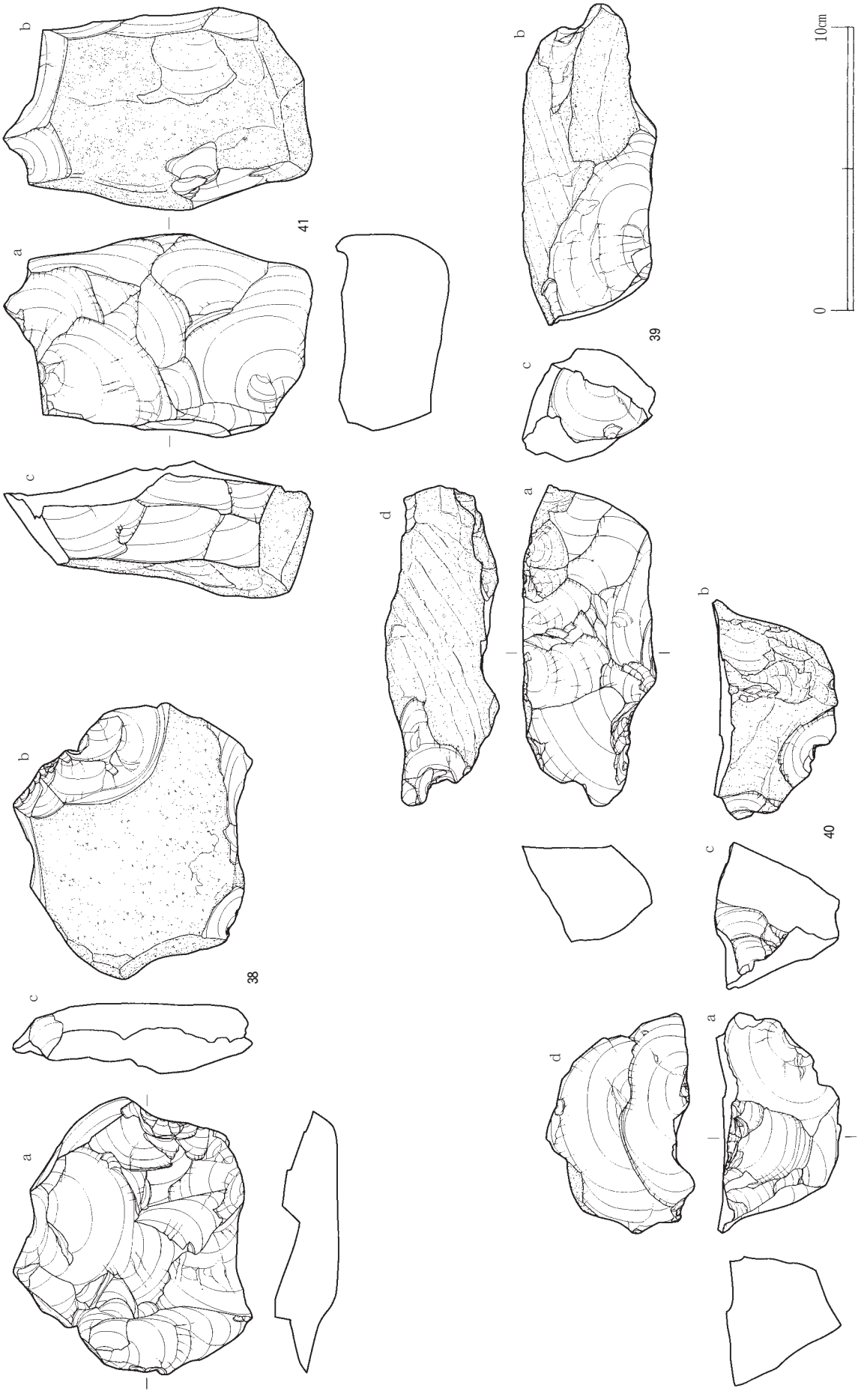
第 15 図　遺構内出土石器（7）



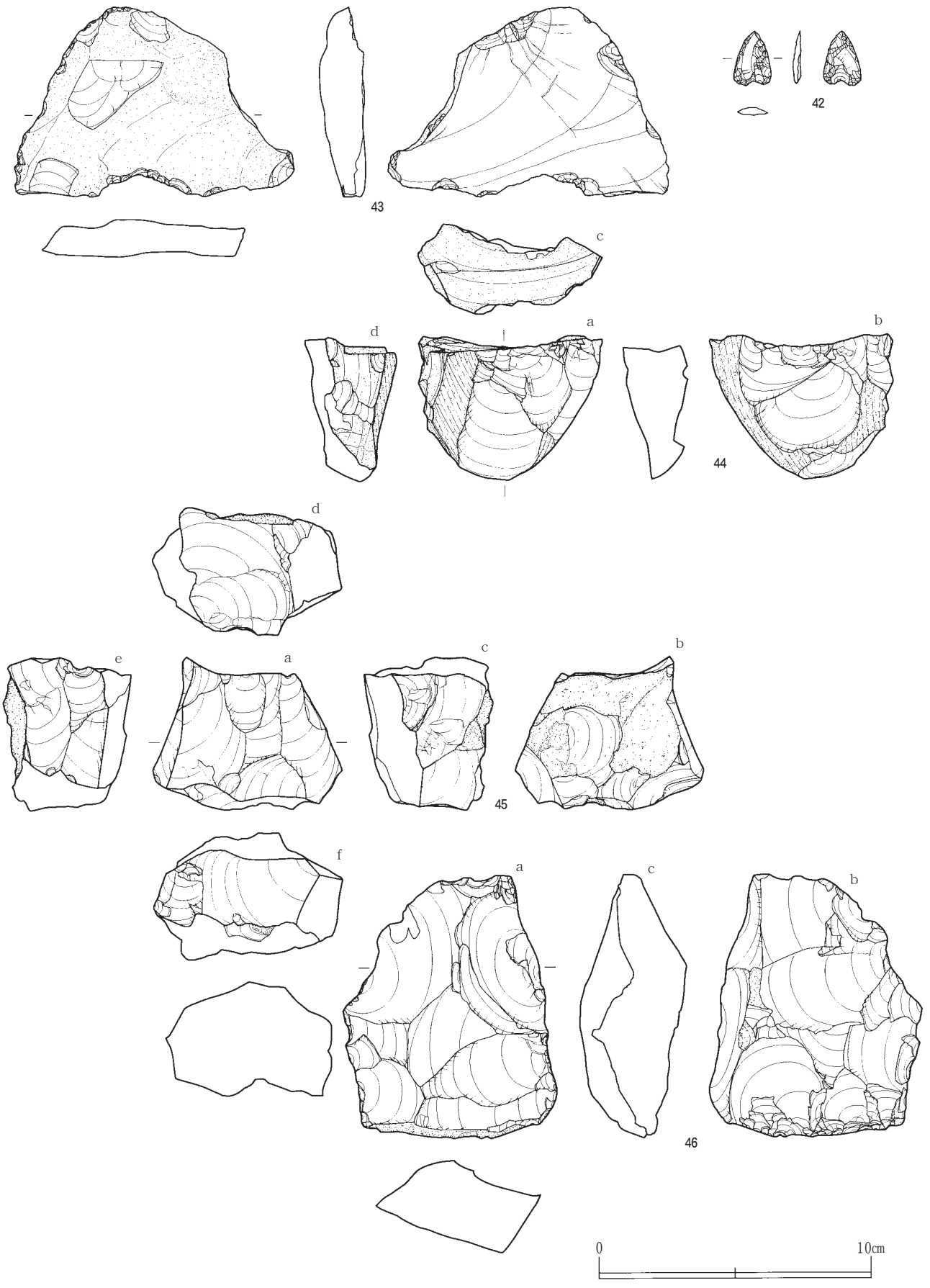
第 16 図　遺構内出土石器（８）



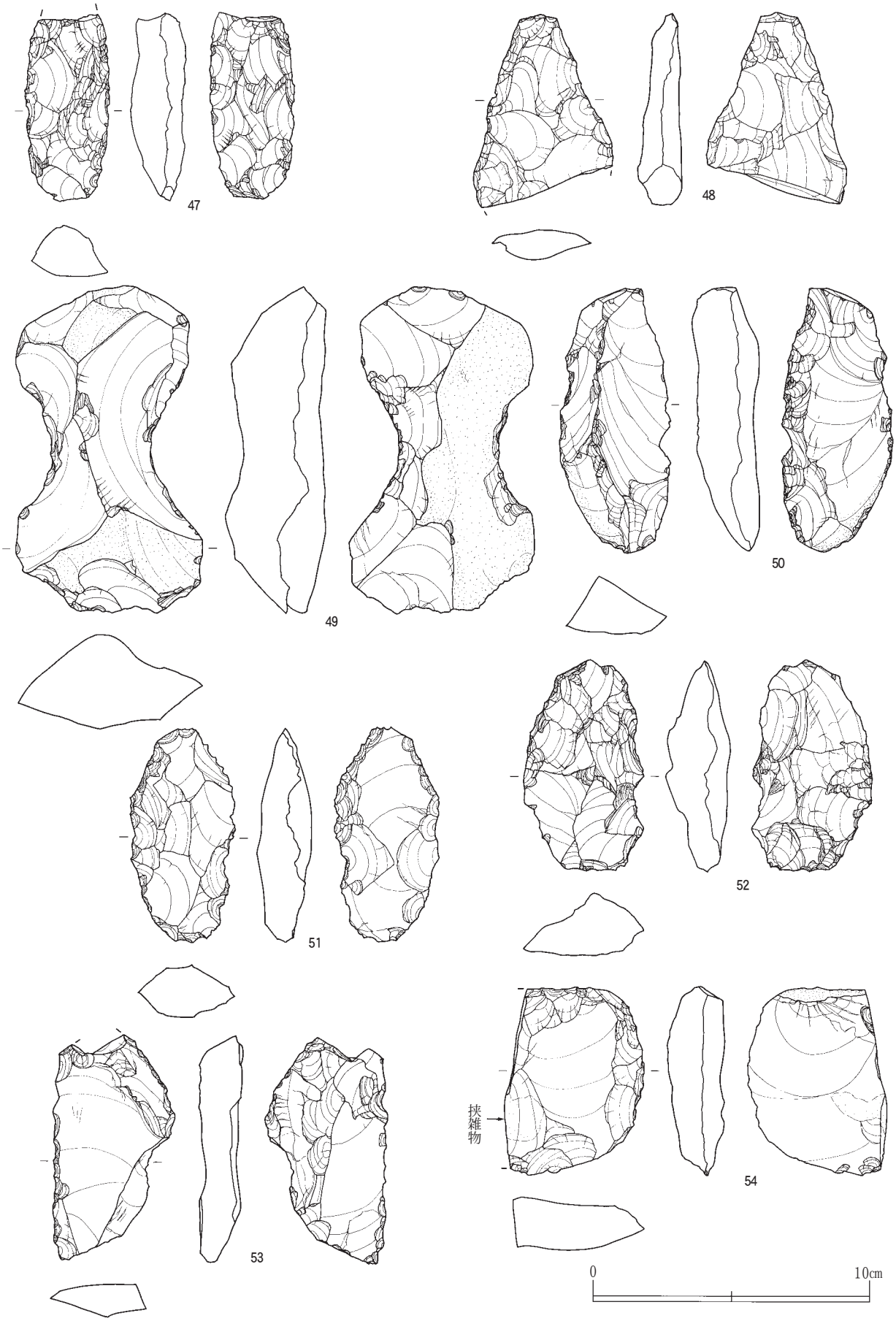
第 17 図　遺構内出土石器（9）



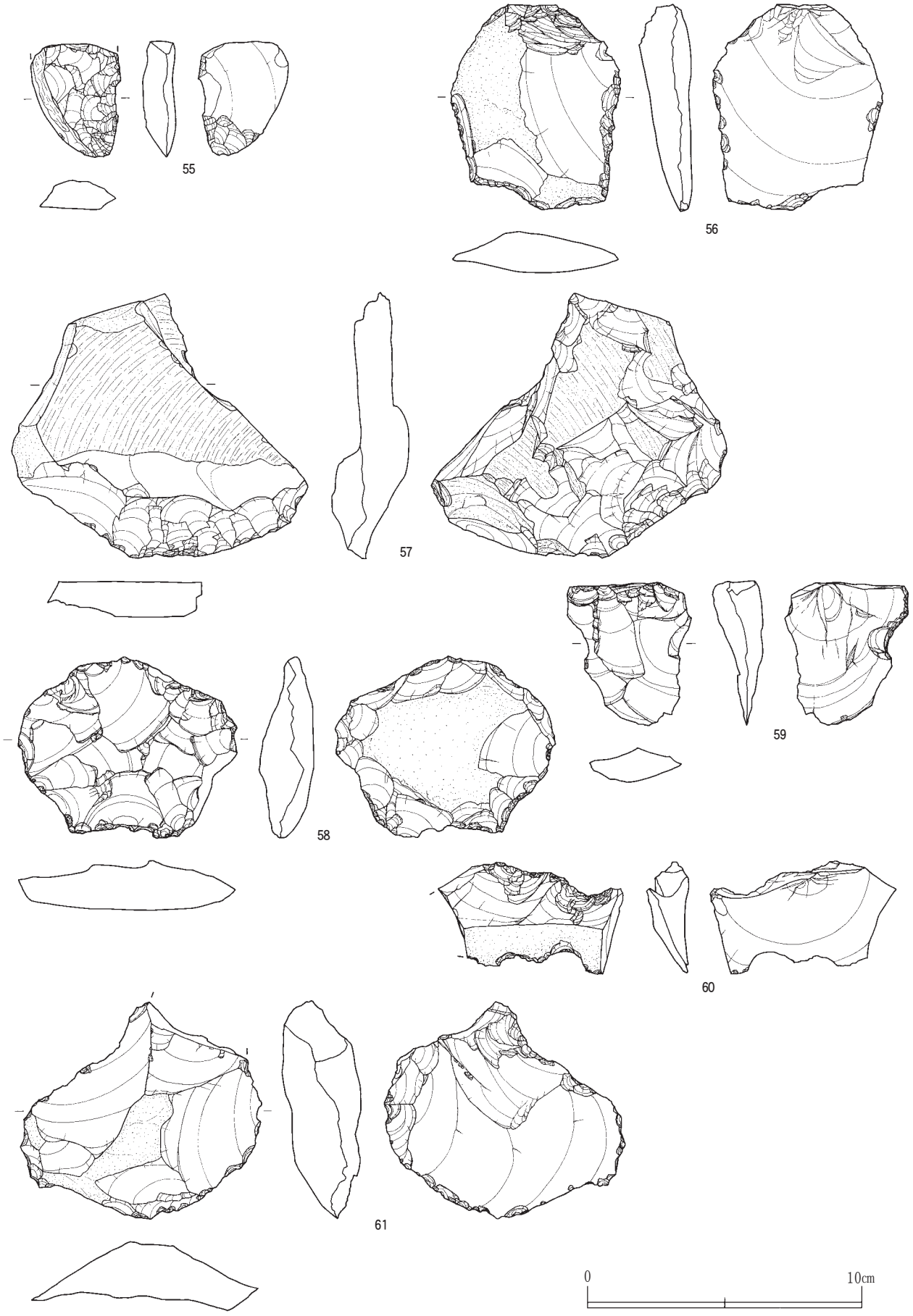
第 18 図　遺構内出土石器（10）



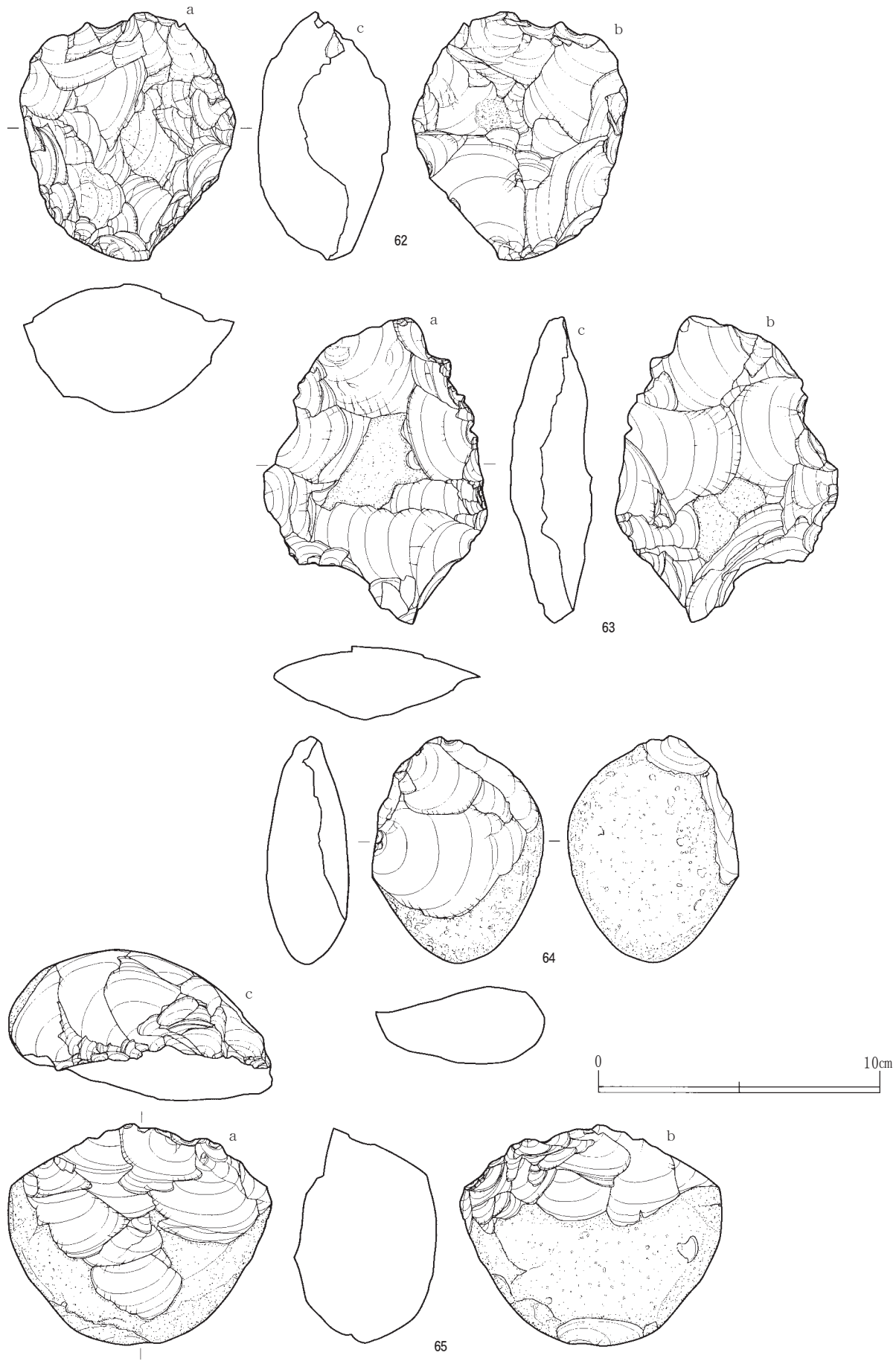
第 19 図　遺構内出土石器（11）



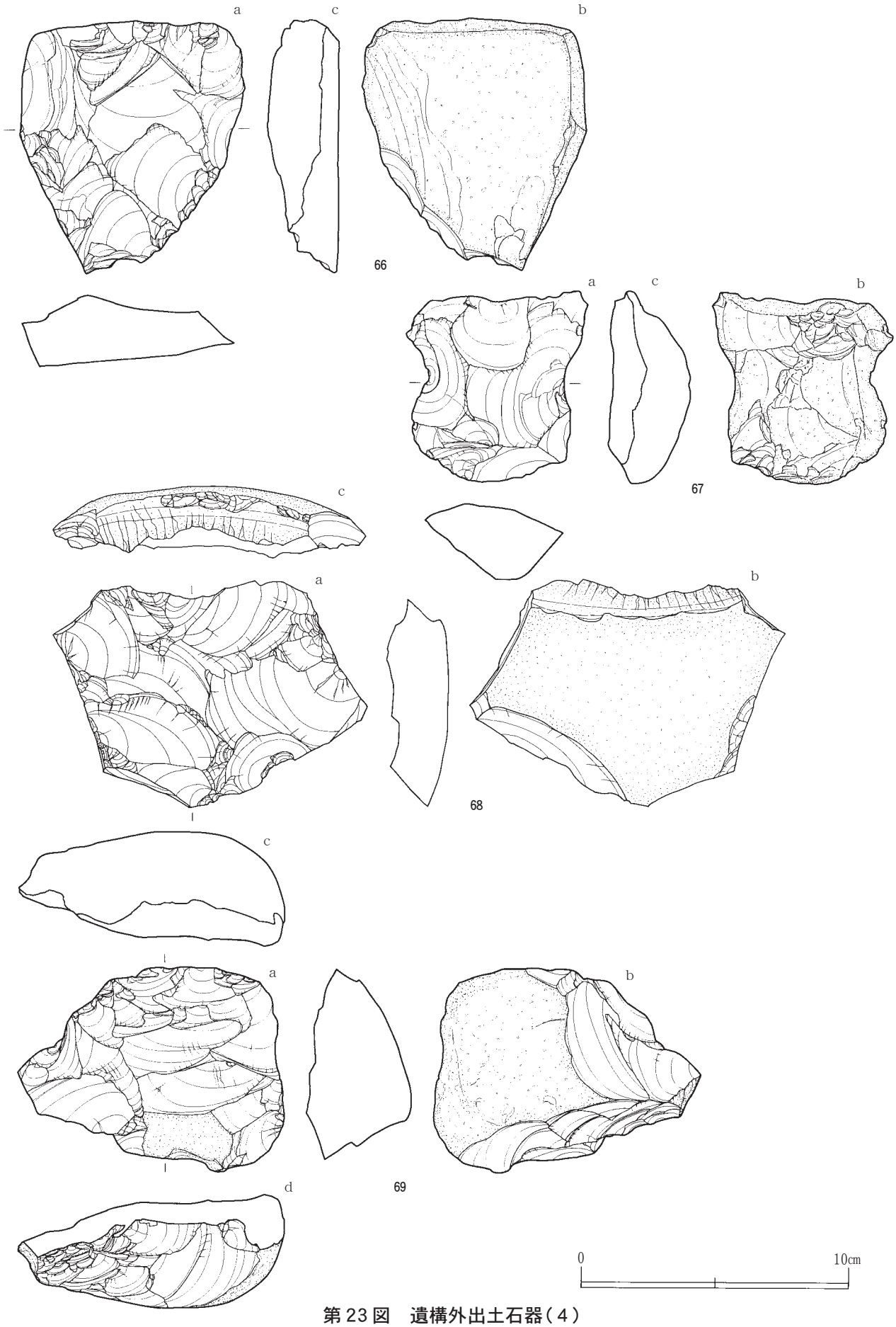
第 20 図　遺構外出土石器（１）



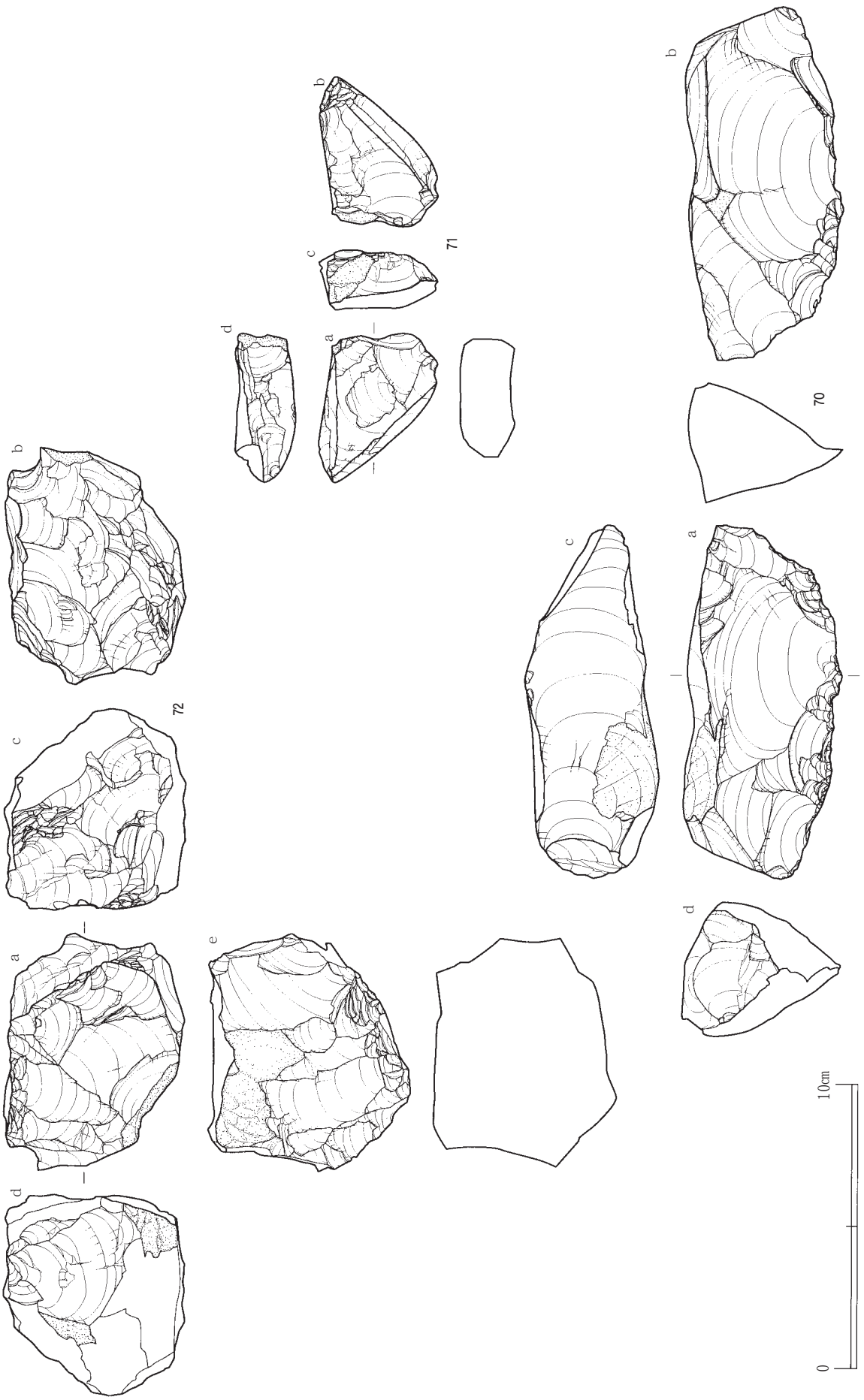
第 21 図　遺構外出土石器（2）



第 22 図　遺構外出土石器（３）



第 23 図　遺構外出土石器（4）



第 24 図　遺構外出土石器（５）

第３章　まとめ

樋向Ⅰ遺跡は、上岩川遺跡群の中で北から２番目に位置する。遺跡からは、ＳＸＱ１・２・４・５・６・７・９・10・12・14・15・18・19の13か所の石器集中部、ＳＫＤ11の原石採掘跡、ＳＷ13の炭焼成遺構を検出した。石器の総数は50,396点で、石器集中部を含む遺構内が23,762点、遺構外が26,634点である。石鏃・石槍・石斧・石匙・石篦・スクレイパー・ノッチ・両面加工石器・二次加工ある剥片・石核・剥片・分割礫・剥離原石が出土した。

石器製作跡は、ＳＸＱ９とＳＸＱ19を除く11か所（まとめて捨てた可能性も含む）である。このうち、Ⅳ層上面で検出したＳＸＱ４・５・６・７・12・14・15 の ７か所は近接した在り方を示しており、東側にはⅡ・Ⅲ層から見つかったＳＸＱ19が存在する。つまり、ＳＸＱ19の石器は大半が元位置を留めておらず、本来先の近接した遺構群を構成していた石器群と理解される。これらＳＸＱ19の石器群は6,185点にものぼることから、先の遺構群は本来一体化した在り方を示していたと考えられる。しかし、石器製作における単位は、少なくとも ７ブロックは存在していたといえよう。

ＳＸＱ10は、長軸1.2m×短軸0.7mの狭い範囲から総数659点の剥片を中心とする石器が出土しており、１㎝以下の剥片や削片約500 点程が出土した。おそらく、トゥールを製作したときの加工残滓と考えられ、トゥールの製作に関わる遺構と判断される。

また、本遺跡では原石採掘跡が検出されたことが特筆される。長さが約２～約４m内に収まるような大きさの土坑が、連結したような状態を示していた。第７図②の土坑状の採掘跡には頁岩の原石が、ややまとまって出土していた。②･⑦の覆土中位には黒色土が堆積するなど自然堆積状態を示し、最も最後まで露出していた可能性がある。

原石採掘跡で著名なのが、長野県長門町星糞峠に所在する旧石器・縄文時代の鷹山黒曜石採掘址群である。今のところ、縄文時代草創期から早期にかけての土器や石器と共に竪坑群などが見つかり、明治大学によって1984年以来継続した調査が続けられている（明治大学鷹山遺跡群調査団1999）。多くの竪坑群の在り方に対して、本遺跡の原石採掘跡は単発的な在り方を示す。段丘縁辺の突出した地形を狙った採掘であり、広く群をなさないのは頁岩の採掘量が限られていたことによると考えられる。

本遺跡から出土した石核の中にも、両面体縁辺加工石核・凹面状石核・舟底状石核が存在する。特に、自然礫の風化相を判断してから剥片剥離を行った上岩川Ａタイプと上岩川Ｂタイプの剥片剥離技術を示す凹面状石核と舟底状石核が目立って出土しており（別編２）、樋向Ⅲ遺跡や鹿渡渉Ⅱ遺跡の成果より本遺跡も縄文時代前期から中期の時期が想定される。

引用・参考文献

鷹山遺跡群調査団　『鷹山遺跡群Ⅰ』　長門町教育委員会　1989（平成元）年
明治大学鷹山遺跡群調査団　『長野県鷹山黒耀石原産地遺跡群の研究―1995・96・97・98 年度にわたる鷹山黒耀石採掘址群調査の記録―』　明治大学鷹山遺跡群調査団　1999（平成11）年

1　遺跡調査風景（南から）

2　ＳＫＤ１１断面（北東から）

1　ＳＫＤ１１断面
および周辺（北東から）

2　ＳＫＤ１１完掘
（北西から）

3　ＳＫＤ１１完掘
（南東から）

1　ＳＸＱ１石器出土状況（南から）

2　ＳＸＱ２石器出土状況（北から）

3　ＳＸＱ４石器出土状況（南西から）

1　ＳＸＱ５石器出土状況（北西から）

2　ＳＸＱ６石器出土状況（南西から）

3　ＳＸＱ７石器出土状況（東から）

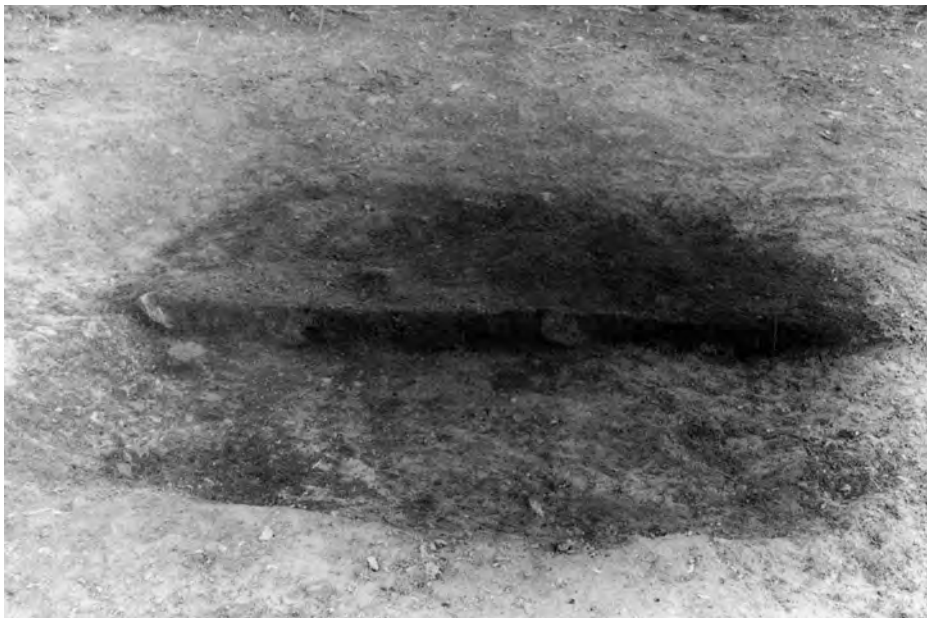
1　ＳＸＱ９断面
（南から）

2　ＳＸＱ 10 石器出土
状況（北から）

3　ＳＸＱ 12 石器出土
状況（南西から）

1　ＳＸＱ 14 石器出土状況（南から）

2　ＳＸＱ 18 検出状況（南西から）



3　ＳＷ 13 断面（南西から）

―― 樋向Ⅱ遺跡 ――

（３ＴＭⅡ）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観(第１図、図版１―１、巻頭図版)

本遺跡は小又川左岸にある低位段丘の南北を沢に囲まれた台地縁辺にあり、標高は41 ～ 43mで緩く南東に傾斜している。小さな舌状地形の先端に位置し、東側は森林軌道で掘削されている。遺跡は当該地域で調査を行った６遺跡のうち、北から３番目にあり北東に樋向Ⅰ遺跡が南西には樋向Ⅲ遺跡が位置する。調査区は長さ約17m、幅約12mの台形状の範囲で周囲の水田から約６mの比高がある。

狭い範囲であるが調査区からは､柱穴様ピット ２基と性格不明遺構４基を検出している。近くには、原石採掘跡と多量の石器が見つかった樋向Ⅲ遺跡が存在しており、性格不明遺構もこれらに関係していた可能性がある。ＳＸ２からは多量の石器が出土しており、北西側の調査区域外に石器製作跡が存在する可能性がある。

第２節　調査の方法(第１図)

発掘調査は、遺構や遺物を計画的に把握するためにグリッド法を採用した。つまり、調査区域の中央部にある工事路線内の中心杭(Ｘ＝5550.970、Ｙ＝－58967.611)を原点ＭＡ50として、国家座標第Ⅹ系の座標北を基準に各４m間隔のグリッド杭を設定した。グリッド杭には、東から西へ昇順するアルファベット２文字と、南から北に昇順する算用数字を組み合わせた記号を記入し、４m方眼の南東部隅(グリッド杭)をその方眼のグリッド名とした｡東西は右文字のＡ～Ｔまでを一順ごとに繰り上げ、左文字を昇順させて表現する。これらを遺構や遺物の記録作業に役立てた。

調査に当たっては、南西側斜面を排土置き場とし一輪車で排土の運搬を行った。調査区は、西側で削平が深く遺構はすぐに検出できたが、南側斜面際では黒褐色土が厚く堆積していた。

検出した遺構には、発見順に遺構の略記号と番号を付した遺構名を与え、図面や写真・遺物取り上げの整理に役立てた。ただし調査の進行に伴い、遺構の性格が異なって略記号を変更したり、欠番になったものもある。平面図や断面図などは1/20を基本にした。写真撮影は､35㎜カラーリバーサルフィルムや白黒ネガフィルムを使用した。遺物は、遺構名・グリッド名・出土層位・出土年月日などを記載して取り上げた。

第３節　調査の経過

樋向Ⅱ遺跡は､2005年４月と ６月に秋田県教育委員会が、当該整備事業に係る路線内で分布調査を実施し確認した遺跡である。これを受けて、同年10月３日～同年10月14日まで秋田県埋蔵文化財センターが確認調査を実施し、樋向Ⅲ遺跡の調査と並行して2006年７月25日～同年９月11日にかけて発掘調査を実施した。

７月25日、雑木撤去を行ってから確認調査トレンチの埋土除去と表土除去を開始した。

８月３日、調査区全面の表土除去を完了し遺構検出を開始する。検出作業を進めた結果、暗褐色を

主体にした土坑状の落ち込みや柱穴様ピットの存在が明らかになった。

8月8日、北東斜面上位から検出していたＳＸ１をかわきりに、個別遺構の本格的な精査を開始した。8月11日には、北西平坦部のＳＸ2から多量の剥片や削片が出土することが判明した。以降、遺構の精査を繰り返し、9月11日には調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、当該６遺跡について一括しておこなった。出土した多量の遺物は数点の土器を除けばすべて石器である。石材原産地遺跡の性格を具体的に提示するのに、各遺跡ごとに遺構内・遺構外出土石器について、その種類を識別し数量を数え挙げることにした。

石器は定形石器・剥片・石核などに分けられるが、自然石(遺構外は除く)・分割礫なども石器と共にカウントの対象にした。調査中における小さな石器と自然石の分別は、効率化を妨げるため発掘現場では行わず整理の洗浄作業後に行い、5㎜前後の剥片も拾い上げた。また、並行して出土石器の接合作業を行った。

遺構の平面図や断面図・エレベーション図などは、組み合わせて第２原図としトレースした。遺跡内から出土した定形石器は極力掲載し、紙面の制約から石核は、製作技術の理解を深めるため典型的な形態のものを選別して掲載した。

定形石器の実測に当たっては、個々の石器についてその製作の過程を観察しながら進めていった。また、一部を委託して実測・トレース作業の迅速化を図った。報告書掲載遺物は、その法量を測定し一覧表にまとめた。整理済みの資料は、報告書掲載ごとにまとめてあるが、掲載遺物以外の資料も取り出し易いように収蔵している。

第２章　調査の記録

本遺跡からは柱穴様ピット２基、性格不明遺構４基を検出した。調査区の地形は、南西側の約３分の２が小高い平坦部、北東側の約３分の２が北東に傾斜する緩斜面である。

第１節　基本土層（第１図）

本遺跡は平坦面の南東際が厚い堆積層を示すので、その地点を基本土層に選定した。

Ⅰ層　黒褐色土。表土。１～３㎝の礫を少量含む。粘性弱、締まり弱。

Ⅱ層　黒色土。粘性弱、締まり弱。

Ⅲ層　灰黄褐色土。３～４㎝の礫を少量含む。粘性中、締まり中。

Ⅳ層　にぶい黄褐色土。地山。１～５㎝の白色礫を多量含む。粘性中、締まり強。

第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物

１　柱穴様ピット

ＳＫＰ４（第２図、図版２－２）

調査区北西側のＭＡ51グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。南東にはＳＸ８が隣接している。柱穴様ピットは長軸0.52m×短軸0.46mの楕円形を示し、深さは0.2mである。出土した石器の総数は８点で、剥片が８点出土した。

ＳＫＰ６（第２図、図版２－３）

調査区西側のＭＡ52グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。東にはＳＸ２が隣接している。平面形は長軸0.48m×短軸0.42mの不整楕円形を示し、深さは0.16mである。出土した石器の総数は296点で、二次加工ある剥片１点・石核３点・剥片291点・剥離原石１点である。

２　性格不明遺構

ＳＸ１（第２・３図、図版１－１）

調査区北側のＬＳ・ＬＴ52、ＬＳ・ＬＴ53グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。平面形は長軸6.3m×短軸2.96mの不整形を示し、深さは1.1mである。出土した石器の総数は129点で、石核13点・剥片110点・分割礫６点である。他に原石が１点出土した。

掲載した石器は剥片（１）のみである。

１は縦長の剥片で先端が湾曲している。

ＳＸ２（第２・３図、図版１－２）

調査区北西側のＭＡ52グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。西にはＳＫＰ６が隣接している。平面形は長軸2.4m×短軸0.85mの不整楕円形を示し、深さは0.5mである。北西側の覆土中より多量の石器が出土した。南西側は確認調査で掘りあげた土を埋め戻したようである。出土した石器の総数は

2,654点で、ノッチ 1点・石核14点・剥片2,639点である。

掲載した石器はノッチ(2) のみである。

2は両端が折損している素材に加工したと考えられる。表面左側縁に抉りを施し、同右側縁にも僅かに調整を施す。

ＳＸ８(第２・３図、図版１－３・２－1)

調査区西側のＭＡ51グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。北西にはＳＫＰ４が隣接している。平面形は長軸2.82m×短軸1.12mの不整楕円形を示し、深さが0.85mである。出土した石器の総数は1,572点で、石錐１点・ノッチ１点・石核49点・剥片1,509点・分割礫10点・剥離原石２点である。

掲載した石器は石錐(3)・ノッチ(4)・石核(5 ・ 6)である。

石錐の３は横長剥片に調整を施し、刃部とつまみ部を作り出している。ノッチの４は、節理の分割面を伴う横長剥片の鋭角な辺に抉りのある調整を施す。

石核の５は、幅の狭い縦長剥片を剥離している。ｃ面下端からの打撃によって折損したものと考えられる。６は分割礫を素材に、ｃ・ｄ両面を中心に連続して剥片剥離を行う。

ＳＸ９(第２図)

調査区南側のＬＴ50･51グリッドに位置し、Ⅳ層上面で検出した。北西にはＳＸ８が隣接している。平面形は長軸5.16m×短軸2.48mの不整形を示し、深さが1.5mである。出土した石器の総数は539点で、石核20点・剥片518点・分割礫１点である。

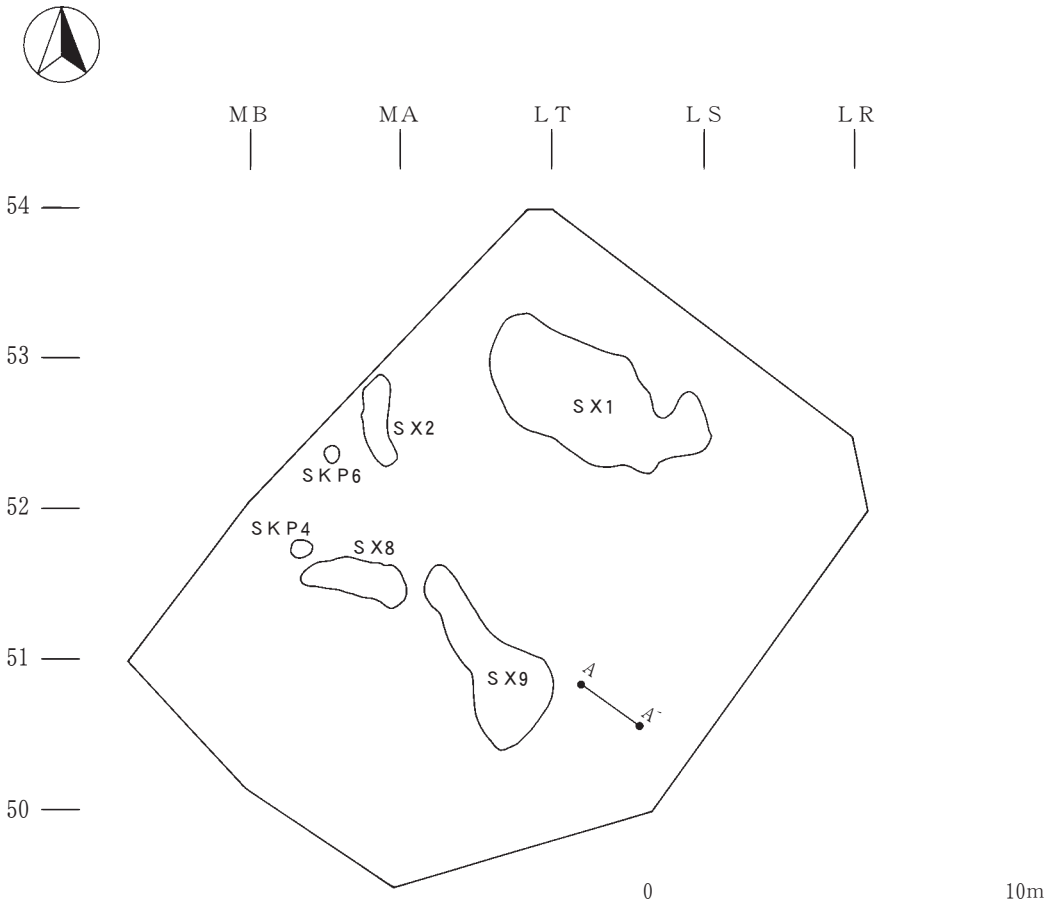
第３節　遺構外出土石器(第４図)

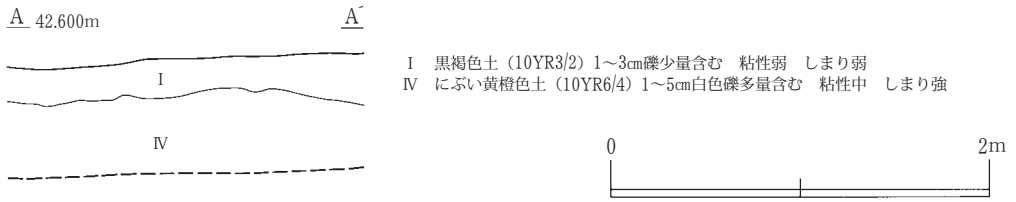
出土した石器の総数は2,069点で、石槍１点・敲き石１点・石核32点・剥片2,028点・分割礫５点・剥離原石２点が出土した。

掲載した石器は石槍(7)・敲き石(8)・石核(9 ・10)である。

石槍の７は、裏面に礫皮面、表面に自然面直下の風化相が観察できることから、扁平な両面体状礫を素材にしたと理解される。先端は鋭角的で、縁辺部には比較的粗い剥離を連続的に施す。中央部で折損している。敲き石の８は、表面の右半分と裏面の左側縁部を除いて、ほぼ全面に敲打の際の剥離が認められる。石材は安山岩製である。

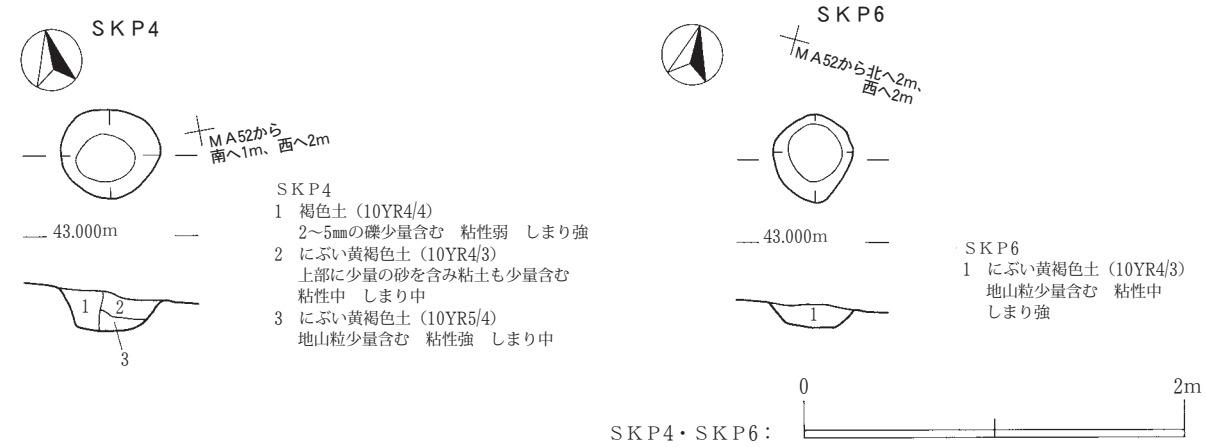
石核の９は主としてａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類するが、ｂ面右下に小さな調整が確認できる。10は分割礫を素材にしたもので、主にａ面とｄ面で剥片剥離を行う。

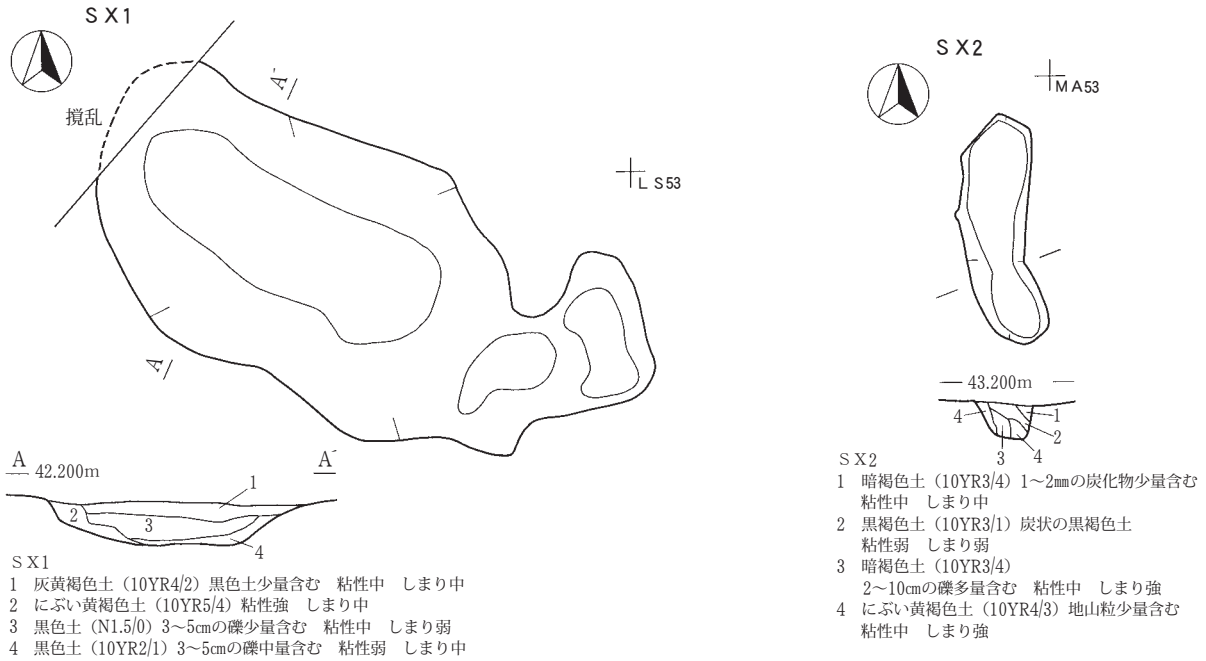


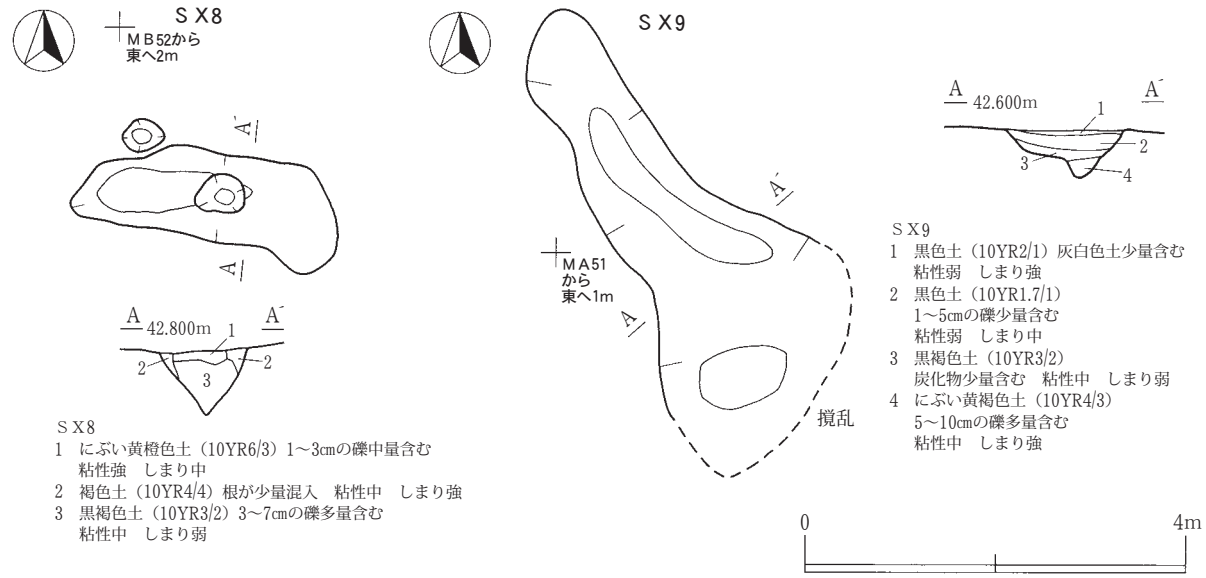


Ⅰ　黒褐色土（10YR3/2）1～3㎝礫少量含む　粘性弱　しまり弱
Ⅳ　にぶい黄橙色土（10YR6/4）1～5㎝白色礫多量含む　粘性中　しまり強

第１図　遺構配置図・基本層位





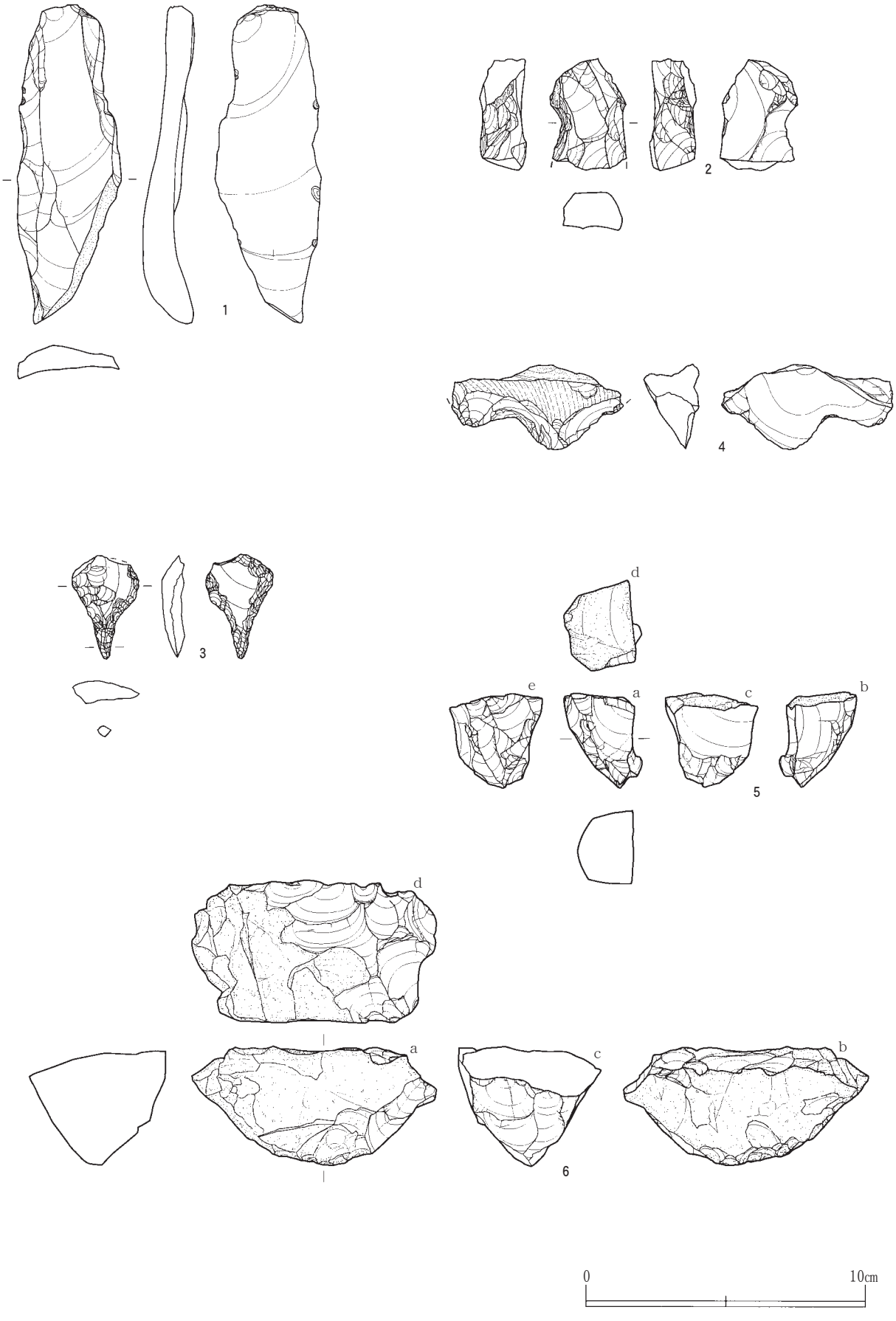


第２図　柱穴様ピット・性格不明遺構（ＳＫＰ４・６、ＳＸ１・２・８・９）

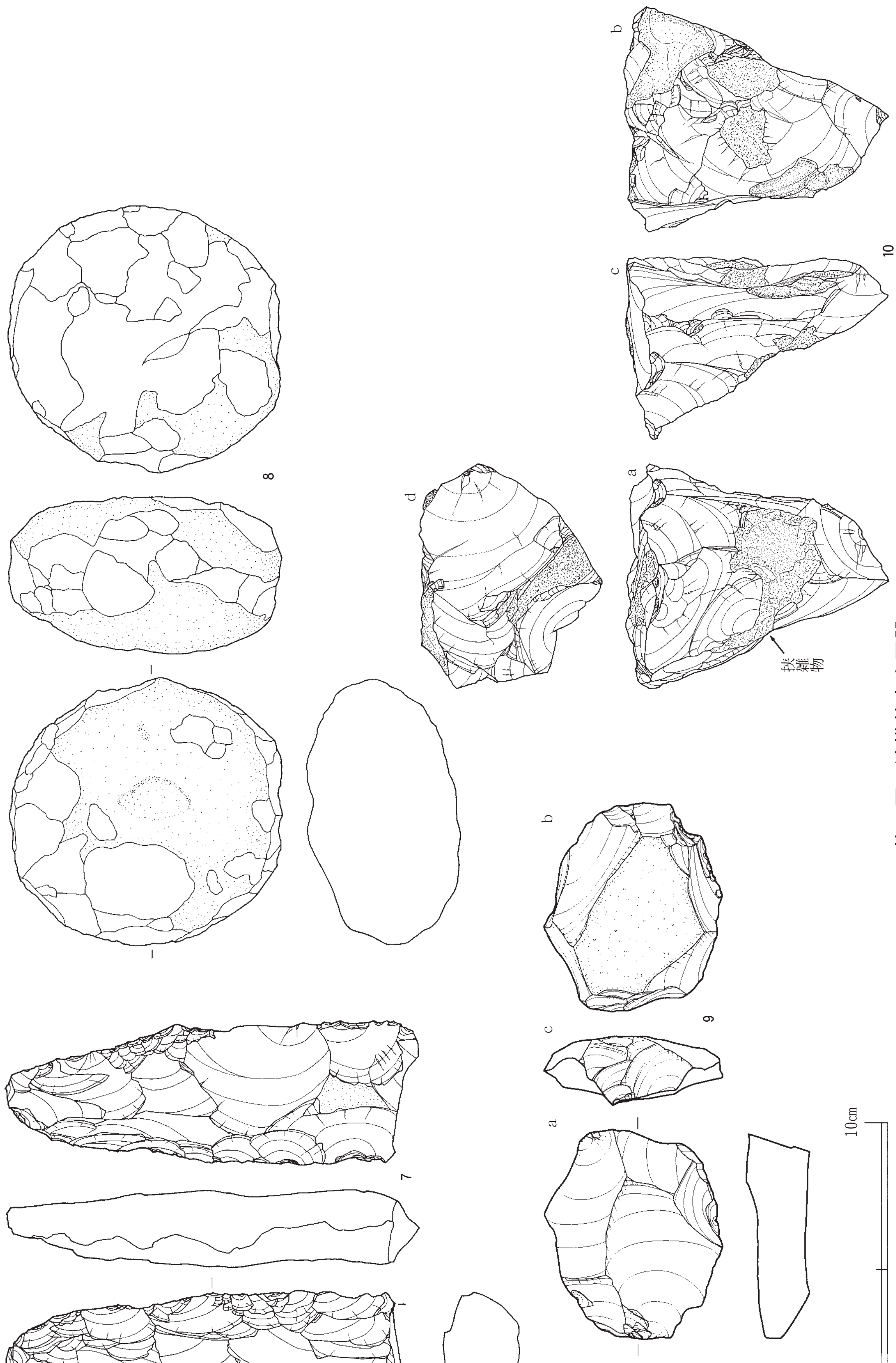
第１表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	出土位置	層 位	器　種	石 質	長さ・幅・厚さ(㎜)	重量(g)	備　　考
1	3	ＳＸ１	(Ⅳ)	剥片	頁岩	114 ・ 38 ・ 18	58.3	
2	3	ＳＸ２	(Ⅳ)	ノッチ	頁岩	40 ・ 28 ・ 17	20.5	
3	3	ＳＸ８	(Ⅳ)	石錐	頁岩	37 ・ 24 ・ 8	5.1	
4	3	ＳＸ８	(Ⅳ)	ノッチ	頁岩	61 ・ 30 ・ 19	25.2	
5	3	ＳＸ８	(Ⅳ)	石核	頁岩	34 ・ 33 ・ 28	28.0	ａ～ｅ面
6	3	ＳＸ８	(Ⅳ)	石核	頁岩	88 ・ 52 ・ 44	196.3	ａ～ｄ面
7	4	ＬＱ５２	Ⅰ	石槍	頁岩	140 ・ 50 ・ 26	161.8	
8	4	ＬＳ５１	Ⅰ	敲石	安山岩	92 ・ 92 ・ 53	516.0	
9	4	ＬＴ５３	Ⅰ	石核	頁岩	71 ・ 61 ・ 22	90.4	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
10	4	ＭＡ５０	Ⅰ	石核	頁岩	89 ・ 76 ・ 62	279.7	ａ～ｄ面

(　)内は遺構確認層



第３図　遺構内出土石器



第４図　遺構外出土石器

第３章　まとめ

樋向Ⅱ遺跡は、上岩川遺跡群中で北から３番目に位置している。遺跡からは、ＳＫＰ４・６の柱穴様ピット、ＳＸ１・２・８・９の性格不明遺構を検出した。石器の総数は7,267 点で、遺構内が5,198点、遺構外が2,069 点である。石槍・石錐・ノッチ・敲石・二次加工ある剥片・石核・剥片・分割礫・剥離原石が出土した。

本遺跡は、小又川左岸丘陵から舌状に延びた台地縁辺にあるが、東西の小さい沢を隔て樋向Ⅲ遺跡と対峙している。後述する樋向Ⅲ遺跡は、石器集中部が密集し多量の石器が出土した他、原石採掘跡が検出された。それに対して本遺跡の遺構や遺物は希薄であるが、むしろ沢で隔てているものの樋向Ⅲ遺跡の一部として捉えられる可能性がある。

遺跡から検出された遺構のうち、性格不明の４遺構は長軸が5～6mのものと、2.5～3m程のものとがある。これらは形態が整っておらず土坑とは認定できない。また、原石採掘跡に想定するにしても、積極的な理由が見出せない。このうちのＳＸ２からは、2,654 点もの多量の石器が出土した。これらの石器の中には、5㎜～20㎜の剥片やチップが1,500点程含まれ、石器そのものは石器製作に関わった加工残滓と考えられる。したがって、ＳＸ２には多くの石器がまとまって出土していたことから、石器加工の残滓をまとめて棄てた穴と考えられる。

出土した石核には、凹面状石核が１点含まれる（９）。別編の分類では、自然礫を分割した分割礫で中央の質を見極め、良質であればその面で求心状の剥片剥離を施したと想定される石核である。この特徴をもつものは、鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡、後述する樋向Ⅲ遺跡からも出土しており、他の遺跡と共通する上岩川Ａタイプの剥片剥離技術が認められる。樋向Ⅲ遺跡における縄文時代前・中期の想定時期より、本遺跡もそのどちらかに帰属するものと考えられる。

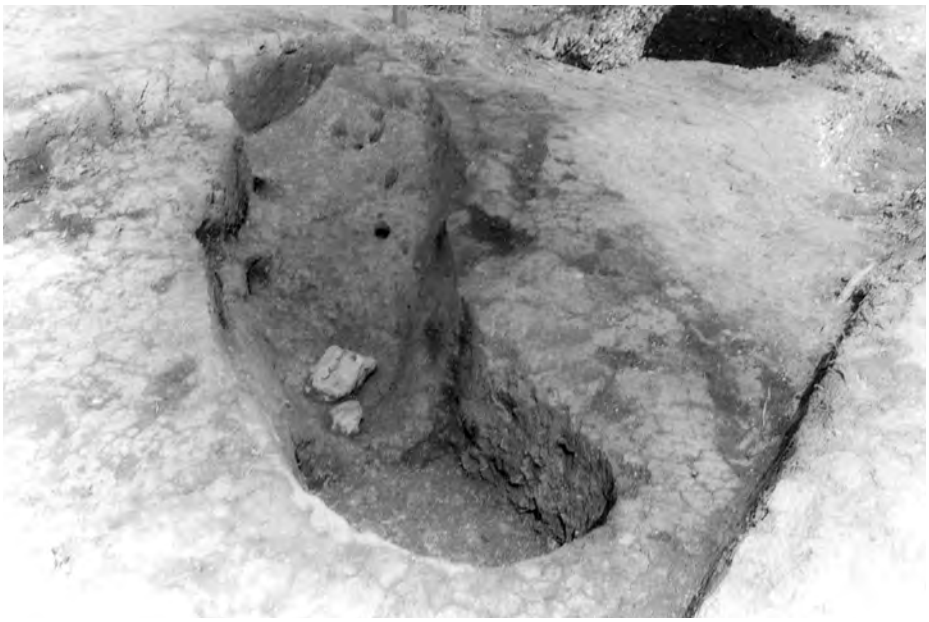
また、縁辺にかなり粗い剥落痕をもつ敲石（８）が出土している。石質は安山岩で軟質であるため、石器のハンマーとは考えられず、他の用途に用いたと考えられる。ちなみに、主として剥片剥離の石器製作に用いられるハンマーは、痘痕状の痕跡を留めるようである（御堂島2003）が、本遺跡を含め上岩川遺跡群からは該当する石器は見つかっていない。鹿角などを用いたかも知れないが、石器製作の必需品で、常に携行されたために残りにくいのかもしれない。

本遺跡は、南で近接している樋向Ⅲ遺跡と北東側に少し離れて存在する樋向Ⅰ遺跡に挟まれており、両遺跡では多量の頁岩原石が使用され、原石採掘跡も見つかっている。この状況から、調査区外で本遺跡の西に延びる沢地においても、頁岩の露頭があった可能性が高い。

引用・参考文献

御堂島　正　「石器製作の使用痕―トラセオロジーの視点から―」『月刊考古学ジャーナル』No.500
2003（平成15）年　ニュー・サイエンス社

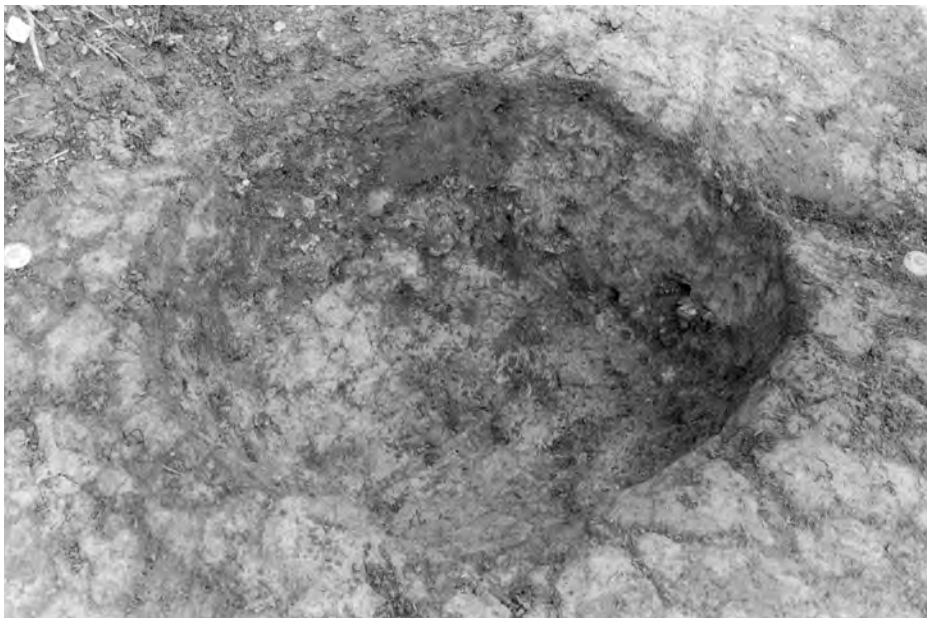
1　ＳＸ１断面
（東から）



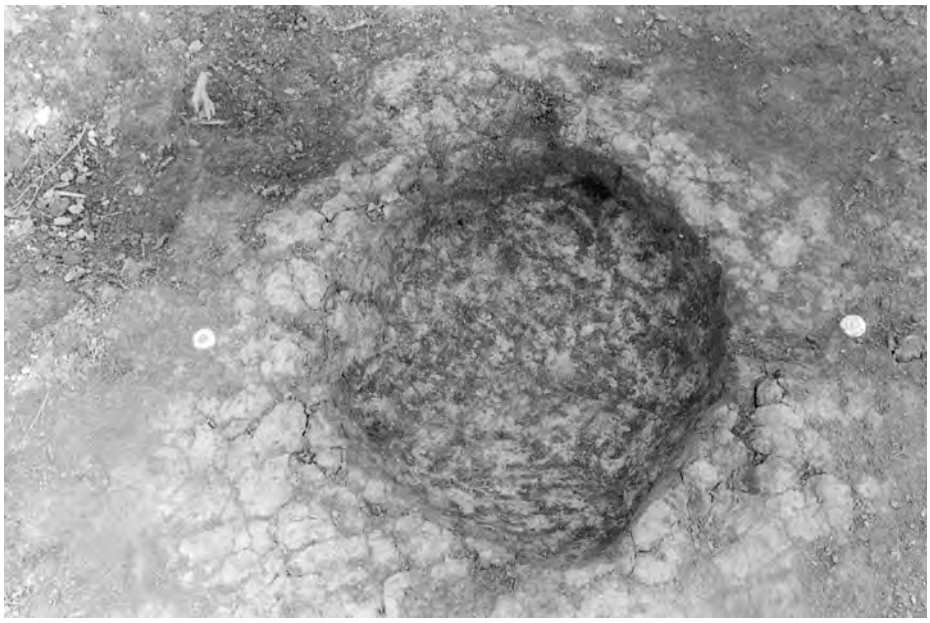
2　ＳＸ２完掘
（南から）

3　ＳＸ８（西から）

1　ＳＸ８完掘
（南から）



2　ＳＫＰ４完掘
（南東から）



3　ＳＫＰ６完掘
（南から）

—— 樋向Ⅲ遺跡 ——

（３ＴＭⅢ）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観(第１図、図版１－１、巻頭図版)

本遺跡は小又川左岸にある低位段丘の縁辺にあり、標高は38～43mで調査区西側が台地から切り離され、北東から南西に延びる繭形の細長い独立丘状を呈している。遺跡は当該地域で調査を行った６遺跡のうち、北から４番目にあり北東に樋向Ⅱ遺跡が南西には大沢Ⅰ遺跡が位置する。調査区は長さ約70m、幅約15mの範囲で周囲の水田から約７mの比高がある。調査区の北側は緩やかに谷筋に落ち込んでおり、西側は森林軌道で掘削され急勾配の掘削面が残っている。さらに、東側は杉の木が林立しており、南側は急斜面で水田まで落ち込んでいる。全体的に、調査区の中央から南側は平坦であるが、北側は北西に傾斜している。

調査区の北東側は遺構・遺物が密集しているのに対して、南西側は全面に深い削平を受けており、僅かな石器と土坑１基を検出したのみである。調査区北側からは、原石採掘跡が５か所検出されたほか、近接・重複しながら石器集中部を５か所検出した。原石を掘り上げ、その場で石器製作を行ったものと考えられる。また、これらの近くで縄文中期後葉の深鉢による土器埋設遺構や、焼土遺構が検出されており、関連した遺構が、本来調査区南西側にも連続していたものと考えられる。また西側では、森林軌道で破壊された遺構の存在が想定される。

第２節　調査の方法(第１図)

発掘調査は、遺構や遺物を計画的に把握するためにグリッド法を採用した。つまり、調査区域の中央部にある工事路線内の中心杭(Ｘ＝5504.279、Ｙ＝－59005.294)を原点ＭＡ50として、国家座標第Ｘ系の座標北を基準に各４m間隔のグリッド杭を設定した。グリッド杭には、東から西へ昇順するアルファベット２文字と、南から北に昇順する算用数字を組み合わせた記号を記入し、４m方眼の南東隅(グリッド杭)をその方眼のグリッド名とした。東西は右文字のＡ～Ｔまでを一順ごとに繰り上げ、左文字を昇順させて表現する。これらを遺構や遺物の記録作業に役立てた。

調査に当たっては、多量の排土が予想されることから、調査区南側の斜面とその下の休耕地を排土置き場とし、ベルトコンベアーを連ねて排土を移動した。遺構の調査は、全面的に表土を除去し、削平の著しい南西調査区について早めに目処をつけた。調査区の東側には、立派にそびえる杉の木が植林されているため、特に深い掘方を伴う北東端では充分な注意を払い、調査の及ばなかった所もある。西側の森林軌道による露頭では、斜面の精査を行い風化した頁岩の岩脈を観察した。

検出した遺構には、発見順に遺構の略記号と番号を付した遺構名を与え、図面や写真・遺物取り上げの整理に役立てた。ただし調査の進行に伴い、遺構の性格が異なって略記号を変更したり、欠番になったものもある。平面図や断面図などは1/20を基本にした。写真撮影は、35㎜カラーリバーサルフィルムや白黒ネガフィルムを使用した。遺物は、遺構名・グリッド名・出土層位・出土年月日などを記載して取り上げた。

第３節　調査の経過

樋向Ⅲ遺跡は、2005年４月と６月に秋田県教育委員会が、当該整備事業に係る路線内で分布調査を実施し確認した遺跡である。これを受けて、同年10月３日～同年10月14日まで秋田県埋蔵文化財センターが確認調査を実施し、2006年７月25日～同年９月11日にかけて発掘調査を実施した。

調査は雑木の除去、ベルトコンベアーの設置などの準備を行い、トレンチの埋土の除去作業を進めながら、北側から本格的な調査を開始した。

７月25日、北側から表土除去を開始したが、表土層に含まれる遺物を採集するのに多くの時間が割かれた。多くは剥片石器であるが、原石も多く見受けられ当初はそれも遺物として採集した。この後もしばらくは、遺物を採集する日々が続いた。

８月22日、調査区の中央東端でＳＲ16を検出した。すぐ近くの北側にＳＮ９を確認したが、竪穴住居とする根拠に乏しく土器埋設遺構として扱った。石器製作や原石採掘跡に関わる年代比定資料として、期待がもたれる。この間南西側の調査区は終了し、北東側の石器集中部の精査を進めてきている。

翌23日、調査区北端側でＳＫＤ６・ＳＫＤ７の大きな落ち込みの確認写真を撮る。これ以降、土層観察用畦を残して覆土の除去作業を行う。ＳＫＤ７の覆土中には、多量の石器が含まれており層位を確かめながら取り上げていった。

９月９日、樋向Ⅰ遺跡と共に、遺跡見学会を開催した。

９月11日、ＳＫＤ６の調査は最後まで残り、写真撮影や観察メモをとり終えた後、杉の木の影響で壁が崩落しないように養生を行って、調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、当該６遺跡について一括しておこなった。出土した多量の遺物は数点の土器を除けばすべて石器である。石材原産地遺跡の性格を具体的に提示するのに、各遺跡ごとに遺構内・遺構外出土石器について、その種類を識別し数量を数え挙げることにした。

石器は定形石器・剥片・石核などに分けられるが、自然石（遺構外は除く）・分割礫なども石器と共にカウントの対象にした。調査中における小さな石器と自然石の分別は、効率化を妨げるため発掘現場では行わず整理の洗浄作業後に行い、５㎜前後の剥片も拾い上げた。また、並行して石器集中部出土石器を中心に接合作業を行った。

遺構の平面図や断面図・エレベーション図などは、組み合わせて第２原図としトレースした。遺跡内から出土した定形石器は極力掲載するが、紙面の制約から石核は、製作技術の理解を深めるため典型的な形態のものを選別して掲載した。

定形石器の実測に当たっては、個々の石器についてその製作過程を観察しながら進めていった。また、一部を委託して実測・トレース作業の迅速化を図った。報告書掲載遺物は、その法量を測定し一覧表にまとめた。整理済みの資料は、報告書掲載ごとにまとめてある。

第２章　調査の記録

本遺跡からは石器集中部５か所、原石採掘跡５か所、土器埋設遺構１基、土坑２基、焼土遺構１基を検出した。調査区西縁は森林軌道として使用していた農道で、南西端側は従来は農道西の丘陵と繋がっていた。また、調査区南西側の半分は0.3m前後の厚さで削平されており、本来存在していた石器集中部が消失している可能性が強い。

第１節　基本土層(第１図)

削平が深く及んでいない調査区北東側で、特に遺構や木の根の撹乱を受けていないような平坦部の地点を選定した。

Ⅰ層　にぶい黄褐色土。表土。粘性弱、締まり弱。

Ⅱ層　にぶい黄褐色土。炭化物を少量含む。粘性弱、締まり中。

Ⅲ層　明黄褐色土。粘性強、締まり強。

第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物

１　石器集中部

ＳＸＱ１(第２図)

調査区北東側のＬＮ53、ＬＯ52・53グリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。西側でＳＫＤ７南でＳＫＤ20と重複しそれらよりも新しい。南にはＳＸＱ２が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸6.3m×短軸2.65mの不整形の範囲を示す。石器の総数は860点で、石核７点･剥片852点･分割礫１点である。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ２(第２・９図、図版２－１)

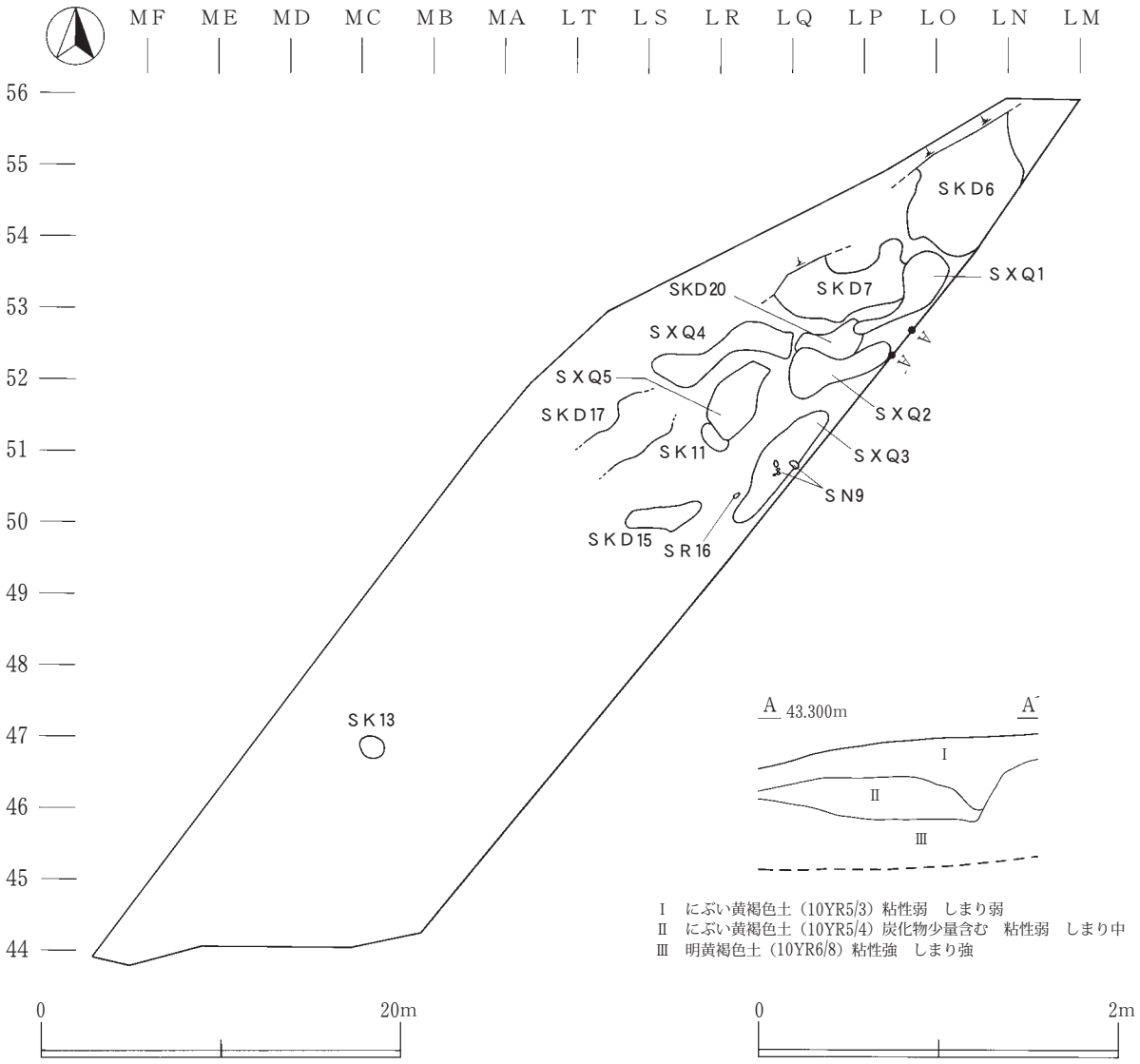
調査区北東側のＬＯ52、ＬＰ51・52グリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。北側でＳＫＤ20と重複しそれよりも新しく、西にはＳＸＱ４が南にはＳＸＱ４が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸5.8m×短軸2.9mの不整形の範囲を示す。石器の総数は980点で、石核14点・剥片966点である。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、石核(１～３)のみである。

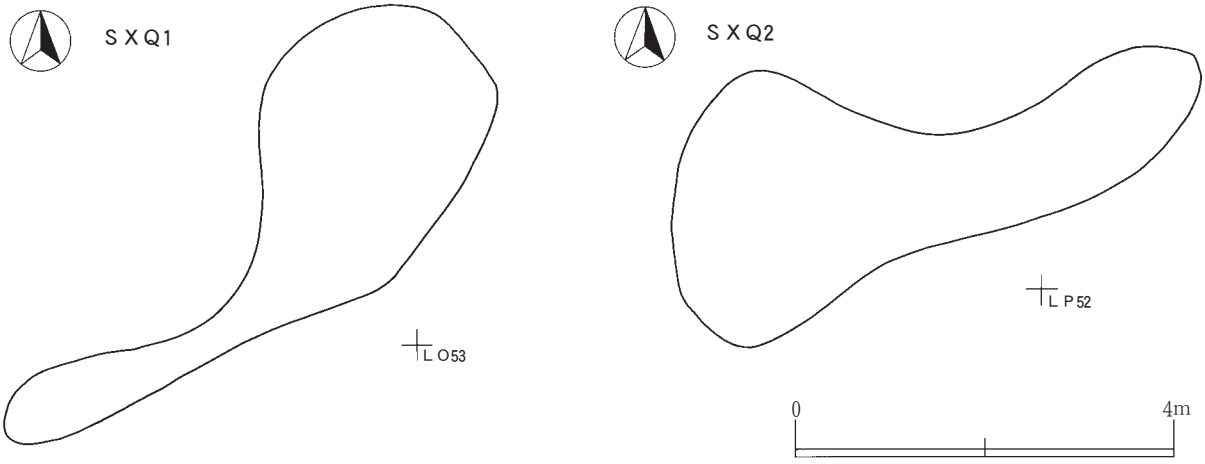
１はａ面上位に最終の剥離面をもち、扁平な自然礫の一側縁に連続して剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ｂに分類する。２はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。３は分厚い両面体状の礫を素材にして、ａ・ｂ両面のほぼ全体に連続して剥片剥離を行う。礫皮面を除く全体が茶褐色に酸化し、礫の芯はガジリの観察から乳白色の風化相を示していることが分かる。両面体縁辺加工石核Ａに分類する。

ＳＸＱ３(第３・９・10図)

調査区中央東よりのＬＰ50・51、ＬＱ50・51グリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。北にＳＸＱ２



第１図　遺構配置図・基本層位



第２図　石器集中部（１）（ＳＸＱ１・２）

が北西にＳＸＱ５が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸7.9m× 短軸2.1mの不整形の範囲を示す。東側境界断面にも石器が観察でき、調査区外にも石器集中部が広がっている。石器の総数は633点で、石槍１点・石錐１点・石匙１点・石篦１点・ノッチ １点・スクレイパー １点・石核２点・剥片625点である。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、石匙（４）・石篦（５）・ノッチ（６）・スクレイパー（７）である。

石匙の ４は、横長剥片を素材に主として表面の下端と右側縁・左側縁上位に調整を施す。つまみ部にはアスファルトが確認できる。石篦の ５は、裏面の膨らみから横長剥片を素材にしていることが分かる。両側縁には丁寧な調整を施す。ノッチの ６は、横長剥片の打点（裏面上端）の対辺側にやや粗い抉り状の調整を施す。スクレイパーの ７は甲高の縦長剥片であり、表面左側縁の中央から下方にかけて細かな調整を施す。

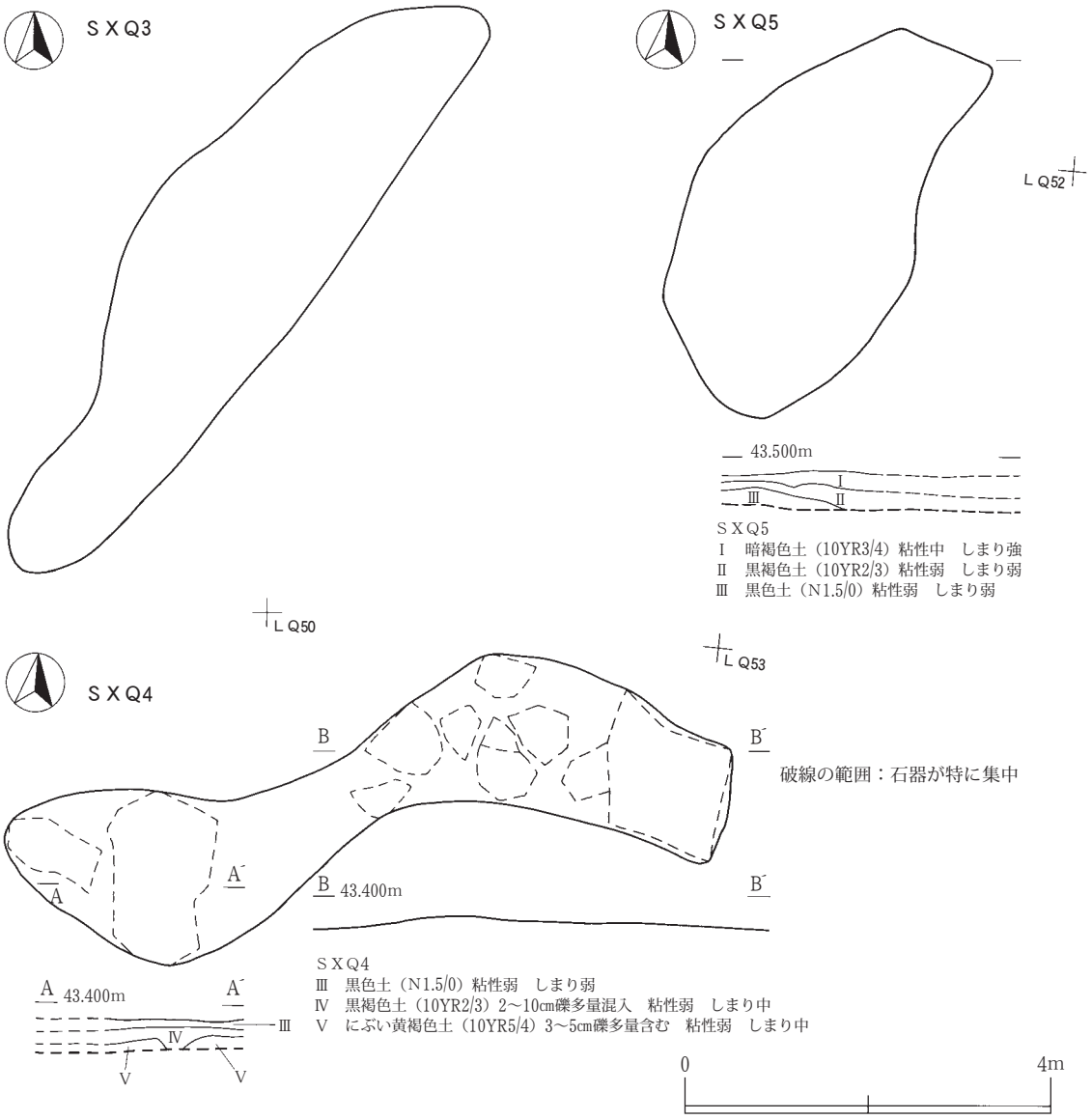
ＳＸＱ４（ 第３・10 ～ 12図、図版２－２・３）

調査区中央やや北東のＬＱ・ＬＲ52グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。南にＳＸＱ５が南西にＳＫＤ17が隣接している。石器の分布状態は長軸 ８ｍ×短軸 ３ｍの緩いＳ字状の範囲を示し、垂直分布では0.32mの高低差がある。石器の総数は5,743点で、石槍１点・両面加工石器１点・スクレイパー ３点・二次加工ある剥片 １点・石核88点・剥片5,593点・分割礫55点・剥離原石 １点である。他に原石 ４点が出土した。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、スクレイパー（８・９）・両面加工石器（10）・石核（11 ～19）である。

スクレイパーの ８は、横長剥片を素材に縁辺に粗い剥離を行った後、表面下端に細かな調整を施す。裏面には主要剥離面と考えられる下端を除くと、連続的に剥片剥離を行っている。表面に礫皮面を多く残している点からも、凹面状石核に近い要素をもつ。 ９は横長剥片を素材に、表面右側縁に細やかな調整を施す。両面加工石器の10は縁辺に粗い調整を全面的に施し、二等辺三角形状を呈する。加工途中で折損している。表面上端の礫皮面と同下方の風化相から、表面は自然礫の礫皮面側と判断できる。

石核の11は分厚い両面体状の礫を素材にして、ａ・ｂ両面の縁辺に連続した剥片剥離を行う。分割礫の可能性があるので、両面体状石核には含めないでおく。12はｂ面中央に礫面直下の風化相が認められることから、両面体状の礫を素材にして、ａ・ｂ両面のほぼ全体に剥片剥離を行う。凹面状石核Ａに分類する。13はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側にａ面上端を除いて剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。14はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に礫皮面除去のための剥離を施す（ｂ面上方）。凹面状石核Ｂに分類する。15は横長剥片を素材にしたと考えられ、幅の狭い縦長剥片を僅かに剥離している。16はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。17は断面が三角形の舟底状の素材に、主としてａ・ｃ両面で連続した剥片剥離を行う。18は断面が三角形の舟底状の素材を用いて、ａ・ｂ両面に連続して剥片剥離を行う。ａ面が節理面の分割面と考えられる。19はａ・ｂ面の各々で、それぞれ連続して剥片剥離を行う。



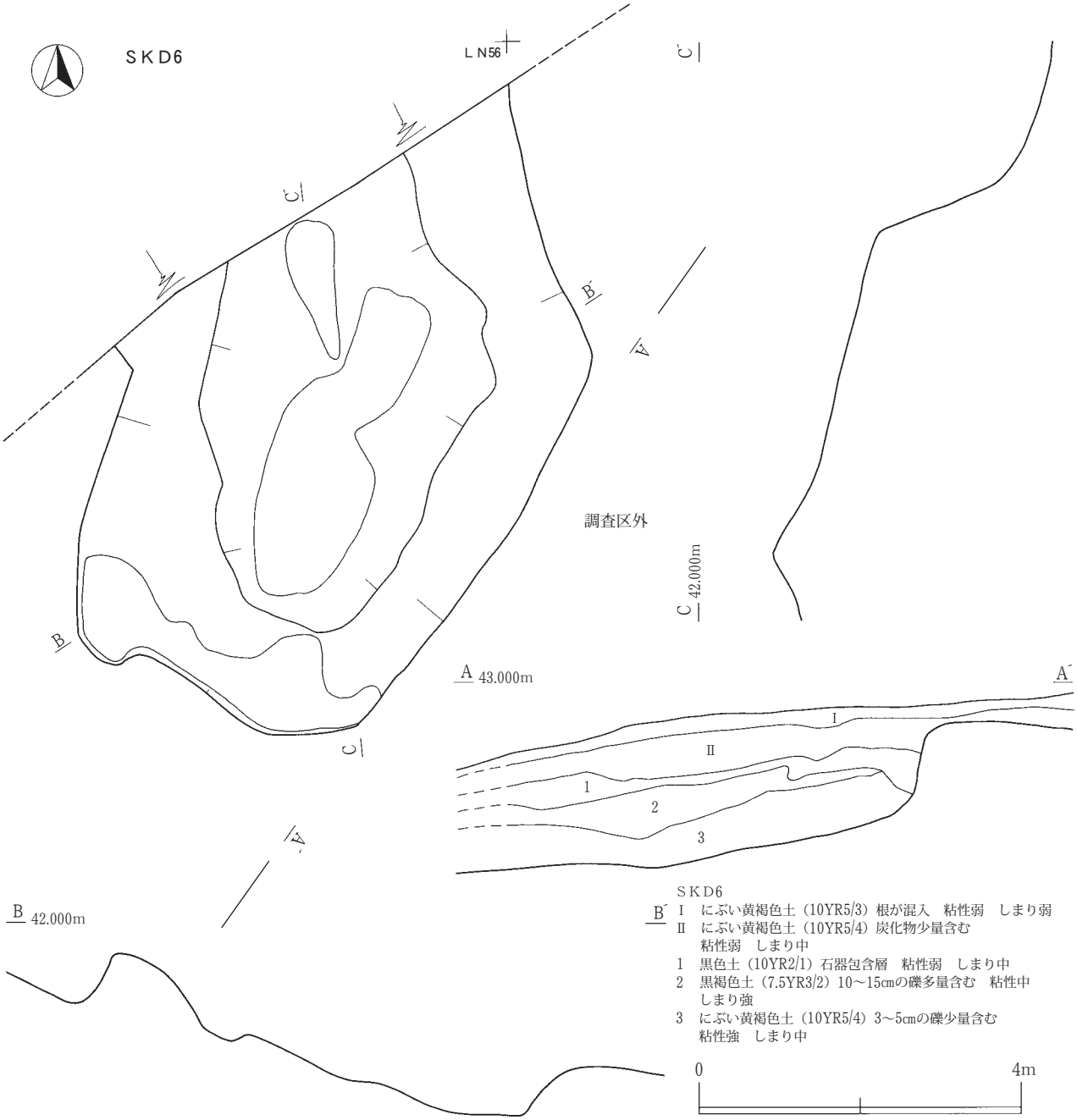
第３図　石器集中部（２）（ＳＸＱ３・４・５）

ＳＸＱ５(第３・12図)

調査区中央やや北東よりのＬＱ51・52、ＬＲ51グリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。南西でＳＫ11と重複しそれより新しい。北にＳＸＱ４が南東にＳＸＱ３が隣接している。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸4.7m×短軸2.7mの不整形の範囲を示す。石器の総数は1,055点で、二次加工ある剥片１点・石核19点・剥片1,035点である。他に原石が４点出土した。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、石核(20)のみである。

石核20はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前にａ面側からｂ面側に剥離を施す。ｂ面右側縁に礫皮面がある。凹面状石核Ｂに分類する。



第４図　原石採掘跡（１）（ＳＫＤ６）

２　原石採掘跡

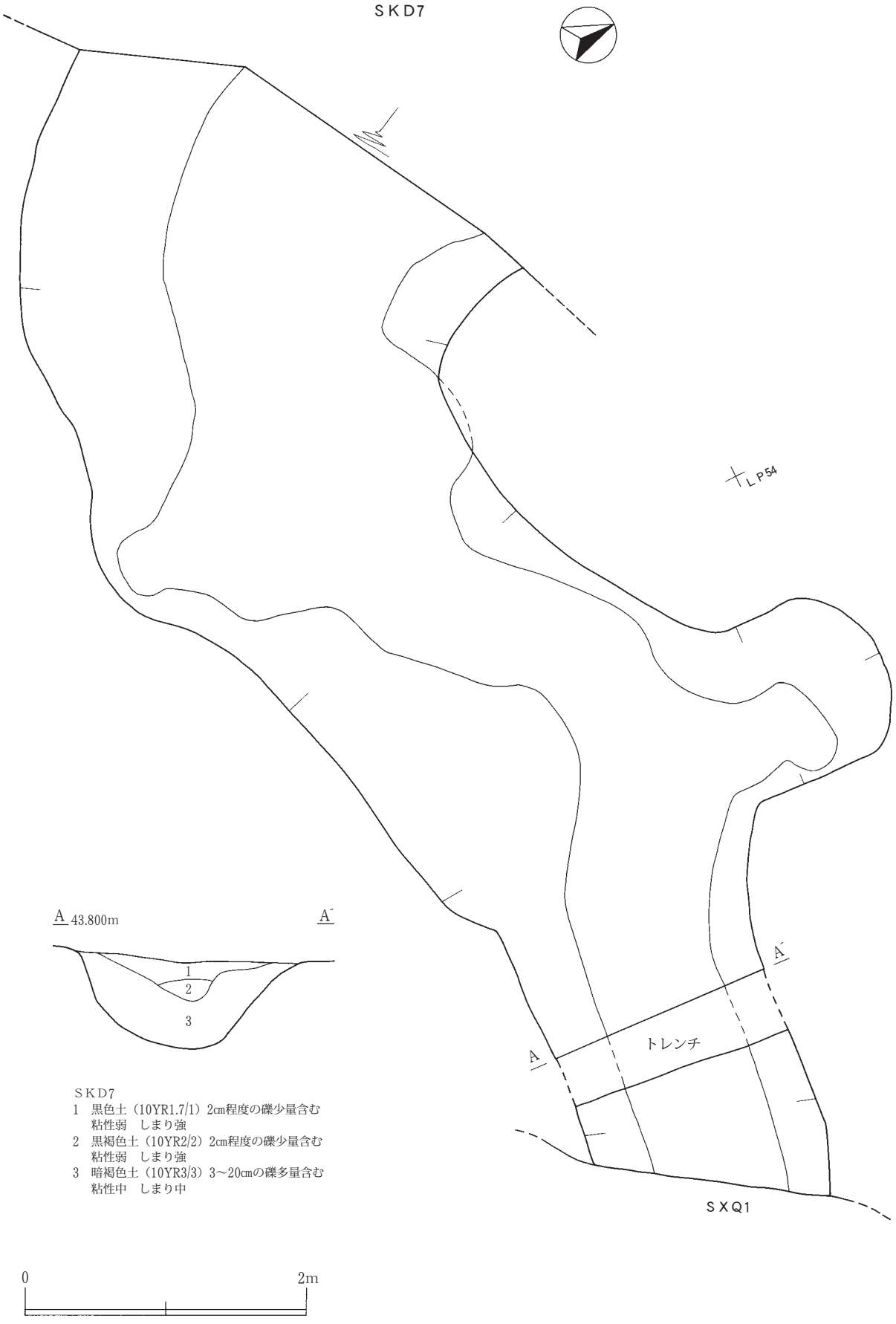
ＳＫＤ６（第４・13～16図、図版１－２・３－１）

調査区北東端のＬＭ54・55、ＬＮ53～55、ＬＯ54・55グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。調査区北西は森林軌道によって削平され、南西にはＳＸＱ１とＳＫＤ７が隣接している。平面形は現存長軸8.8m×短軸5.28mの不整形を示し、深さは２mである。覆土からは多量の石器が出土した。出土した石器の総数は6,161点で、石槍１点・石匙１点・石篦１点・スクレイパー５点・二次加工ある剥片５点・石核172点・剥片5,969点・分割礫３点・剥離原石４点である。他に原石が４点出土した。原石採掘跡と考えられる。

掲載した石器は、石槍(21)・石匙(22)・石篦(23)・スクレイパー(24 ～ 27)・石核(28 ～ 38)である。

石槍の21は、横長剥片の素材に丁寧な剥離を行っている。特に表面左側縁では幅の狭い剥離を中心部まで及ぼし、器面を全体に薄く滑らかに仕上げる意図がある。石槍の製作過程で折損し、製作を断念したと考えられる。石匙の22は、横長の剥片を素材にしている。つまみ部と括れ部の両面には調整を施すが、これ以外の部分では表面にのみ調整を施す。石篦の23は横長剥片を素材にしている。表面における剥離が主体で同下端には細かな調整を施すが、裏面左側縁にはそれより古い剥離が及ぶ。スクレイパーの24は、縦長剥片の一側縁に細かな調整を施している。刃部には 4つの浅い窪みが認められる。25は横長剥片を素材にして、表面右側縁に主体的な調整を施す。裏面には魚の尾と観察される化石化した痕跡が認められる。26は横長剥片を素材にして、その先端と両側縁に丁寧な調整を施す。裏面は左側縁下方に調整を施す。27は横長剥片を素材にして、表面右側縁から左側縁にかけて調整を施すが、裏面には認められない。

石核の28はｂ面の主要剥離面から横長の剥片を素材にして、ａ・ｂ両面に連続した剥片剥離を行う。29は分割礫を素材にしたと考えられ、ｂ面に自然面が多くあり、ａ・ｂ両面で連続して剥片剥離を行う。凹面状石核に近い。30は薄く扁平な自然礫を素材にして、ａ・ｂ両面の上端で連続した剥片剥離を行うが、ａ面右上で折損したと考えられる。ｂ面右上の観察から、その後同右側縁で連続した剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ｂに分類した。31は最終の剥離面をｄ面にもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に連続した剥離を施す。後者で礫皮面を剥離し、前者では目的剥片を剥離したと考えられる。凹面状石核Ｂに分類する。32は両面体状の礫の一先端側を中心に、連続した剥片剥離を行う。ｂ面右側縁に平坦面を形成していることから、これを打点面とする連続した剥片剥離の石核(舟底状石核)ともみられる。ここでは両面体縁辺加工石核Ｂに分類しておく。33はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に剥離を施す。両面体状の扁平な自然礫を素材にしているので、両面体縁辺加工石核Ａに分類する。34はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続して剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に連続的な剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。35はａ面側だけに連続して剥片剥離を行う。自然面は、滑らかで光沢があり風化の厚みは少ない。凹面状石核Ａに分類する。36は三面体状の自然礫を素材にして、対面する分厚い両面(ａ・ｂ面)で全面的に連続した剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核に近い。37はａ面左側縁で連続して剥片剥離を行ってから、同面中央で縦長の剥片剥離を行う。左側縁の剥離以前に、ａ面側からｂ面側に剥離を行っている。38はａ面の上下が平坦な多面体状の石核で、上下を打点にする縦長の剥片剥離を連続して行う。下端のｅ面では横長剥片を剥離している。



第５図　原石採掘跡（２）（ＳＫＤ７）

ＳＫＤ７(第５・17・18図、図版３－２・３)

調査区北東側のＬＯ・ＬＰ・ＬＱ53グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。北西は軌道によって削平され、東はＳＸＱ１と重複するがそれより古い。南にＳＸＱ２やＳＸＱ４が隣接している。平面形は現存長軸9.6m×短軸2.2mの不整形を示し、深さは0.68mである。出土した石器の総数は1,038点で、石槍１点・刺突具１点・二次加工ある剥片２点・石核31点・剥片1,000点・分割礫２点・剥離原石１点である。他に原石が２点出土した。原石採掘跡と考えられる。

掲載した石器は、石槍(39)・刺突具(40)・石核(41～45)である。

石槍の39は基部側がやや丸みを帯び、尖端が折損したと考えられる。全面に調整剥離を施している。40は表面右上位に主要剥離面が観察され、横長剥片を素材に利用したと考えられる。尖端を三角形断面に仕上げており、表面右尖端側には細かく丁寧な調整を施す。

石核の41は分割礫を素材にしたと考えられ、ａ面の左右に節理面があり、中央で幅の狭い縦長剥片を剥離している。42はａ面上位が平坦気味で、三面体状の柱状を呈している。ａ面では中央に縦長剥離、左右に打点を横方向にもつ横長剥離を施す。43はａ面中央下位とｂ面左上位に最終的な剥離面をもち、ａ面で連続して剥片剥離を行う。これ以前にａ面側からｂ面側に剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。44は分厚い両面体状礫を素材にして、ａ・ｂ両面の全体に連続的な剥片剥離を行う。両面体縁辺加工石核Ａに分類する。45はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続的に剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に連続した剥片剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。

ＳＫＤ15(第６図、図版４－１)

調査区中央のＬＲ・ＬＳ50グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。北東にＳＸＱ３が北西にＳＫＤ17が隣接している。平面形は長軸4.3m×短軸1.6mの不整形を示し、深さは0.38mである。出土した石器は53点で、剥片が53点出土した。原石採掘跡と考えられる。

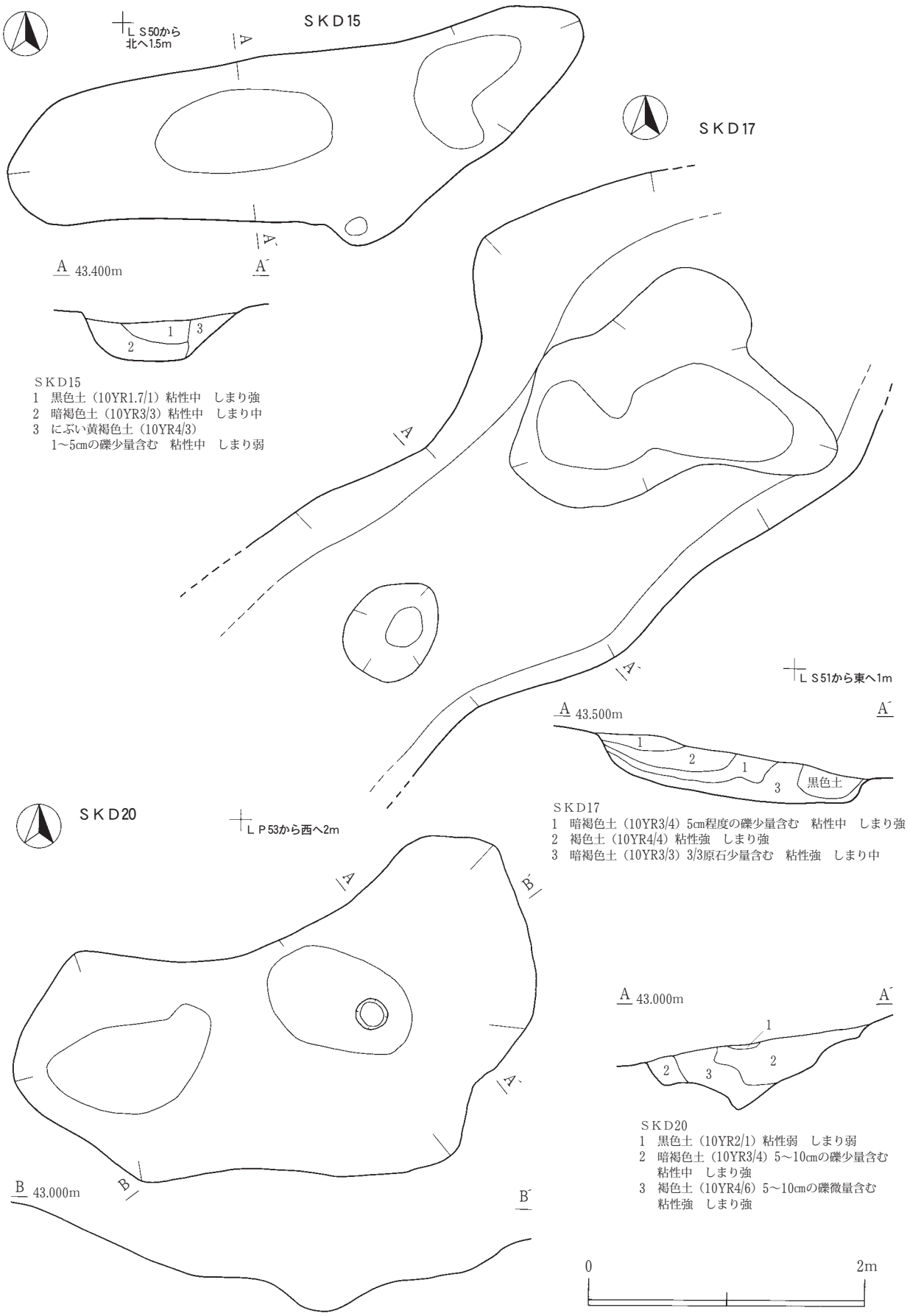
ＳＫＤ17(第６・18～21図、図版４－２・３)

調査区中央のＬＲ51、ＬＳ50・51グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。北東にはＳＸＱ４・ＳＸＱ５が隣接している。北東と南西側は撹乱で不明瞭である。平面形は現存長軸4.3m×短軸3.6mの不整形を示し、深さは0.54mである。出土した石器の総数は2,203点で、両面加工石器１点・石槍１点・石匙１点・スクレイパー３点・ノッチ１点・二次加工ある剥片１点・石核84点・剥片2,097点・分割礫14点である。他に原石２点が出土した。原石採掘跡と考えられる。

掲載した石器は、両面加工石器(46)・石槍(47)・石匙(48)・スクレイパー(49・50)・ノッチ(51)・石核(52～57)である。

両面加工石器の46は、両面に丁寧な調整剥離を全面に施すが、先端付近で折損している。石槍の47は石槍製作過程で折損したもので、裏面が平坦で表面が甲高な素材を用いた一例である。表面下方には調整剥離を施し、後に上位の甲高部分を除去しようとしたと考えられる。石匙の48は、横長剥片の両端を狭めて撥状に製作している。主として表面の両側縁と底辺に細かな調整を施す。全体にトロトロした光沢があり、ポリッシュの痕跡と考えられる。スクレイパーの49は、縦長剥片の表面左上位の側縁に細かな調整を施す。裏面の主要剥離面は節理面になっている。50は、横長剥片の表面左側縁に細かく長い調整を施す。ノッチの51は、縦長剥片の裏面右側縁に窪み状の丁寧な剥離を施す。

石核の52はａ面に最終的な剥離面をもち、両面体状の礫の一側縁に連続して剥片剥離を行う。両



第６図　原石採掘跡（３）（ＳＫＤ 15 ・ 17 ・ 20）

面体縁辺加工石核Ｂに分類する。53はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続的に剥片剥離を行う。これ以前に、ａ面側からｂ面側に連続した剥離を施す。凹面状石核Ｂに分類する。54はａ面に最終的な剥離面をもち、同面で分割面(ｄ面)からの連続的な剥片剥離を行う。舟底状石核Ａに分類する。55はａ面とｄ面に最終の剥離をもち、ａ面では連続した剥片剥離を行う。ｄ面は分割面であり、舟底状石核Ｂに分類する。56はａ面に最終の剥離面をもち、同面で連続的に剥片剥離を行う。ａ面右端に主要剥離面が観察できる。凹面状石核Ａに分類する。57は、多面(７面以上)体的な球体状の素材に剥片剥離を行う。

ＳＫＤ20(第６・21図、図版４－3)

調査区北東側のＬＰ52グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。北東はＳＸＱ１、南はＳＸＱ２と重複し、それらよりも古い。平面形は長軸3.85m×短軸2.35mの不整形を示し、深さは0.72mである。出土した石器の総数は1,683点で、両面加工石器３点・石槍１点・石核13点・剥片1,666点である。原石採掘跡と考えられる。

掲載した石器は、両面加工石器(58 ～ 60)・石槍(61)である。

両面加工石器の58は表面が甲高、裏面が平坦で、尖端を丸く仕上げている。裏面下端に細かな調整を施す。59は表面の右側縁中央を除いて、全体に調整を施し楕円形に整えている。表面上位には自然面がある。60は先端が折損したものと考えられ、表面の右側縁と裏面の左側縁に丁寧な調整を施す。石槍の61は横長剥片を素材にして、基部と両側縁に丁寧な調整を施す。表面の両側縁の剥離は幅が狭く細長い。折損している。

３　土器埋設遺構

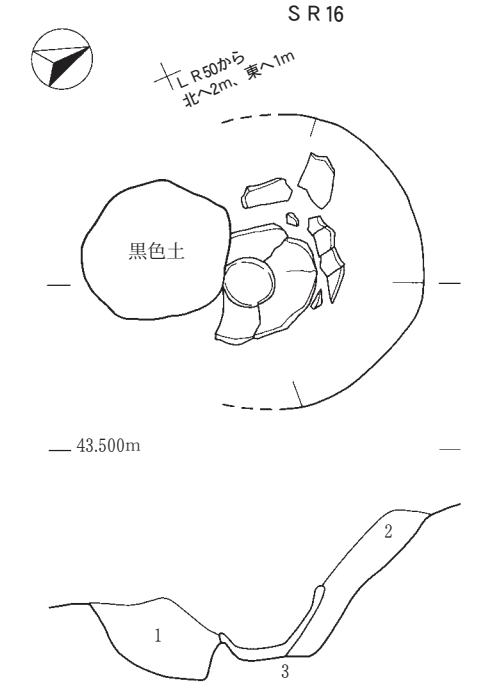
ＳＲ16(第７・８図、図版５－１)

調査区中央やや東のＬＱ50グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。東にはＳＸＱ３が西にはＳＫＤ15が隣接している。長軸0.5m×短軸0.4mの掘方に深鉢を埋設し炉として使用していた。掘方の底面にはＤ４が据えられ、その上の方にＤ１・Ｄ３・Ｄ５が存在した。確認時のものがＤ２・Ｄ６で上位もしくはその近辺で出土した。

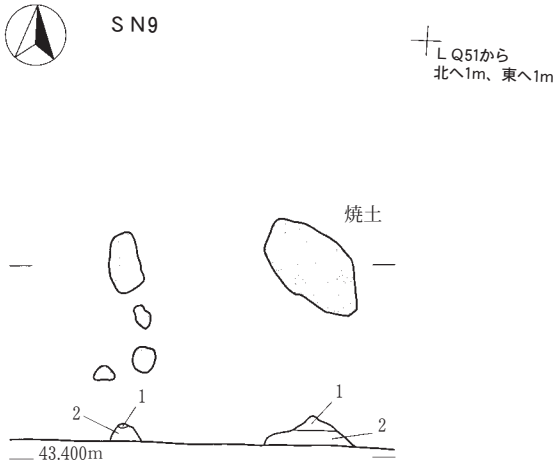
掲載した土器は深鉢で、Ｄ１・Ｄ５は胴部から頸部、Ｄ２・Ｄ３は胴部、Ｄ４・Ｄ６は底部である。Ｄ１は胴部と頸部の境に平行沈線があり、胴部に斜縄文を施し沈線で文様を描いている。沈線で描く逆「U」字状の間に、平行沈線と半円状の円形刺突文で囲われた小さな円形文がある。Ｄ２は斜縄文に縦位の沈線を施す。Ｄ３は上位端部に､胴部と頸部の境を成す僅かな沈線が確認できる。そこから、斜縄文の上に逆「U」字状の沈線文を施す。Ｄ４は底部付近の無文部の上に斜縄文を施す。Ｄ５は胴部と頸部の境に平行沈線があり、胴部に斜縄文を施す。平行沈線の上下には円形刺突文を施す。Ｄ６は底部付近に斜縄文を施し、胎土には僅かに繊維を含む。Ｄ１～Ｄ４は文様構成が類似しＤ５は別個体と考えられるが縄文時代中期後葉の大木９式土器である。Ｄ６は前期の資料と考えられ、同遺構に近接しⅣ層上位で出土した。

４　土坑

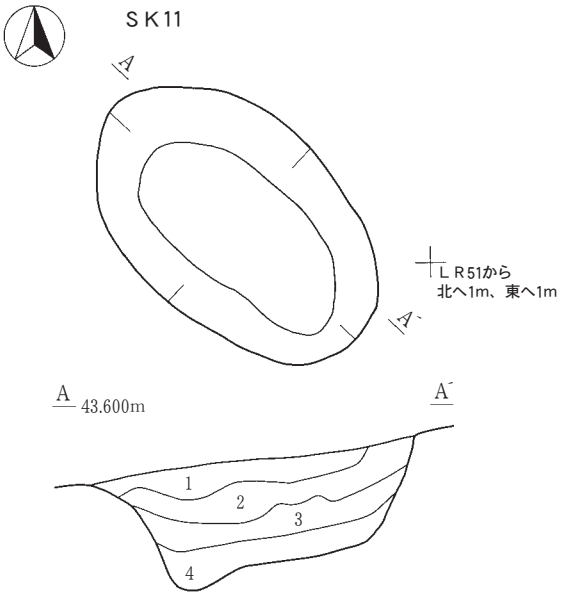
ＳＫ11(第７図、図版５－２)



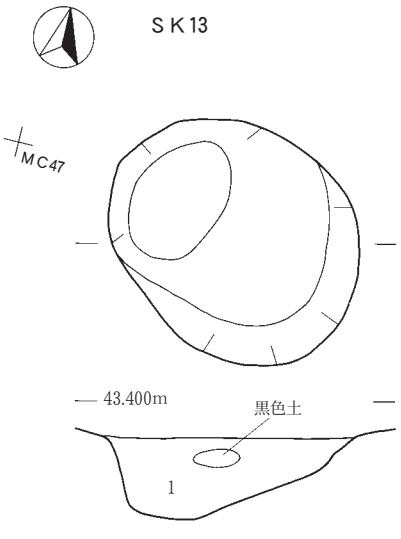
ＳＲ16
1　黒褐色土（10YR2/2）2と3を少量含む　粘性弱　しまり中
2　暗褐色土（10YR3/3）炭化物微量含む　粘性中　しまり強
3　黄褐色土（10YR5/6）赤褐色粒少量含む　粘性中　しまり強



ＳＮ9
1　明赤褐色土（2.5YR5/8）粘性弱　しまり中
2　にぶい赤褐色土（5YR4/3）粘性弱　しまり中

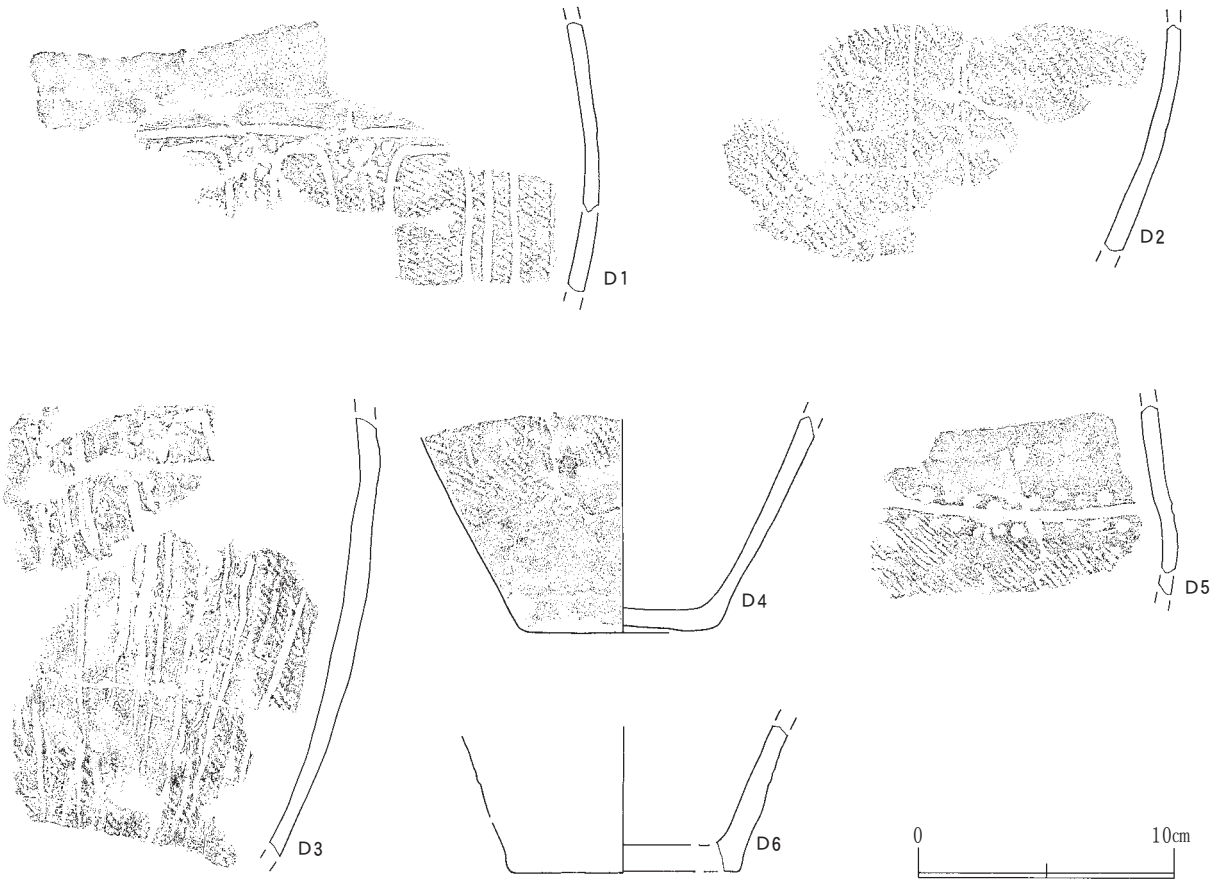


ＳＫ11
1　黒褐色土（10YR3/2）粘性弱　しまり強
2　暗褐色土（10YR3/3）炭化物少量含む　粘性中
　しまり強
3　暗褐色土（10YR3/4）炭化物微量含む　粘性中
　しまり強
4　褐色土（10YR4/6）粘性強　しまり強



ＳＫ13
1　灰黄褐色土（10YR4/2）
　黒褐色土（10YR2/2）粒少量・大礫含む
　粘性強　しまり強

第７図　土器埋設遺構・焼土遺構・土坑（ＳＲ16、ＳＮ9、ＳＫ11・13）



第８図　遺構内出土土器

調査区中央のＬＱ・ＬＲ51グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。北東でＳＸＱ５と重複しそれよりも古い。北にＳＸＱ４が南東にＳＸＱ３が隣接している。平面形は長軸1.78m×短軸1.1mの楕円形を示し、深さは0.82mである。

ＳＫ13（第７・22図、図版５－３）

調査区南西側のＭＢ46・47グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。平面形は長軸1.44m× 短軸1.18mの楕円形を示し、深さは0.44mである。出土した石器の総数は502点で、石鏃１点・石槍１点・スクレイパー ２点・半円状扁平打製石器１点・石核15点・剥片472点・分割礫10点である。

掲載した石器には、石鏃(62)・石槍(63)・スクレイパー(64・65)・石核(66)・半円状扁平打製石器(67)がある。

石鏃の62は裏面の膨らみから、横長剥片を素材にしたと考えられる。裏面は全体に細かな調整を施す。基部は表面にも細かな剥離を施す。石槍の63は表面は甲高で裏面は平坦である。裏面には両側縁から薄い剥片を剥離している。表面では上下２つの折損面から小さな剥片を得ている。石槍の製作途中で折損し、その後石核として利用したものと考えられる。スクレイパーの64は裏面に平坦面をもつ素材を利用したもので、表面に窪み状の右側縁に直線的な剥離を施している。65は横長の剥片を利用したと考えられ、両面に全体的な加工を施し、その後表面左上位に細かく丁寧な調整を施す。

石核の66は、ａ面上位の平坦面を打面にして縦長剥片を連続的に得ている。同面には下端からの剥離も僅かに見られる。

半円状扁平打製石器の67は、扁平な楕円状の自然礫を素材にして、表面の上下側縁と左右側縁に

粗い剥離を施す。下端は直線的で擦り面に利用しており、左右の側縁は僅かに窪む傾向を示す。

５　焼土遺構

ＳＮ９（第７図）

調査区中央やや東のＬＰ・ＬＱ50グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。削平されたことにより疎らな在り方を示す。焼土は長軸1.38m×短軸0.86mの範囲で確認できた。

第３節　遺構外出土遺物（第23・24図）

出土した石器の総数は14,035点で、石鏃３点・石槍６点・石匙２点・石錐３点・スクレイパー ５点・ノッチ １点・二次加工ある剥片１点・石核209点・剥片13,803点・剥離原石２点である。

掲載した石器は、石鏃（68 ～ 70）・石槍（71 ～ 76）・石匙（77・78）・石錐（79 ～ 81）・スクレイパー（82 ～ 86）である。

石鏃の68は基部が凹基式で、裏面の主要剥離面から横長剥片を素材にしている。両面に細かく丁寧な調整を施す。69は基部が細長い凸基式で、尖端が鋭く尖る。裏面に主要剥離面を残し、両面に細かく丁寧な剥離を施す。70は凸基式の石鏃で、両面の中央には縦に稜が形成され、特に裏面には丁寧な調整を全面に施す。石槍の71は基部に舌部をもつ石槍と考えられ、基部側の表面左と裏面左に抉り状の剥離を施す。両側縁には粗い調整を施す。72は表面に自然面、裏面の節理面上位に風化相が一部認められることから、両面体状礫を素材にしたと考えられる。表面では粗く裏面では丁寧で薄い剥片を剥離していたが、製作途中で折損した。この後折損面から、表面下部の甲高部分を除去するため剥離を施す。73は両面に粗い調整を施して、その後折損した。両面に礫皮面直下の風化相が認められるので、両面体状の自然礫を素材にしたと考えられる。74は、表面左に平坦な自然面があり裏面尖端に小さく節理面が認められることから、分割礫もしくは剥片を素材にしたと考えられる。両面に薄い剥片剥離を施す。中央付近で挟雑物の影響で折損している。75は縦長剥片の素材と考えられ、表面の両側縁に丁寧な調整を施す。折損後表面右側縁に窪み状の剥離を施して、スクレイパーとして使用した可能性がある。76は石槍の製作途中で折損したものと考えられる。表裏両面の右側縁に剥離を施す。両面上端には礫皮面が残る。石匙の77は横長の薄い剥片を素材にして、表面右側縁に細かく丁寧な調整を施す。78は横長剥片を素材にして、台形状の上辺側につまみを作っている。表面の側縁と裏面の左側縁に細かな調整を施す。石錐の79は表面左側縁と裏面両側縁に細かい剥離を施し、刃部の両面にも粗い剥離が認められる。製作途中で中央から折損している。80は横長剥片を素材にして、裏面下端を除く全面に剥離を施す。刃部表面には縦長の薄い調整剥離を丁寧に行う。81は刃部に粗い剥離を施し、製作途中で折損したものと考えられる。スクレイパーの82は、表面左側縁に調整剥離を施し、その後刃部が折損したと考えられる。83は横長剥片を素材にして、打点の対辺に丁寧な調整を施す。84は縦長剥片の裏面左側縁に細かく丁寧な調整を施し、後に折損している。85は縦長剥片を素材にして、主として表面左側縁に細かく丁寧な調整を施す。86は横長剥片を素材にして、表面先端部から右側縁にかけて両面に細かく丁寧な調整を施す。

第１表　石器観察表（１）

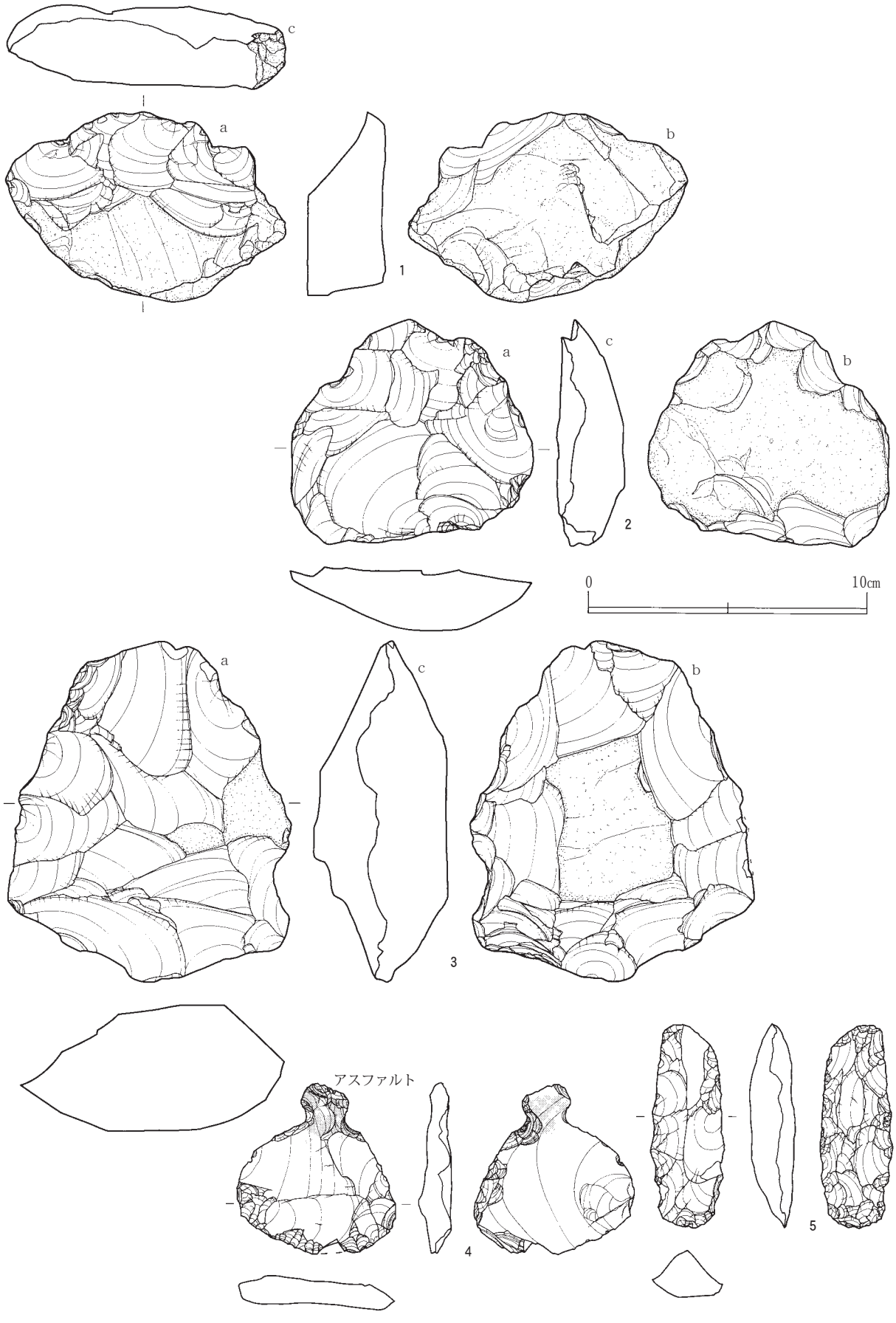
遺物番号	挿図番号	出土位置	層 位	器　種	石 質	長さ・幅・厚さ(㎜)	重量(g)	備　　考
1	9	ＳＸＱ２	Ⅱ	石核	頁岩	100 ・ 69 ・ 30	202.1	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
2	9	ＳＸＱ２	Ⅱ	石核	頁岩	87 ・ 82 ・ 25	148.6	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
3	9	ＳＸＱ２	Ⅳ	石核	頁岩	123 ・ 102 ・ 48	508.5	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ａ
4	9	ＳＸＱ３	Ⅰ	石匙	頁岩	61 ・ 57 ・ 12	30.8	アスファルト付着
5	9	ＳＸＱ３	Ⅰ	石篦	頁岩	73 ・ 27 ・ 17	30.7	
6	10	ＳＸＱ３	Ⅳ	ノッチ	頁岩	49 ・ 28 ・ 11	8.6	
7	10	ＳＸＱ３	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	55 ・ 29 ・ 21	30.5	
8	10	ＳＸＱ４	Ⅲ	スクレイパー	頁岩	73 ・ 52 ・ 31	111.6	
9	10	ＳＸＱ４	Ⅱ	スクレイパー	頁岩	83 ・ 55 ・ 22	90.8	
10	10	ＳＸＱ４	Ⅲ	両面加工石器	頁岩	122 ・ 60 ・ 18	118.4	
11	10	ＳＸＱ４	Ⅱ	石核	頁岩	79 ・ 78 ・ 58	378.0	ａ～ｃ面
12	10	ＳＸＱ４	Ⅲ	石核	頁岩	69 ・ 91 ・ 32	126.8	ａ～ｄ面　凹面状石核Ａ
13	11	ＳＸＱ４	Ⅲ	石核	頁岩	102 ・ 77 ・ 32	263.6	ａ～ｄ面　凹面状石核Ｂ
14	11	ＳＸＱ４	Ⅲ	石核	頁岩	94 ・ 92 ・ 33	264.2	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
15	11	ＳＸＱ４	Ⅲ	石核	頁岩	70 ・ 60 ・ 24	93.9	ａ～ｃ面
16	11	ＳＸＱ４	Ⅲ	石核	頁岩	86 ・ 60 ・ 23	98.4	ａ～ｄ面　凹面状石核Ｂ
17	12	ＳＸＱ４	Ⅲ	石核	頁岩	102 ・ 55 ・ 50	241.7	ａ～ｄ面
18	12	ＳＸＱ４	Ⅲ	石核	頁岩	73 ・ 34 ・ 30	50.4	ａ～ｄ面
19	12	ＳＸＱ４	Ⅱ	石核	頁岩	103 ・ 71 ・ 25	136.9	ａ～ｄ面
20	12	ＳＸＱ５	Ⅳ	石核	頁岩	94 ・ 64 ・ 25	167.3	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
21	13	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石槍	頁岩	88 ・ 63 ・ 22	88.2	
22	13	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石匙	頁岩	87 ・ 32 ・ 17	40.7	
23	13	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石篦	頁岩	122 ・ 62 ・ 25	154.8	
24	13	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	スクレイパー	頁岩	98 ・ 52 ・ 18	61.5	
25	13	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	スクレイパー	頁岩	73 ・ 62 ・ 20	94.1	
26	13	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	スクレイパー	頁岩	76 ・ 43 ・ 16	48.2	
27	13	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	スクレイパー	頁岩	77 ・ 60 ・ 17	53.0	
28	14	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	108 ・ 56 ・ 34	231.6	ａ～ｃ面
29	14	ＳＫＤ６	Ⅳ	石核	頁岩	97 ・ 52 ・ 50	199.1	ａ～ｄ面　凹面状石核に近い
30	14	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	116 ・ 75 ・ 33	238.3	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
31	14	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	68 ・ 64 ・ 43	158.5	ａ～ｄ面　凹面状石核Ｂ
32	15	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	105 ・ 69 ・ 32	231.6	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
33	15	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	128 ・ 71 ・ 32	266.5	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ａ
34	15	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	117 ・ 103 ・ 43	549.2	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
35	15	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	77 ・ 66 ・ 41	264.9	ａ～ｃ面　凹面状石核Ａ
36	16	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	105 ・ 90 ・ 74	591.0	ａ～ｄ面　両面体縁辺加工石核に近い
37	16	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	87 ・ 85 ・ 48	351.0	ａ～ｃ面
38	16	ＳＫＤ６	(Ⅳ)	石核	頁岩	91 ・ 86 ・ 68	644.4	ａ～ｅ面
39	17	ＳＫＤ７	(Ⅳ)	石槍	頁岩	124 ・ 37 ・ 21	75.5	
40	17	ＳＫＤ７	(Ⅳ)	刺突具	頁岩	104 ・ 36 ・ 28	79.9	
41	17	ＳＫＤ７	(Ⅳ)	石核	頁岩	98 ・ 47 ・ 30	137.9	ａ～ｄ面
42	17	ＳＫＤ７	(Ⅳ)	石核	頁岩	87 ・ 63 ・ 53	301.8	ａ～ｅ面
43	18	ＳＫＤ７	(Ⅳ)	石核	頁岩	112 ・ 65 ・ 37	186.6	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ

（　）内は遺構確認層

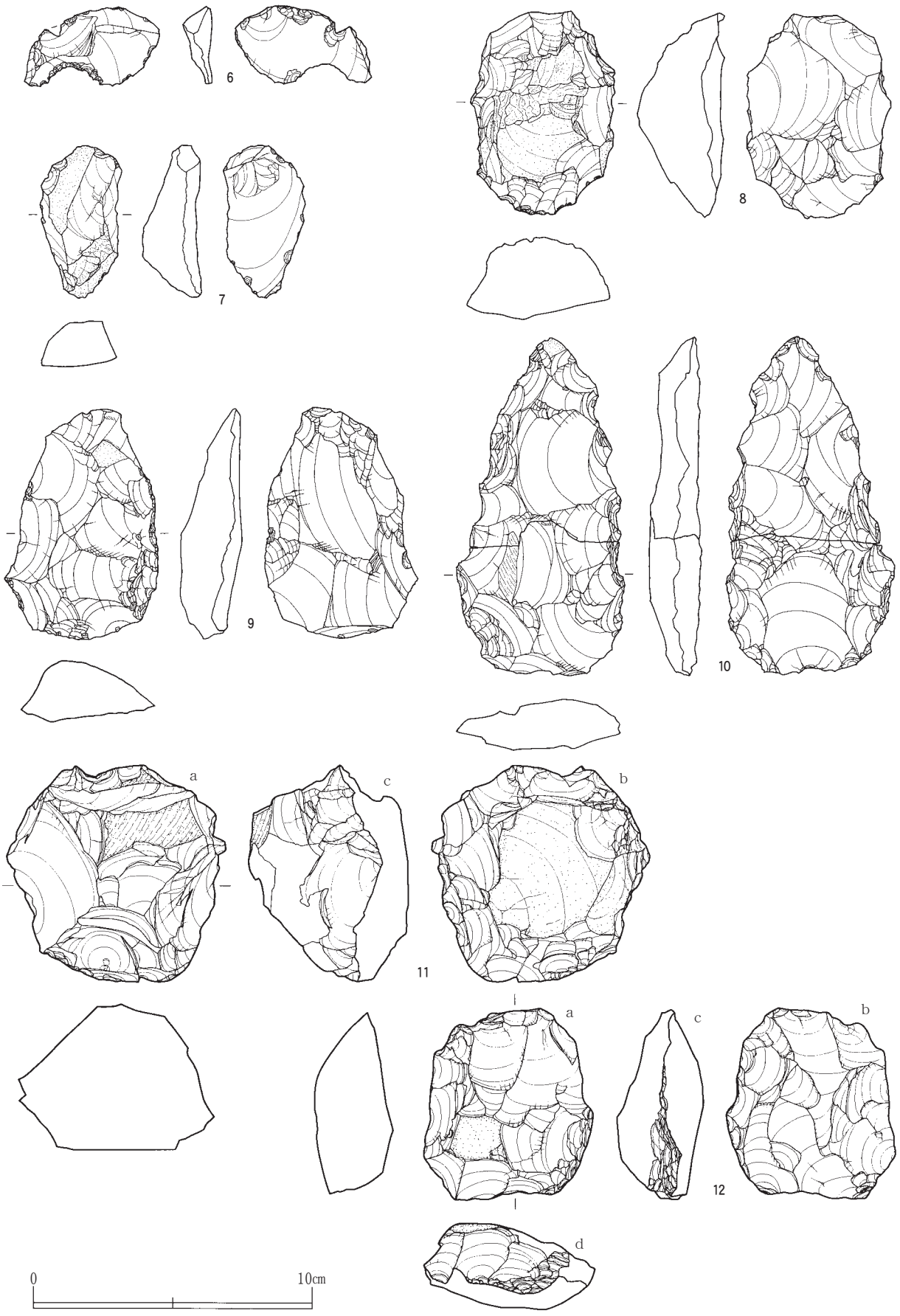
第２表　石器観察表（２）

遺物番号	挿図番号	出土位置	層 位	器　種	石 質	長さ・幅・厚さ(㎜)	重量(g)	備　　考
44	18	ＳＫＤ７	(Ⅳ)	石核	頁岩	85 ・ 71 ・ 48	199.1	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ａ
45	18	ＳＫＤ７	(Ⅳ)	石核	頁岩	80 ・ 71 ・ 25	146.8	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
46	18	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	両面加工石器	頁岩	60 ・ 39 ・ 17	34.0	
47	18	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	石槍	頁岩	81 ・ 40 ・ 30	80.7	
48	19	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	石匙	頁岩	85 ・ 39 ・ 13	30.2	
49	19	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	スクレイパー	頁岩	86 ・ 61 ・ 23	122.2	
50	19	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	スクレイパー	頁岩	87 ・ 73 ・ 14	96.4	
51	19	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	ノッチ	頁岩	79 ・ 53 ・ 26	78.0	
52	19	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	石核	頁岩	106 ・ 78 ・ 40	396.1	ａ～ｃ面　両面体縁辺加工石核Ｂ
53	19	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	石核	頁岩	88 ・ 75 ・ 44	265.6	ａ～ｃ面　凹面状石核Ｂ
54	20	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	石核	頁岩	130 ・ 59 ・ 35	257.4	ａ～ｄ面　舟底状石核Ａ
55	20	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	石核	頁岩	90 ・ 53 ・ 23	91.1	ａ～ｄ面　舟底状石核Ｂ
56	20	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	石核	頁岩	73 ・ 49 ・ 47	118.1	ａ～ｄ面　凹面状石核Ａ
57	21	ＳＫＤ17	(Ⅳ)	石核	頁岩	91 ・ 84 ・ 83	652.2	ａ～ｆ面
58	21	ＳＫＤ20	(Ⅳ)	両面加工石器	頁岩	48 ・ 46 ・ 16	25.2	
59	21	ＳＫＤ20	(Ⅳ)	両面加工石器	頁岩	71 ・ 60 ・ 27	99.5	
60	21	ＳＫＤ20	(Ⅳ)	両面加工石器	頁岩	72 ・ 43 ・ 26	61.0	
61	21	ＳＫＤ20	(Ⅳ)	石槍	頁岩	41 ・ 39 ・ 13	20.1	
62	22	ＳＫ13	(Ⅳ)	石鏃	頁岩	27 ・ 9 ・ 5	0.8	
63	22	ＳＫ13	(Ⅳ)	石槍	頁岩	56 ・ 43 ・ 16	37.1	
64	22	ＳＫ13	(Ⅳ)	スクレイパー	頁岩	75 ・ 46 ・ 22	65.4	
65	22	ＳＫ13	(Ⅳ)	スクレイパー	頁岩	55 ・ 43 ・ 16	37.5	
66	22	ＳＫ13	(Ⅳ)	石核	頁岩	81 ・ 50 ・ 50	144.2	ａ～ｄ面
67	22	ＳＫ13	(Ⅳ)	半円状扁平打製石器	安山岩	133 ・ 85 ・ 36	470.3	
68	23	ＬＲ52	Ⅰ	石鏃	頁岩	16 ・ 11 ・ 3	0.2	
69	23	表採	－	石鏃	頁岩	33 ・ 13 ・ 4	1.4	
70	23	ＬＲ52	Ⅰ	石鏃	頁岩	25 ・ 11 ・ 5	1.2	
71	23	ＬＲ52	Ⅰ	石槍	頁岩	71 ・ 32 ・ 13	26.1	
72	23	ＬＱ52	－	石槍	頁岩	134 ・ 71 ・ 35	229.2	
73	23	ＭＢ46	Ⅰ	石槍	頁岩	67 ・ 44 ・ 17	44.2	
74	23	ＬＯ52	Ⅰ	石槍	頁岩	86 ・ 62 ・ 25	109.6	
75	23	ＬＰ53	－	石槍	頁岩	53 ・ 48 ・ 17	36.7	
76	23	ＬＯ53	－	石槍	頁岩	70 ・ 53 ・ 22	75.6	
77	23	ＬＴ47	Ⅰ	石匙	頁岩	63 ・ 38 ・ 9	11.7	
78	24	ＭＢ44	Ⅰ	石匙	頁岩	58 ・ 49 ・ 9	21.0	
79	24	ＬＲ52	－	石篦	頁岩	102 ・ 60 ・ 17	87.2	
80	24	ＬＱ52	－	石篦	頁岩	98 ・ 41 ・ 26	70.5	
81	24	ＬＱ52	Ⅰ	石篦	頁岩	60 ・ 36 ・ 22	40.8	
82	24	ＭＢ47	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	63 ・ 31 ・ 20	37.7	
83	24	ＬＱ52	Ⅳ	スクレイパー	頁岩	74 ・ 50 ・ 12	32.7	
84	24	ＬＯ53	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	44 ・ 34 ・ 17	23.6	
85	24	ＬＰ52	－	スクレイパー	頁岩	81 ・ 59 ・ 16	40.5	
86	24	ＬＳ50	Ⅰ	スクレイパー	頁岩	66 ・ 51 ・ 14	30.5	

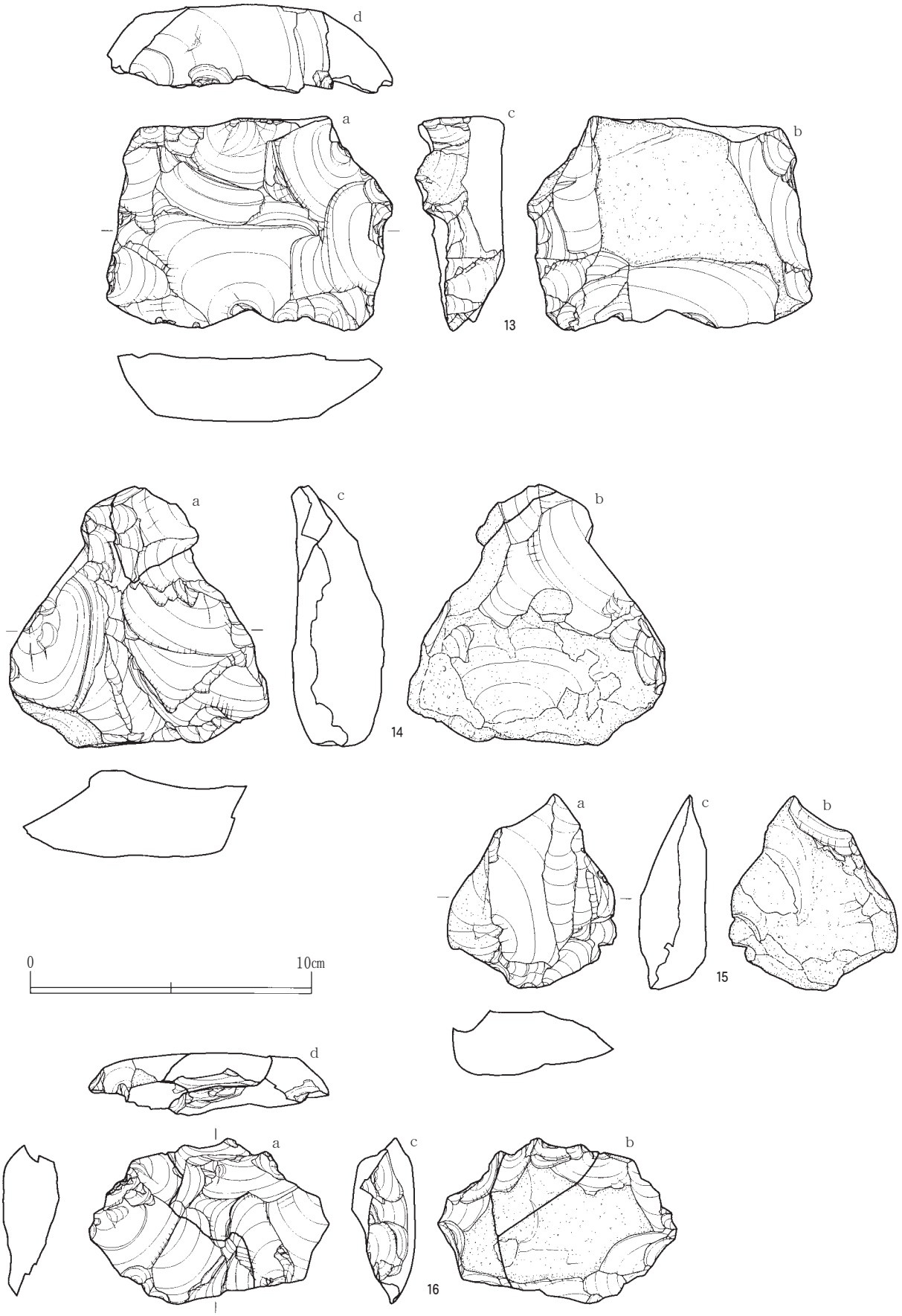
（　）内は遺構確認層



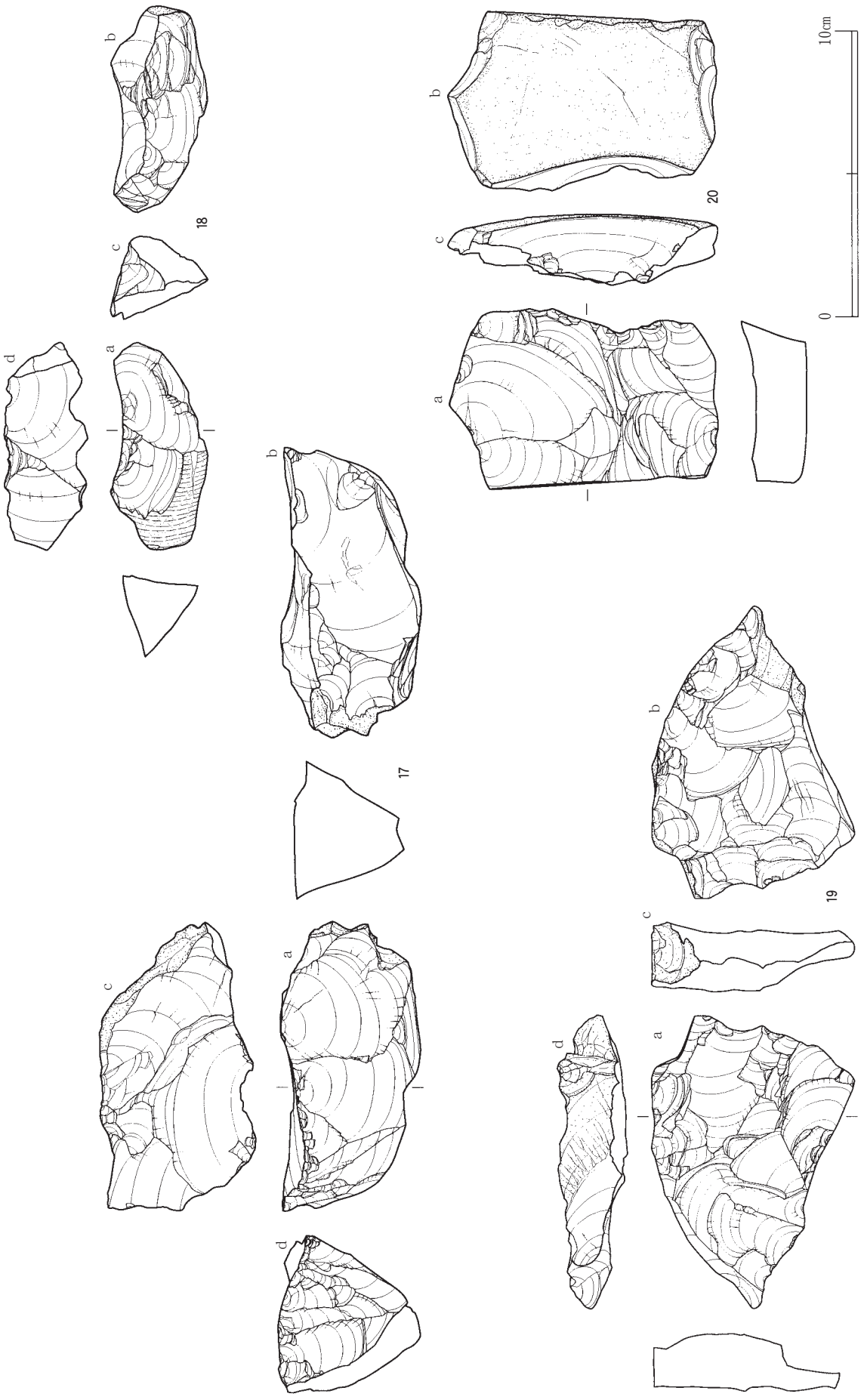
第９図　遺構内出土石器（１）



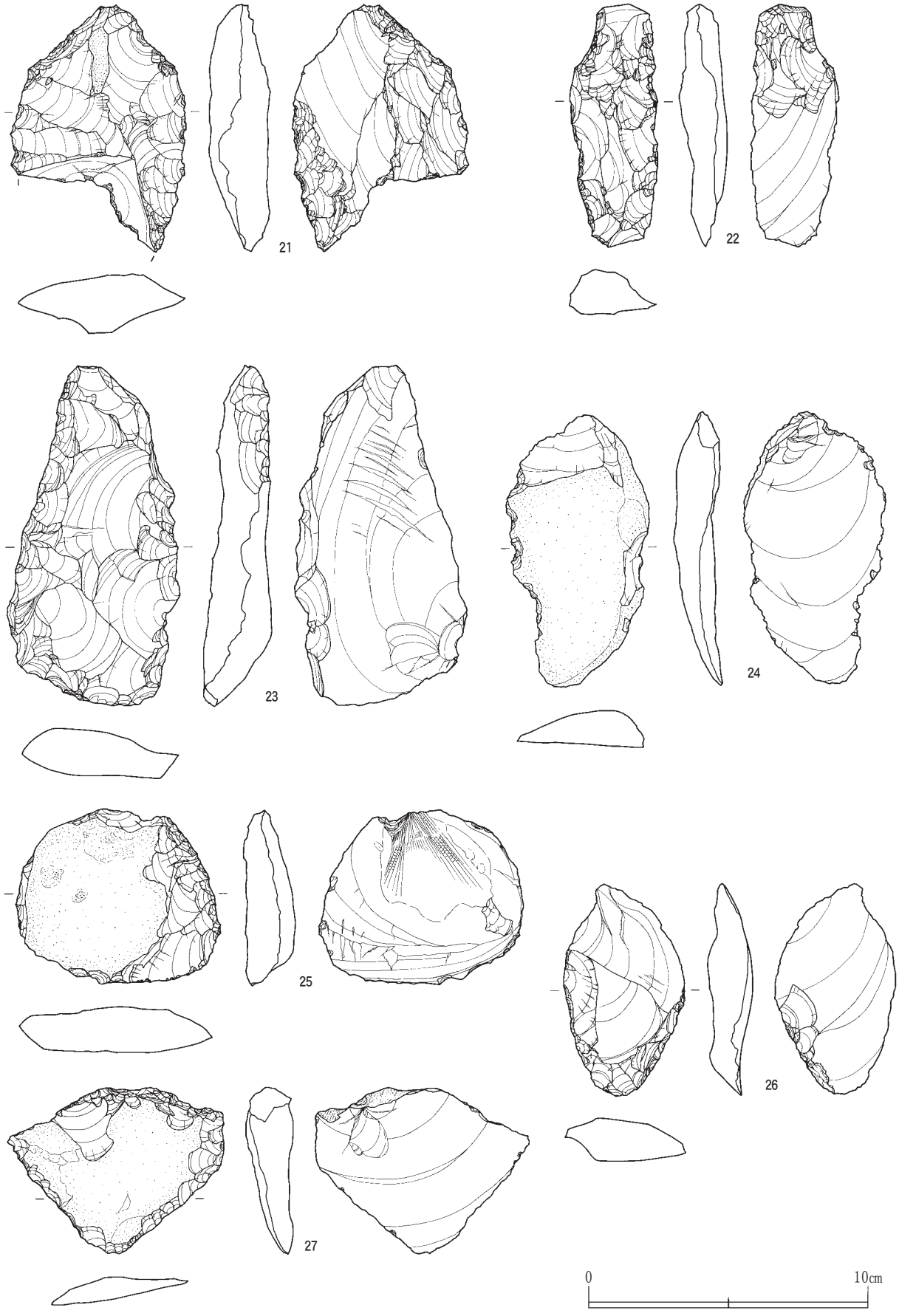
第 10 図　遺構内出土石器（２）



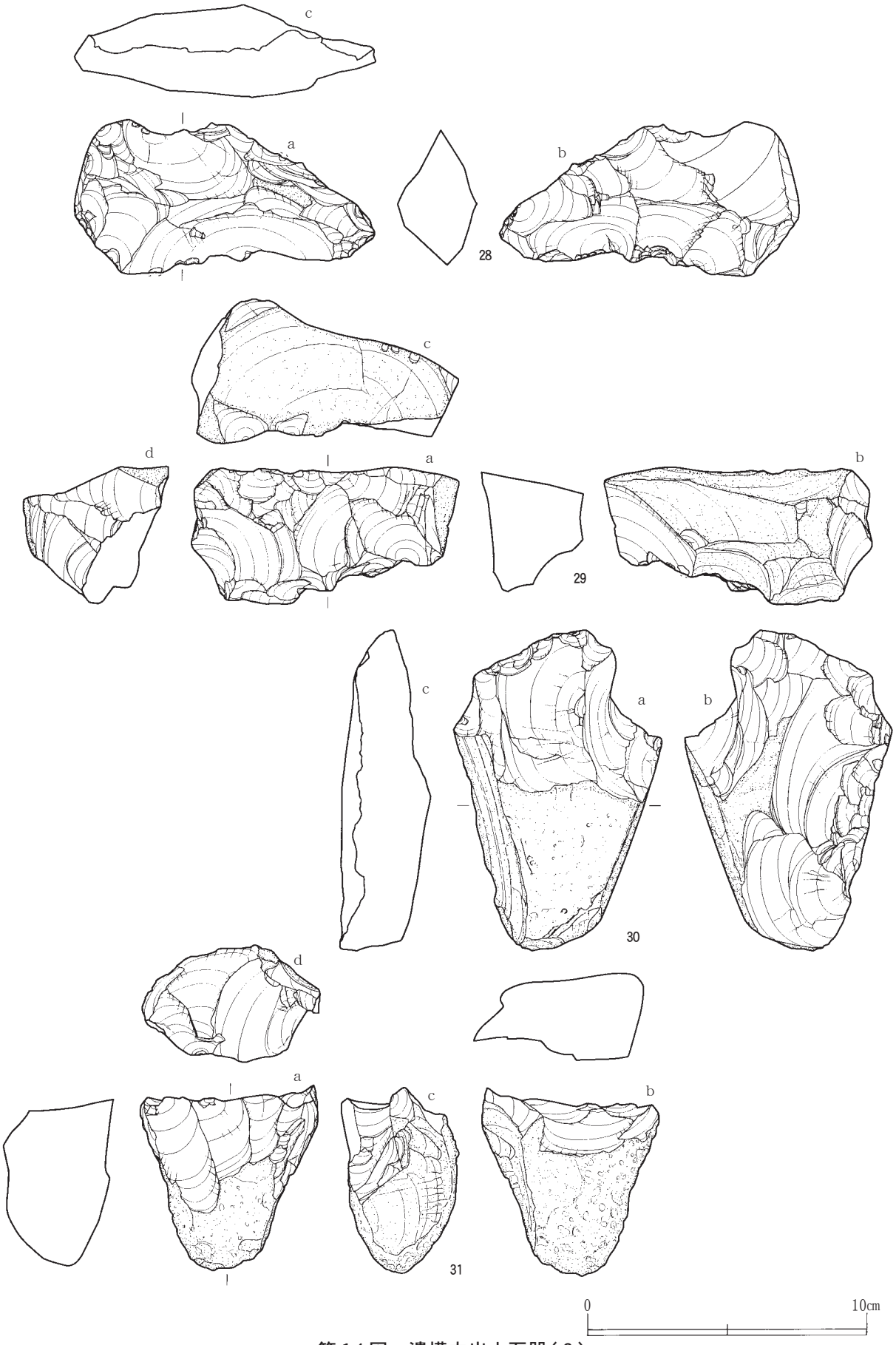
第 11 図　遺構内出土石器（3）



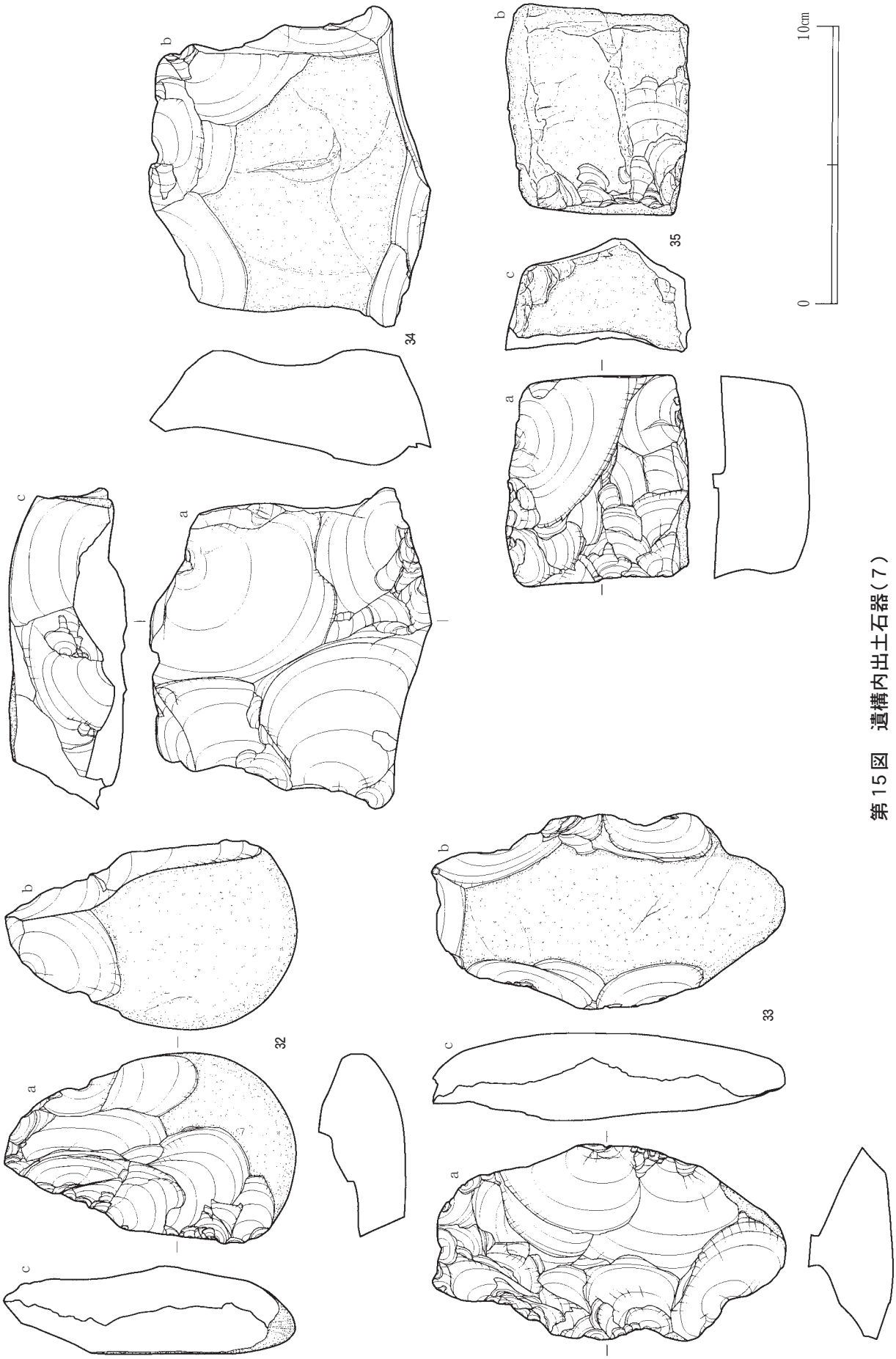
第12図　遺構内出土石器（４）



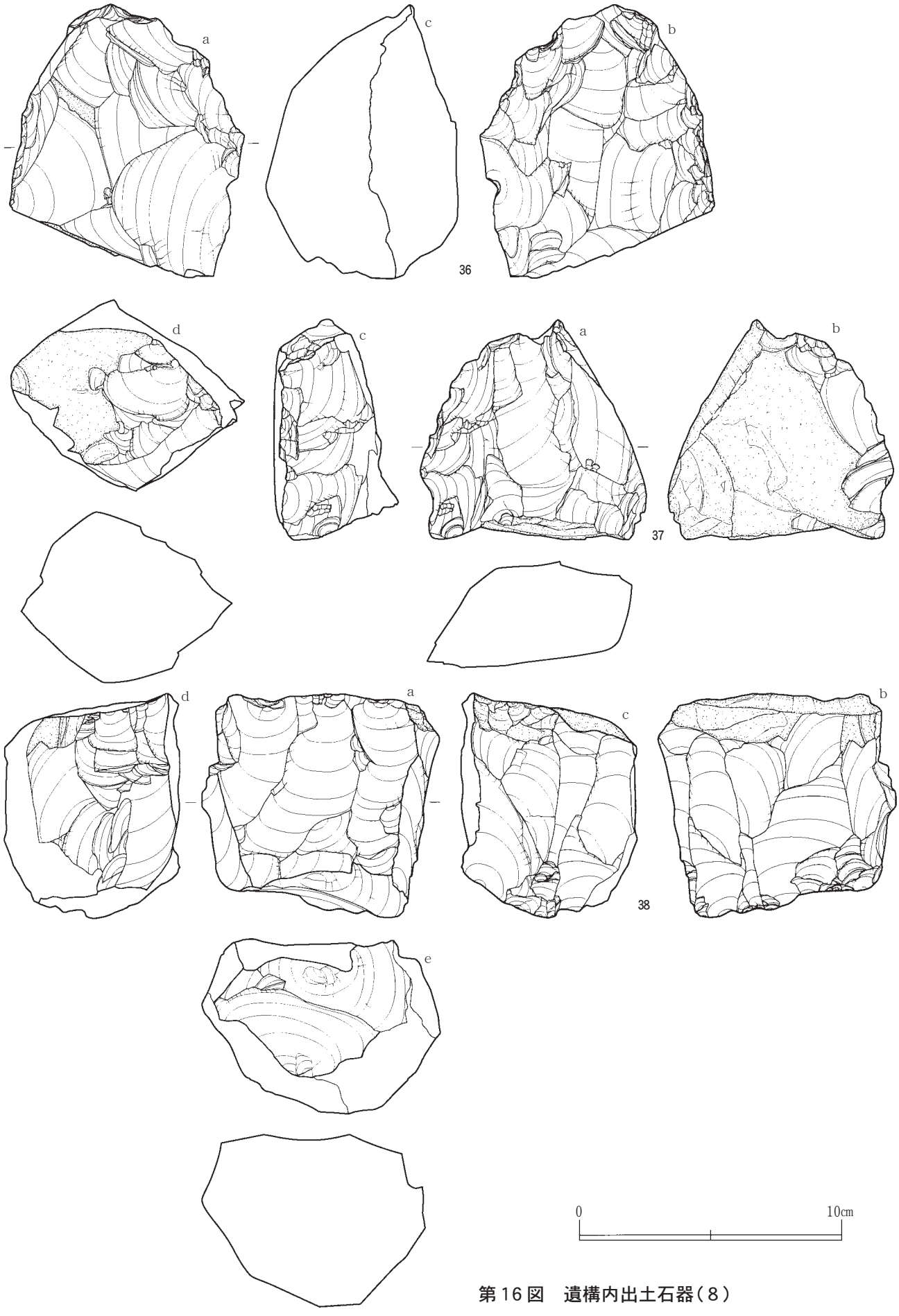
第 13 図　遺構内出土石器（5）



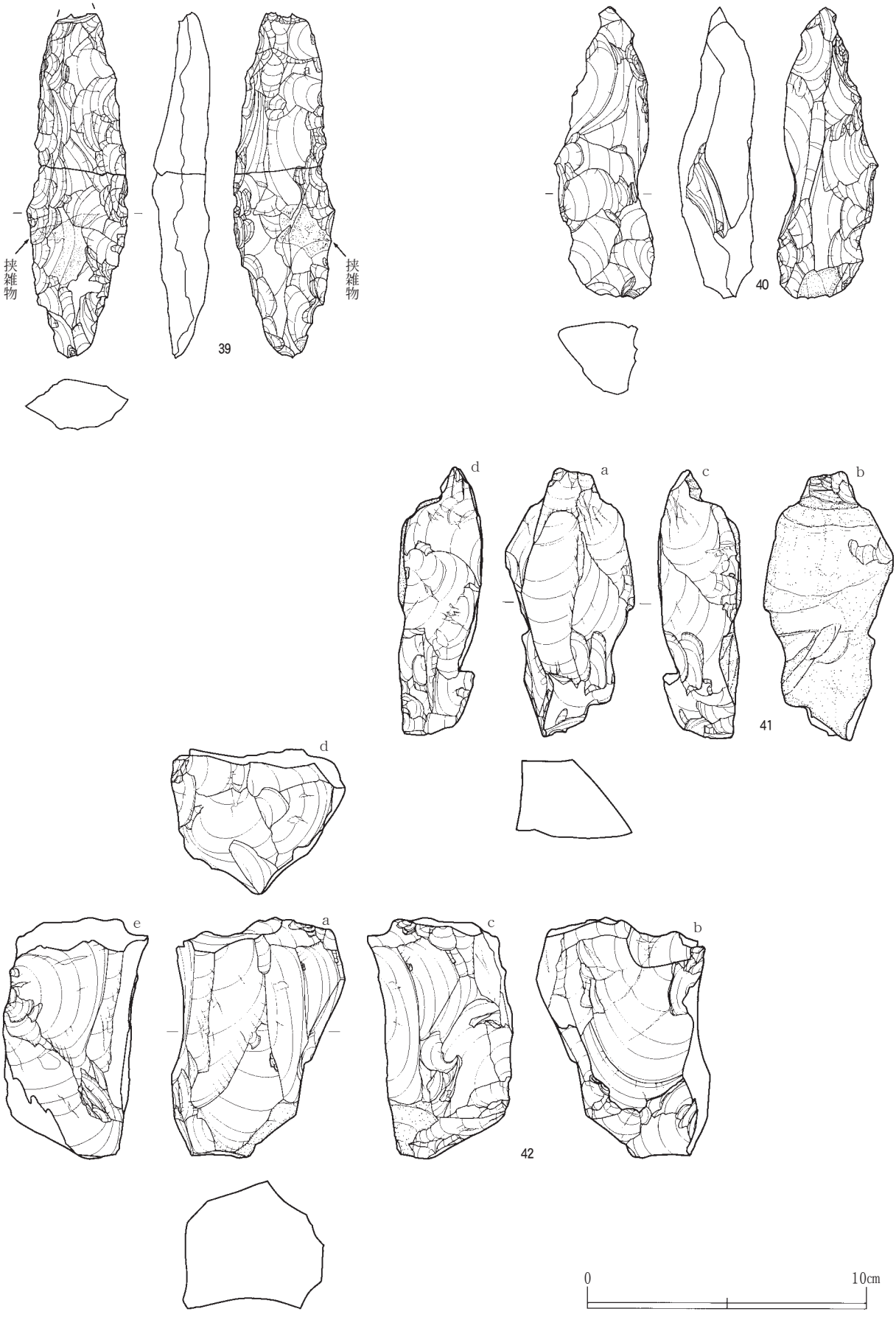
第 14 図　遺構内出土石器（６）



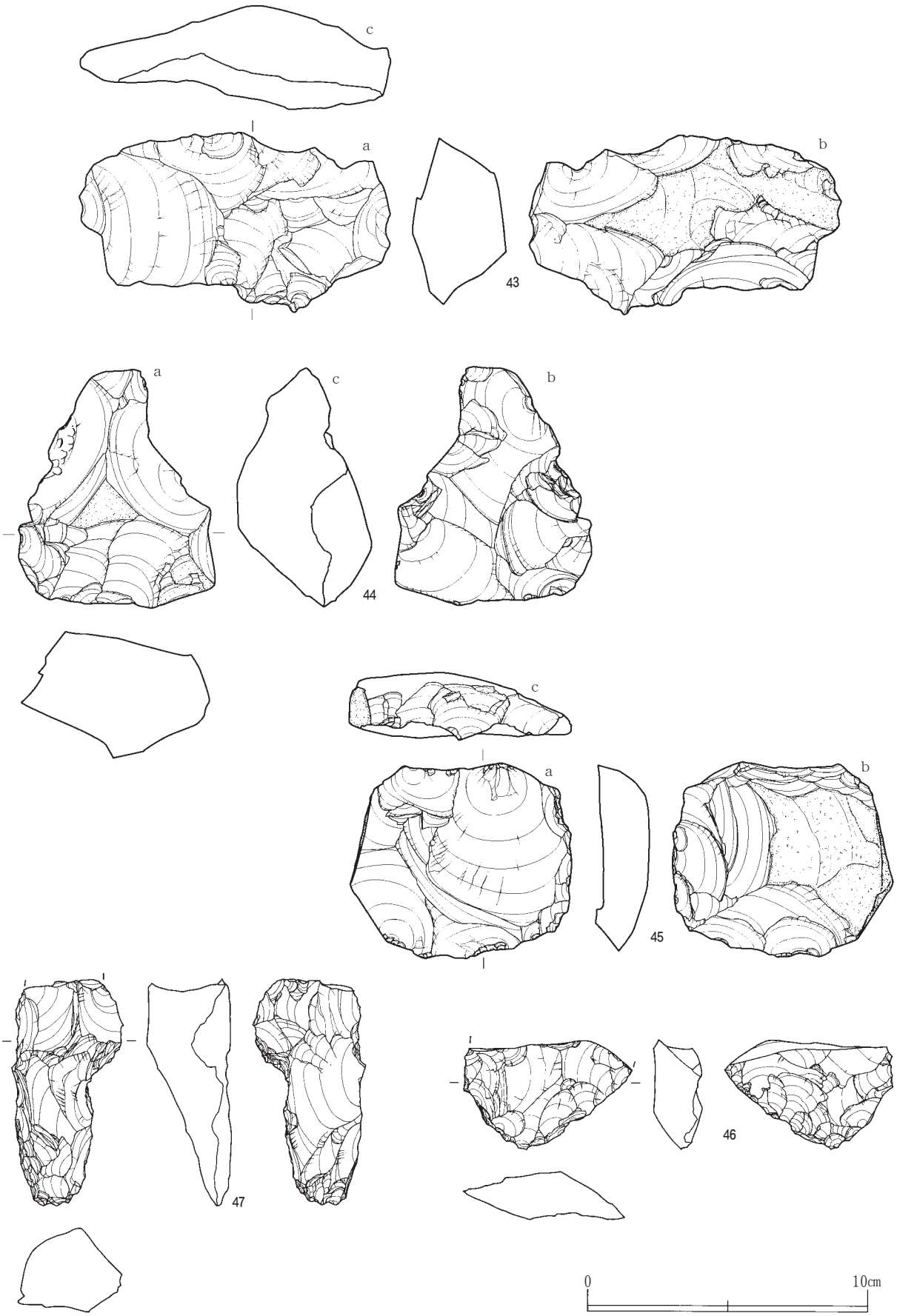
第15図　遺構内出土石器（7）



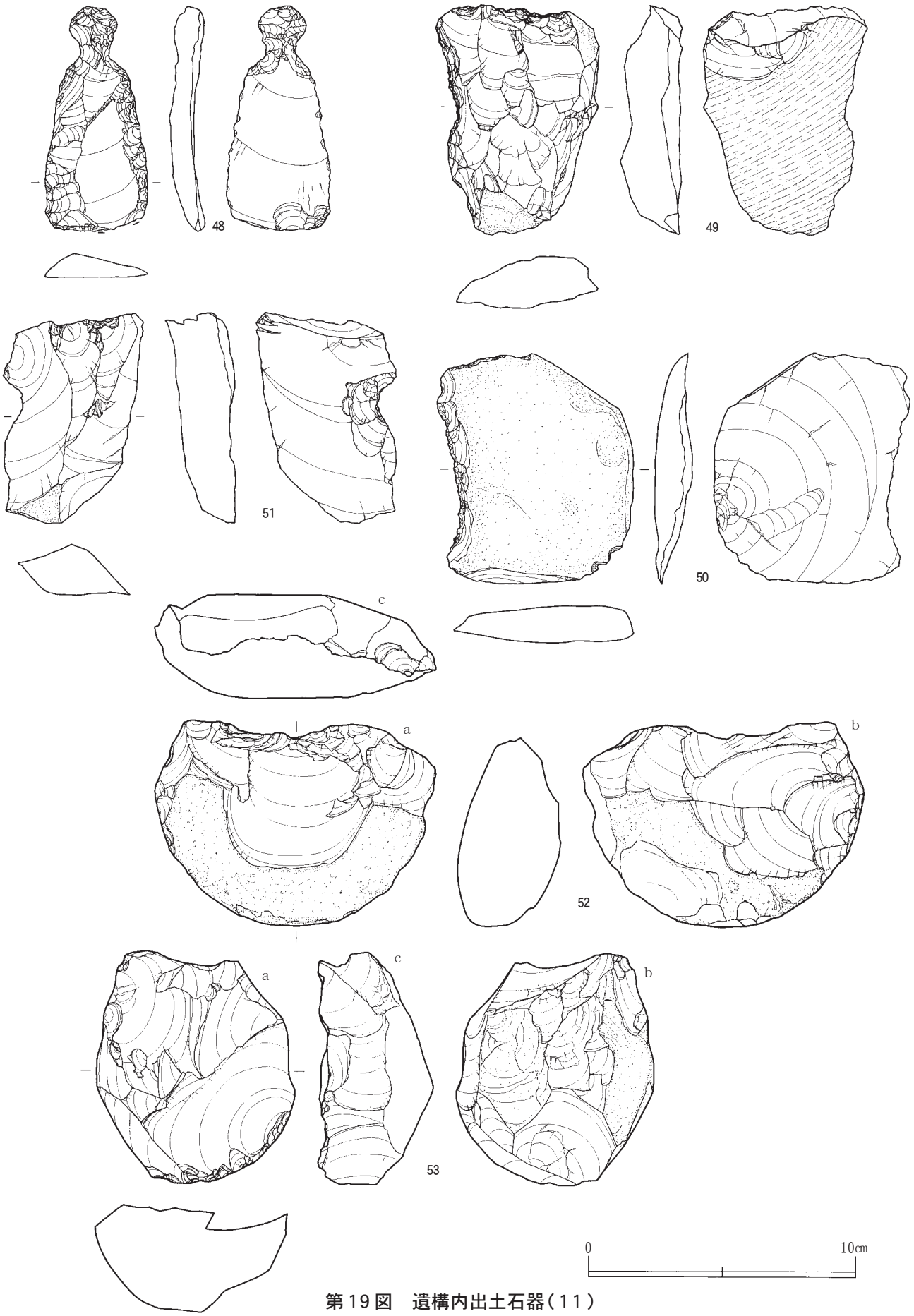
第 16 図　遺構内出土石器（８）



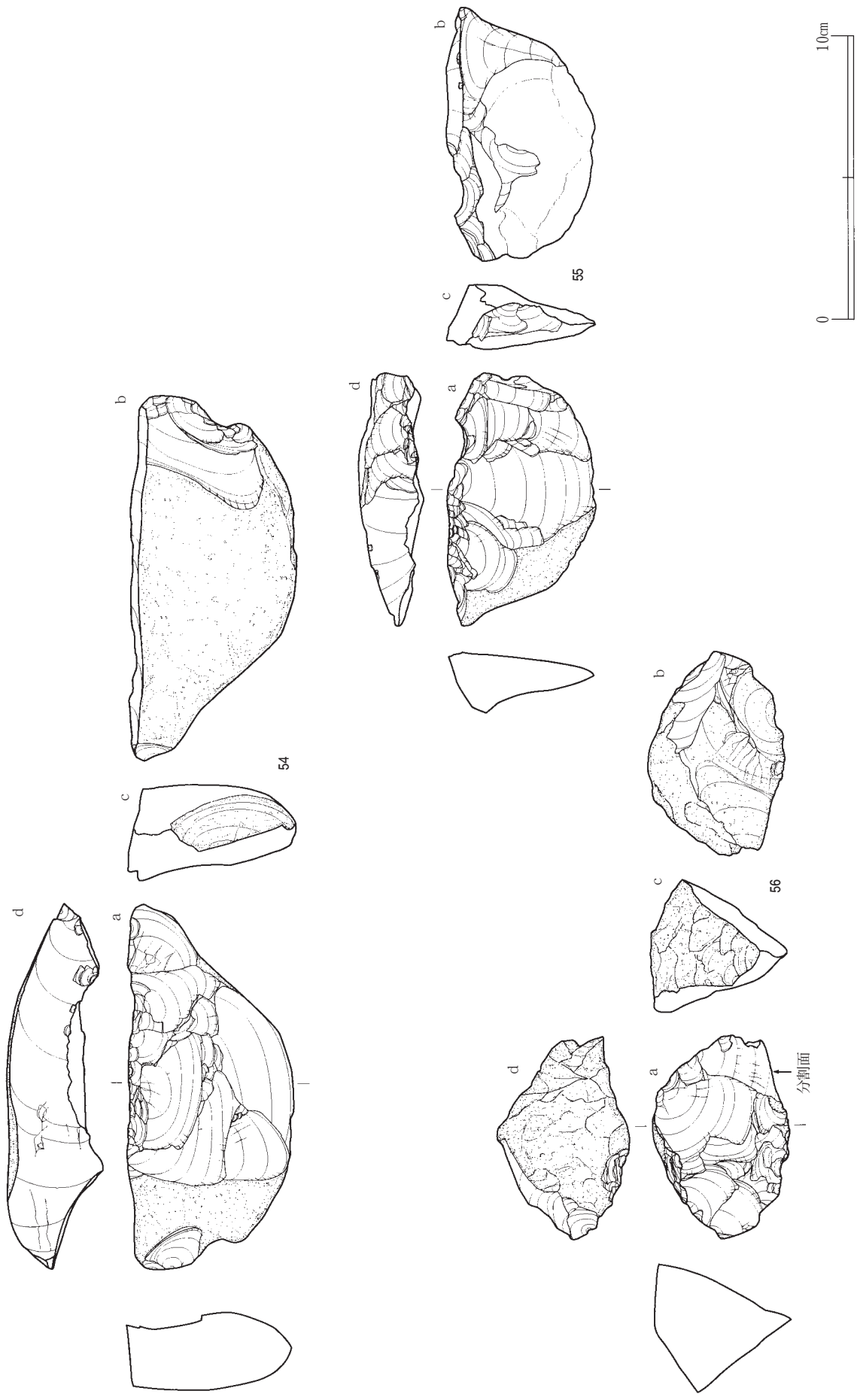
第 17 図　遺構内出土石器（9）



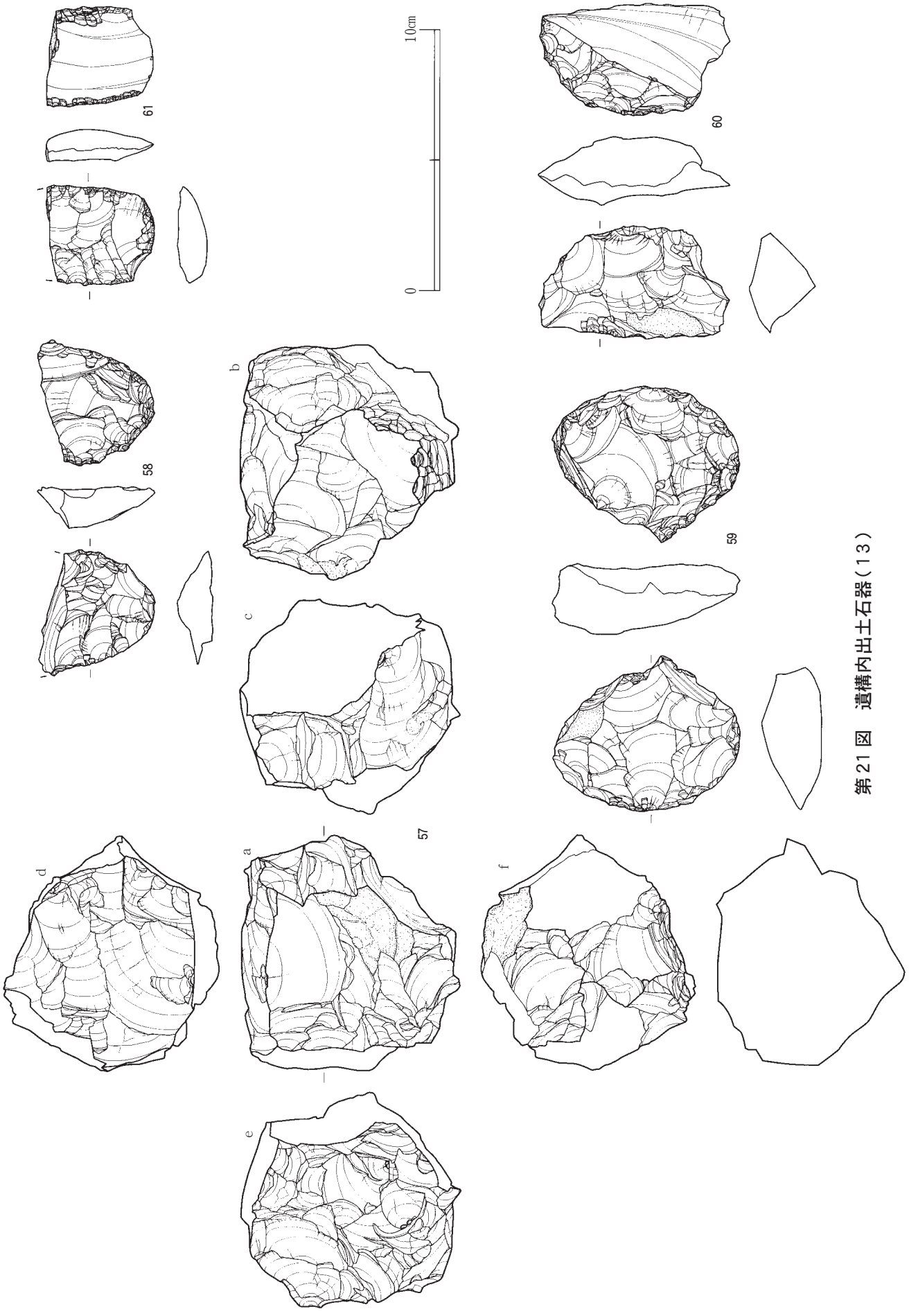
第 18 図　遺構内出土石器（10）



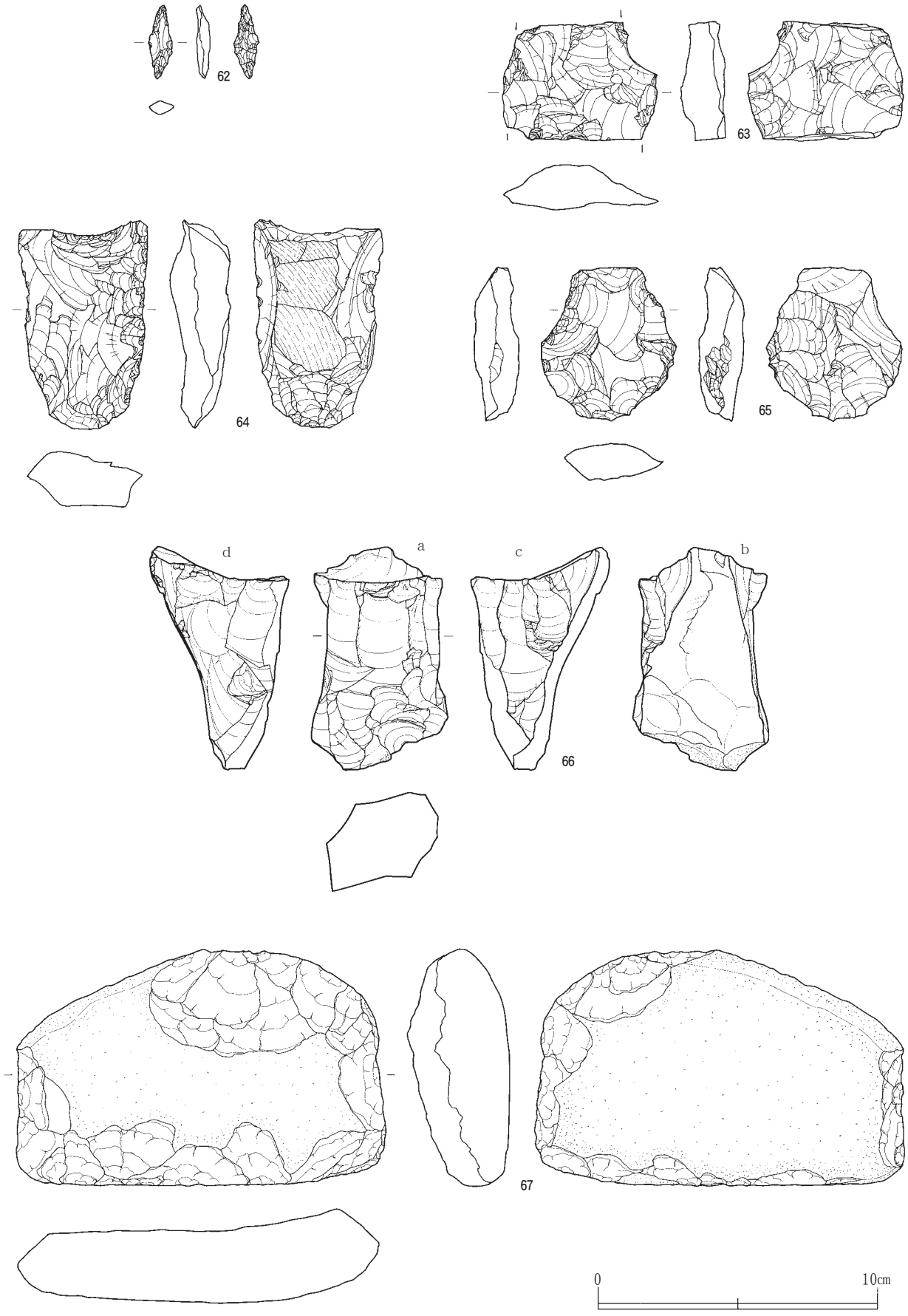
第19図　遺構内出土石器（11）



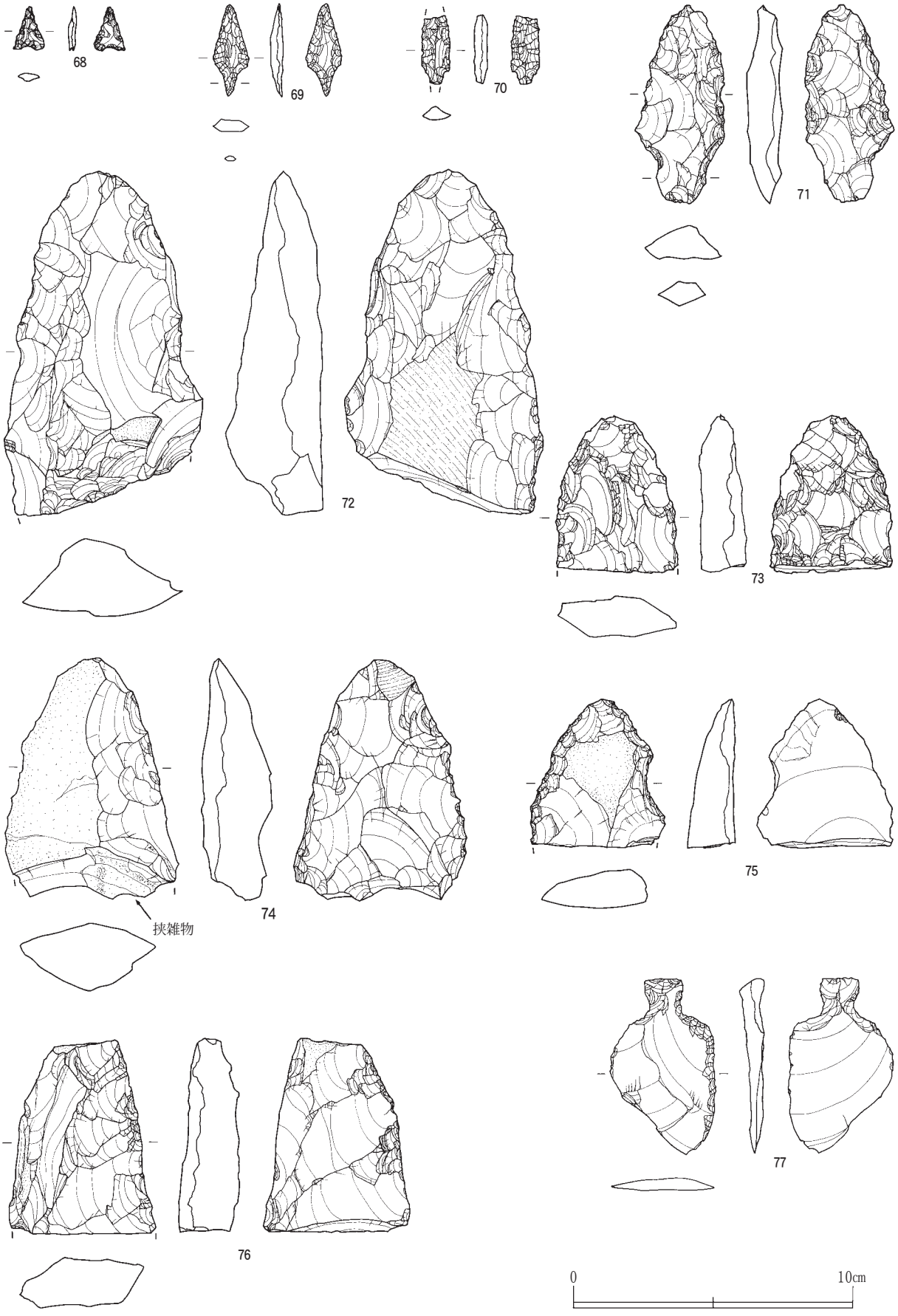
第20図　遺構内出土石器（12）



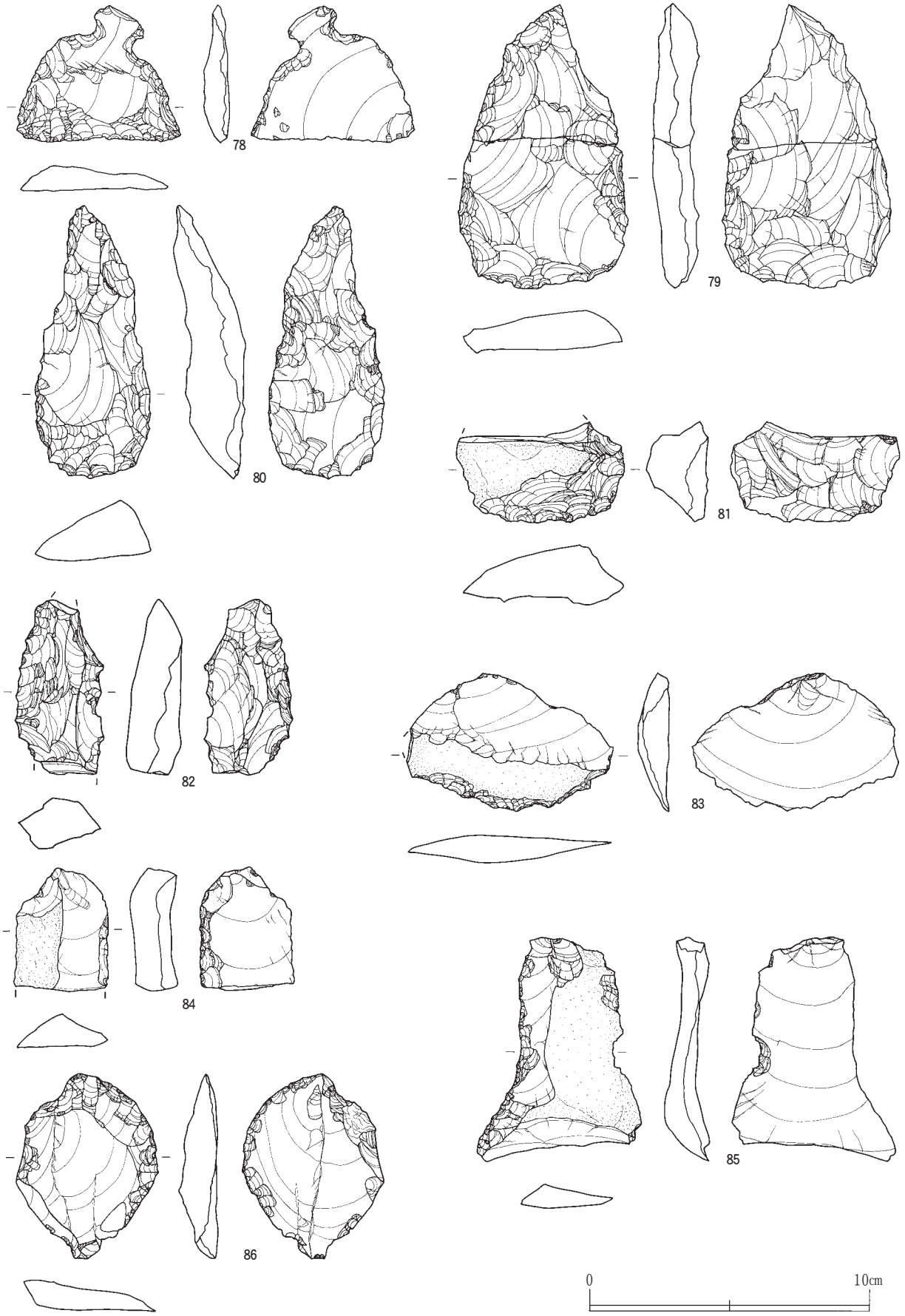
第21図　遺構内出土石器（13）



第 22 図　遺構内出土石器（１４）



第 23 図　遺構外出土石器（1）



第 24 図　遺構外出土石器（２）

第３章　まとめ

樋向Ⅲ遺跡は、上岩川遺跡群の中で北から ４番目に位置している。遺跡からは、ＳＸＱ１・２・３・４・５の ５か所の石器集中部、ＳＫＤ６・７・15・17・20の ５か所の原石採掘跡、ＳＲ16の土器埋設遺構、ＳＫ11・13の土坑、ＳＮ９の焼土遺構を検出した。石器の総数は34,946点で、石器集中部を含む遺構内が20,911点、遺構外が14,035点である。石鏃・石槍・刺突具・石匙・石篦・スクレイパー・ノッチ・両面加工石器・半円状扁平打製石器・二次加工ある剥片・石核・剥片・分割礫・剥離原石が出土した。

本遺跡から出土した石器は約35,000点で、樋向Ⅰ遺跡・鹿渡渉Ⅱ遺跡に次ぎ上岩川遺跡群では ３番目の多さである。石器集中部およびＳＫＤ15を除いた原石採掘跡からは多量の石器が出土し、それらは近接した在り方を示している。これらの石器が集中する範囲は、石器作りのある種の作業状況を示すものと思われ、全体で一時期を示す可能性がある。石器集中部の個別単位の在り方は、樋向Ⅰ遺跡の中央部での状態や鹿渡渉Ⅱ遺跡Ａ区北側の状態とも共通する。

石器集中部の中のＳＸＱ４は、長軸８ｍ×短軸３ｍの範囲から5,700点余りの石器が出土し、さらに11か所で特に密集する範囲が確認できた。石器が密集する範囲は、0.4m×0.25m ～ ２m×1.5mの広がりがあり、大小の広がりは石器作りの個別作業の残滓集積単位といえる。今後、個別範囲の個体別資料の把握を行うことで、作業の様子が具体化するものと思われる。

原石採掘跡は、大きく不整な土坑状を呈するＳＫＤ６、不整な溝状を呈するＳＫＤ７・17、不整で細長い土坑状のＳＫＤ15・20を確認した。このうち大型のＳＫＤ６は、段丘縁辺の斜面最上位に形成され、北西は森林軌道に切られる。現状では底面や壁に凹凸があり覆土のⅡ層・１層からは多量の石器が出土した。２・３層は人為的に埋められ、その後多くの石器が堆積したものと考えられる。この部分は石器集中部とすべきかもしれない。ＳＫＤ７・17は段丘上の縁に位置し、ＳＫＤ７も北西が森林軌道に切られる。ＳＫＤ７は底面がやや凹凸を示し、壁で張り出す状態も確認された。ＳＫＤ17は比較的浅く、北東・南西側は杉株などで撹乱されていた。底面には部分的に不整な落ち込みをもつ。ＳＫＤ15・20はどちらにも ２つの浅い窪みをもつ。ＳＫＤ６を除いた原石採掘跡は、その長軸方向が東西から北東―南西方向に収まる。

原石採掘跡には樋向Ⅰ遺跡第３章で述べたように、旧石器・縄文時代の長野県鷹山黒曜石採掘址群がある（長門町教育委員会1989、明治大学鷹山遺跡群調査団1999）。1999 年の研究成果には、島田和高が01号竪坑の調査について述べている。01号竪坑の大きさは、平面形が長径約６ｍ×短径約４ｍで楕円形状を呈する。大きくは「上段の掘り方」→「中段の掘り方」→「最下段（Ａ・Ｂ）の掘り方」の順で掘削を行い、「上段の掘り方」面と「下段の掘り方」面には小土坑群が掘り込まれ、「中段掘り方」面ではテラス状面が確認でき一部で大きくオーバーハングする、としている。この遺構の表面からの深さは、「上段掘り方」で約2.5m、「中段掘り方」で約3.5m、「下段掘り方」では約５ｍもあり、竪坑としている理由である。樋向Ⅰ遺跡の形態は、比較的浅い不整の土坑状や溝状を呈する形態で、掘削形態も異なる。これらのことは、原石の産出状態に起因するものであろう。

調査区南西側は、本来軌道で分断された西側尾根部へ連続していたものである。ＳＫＤ15とＳＫ

13の間には、両遺構を結んだ中間を頂点として西に開析した小さな沢頭が存在した。この沢頭の南側が西側尾根部へ繋がり、調査区北側の縁辺部地形は北東―南西方向に沿っていたと推定される。この地形に先の原石採掘跡が規制されていたことが理解される。また、石器集中部の長軸方向も同じ傾向にあるのは、原石採掘跡に規制されたものと考えられる。

本遺跡からは、上岩川遺跡群中の他の５遺跡に比べ、トゥールが比較的多く出土している。このうち石鏃・石匙・半円状扁平打製石器は縄文時代のもので、中でも半円状扁平打製石器は前期的な様相をもつ。しかし、それ以外の石器が前期とは断定できない。石器で注目されるのが、別編２で扱っている凹面状石核と舟底状石核の存在で、前者の石核は10点以上を掲載したが、後者を含めて他の遺跡を上回る数が出土している。注目されるのが凹面状石核で、掲載分だけの出土遺構はＳＸＱ２・４・５、ＳＫＤ６・７・17となり、検出遺構のほぼ全域から出土している。このことは、石器製作の石器集中部と原石採掘跡に関わって、上岩川Ａタイプの剥片剥離をもつ石器製作者(集団)が関係した遺構群と想定される。

ちなみに舟底状石核の掲載分の石核はＳＫＤ17にあり、ここでは凹面状石核との共存が確かめられた。凹面状石核と舟底状石核の共存は樋向Ⅰ遺跡のＳＸＱ９でも確認できた。凹面状石核を残す上岩川Ａ剥片剥離技術と、舟底状石核を残す上岩川Ｂ剥片剥離技術は、原石の中心部の良否を直ぐに見極めて剥片剥離に取り掛かる共通の技術思考をもち、上岩川遺跡群においては同時生を有すると理解している。両技術の同時性が、遺構内でも確かめられたことになる。

土器埋設遺構は中期後葉の深鉢が設置されたものである。確認時から、竪穴住居跡を意識して周辺を精査したが、平面プラン・東側断面の立ち上がり・柱穴が検出できず、土器埋設遺構と判断した。これに近接して胎土に繊維を含む深鉢底部(Ｄ６)が出土しており、本遺跡の遺構群が前期～後期の可能性のあることを示唆する。先に半円状扁平打製石器の存在とその年代が前期的であることを述べたが、本石器は遺構群が集中している地点から離れたＳＫ13からの出土である。以上のことから、石器集中部や原石採掘跡の遺構群は、縄文時代前期～中期の時期と考えられるが、中期に限定される可能性も想定しておきたい。

なお、本遺跡の南西側の調査区縁辺には、軌道によって露頭した軟質の泥岩層(秋田県農政部1984)が露出している。調査区表面から１～２ｍ下では、泥岩層の上面が南から北に傾斜していた(傾斜は沢頭の影響)。泥岩層に対峙すると右上～左下にかけて強い傾斜の節理が認められた。表面を削ると全体が黄褐色の泥岩層中節理の右側に、10㎝前後に砕け酸化したクラック状態の層が観察できる。これらより左には、移植ゴテで削れる灰色をした10㎝前後の軟質頁岩も僅かに認められたが、全体が硬質の頁岩層でないことが確かめられた。

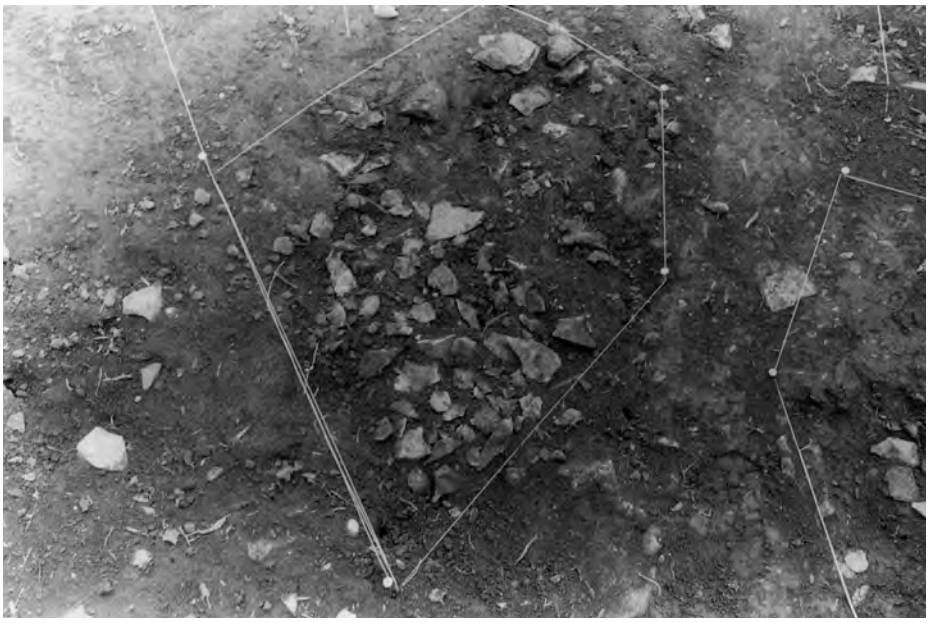
引用・参考文献

秋田県農政部　『土地分類基本調査森岳・羽後浜田』　1984(昭和59)年
鷹山遺跡群調査団　『鷹山遺跡群Ⅰ』　長門町教育委員会　1989(昭和63)年
明治大学鷹山遺跡群調査団　『長野県鷹山黒耀石原産地遺跡群の研究―1995・96・97・98 年度にわたる鷹山黒耀石採掘址群調査の記録―』　明治大学鷹山遺跡群調査団　1999(平成11)年

1　遺跡全景（北から）

2　ＳＫＤ６断面および完掘状況（西から）

1　ＳＸＱ２石器
出土状況（西から）



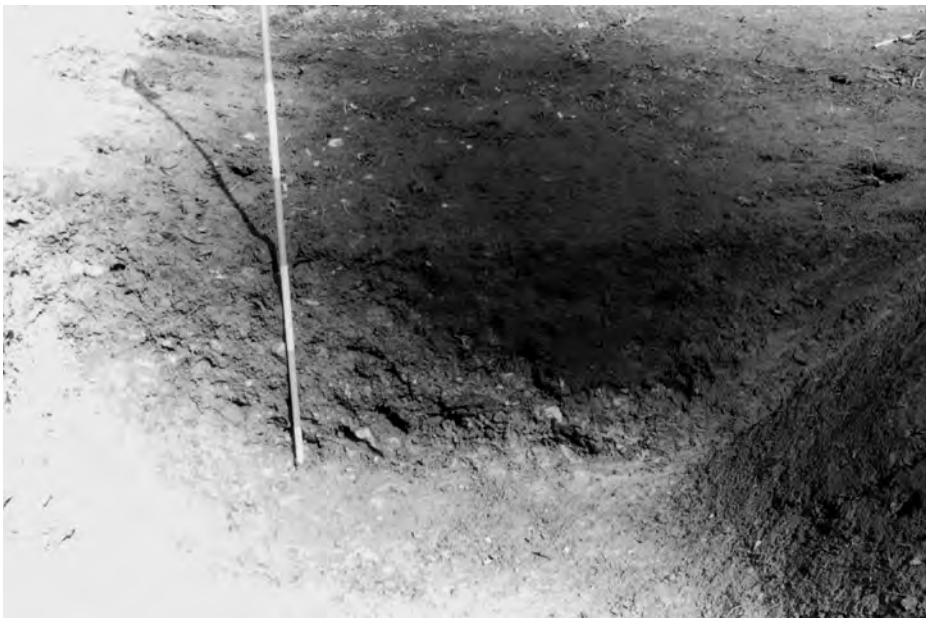
2　ＳＸＱ４石器
出土状況（西から）

3　ＳＸＱ４石器
出土状況（西から）

1　ＳＫＤ６確認状況（南西から）

2　ＳＫＤ７調査風景（東から）

3　ＳＫＤ７調査風景（西から）



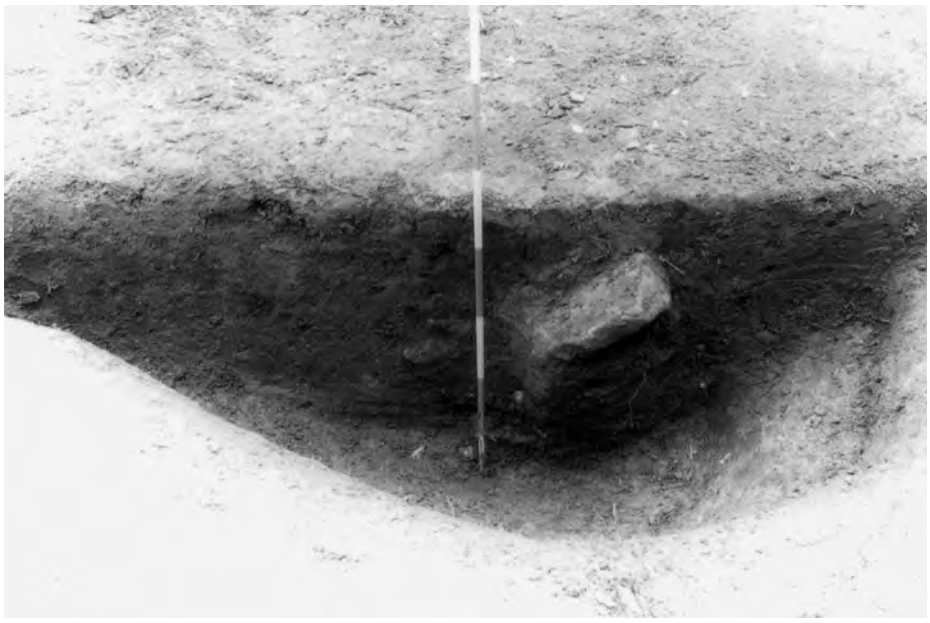
1　ＳＫＤ15断面
（西から）

2　ＳＫＤ17完掘
（北から）

3　ＳＫＤ17・20
完掘（西から）

1　ＳＲ16完掘
（南西から）

2　ＳＫ11完掘
（南から）



3　ＳＫ13断面
（南から）

―― 大沢Ⅰ遺跡 ――
（３ＯＳＩ）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観(第１図、巻頭図版)

本遺跡は、小又川左岸にある低位段丘の縁辺にあり、標高は42 ～ 45mで緩く南東に傾斜している。遺跡は、当該地域で調査を行った 6遺跡のうち北から 5番目にあり、北東に樋向Ⅲ遺跡が南西には大沢Ⅱ遺跡が位置する。調査区は長さ約92m、幅約17mの北東から南西にかけての細長い範囲で、周囲の水田から９mの比高がある。調査区に沿った東側には過去の森林軌道設置のための掘削により、地山の露出が見られる箇所がある。調査区は、範囲確認調査で遺物が確認できなかった南西寄りの中央部を除いて、北東側をＡ区、南西側をＢ区とした。

Ａ区では、西側で縄文時代の剥片が集中する石器集中部を４か所検出した。北東側を除く３つの石器集中部の南東側は北東―南西方向に大きく削平を受けており、これら石器集中部が本来南東側に延びていたことが理解される。また北西側にも範囲が拡大するが、Ａ・Ｂ区が同じ段丘の縁辺にありながらＡ区に石器集中部が確認されるのは、隣接する樋向Ⅲ 遺跡との関連が考慮される。

Ｂ区では、中世以降と考えられる炭焼成遺構を４基検出した。これらは重複・近接しておりほぼ同時期と考えられる。この南西側には、炭焼成遺構と関連したと考えられる重複した幅の狭い溝が存在する。南東側に排水として機能したようである。

第２節　調査の方法(第１図)

発掘調査は、遺構や遺物を計画的に把握するためにグリッド法を採用した。つまり、調査区域の中央部にある工事路線内の中心杭(Ｘ＝5410.861、Ｙ＝－59080.614)を原点ＭＡ50として、国家座標第Ⅹ系の座標北を基準に各４m間隔のグリッド杭を設定した。グリッド杭には、東から西へ昇順するアルファベット ２文字と、南から北に昇順する算用数字を組み合わせた記号を記入し、４m方眼の南東部隅(グリッド杭)をその方眼のグリッド名とした。東西は右文字のＡ～Ｔまでを一順ごとに繰り上げ、左文字を昇順させて表現する。これらを遺構や遺物の記録作業に役立てた。

調査に当たっては、Ａ区・Ｂ区共にその中間地帯を排土置き場として利用した。両地区の排土が高く盛り上がることが予想されたので、排土の流出を防ぐために土留め柵を設置した。さらに、森林軌道が現農道として利用されているため、雑木などで道をふさがないように留意した。また、軌道掘削による露頭を利用して、地山中の頁岩包含状況を確かめた。

検出した遺構には、発見順に遺構の略記号と番号を付した遺構名を与え、図面や写真・遺物取り上げの整理に役立てた。ただし調査の進行に伴い、遺構の性格が異なって略記号を変更したり、欠番になったものもある。平面図や断面図などは1/20を基本にした。写真撮影は、35㎜カラーリバーサルフィルムや白黒ネガフィルムを使用した。遺物は、遺構名・グリッド名・出土層位・出土年月日などを記載して取り上げた。また、発掘調査時に遺物の洗浄も行っている。

第３節　調査の経過

大沢Ⅰ遺跡は、2005年４月と ６月に秋田県教育委員会が、当該整備事業に係る路線内で分布調査を実施し確認した遺跡である。これを受けて、同年10月３日～同年10月14日まで秋田県埋蔵文化財センターが確認調査を実施し、2006年６月26日～同年７月21日にかけて発掘調査を実施した。

６月26日、Ａ区において表土除去を開始し、一部で地山面まで薄いことを確認した。Ｂ区では、雑木などを除去してから、確認調査時のトレンチ埋土を除去した。

６月28日、Ａ区では調査区の北西側より石器が出土し、遺物を残しながら掘り進める。Ｂ区では炭焼成遺構の一部プランが確認できた。

７月３日、風雨が強く、大雨洪水警報が出されたため、作業を中止する。室内作業を行うが、晴れ間を見て遺跡の巡回を行った。

７月７日、Ｂ区のＳＤ11・ＳＤ12を掘り上げ、炭焼成遺構に関わる排水溝と判断する。

７月12日、Ａ区ではＳＸＱ２の遺物取り上げを終了する。Ｂ区では、地山面の確認面を精査したところ、新たにＳＷ５～ＳＷ７を検出した。切り合い関係が不明確で検討を要した。また、ＳＸ８を検出し覆土を除去する。

７月14日、Ｂ区で炭焼成遺構の土層観察用畦を残して覆土の除去を進める。

７月20日、Ａ区南東斜面に土層観察のためのトレンチを設定し、農道にバックホーを移動して黒土の掘削を行う。その後人力で精査した。この頃までに、Ａ・Ｂ地区の調査はほぼ終了した。

７月21日、Ｂ地区の平面図を終了させて大沢Ⅰ遺跡の調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、当該６遺跡について一括して行った。出土した多量の遺物は数点の土器を除けばすべて石器である。石材原産地遺跡の性格を具体的に提示するのに、各遺跡ごとに遺構内・遺構外出土石器について、その種類を識別し数量を数え挙げることにした。

石器は定形石器・剥片・石核などに分けられるが、自然石(遺構外は除く)・分割礫なども石器と共にカウントの対象にした。調査中における小さな石器と自然石の分別は、効率化を妨げるため発掘現場では行わず整理の洗浄作業後に行い、５㎜前後の剥片も拾い上げた。また、並行して石器集中部の出土石器を中心に接合作業を行った。

遺構の平面図や断面図・エレベーション図などは、組み合わせて第２原図としトレースした。遺跡内からは、剥片やチップが多く出土したが、定形石器は僅かしか出土しないため、実測資料は少ない。

定形石器の実測に当たっては、個々の石器についてその製作過程を観察しながら進めていった。報告書掲載遺物は、実測・トレース作業の迅速化を図り、その法量を測定し一覧表にまとめた。整理済みの資料は、報告書掲載ごとにまとめてあるが、掲載遺物以外の資料も取り出し易いように収蔵している。

第２章　調査の記録

本遺跡からはＡ区より石器集中部４か所、柱穴様ピット １基、Ｂ区より土坑１基、炭焼成遺構４基、溝跡２条を検出した。調査区の東縁には、森林軌道として使用していた農道があり段丘崖に当たる。Ａ区は本来平坦面であったが、中央東側の南北２分の１程は0.5m以上の深さの掘削区域があり段差がつく。Ｂ区は東側に緩く傾斜し、かつＡ区の高位面からの緩斜面になっている。

第１節　基本土層（第２図）

本遺跡のＡ区では、平坦面の基本層位Ａ地点と農道際の基本層位（斜面Ａ～Ｃ）を選定し、Ｂ区については緩い斜面地の基本層位Ａ地点を選定した。基本土層は、Ａ区においては基本層位Ａ地点を、Ｂ区においては基本層位Ａ地点を基本とする。

（基本層位Ａ区Ａ地点）

Ⅰ層　黒褐色土。表土。粘性弱、締まり弱。

Ⅱ層　褐色土。遺物包含層。粘性弱、締まり中。

Ⅲ層　黄褐色土。粘性中、締まり強。

Ⅳ層　明黄褐色土。地山。大・小の礫を含む。

（基本層位斜面Ａ）

１層　にぶい黄褐色土。粘性弱、締まり中。

２層　褐灰色土。粘性強、締まり強。

３層　にぶい黄橙色土。粘性強、締まり強。

（基本層位斜面Ｂ）

１層　灰黄褐色土。粘性中、締まり中。

２層　にぶい黄褐色土。粘性強、締まり強。

３層　褐灰色土。頁岩を多く含む。粘性強、締まり強。

４層　灰黄褐色土。粘性強、締まり強。

５層　黄褐色土。粘性強、締まり強。

（基本層位斜面Ｃ）

１層　灰黄褐色土。粘性中、締まり中。

２層　にぶい黄褐色土。粘性強、締まり強。

３層　褐灰色土。粘性強、締まり強。

４層　褐灰色土。粘性強、締まり強。

（基本層位Ｂ区Ａ地点）

Ⅰ層　黒褐色土。表土。粘性強、締まり弱。

Ⅱ層　黄褐色土。粘性強、締まり強。

Ⅲ層　にぶい黄橙色土。地山。粘性強、締まり強。

第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物

１　石器集中部

ＳＸＱ１（第３図、図版２－1）

Ａ区北東側のＬＰ58・59グリッドに位置し、表土・Ⅱ層で検出した。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸2.1m×短軸1.2mの楕円形の範囲を示し、垂直分布では0.15mの高低差がある。石器の総数は92点で、剥片92点が出土した。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ２（第３図）

Ａ区中央やや北よりのＬＲ56・57、ＬＳ55・56グリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。南西にＳＸＱ３が隣接している。南東側は北東―南西に細長く土取りされており、本来遺構は南東側と調査区外の北東側に広がっていたものと推定される。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸8.2m×短軸5.6mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.5mの高低差がある。石器の総数は169点で、石核１点・剥片168点である。石器製作跡と考えられる。

ＳＸＱ３（第３・６図）

Ａ区中央西よりのＬＴ53～55、ＭＡ53・54グリッドに位置し、表土・Ⅱ層で検出した。北東にＳＸＱ２が南西にＳＸＱ10が隣接している。南東側は北東―南西に細長く土取りされており、本来遺構は南東側と調査区外の北西側に広がっていたものと推定される。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸9.65m×短軸5.85mの不整形の範囲を示し、垂直分布では0.7mの高低差がある。石器の総数は479点で、石鏃２点・剥片477点である。石器製作跡と考えられる。

掲載した石器は、石鏃（１・２）のみである。

石鏃の１は裏面に主要剥離面を残し、両面に丁寧な調整を施す。２は裏面に主要剥離面を残す凸基式で、基部を折損している。両面に丁寧な調整を施す。

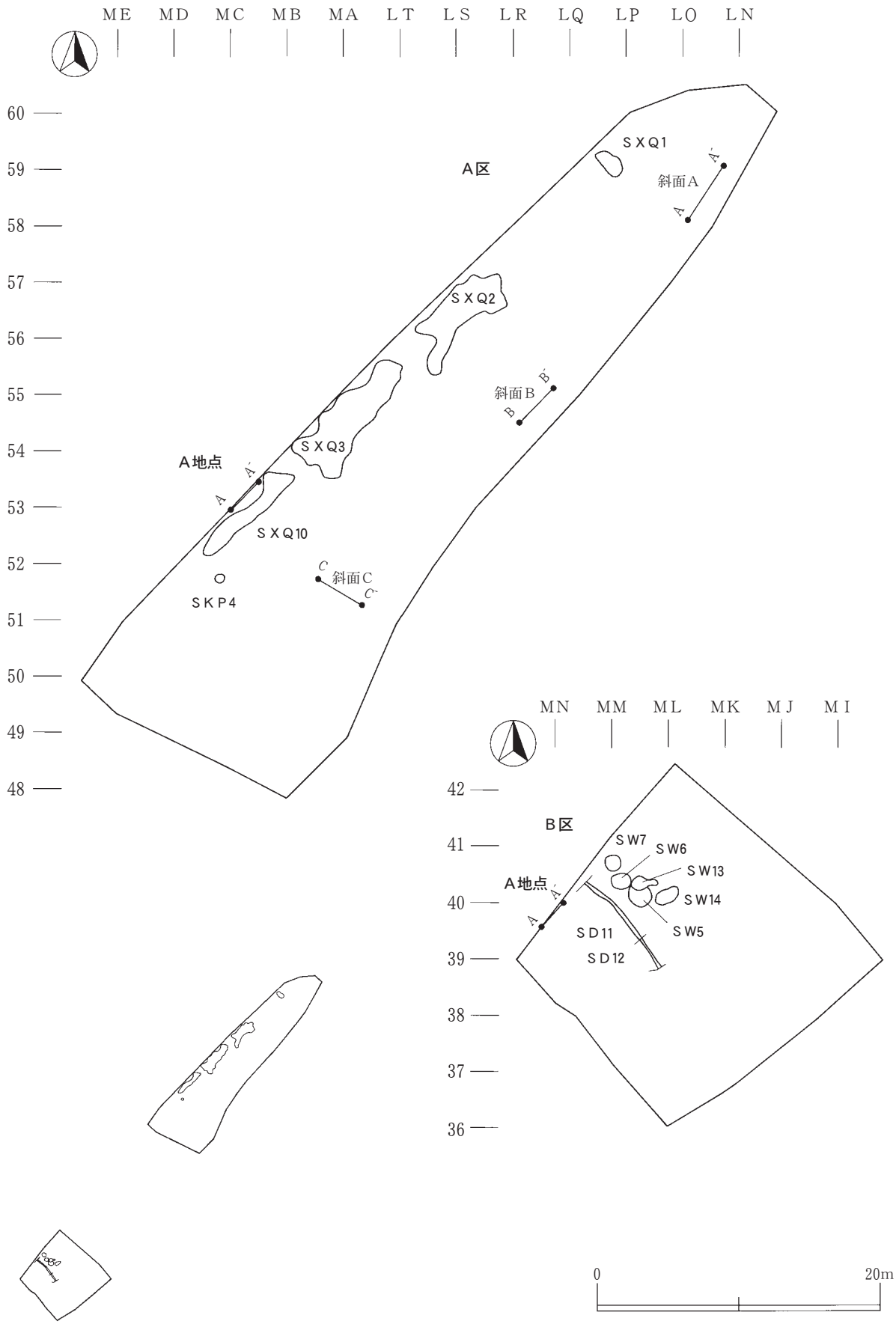
ＳＸＱ10（第３図）

Ａ区南西側のＭＢ52・53、ＭＣ52グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。北東にＳＸＱ３が南にＳＫＰ４が隣接している。南東側は北東―南西に細長く土取りされており、本来遺構は南東側と調査区外の北西側に広がっていたものと推定される。出土した石器を、広がりと一部の標高を図化・測定し一括して取り上げた。石器の分布状態は長軸8.4m×短軸1.85m の不整形の範囲を示し、垂直分布では0.6mの高低差がある。石器の総数は153点で、剥片153点が出土した。石器製作跡と考えられる。

２　柱穴様ピット

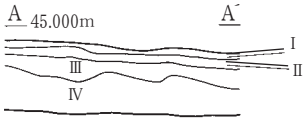
ＳＫＰ４（第３図）

Ａ区南西側のＭＣ51グリッドに位置し、Ⅱ層で検出した。北にはＳＸＱ10 が隣接している。平面形は長軸0.58m×短軸0.56mの円形を示し、深さは0.45mである。


ME
MD
MC
MB
MA
LT
LS
LR
LQ
LP
LO
LN
60
59
58
57
56
55
54
53
52
51
50
49
48
A区
SXQ1
斜面A
A
A'
SXQ2
斜面B
B
B'
A地点
SXQ3
SXQ10
SKP4
C
斜面C
C'
MN
MM
ML
MK
MJ
MI
42
41
40
39
38
37
36
B区
SW7
SW6
SW13
SW14
SW5
SD11
SD12
A地点
0
20m

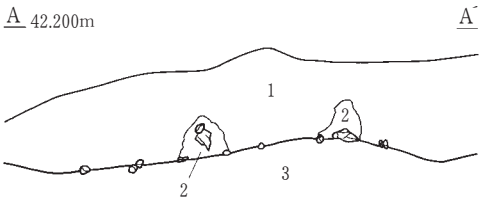
第１図　遺構配置図

A区A地点



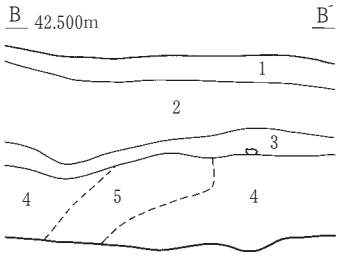
A区A地点
Ⅰ　黒褐色土（10YR3/2）粘性弱　しまり弱
Ⅱ　褐色土（10YR4/4）粘性弱　しまり中
Ⅲ　黄褐色土（10YR5/6）粘性中　しまり強
Ⅳ　明黄褐色土（10YR6/6）大小礫含む　粘性強　しまり強

斜面A



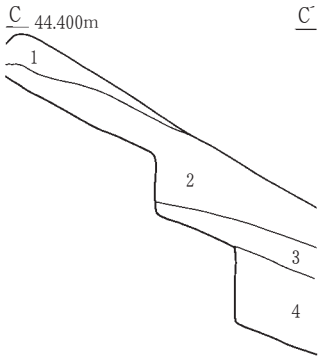
斜面A
1　にぶい黄褐色土（10YR5/3）粘性弱　しまり中
2　褐灰色土（10YR6/1）粘性強　しまり強
3　にぶい黄橙色土（10YR6/4）粘性強　しまり強

斜面B



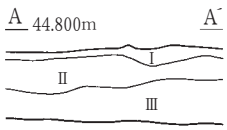
斜面B
1　灰黄褐色土（10YR4/2）粘性中　しまり中
2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）粘性強　しまり強
3　褐灰色土（10YR6/1）頁岩多量含む　粘性強　しまり強
4　灰黄褐色土（10YR5/2）粘性強　しまり強
5　黄褐色土（10YR5/6）粘性強　しまり強

斜面C

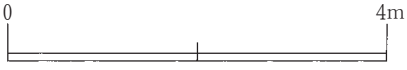


斜面C
1　灰黄褐色土（10YR4/2）粘性中　しまり中
2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）粘性強　しまり強
3　褐灰色土（10YR6/1）粘性強　しまり強
4　褐灰色土（10YR4/1）粘性強　しまり強

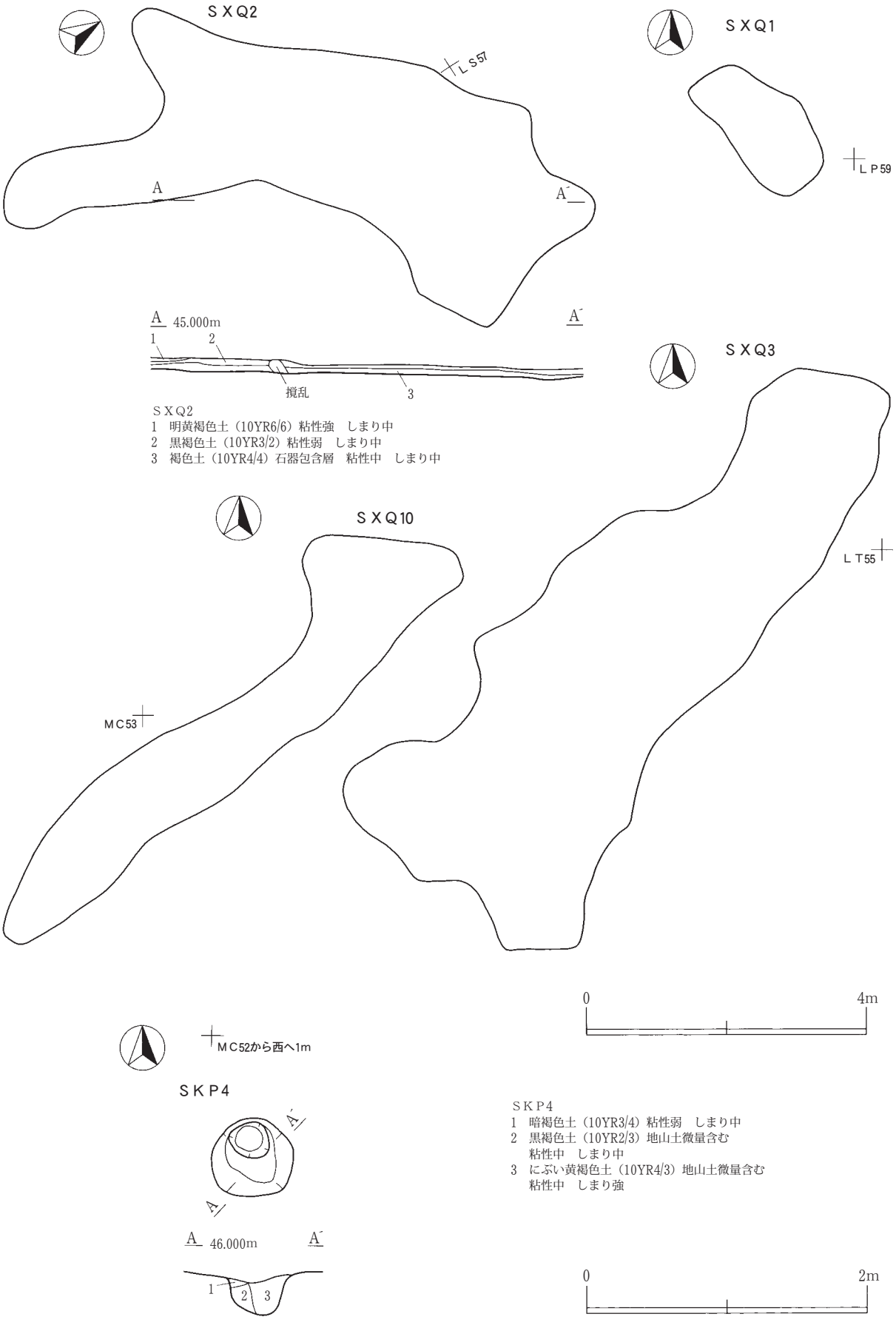
B区A地点



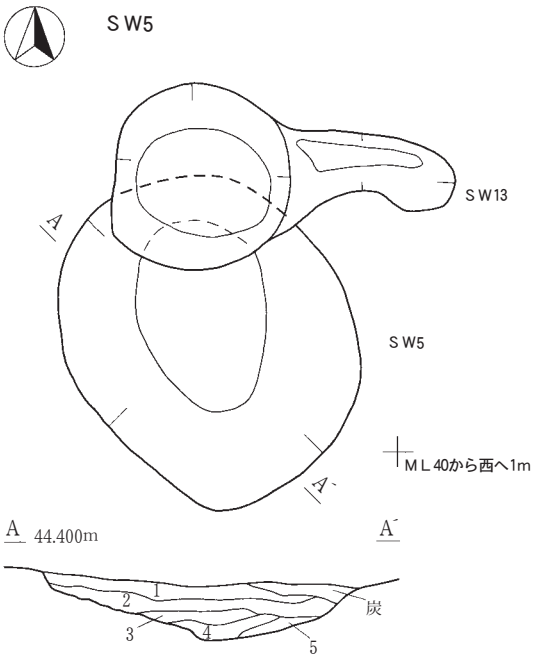
B区A地点
Ⅰ　黒褐色土（10YR3/2）粘性強　しまり弱
Ⅱ　黄褐色土（10YR5/6）粘性強　しまり強
Ⅲ　にぶい黄橙色土（10YR7/3）粘性強　しまり強



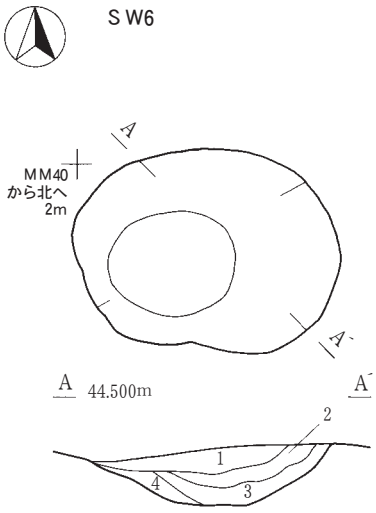
第２図　基本層位



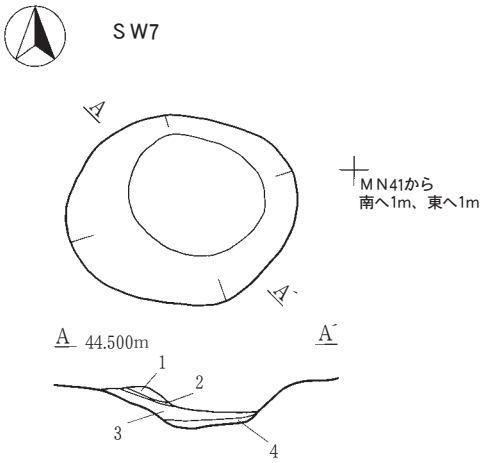
第３図　石器集中部（１）・柱穴様ピット（ＳＸＱ１・２・３・10、ＳＫＰ４）



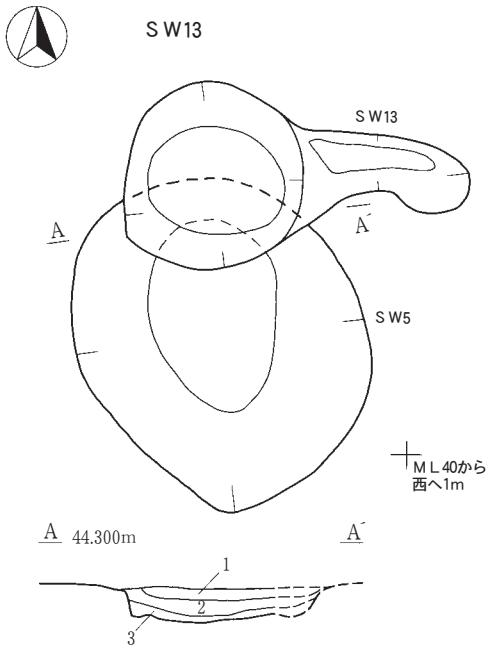
SW5
1　黒色土（10YR2/1）炭化物多量含む　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土（10YR3/2）炭化物多量含む　粘性中　しまり中
3　黒色土（7.5YR2/1）炭化物多量含む　焼土含む　粘性中　しまり弱
4　黒褐色土（10YR3/1）粘性中　しまり強
5　暗褐色土（10YR3/3）粘性強　しまり中



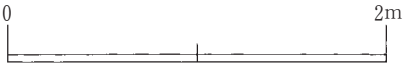
SW6
1　黒色土（10YR2/1）炭化物多量含む　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土（10YR2/2）炭化物多量含む　粘性中　しまり弱
3　黒褐色土（10YR3/2）炭化物少量含む　粘性強　しまり中
4　黒褐色土（10YR3/1）炭化物中量含む　粘性中　しまり中



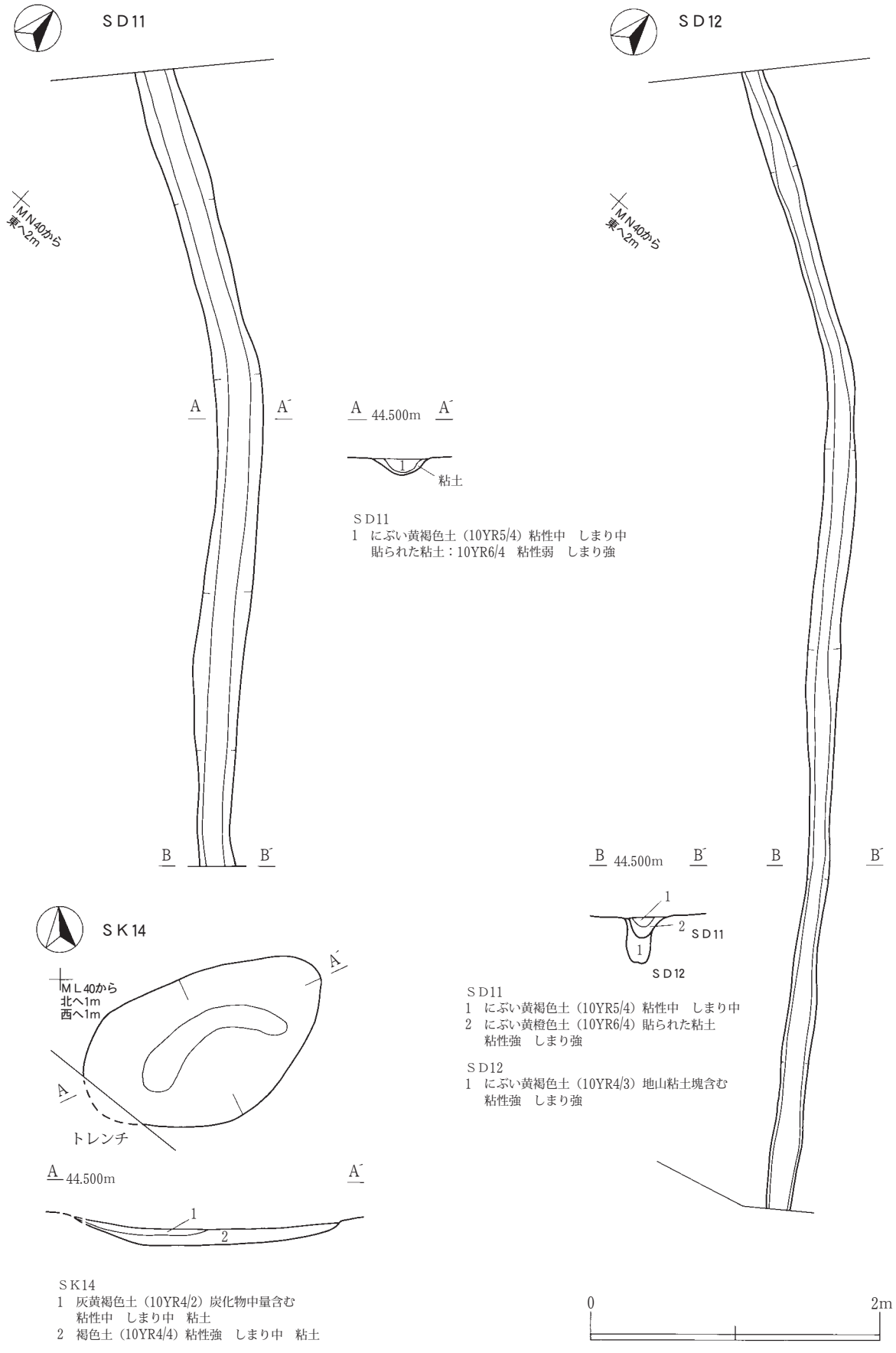
SW7
1　明赤褐色（2.5YR5/8）表土少量含む　焼土
2　炭　黒色（N2/0）
3　砂　褐色（10YR4/4）粘性弱　しまり弱
4　炭・焼土混じり



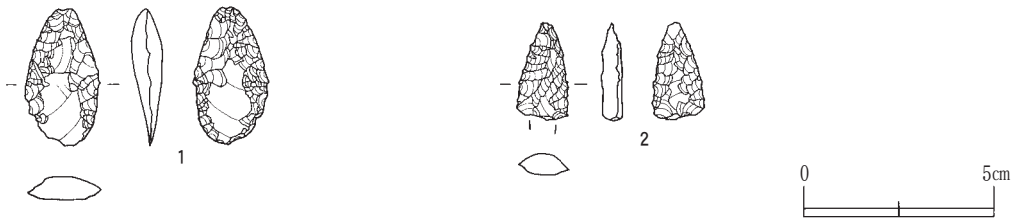
SW13
1　にぶい黄褐色土（10YR4/3）炭化物多量含む　粘性強　しまり中
2　暗褐色土（10YR3/3）炭化物・焼土粒子多量含む　粘性強　しまり強
3　褐色土（10YR4/4）砂粒少量含む　粘性強　しまり中



第４図　炭焼成遺構（ＳＷ５・６・７・13）



第５図　土坑・溝跡（ＳＫ14、ＳＤ11・12）



第６図　遺構内出土石器

第３節　中世以降の検出遺構

１　土坑

ＳＫ14(第５図)

Ｂ区中央北西よりＭＫ・ＭＬ40グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。西にはＳＷ５・ＳＷ13が隣接している。平面形は長軸1.8m×短軸1.04mの楕円形を示し、深さは0.27mである。

２　炭焼成遺構

ＳＷ５(第４図、図版２－２)

Ｂ区中央北西よりＭＬ39・40グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。ＳＷ13と切り合いそれより古い。平面形は長軸1.76m×短軸1.46mの楕円形を示し、深さは0.38mである。炭焼成遺構と考えられる。覆土には炭が混入し、一部で焼土を確認している。

ＳＷ６(第４図、図版２－２)

Ｂ区中央北西よりＭＬ40グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。東側のＳＷ５・ＳＷ13と近接し、北西にはＳＷ７が隣接している。平面形は長軸1.4m×短軸1.1mの楕円形を示し、深さは0.47mである。炭焼成遺構と考えられる。覆土には炭が混入している。

ＳＷ７(第４図)

Ｂ区中央北西よりＭＬ・ＭＭ40グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。南東にＳＷ６が隣接している。平面形は長軸1.2m×短軸１mの楕円形を示すと推定され、深さは0.3mである。炭焼成遺構と考えられる。覆土には炭と焼土が混在している。

ＳＷ13(第４図)

Ｂ区中央北西よりＭＬ40グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。ＳＷ５と切り合いそれよりも新しく、西にＳＷ６が近接している。平面形は長軸1.8m×短軸１mのイチジク形を示し、深さは0.25mである。覆土には炭と焼土が混在している。石器の総数は18点で、剥片18点が出土した。

３　溝跡

ＳＤ11(第５図、図版２－３)

Ｂ区中央北西よりＭＬ38・39、ＭＭ40グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。ＳＤ12と重複しておりそれよりも新しい。長さ5.6m× 幅0.32mで北西―南東方向の曲線を示し、深さは図のＢ―Ｂ′で0.15mである。

ＳＤ12(第５図)

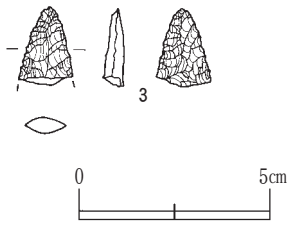
Ｂ区中央北西よりＭＬ38・39、ＭＭ40グリッドに位置しＳＤ11の下で検出した。ＳＤ11と重複しておりそれよりも古い。長さ 8ｍ×幅0.24m で北西―南東方向の曲線を示し、深さは0.34mである。

第４節　遺構外出土遺物(第７図)

出土した石器の総数は1,947点で、石鏃１点・石核７点・剥片1,939点である。

掲載した石器は石鏃(３)のみである。

石鏃の３は表面に自然面をもち、縦長剥片を素材にしたと考えられる。両面の両側縁を中心に細かく丁寧な剥離を施す。



第７図　遺構外出土石器

第１表　石器観察表

遺物番号	挿図番号	出土位置	層位	器種	石質	長さ・幅・厚さ(mm)	重量(g)	備考
1	6	ＳＸＱ３	表土	石鏃	頁岩	36 ・ 20 ・ 8	5.0	
2	6	ＳＸＱ３	表土	石鏃	頁岩	26 ・ 14 ・ 6	2.1	基部を欠損
3	7	ＬＳ56	Ⅰ	石鏃	頁岩	21 ・ 14 ・ 6	1.1	

第３章　まとめ

大沢Ｉ遺跡は、上岩川遺跡群の中で北から５番目に位置している。遺跡からは、ＳＸＱ１・２・３・10の４か所の石器集中部、ＳＫＰ４の柱穴様ピット、ＳＫ14の土坑、ＳＷ５・６・７・13の炭焼成遺構、ＳＤ11･12の溝跡を検出した。石器の総数は2,858点で、石器集中部を含む遺構内が911点、遺構外が1,947点である。石鏃・石核・剥片が出土した。

本遺跡は、北側Ａ区と南側のＢ区に分けられるが、Ａ区において４か所の石器製作跡が確認できた。これらはＳＸＱ１を除いて近接して北東―南西方向の長軸があるように見える。しかし、３遺構共北西の調査区境の断面に石器が認められることから、調査区外にもその範囲は広がる。ＳＸＱ２・３の南東側には先に述べた掘削範囲がある。以上より、ＳＸＱ２･３･10は現状より大きな分布範囲であった。ＳＸＱ１とＳＸＱ10の間にも石器が認められ、４遺構全体が削平を受けていたことからすれば、本来一つにまとまっていた可能性がある。

出土した石器は、４遺構共に３㎝以下の剥片や削片が主体で、大型の原石や分割礫などは見られない。ＳＸＱ３から石鏃２点、遺構外から石鏃１点が出土したことから、小型のトゥールなどを製作していたと思われる。

Ａ区の南東側には森林軌道が沿っているが、その南西側の断面を一部削り自然堆積土の様子を観察した。遺跡の南や西側丘陵地は、基本的に硬質泥岩層（女川層）で構成される（秋田県農政部1984）。以下に状況を簡単に記すが、大まかな観察であることを断っておきたい。

斜面Ａの軌道面より上へ１m余りの断面観察では、起伏のある泥岩層の上（一部はクラック状）に粘質土を部分的に挟みながら破砕泥岩ブロック層（破砕されたような泥岩ブロック層で、1 ～ 10㎝程が主体である）がある。この中に、10 ～ 30㎝の硬質頁岩原石が多数確認できた。この上に、黄・白色土系の粘質地山層が堆積することが斜面Ｂ・Ｃで確かめられる。

斜面Ｂの軌道面より上へ1.5m余りの断面観察では、やはり起伏のある泥岩層（大部分がクラック状）の上に比較的薄い破砕泥岩ブロック層があり、この上に白色土系の粘質地山土が堆積する。破砕泥岩ブロック層が薄いせいか、硬質頁岩の原石は確認できなかった。

斜面Ｃでは、軌道面より上に1.5m余りの北西断面とこれに直行し傾斜に沿う北東断面で観察した。これは、低い位置に起伏のある泥岩層（クラック状）の上に、破砕泥岩ブロック層が疎らな状態で確認できた。この中に明確な頁岩の原石は確認できなかった。この上に、黄・白色土系の粘質地山層が厚く堆積している状態が、斜面北東断面で確認できた。

斜面Ａ～Ｃの北西断面幅は４～５mで、その泥岩層の軌道面からの起伏は、斜面Ａ･Ｂでは１m程、斜面Ｃでは0.5m程である。この上の破砕泥岩ブロック層は、斜面Ａで厚く（0.5 ～ 1m）、斜面Ｂでは薄い（0.1 ～ 0.3m）。斜面Ａではさらに上方へ厚みを増す。この中の硬質頁岩は、旧小又川の氾濫原か、段丘礫層に関係すると思われ、上流の頁岩岩脈から流れ着いた転石と考えられる。

引用・参考文献

秋田県農政部　『土地分類基本調査森岳・羽後浜田』　1984（昭和59）年

1　遺跡遠景（北東から）

2　斜面Ａの頁岩検出状況（南東から）

1　ＳＸＱ１石器
出土状況（東から）

2　ＳＷ５～７完掘
（北東から）

3　ＳＤ１１調査風景
（南東から）

―― 大沢Ⅱ遺跡 ――

（３ＯＳⅡ）

第１章　発掘調査の概要

第１節　遺跡の概観(第１図、巻頭図版)

本遺跡は、小又川左岸にある低位段丘の縁辺にあり標高は39～40mである。遺跡は当該地域で調査を行った６遺跡のうち最も南側に位置し、北東側には大沢Ⅰ遺跡がある。調査区は長さ約55m、幅約16mの範囲で周囲の水田から約７mの比高がある。調査区の北西端は丘陵に向けてやや急な斜面となっており、その先には針葉樹が繁茂している。南東側は緩やかな斜面となり水田に接している。南西端には北西に延びる水路がある。

調査区における石器の分布状況は疎らであるが、調査区の西側では剥片や原石が多く見つかっている。原石を採掘したと思われる溝状の遺構２か所を検出した。また、中央南東部の調査区で最も突出したような所では土坑状の掘り込みを検出した。原石採掘跡の可能性のある遺構として捉えている。

調査区の中央やや東側には土器埋設遺構を検出した。住居跡の可能性を追求したが、積極的根拠が得られなかった。土器は脆く図化できないが、胎土などから縄文中期頃が想定される。北東部斜面側は緩く傾斜し、石器が出土したことから遺構の存在を想定したが、検出されなかった。逆に南西端部からは、小さいながら焼土遺構や土坑が検出された。なお、本遺跡からは石器集中部が検出されていない。

第２節　調査の方法(第１図)

発掘調査は、遺構や遺物を計画的に把握するためにグリッド法を採用した。つまり、調査区域の中央部にある工事路線内の中心杭(Ｘ＝5263.851、Ｙ＝－59184.314)を原点ＭＡ50として、国家座標第Ｘ系の座標北を基準に各４m間隔のグリッド杭を設定した。グリッド杭には、東から西へ昇順するアルファベット２文字と、南から北に昇順する算用数字を組み合わせた記号を記入し、４m方眼の南東部隅(グリッド杭)をその方眼のグリッド名とした。東西は右文字のＡ～Ｔまでを一順ごとに繰り上げ、左文字を昇順させて表現する。これらを遺構や遺物の記録作業に役立てた。

調査に当たっては、調査区の北東側から南側にかけての区域を排土置き場として利用した。大沢Ⅱ遺跡と北にある大沢Ⅰ遺跡の間は、旧水田跡地でぬかるむため排土をバックホーで敷き詰め、歩行用の連絡路として活用した。調査区には杉の根株が多く残されていたが、調査では遺構が関係する場合以外はそのまま残すことにした。

検出した遺構には、発見順に遺構の略記号と番号を付した遺構名を与え、図面や写真・遺物取り上げの整理に役立てた。ただし調査の進行に伴い、遺構の性格が異なって略記号を変更したり、欠番になったものもある。平面図や断面図などは1/20を基本にした。写真撮影は、35㎜カラーリバーサルフィルムや白黒ネガフィルムを使用した。遺物は、遺構名・グリッド名・出土層位・出土年月日などを記載して取り上げた。

第３節　調査の経過

大沢Ⅱ遺跡は、2005年４月と６月に秋田県教育委員会が、当該整備事業に係る路線内で分布調査を実施し確認した遺跡である。これを受けて、同年10月３日～同年10月14日まで秋田県埋蔵文化財センターが確認調査を実施し、2006年６月７日～ 同年６月23日にかけて発掘調査を実施した。

６月７日、調査は雑木撤去を行ってから、ベルトコンベアーの設置などの準備作業を行う。並行して、確認調査トレンチの埋土除去と表土除去を開始した。

６月15日、基本土層の写真撮影を行い、断面図を作成する。原石採掘跡と思われる溝状や土坑状の遺構を掘り進める。

６月23日、土器埋設遺構の周囲を丁寧に精査し、柱穴の有無を確認したが、明確な柱穴は確認されなかった。また、床面も確認されなかったので土器埋設遺構と判断した。一部の残務整理は残ったものの、本日で本遺跡の調査を終了した。

第４節　整理作業の方法と経過

整理作業は、当該６遺跡について一括しておこなった。出土した多量の遺物は数点の土器を除けばすべて石器である。石材原産地遺跡の性格を具体的に提示するのに、各遺跡ごとに遺構内・遺構外出土石器について、その種類を識別し数量を数え挙げることにした。

石器は定形石器・剥片・石核などに分けられるが、自然石(遺構外は除く)・分割礫なども石器と共にカウントの対象にした。調査中における小さな石器と自然石の分別は、効率化を妨げるため発掘現場では行わず整理の洗浄作業後に行い、５㎜前後の剥片も拾い上げた。また、並行して出土した石器を中心に接合作業を行った。

遺構の平面や断面図・エレベーション図などは、組み合わせて第２原図としトレースした。遺跡内から出土した定形石器は極力掲載した。

定形石器の実測に当たっては、個々の石器についてその製作過程を観察しながら進めていった。報告書掲載遺物は、実測・トレース作業の迅速化を図り、その法量を測定し一覧表にまとめた。整理済みの資料は、報告書掲載ごとにまとめてあるが、掲載遺物以外の資料も取り出し易いように収蔵している。

第２章　調査の記録

本遺跡からは原石採掘跡３か所、土器埋設遺構１基、土坑３基、焼土遺構１基を検出した。調査区は北東端と西側は緩く傾斜するが、中央部の東西はほぼ平坦である。

第１節　基本土層(第１図)

調査区の全般に土層が厚く堆積しており、基本土層は調査区でも最も平坦で広い部分の一角を選定した。

Ⅰ層　黒褐色土。３～５㎝の礫を少量含む。粘性弱、締まり弱。

Ⅱ層　暗褐色土。礫を僅かに含む。粘性弱、締まり中。

Ⅲ層　褐色土。礫を少量含む。粘性中、締まり中。

Ⅳ層　にぶい橙色土。下位に礫が多量に含む。粘性強、締まり中。

第２節　縄文時代の検出遺構と出土遺物

１　原石採掘跡

ＳＫＤ２(第２図、図版１－１)

調査区中央南西よりＭＡ49～51、ＭＢ51・52、ＭＣ52グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出した。北東にＳＫＤ７が隣接している。長さ14.8m×幅1.4mで北西―南東方向に蛇行し、深さは0.6mである。断面は「Ｕ」字状で、強い角度と弱い角度の部分がある。

ＳＫＤ５(第３図、図版１－２)

調査区中央東よりＬＳ51・52、ＬＴ51・52グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。西でＳＫＤ７と重複するが新旧関係は不明で、北にＳＲ11が隣接している。平面形は長軸4m×短軸2.2mの不整形で、深さは約1.2mである。剥片が５点出土した。

ＳＫＤ７(第３図、図版１－１)

調査区中央ＬＴ51・52、ＭＡ52・53、ＭＢ53グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。東でＳＫＤ５と重複するが新旧関係は不明である。長さ12m×　幅1.28mで北西―南東方向に蛇行し、深さは0.6mである。特にＬＴ51グリッドでは、90度の角度の屈曲を示しており人為的掘削の根拠でもある。断面は「Ｕ」字状でやや強い角度で立ち上がる。剥片が２点出土した。

２　土器埋設遺構

ＳＲ11(第４図、図版１－３)

調査区中央東よりＬＳ52グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。南にＳＫＤ５が隣接している。長軸0.41m×短軸0.31m、深さ0.2mの掘方に深鉢を埋設し炉として使用していた。脆い深鉢で、上がやや窄まるような状態で出土した。土器は図化が不可能であるが、縄文中期頃が想定される。

３　土坑

ＳＫ３（第４図）

調査区南西端のＭＤ48グリッドに位置し、Ⅲ層上面で検出した。南東にＳＮ１が隣接している。平面形は現状の径0.76mの略円形を示すと考えられ、深さは0.18mである。底面には凹凸がある。剥片が２点出土した。

ＳＫ９（第４図）

調査区南西側のＭＢ49・50グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。北側にＳＫＤ２が隣接している。平面形は長軸1.82m×短軸1.36mの不整楕円形で、深さ0.52mである。底面は平坦で、壁は北側が急角度でその他は緩い角度で立ち上がる。剥片が３点出土した。

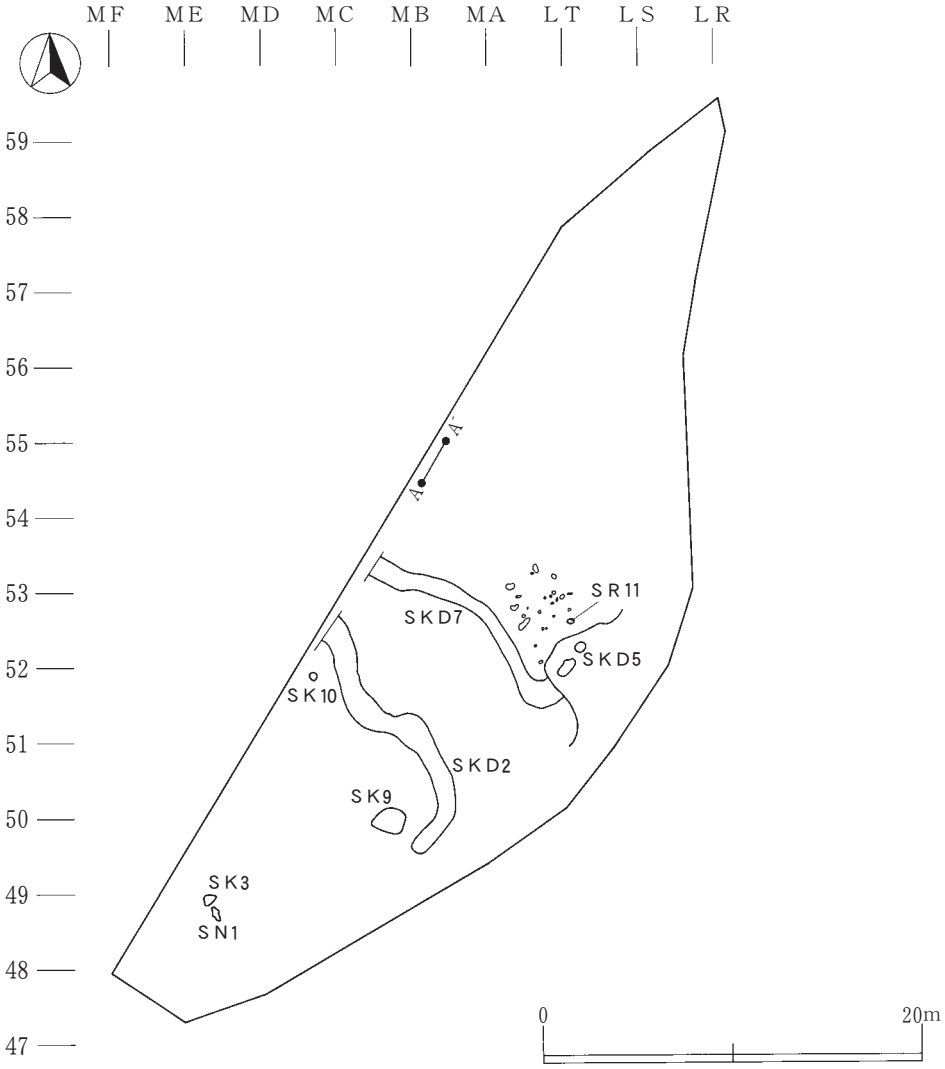
ＳＫ10（第４図）

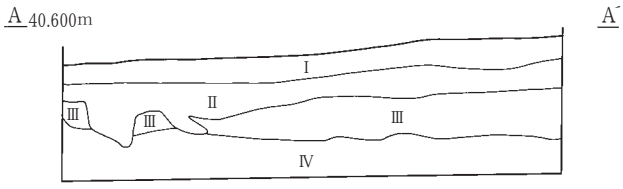
調査区中央南西のＭＣ51グリッドに位置し、Ⅳ層で検出した。東側にかけてＳＫＤ２が隣接している。平面形は長軸0.46m×短軸0.44mの不整楕円形で、深さは0.14mである。底面は平坦で壁は緩い角度で立ち上がる。剥片が３点出土した。

４　焼土遺構

ＳＮ１（第４図）

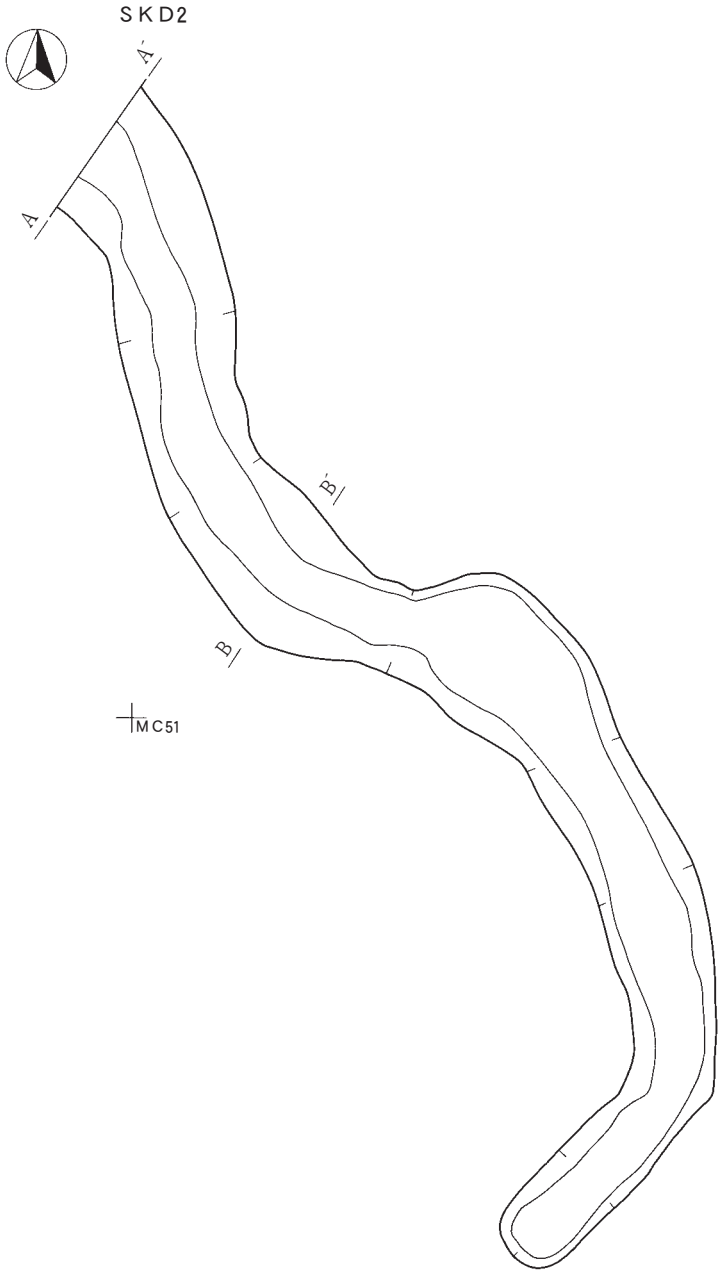
調査区南西端のＭＤ48グリッドに位置し、Ⅲ層で検出した。平面形は長軸0.8m×短軸0.38mの不整形である。石核１点・剥片が４点出土した。

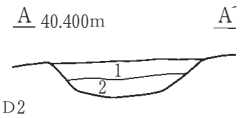




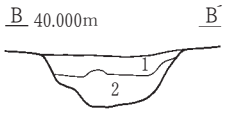
Ⅰ　黒褐色土（10YR2/2）3～5㎝　礫少量含む　粘性弱　しまり強
Ⅱ　暗褐色土（10YR3/4）礫微量含む　粘性弱　しまり中
Ⅲ　褐色土（10YR4/４）礫少量含む　粘性中　しまり中
Ⅳ　にぶい橙色土（2.5YR6/4）下位に礫多量含む　粘性強　しまり中

第１図　遺構配置図・基本層位



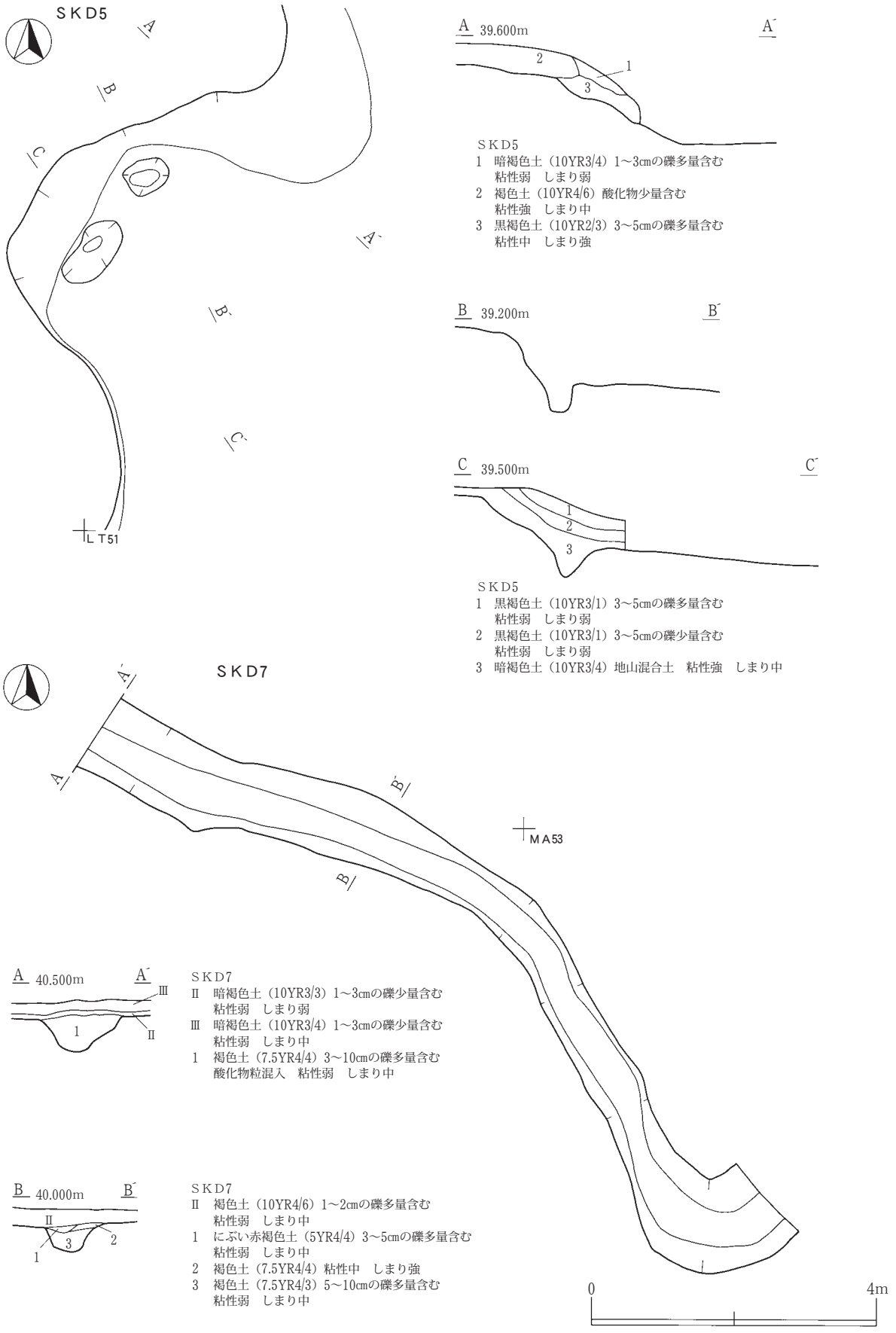


SKD2
1　暗褐色土（10YR3/3）1～3㎝の礫少量含む
　粘性弱　しまり弱
2　暗褐色土（10YR3/4）粘性弱　しまり中

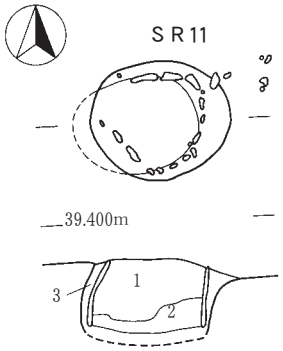


SKD2
1　黒褐色土（10YR3/2）1～3㎝の礫少量含む
　粘性弱　しまり中
2　にぶい黄褐色土（10YR4/3）3～5㎝の礫少量含む
　粘性中　しまり中

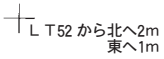
第２図　原石採掘跡（１）（ＳＫＤ２）

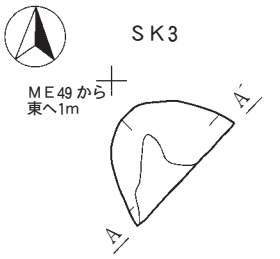


第３図　原石採掘跡（２）（ＳＫＤ５・７）

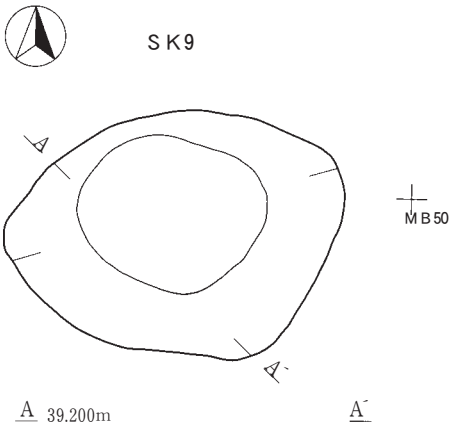


ＳＲ11
1　褐色土（10YR4/4）粘性中　しまり強
2　黒褐色土（10YR3/2）土器粉状粒子少量含む
　下部に1～2㎜の炭化物層
　粘性弱　しまり中
3　暗褐色土（10YR3/3）粘性弱　しまり中

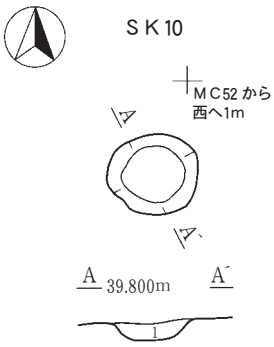




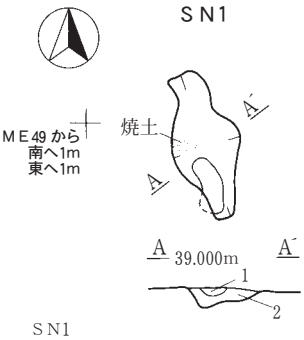
ＳＫ3
1　黒褐色土（10YR2/3）3～5㎝の礫中量含む
　粘性弱　しまり弱
2　黒褐色土（10YR2/2）炭化物少量含む　粘性弱
　しまり弱



ＳＫ9
1　黒褐色土（10YR3/1）炭化物多量含む　粘性弱　しまり中
2　黒褐色土（10YR3/2）炭化物少量含む　粘性弱　しまり中
3　黒色土（10YR2/1）炭化物多量含む　粘性弱　しまり弱
4　暗褐色土（10YR3/4）礫少量含む　粘性弱　しまり中



ＳＫ10
1　暗褐色土（10YR3/3）炭化物多量含む
　粘性中　しまり強



ＳＮ1
1　赤色土（10R5/8）粘性弱　しまり中
2　黒褐色土（10YR3/2）炭化物少量含む　粘性弱　しまり弱

第４図　土器埋設遺構・土坑・焼土遺構（ＳＲ11、ＳＫ3・9・10、ＳＮ1）

第１表　石器観察表

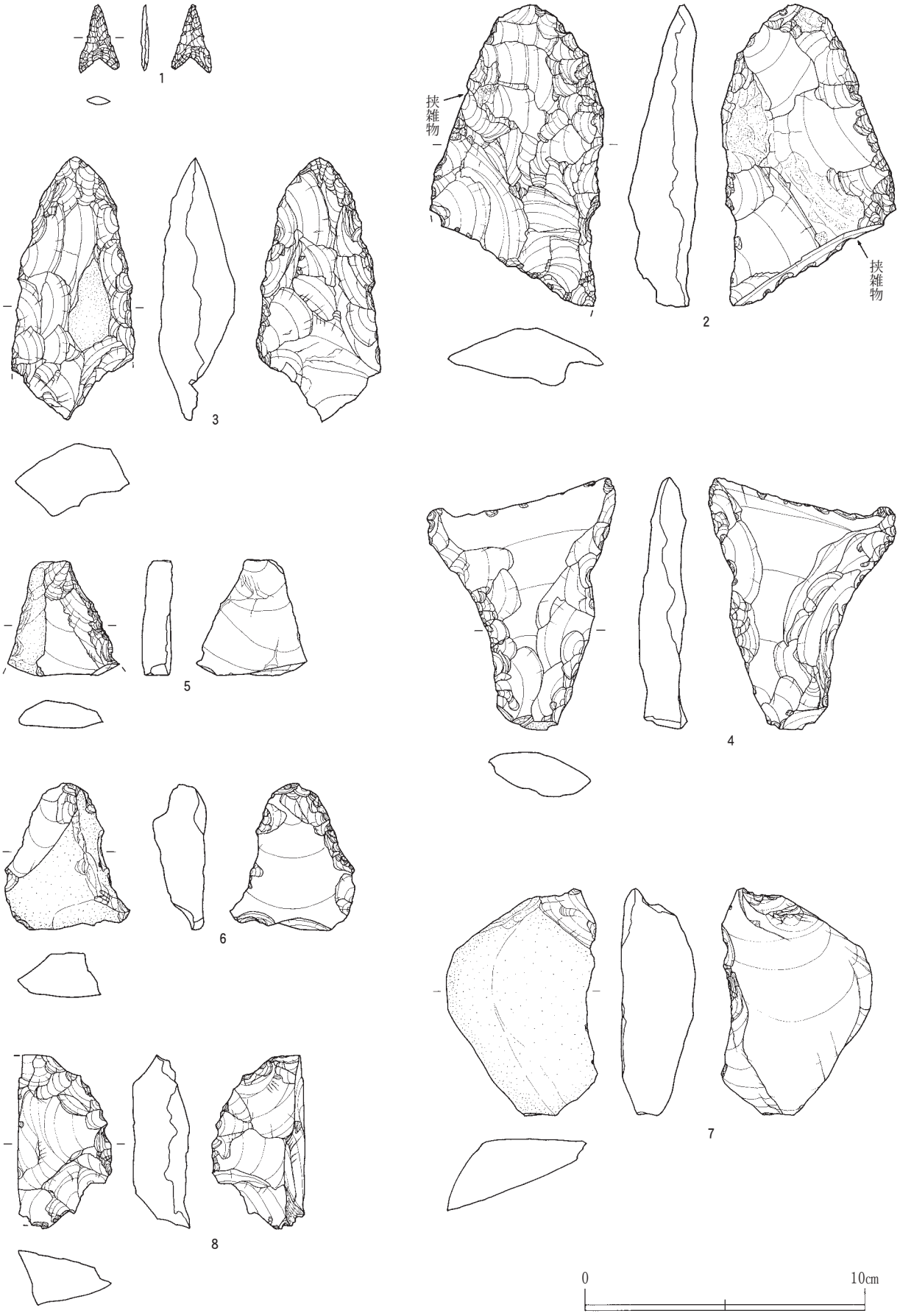
遺物番号	挿図番号	出土位置	層 位	器　種	石 質	長さ・幅・厚さ(mm)	重量(g)	備　　考
1	5	－	排土	石鏃	頁岩	25 ・ 14 ・ 3	0.6	
2	5	ＭＡ51	Ⅱ	石槍	頁岩	109 ・ 62 ・ 25	116.8	
3	5	ＬＲ53	－	石槍	頁岩	95 ・ 44 ・ 27	86.1	
4	5	ＭＤ49	Ⅱ	ﾄﾗﾝｼｪ様石器	頁岩	90 ・ 68 ・ 17	69.9	
5	5	ＬＲ54	Ⅱ	スクレイパー	頁岩	41 ・ 40 ・ 11	16.5	
6	5	ＭＤ49	Ⅱ	スクレイパー	頁岩	52 ・ 45 ・ 20	31.9	
7	5	ＭＡ50	Ⅱ	スクレイパー	頁岩	82 ・ 62 ・ 27	90.1	
8	5	ＭＤ49	Ⅱ	両面加工石器	頁岩	62 ・ 33 ・ 20	37.0	

第３節　遺構外出土石器(第５図)

出土した石器の総数は912点で、石鏃１点・石槍２点・トランシェ様石器１点・スクレイパー ３点・両面加工石器１点・二次加工ある剥片１点・石核45点・剥片856点・剥離原石２点である。

掲載した石器は、石鏃(１)・石槍(２・３)・トランシェ様石器(４)・スクレイパー(５～７)・両面加工石器(８)である。

石鏃の１は凹基式で、抉りは「Ｖ」字状で深い。表・裏両面の全体に細かく丁寧な調整を施す。石槍の２は裏面に礫皮面、表面の中央やや右下側に礫皮面直下の風化相が認められ、両面体状礫を素材にしたものと考えられる。両面の全体にやや粗い剥離を行っているが、表面左側縁と裏面右側縁には細かな調整を施す。製作途中で折損している。３は表面に礫皮面、裏面の中央部に礫皮面直下の風化相が認められ、両面体状礫を素材にしたものと考えられる。両面の両側縁を中心にやや粗い剥離を行っており、表面右側縁と裏面右側縁の剥離面は強い角度で形成される。製作途中で中央付近から折損している。トランシェ様石器の４は、表面下端が打点で裏面に主要剥離面をもつ横長剥片を素材にしている。全体が撥形で直刃を形成し、両面の両側縁に調整剥離を施している。スクレイパーの５は剥片を素材にして、表面右側縁に調整剥離を施す。６は剥片を素材にして、表面右側縁と裏面の右側縁に細かい調整を施す。７は横長剥片を素材にして、裏面左側縁に沿って縦長の剥離を行ってから、その中央やや上位に小さな剥離を施す。両面加工石器の８は、裏面が平坦で両面の全体に剥片剥離を施している。折損している。



第 5 図　遺構外出土石器

第３章　まとめ

大沢Ⅱ遺跡は、上岩川遺跡群の中で北から６番目に位置している。遺跡からは、ＳＫＤ２・５・７の原石採掘跡と推定される遺構、ＳＲ11の土器埋設遺構、ＳＫ３・９・10の土坑、ＳＮ１の焼土遺構を検出した。石器の総数は932点で、遺構内が20点、遺構外が912点である。石鏃・石槍・トランシェ様石器・スクレイパー・両面加工石器・二次加工ある剥片・石核・剥片が出土した。中期の土器も出土した。

本遺跡からは、石器集中部が確認できなかったが、原石採掘跡の可能性のあるＳＫＤ２・５・７が検出された。これらは調査区の中央にあり、ＳＫＤ７とＳＫＤ２は平坦部、ＳＫＤ５は段丘縁辺部にある。地形的には、西側丘陵から低く延びる舌状地形の先端部に当たっている。ＳＫＤ７はＳＫＤ５と切り合うが新旧は不明である。このＳＫＤ７とＳＫＤ２は、北西―南東を軸にすると北東―南西の比較では最も高まる辺りで、左右の対称形をなす。

これらの溝は変則的な屈曲部と、総体には南東に僅かな傾斜を示すようであるが、ＳＫＤ２に見られるように先端が留まり、水が流れるような状態を示していない。また、底面や壁が明確に整っていた状態でもなく、土坑が連結するような状況でもなかった。深さは深いところでは１m前後もあり、黒色土より下の掘り込みは、黄色土系の地山土と大沢Ｉ遺跡で観察できた破砕泥岩ブロック層である。この層は、大沢Ｉ遺跡Ａ斜面の断面では、良質な硬質頁岩が多く含まれていた層である。これらの要因から、人為的な溝で原石採掘跡の可能性を想定したが、硬質頁岩は確認できなかった。

一方、ＳＫＤ５においても、地山に硬質頁岩は確認できなかったが、良質な粘土層も確認できなっかたので、周辺遺跡の地質環境(秋田県農政部1984)や剥片石器の出土状況から、原石採掘跡に想定したものである。先のＳＫＤ７・２と共に可能性のある原石採掘跡として捉えておきたい。

また本遺跡では、縄文中期に想定した土器埋設遺構を検出した。埋設土器には、文様がなく明確に中期の土器とは言い切れないが、胎土や焼成から中期と想定したものである。遺構配置図に示したように、北西側に小さな撹乱された穴が集中しており、小さな柱穴が重複している可能性も考えられたが、明確な壁や床面が確認できないことから、土器埋設遺構と考えた。この遺構を使用した人々が、原石採掘跡と想定した遺構群を掘削したものではないだろうか。

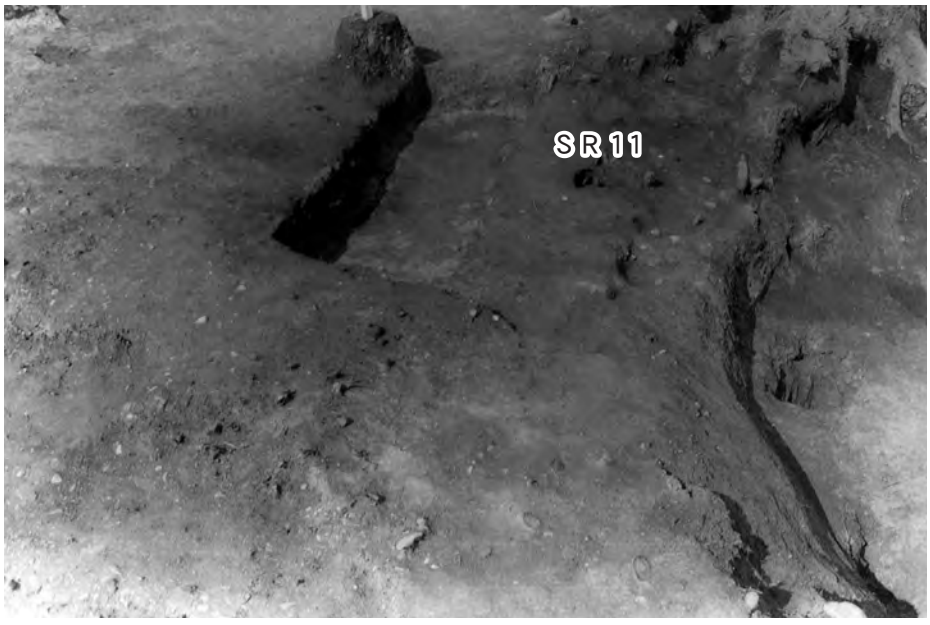
本遺跡出土石器の中には、トランシェ様石器が存在する(第５図－４)。この刃部は幅が広く、撥形を呈している。正面刃部に特徴をもち、命名者は「刃部は第一次加工でできた鋭い縁辺が、そのまま使用されているところがこの石器のもっとも特徴的なところである。」としている(富樫1976)。つまり、直刃状で正面刃部を急角度につくることを特徴とする。トランシェ様石器は、一般に早期の年代が与えられているが、先の資料は直刃状であるものの、刃部が急角度を保持していないことから後出と考えられる。

引用・参考文献

秋田県農政部　『土地分類基本調査　森岳・羽後浜田』　1984(昭和59)年
富樫泰時　「トランシェ様石器」『東北考古学の諸問題』　1976(昭和51)年

1　ＳＫＤ２・７断面
（北西から）

2　ＳＫＤ５完掘
（南西から）



3　ＳＲ１１と周辺
（南西から）

—— 別　編 ——

1　放射性炭素年代測定結果報告書
（AMS測定）
上岩川地内遺跡群

（株）加速器分析研究所

（1）　遺跡の位置

上岩川地内遺跡群は、秋田県山本郡三種町上岩川（北緯40° 2′ 50″、東経140° 8′ 25″）に所在する。

（2）　測定の目的

上岩川地内遺跡群は縄文時代の遺跡が主体である。埋設土器が出土した樋向Ⅲ遺跡や大沢Ⅱ遺跡のある程度の年代は推定できたが、それ以外の遺跡は年代を推定できる遺物がほとんど出土していない。そのため遺構覆土から出土した炭化物の年代測定を行うことによって時期を確定し、遺構の年代や新旧関係を把握することを目的とする。

（3）　測定対象試料

測定試料は、樋向Ⅰ遺跡ＳＮ13底部から出土した炭化物（試料１：IAAA-61339）、樋向Ⅲ遺跡ＳＮ９焼土内の炭化物（試料２：IAAA-61340）、大沢Ⅰ遺跡ＳＷ7底部から出土した炭化物（試料３：IAAA-61341）、ＳＷ5底部から出土した炭化物（試料４：IAAA-61342）、大沢Ⅱ遺跡ＳＮ1焼土内の炭化物（試料５：IAAA-61343）、ＳＲ11底面直上から出土した炭化物（試料6：IAAA-61344）、鹿渡渉Ⅱ遺跡ＳＸ45（倒木痕）底部直上から出土した炭化物（試料7：IAAA-61345）、合計７点である。試料は採取後、アルミホイルに包まれ、さらにビニール袋に入れて保管された。

（4）　化学処理工程

1）メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。

2）AAA（Acid Alkali Acid）処理。酸処理、アルカリ処理、酸処理により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では0.001 ～ １Ｎの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では１Ｎの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。

3）試料を酸化銅１gと共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で２時間加熱する。

4）液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO_2）を精製する。

5）精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（還元）し、グラファイトを作製する。

6）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着し測定する。

（５）測定方法

測定機器は、3MVタンデム加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。134個の試料が装填できる。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。また、加速器により^{13}C/^{12}Cの測定も同時に行う。

（６）算出方法

１）年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。

２）BP年代値は、過去において大気中の炭素14濃度が一定であったと仮定して測定された、1950年を基準年として遡る放射性炭素年代である。

３）付記した誤差は、次のように算出した。

複数回の測定値について、χ^2検定を行い測定値が１つの母集団とみなせる場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、みなせない場合には標準誤差を用いる。

４）δ^{13}Cの値は、通常は質量分析計を用いて測定するが、AMS測定の場合に同時に測定されるδ^{13}Cの値を用いることもある。

δ^{13}C補正をしない場合の同位体比および年代値も参考に掲載する。

同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差（‰；パーミル）で表した。

$$\delta^{14}C = [(^{14}A_S - {}^{14}A_R) / {}^{14}A_R] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}C = [(^{13}A_S - {}^{13}A_{PDB}) / {}^{13}A_{PDB}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、$^{14}A_S$：試料炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_S$または$(^{14}C/^{13}C)_S$

$^{14}A_R$：標準現代炭素の^{14}C濃度：$(^{14}C/^{12}C)_R$または$(^{14}C/^{13}C)_R$

δ^{13}C は、質量分析計を用いて試料炭素の^{13}C 濃度（$^{13}A_S = {}^{13}C/^{12}C$）を測定し、PDB（白亜紀のベレムナイト（矢石）類の化石）の値を基準として、それからのずれを計算した。但し、加速器により測定中に同時に^{13}C/^{12}Cを測定し、標準試料の測定値との比較から算出したδ^{13}Cを用いることもある。この場合には表中に〔加速器〕と注記する。

また、Δ^{14}Cは、試料炭素が$\delta^{13}C = -25.0$（‰）であるとしたときの^{14}C濃度（$^{14}A_N$）に換算した上で計算した値である。（１）式の^{14}C濃度を、δ^{13}Cの測定値をもとに次式のように換算する。

$$^{14}A_N = {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))2$$

（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{12}C$を使用するとき）

または

$$= {}^{14}A_S \times (0.975 / (1 + \delta^{13}C / 1000))$$

（$^{14}A_S$として$^{14}C/^{13}C$を使用するとき）

$$\Delta^{14}C = [(^{14}A_N - {}^{14}A_R) / 14A_R] \times 1000 \text{（‰）}$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなる。多くの場合、同位体補正をしないδ^{14}Cに相当するBP年代値が比較的よくその貝と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致する。

^{14}C濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC（percent Modern Carbon)がよく使われており、Δ^{14}Cとの関係は次のようになる。

$$\Delta^{14}C = (pMC / 100 - 1) \times 1000 \ (‰)$$

$$pMC = \Delta^{14}C / 10 + 100 \ (\%)$$

国際的な取り決めにより、このΔ^{14}CあるいはpMCにより、放射性炭素年代(Conventional Radiocarbon Age；yrBP)が次のように計算される。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}C / 1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (pMC / 100)$$

5）^{14}C年代値と誤差は，1桁目を四捨五入して10年単位で表示する。

6）較正暦年代の計算では、IntCal04データベースを用い、OxCalv3.10較正プログラムを使用した。

（7）測定結果

樋向Ⅰ遺跡ＳＮ13底部から出土した炭化物（試料１：IAAA-61339）は930±40yrBPの^{14}C年代であり、平安時代後期に相当する。樋向Ⅲ遺跡ＳＮ9焼土内の炭化物（試料２：IAAA-61340）は1770±40yrBPの^{14}C年代であり、古墳時代前期に相当する。大沢Ⅰ遺跡ＳＮ７底部から出土した炭化物（試料３：IAAA-61341）は810±40yrBPの^{14}C年代であり、鎌倉時代前半に相当する。ＳW5底部から出土した炭化物（試料４：IAAA-61342）は850±30yrBPの^{14}C年代であり、平安時代末から鎌倉時代初頭に相当する。大沢Ⅱ遺跡ＳＮ1焼土内の炭化物（試料5：IAAA-61343）は1840±40yrBPの^{14}C年代であり、弥生時代末から古墳時代初頭に相当する。ＳＲ11底面直上から出土した炭化物（試料６：IAAA-61344）は1500±40yrBPの^{14}C年代であり、飛鳥時代前半に相当する。鹿渡渉Ⅱ遺跡ＳＸ45（倒木痕）底部直上から出土した炭化物（試料７：IAAA-61345）は780±30yrBPの^{14}C年代であり、鎌倉時代前半に相当する。

参考文献

Stuiver,M.and Polash,H.A.(1977)Discussion:Reporting of ^{14}C data.*Radiocarbon*,19:355-363

第１表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

IAA Code No.	試料番号	Libby Age (yrBP)	補正なし (yrBP)	$\delta^{13}C$	暦年較正１σ(yrcalBP)	暦年較正２σ(yrcalBP)
IAAA-61339	1	930±40	900±30	−23.12±0.75	1030AD-060AD(12.4%) 1070AD-1160A（55.8%）	1020AD-1180AD(95.4%)
IAAA-61340	2	1770±40	1770±30	−24.96±0.79	210AD-340AD(68.2%)	130AD-350AD(93.9%) 360AD-380AD（1.5%）
IAAA-61341	3	810±40	780±30	−23.19±0.77	1205AD-1265AD(68.2%)	1160AD-1280AD(95.4%)
IAAA-61342	4	850±30	870±30	−26.04±0.72	1160AD-220AD(68.2%)	1052AD-1090AD(7.8%) 1120AD-1140AD(1.9%) 1150AD-1260AD(85.8%)
IAAA-61343	5	1840±40	1830±40	−24.26±0.72	130AD-225AD(68.2%)	70AD-250AD(95.4%)
IAAA-61344	6	1500±40	1490±30	−24.16±0.81	540AD-610AD(68.2%)	430AD-490AD(11.0%) 530AD-650AD(84.4%)
IAAA-61345	7	780±30	740±30	−22.03±0.71	1220AD1270AD(68.2%)	1185AD-1200AD（2.6%） 1205AD-1285AD(92.8%)

２　石核の分類と剥片剥離技術について

（１）石核の分類

鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡（上岩川地内遺跡群）からは多量の石器が出土した。出土石器の多くは剥片であるが、石核やトゥールも目立って出土しており、石器製作を行っていたことが理解できる。これらの遺跡は、原石の採掘とそこでの石器製作に関わる石材原産地遺跡としての性格をもつ。ここでは石核の分類を行い、そこから類推される所見について述べる。

剥片剥離技術を把握するには、剥片剥離作業を作業手順に従って系統的に説明することが必要であるが、ここでは、石核の観察と分類から剥片剥離技術の解釈に少しでも近づきたいと考えている。分類に当たっては、剥片剥離技術の理解を深めるための分類であることを予め確認しておきたい。石核による剥片剥離技術の観察視点として、剥離の切り合いによる剥片剥離過程の把握は勿論であるが、これらと関連した石核の作業面と非作業面の相関関係が素材の形と共に重要な要素になるものと考えられる。したがって、石核の分類に当たっては、形状以外に作業面と非作業面を考慮した分類を目指したい。

①　両面体縁辺加工石核

両面体状の自然礫を素材として、縁辺に連続的な剥片剥離を行う。剥離が縁辺のすべてもしくはほとんどに及ぶものをＡ類、縁辺の局部に止まるものをＢ類とする。前者は素材の形によって円形・楕円形などの形状がある。後者は剥離の在り方によって縦長・横長などの形状がある。

②　凹面状石核

長軸値と短軸値の比率が小さい面の全面もしくはほぼ全面に、中心に向かう連続的な剥片剥離（求心状剥離）を行う。この面（求心状剥離面）以外が自然面もしくはほぼ自然面のものをＡ類、求心状剥離面の対面に自然面を残し、それらの中間に求心状剥離面側から求心状剥離以前の連続的な剥片を伴

うものをＢ類とする。求心状剥離面の形状は素材によって規定され、楕円形・方形・三角形など様々である。

③　舟底状石核

長軸値と短軸値が比率が大きい細長い平坦部(甲板面)と扁平な両面体で構成され、主として礫分割面の甲板から、連続的な剥片剥離を行う。甲板面が分割状態をＡ類、そこに剥離を施すものをＢ類とする。

④　その他の石核

特徴的な①～③以外の石核を一括した。この中には、やや大きめな剥片を素材にして、剥片剥離を行っているような場合もあるが、分割礫との識別が不明瞭であるので新たな分類は設けていない。

(２)剥片剥離技術

前項では、石核の特徴から両面体縁辺加工石核Ａ・Ｂ、凹面状石核Ａ・Ｂ、舟底状石核Ａ・Ｂを抽出した。これらの石核のうち、両面体縁辺加工石核Ａ・Ｂは、共に両面体状の自然礫を素材にしており、長さが10㎝前後や10㎝以上の比較的大振りのものが目立つ。なぜ、大振りの石核が遺跡に残されているのか、石器製作過程途中の何らかのアクシデントを除いて具体的に考えてみる。

遺跡に残された両面体縁辺加工石核Ａ・Ｂを観察すると、基本的に頁岩の風化相(褐色面のものや灰色系でも風化質のものなど)を嫌い、その内にある灰白～灰～灰黒色の硬質で滑らかな部分を獲得することを目指している傾向が窺える。たとえば、樋向Ⅰ遺跡32は、風化相を除く灰色の範囲はａ面右上の横４㎝×縦２㎝の大きさで、今後、剥片剥離を行っても良質な剥片は見込めない。つまり初期の剥片剥離は、礫皮面を含む風化相の除去と良質面およびそれで推定できる良質部分の容積算定のための剥離と理解される。これを仮に初期剥離とすれば、32は初期剥離を行ったもので、素材獲得のための剥片剥離とは区別しなければならない。前者を剥片剥離過程Ａ、後者を剥片剥離過程Ｂとして、風化相をもつ頁岩の剥片剥離過程を２段階に概念づけておきたい。

以上を念頭に置いて改めて観察すれば以下のことが想定される。鹿渡渉Ⅱ遺跡９は、剥離面のすべてが褐色の風化面で、その時点で剥片剥離Ｂ段階を断念した(①)。樋向Ⅰ遺跡29 は、全体に薄く大きめの剥離を得ようとすれば、礫皮面や風化相が伴うため、その時点で断念した(②)。同遺跡52は、前述のような理由による(③)。同遺跡33は、灰色の良質な部分に挟雑物を含んでおり、Ｂ段階を断念する要因でもあり得た(④)。同遺跡35は、全体に風化相が厚くａ面下端の灰色面に横４㎝×縦1.5㎝の痘痕状の部分があり、その時点で同じく断念した(⑤)。以上の①～⑤は、風化相の在り方や、個別要因で、剥片剥離過程Ｂを断念したと思われる例であり、他で分類した石核にも当てはまる。このような類例から類推すると、両面体縁辺加工石核Ａと両面体縁辺加工石核Ｂの相違は、内部石質の様子を知る手段の相違に拠るもので、取り立てて剥片剥離過程の違いを想定させるものではないことが理解される。ちなみに、両面体縁辺加工石核Ａ・Ｂの交互に剥離を行う剥片剥離技術は、草創期以来の石槍などの製作技術としても存在しており、上岩川地内では剥片剥離過程Ｂとして存在していたものと考えられる。事実、鹿渡渉Ⅱ遺跡の接合資料Ａ・Ｂ・Ｃによってそのことは確かめられる(第９～11図)。

次に凹面状石核を取り上げ、Ａ類・Ｂ類について検討する。凹面状石核は求心状剥離を行うが、その始まりは基本的に平坦な分割面が望ましい。これらの石核は、総体に厚さに対する求心状面径の比

率が大きい浅い椀形や皿状のものが目立つが、その比率の小さい角錐状のものがある(鹿渡渉Ⅱ遺跡12・樋向Ⅱ遺跡６・樋向Ⅲ遺跡29・同56)。凹面状石核Ａは風化相がほとんどないか薄い傾向にある。これに対して、求心状剥離以前の剥離をもつＢは、風化相が厚い傾向にある。すなわち、風化相の厚い石材は、基本的に風化相を取り除きながら求心状の剥片剥離を行ったものと考えられる。その他、礫皮面の除去や求心状剥離の打点を用意するために行われた剥離も考慮される。

次に舟底状石核を検討する。樋向Ⅲ遺跡54は甲板面の観察では、左の縁辺を除いた風化相はほぼ１㎝の厚さである。下端の風化相を除去して中心部の良質な部分で連続的な剥片剥離を行った例である。舟底状石核は、一部甲板面に剥離施した例(樋向Ⅲ遺跡55)を含んで、６つの資料を掲載した(鹿渡渉Ⅱ遺跡16・樋向Ⅰ遺跡11・同12・同18・樋向Ⅲ遺跡54)。このうち鹿渡渉Ⅱ遺跡16は、甲板面以外の両面で連続的な剥片剥離を行った例である。舟底状石核の分割面は剥片の打面として有効であるが、最も注意すべきことは、自然礫の中央にある良質な部分を分割面で判断できる点である。このことは、おそらく凹面状石核においても同じように重視された点だろう。

凹面状石核と舟底状石核は、はじめに自然礫の内部石質の観察があり(ア)、次に風化相の剥片除去を行い(イ)（風化相が薄ければそれを省略)、次に良質部分の連続的な剥片剥離を行った(ウ)ものである。これらの剥片剥離工程は、両面体縁辺加工石核Ａ・Ｂにおける剥片剥離技術２工程の、剥片剥離過程Ａはイに、同過程Ｂはウに対応し、両面体縁辺加工石核Ａ・Ｂの剥片剥離技法とは異なるア段階が加わった技法と考えることができる。これらは、石材の形状(扁平かそうでないのか)によって、使い分けられた類似した剥片剥離技術とみられる。したがって、凹面状石核と舟底状石核から導かれた剥片剥離技法を、６遺跡の調査にちなんで前者を上岩川Ａ型(タイプ)、後者を上岩川Ｂ型(タイプ)と把握しておきたい。これらは、比較的厚い風化相をもつ、石材原産地遺跡特有の剥片剥離技法と考えることができる。

上岩川遺跡群からは、石器製作に伴う残滓が多量に出土しているのに対して、トゥール類は極めて少ない。これは、主として原石採取と初期の剥片剥離のみが遂行された石材原産地遺跡の一般的な特性であり、主に集落内で製作されたトゥールの素材は、原産地の原石を加工して集落内へ運び込まれたことにほかならない。したがって、本項で検討した剥片剥離技術を用いてどのようなトゥールを製作したのかは当遺跡群のみからは判断しがたく、今後、同時期の周辺集落との比較分析を通じて明らかにしていきたい。

報 告 書 抄 録

ふりがな	かどわたりにいせき・とよむかいいちいせき・とよむかいにいせき とよむかいさんいせき・おおさわいちいせき・おおさわにいせき
書名	鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡・樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡
副書名	高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第436集
編著者名	利部　修　菅原幹夫　今野沙貴子
編集機関	秋田県埋蔵文化財センター
所在地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地　　TEL　(0187) 69-3331
発行年月日	西暦2008年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
鹿渡渉Ⅱ（かどわたり に）	秋田県山本郡（あきたけんやまもとぐん） 三種町上岩川字（みたねちょうかみいわかわあざ） 鹿渡渉1-23外（かどわたり ほか）	05348	348-	40° 02′ 59″	140° 08′ 57″	20060607 ～ 20060725	1,730	高速交通関連道路整備事業県道能代五城目線に係る事前発掘調査
樋向Ⅰ（とよむかい いち）	秋田県山本郡（あきたけんやまもとぐん） 三種町上岩川字（みたねちょうかみいわかわあざ） 樋向107外（とよむかい ほか）	05348	348-	40° 02′ 48″	140° 08′ 46″	20060726 ～ 20060911	3,300	
樋向Ⅱ（とよむかい に）	秋田県山本郡（あきたけんやまもとぐん） 三種町上岩川字（みたねちょうかみいわかわあざ） 樋向32-1外（とよむかい ほか）	05348	348-	40° 02′ 44″	140° 08′ 44″	20060725 ～ 20060911	290	
樋向Ⅲ（とよむかい さん）	秋田県山本郡（あきたけんやまもとぐん） 三種町上岩川字（みたねちょうかみいわかわあざ） 樋向14-1外（とよむかい ほか）	05348	348-	40° 02′ 41″	140° 08′ 43″	20060725 ～ 20060911	950	
大沢Ⅰ（おおさわいち）	秋田県山本郡（あきたけんやまもとぐん） 三種町上岩川字（みたねちょうかみいわかわあざ） 大沢156外（おおさわ ほか）	05348	348-	40° 02′ 37″	140° 08′ 37″	20060626 ～ 20060721	1,170	
大沢Ⅱ（おおさわ に）	秋田県山本郡（あきたけんやまもとぐん） 三種町上岩川字（みたねちょうかみいわかわあざ） 大沢105外（おおさわ ほか）	05348	348-	40° 02′ 33″	140° 08′ 35″	20060607 ～ 20060623	600	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鹿渡渉Ⅱ	石器製作跡	縄文	石器集中部　13か所 土坑　1基	石核・石鏃 剥片石器	頁岩原産地遺跡の石器製作跡や原石採掘跡が明らかになり、土器埋設遺構などから縄文時代前期～中期の時期が想定できた。石核の観察から、自然礫の良質な部分をいち早く見極める石材原産地ならでわの剥片剥離技法が確かめられた。
樋向Ⅰ	石器製作跡	縄文	石器集中部　13か所 原石採掘跡　1か所 炭焼成遺構　1基	石核・石鏃 スクレイパー 剥片石器	
樋向Ⅱ	石器製作跡	縄文	柱穴様ピット　2基 性格不明遺構　4基	石核・石槍・敲石	
樋向Ⅲ	石器製作跡	縄文	石器集中部　5か所 原石採掘跡　5か所 土器埋設遺構　1基 焼土遺構　1基 土坑　2基	石核・石鏃・石槍 剥片石器	
大沢Ⅰ	石器製作跡	縄文	石器集中部　4か所 柱穴様ピット　1基 炭焼成遺構　4基 土坑　1基 溝跡　2条	石核・石鏃 剥片石器	
大沢Ⅱ	石器製作跡	縄文	原石採掘跡　3か所 土器埋設遺構　1基 土坑　3基 焼土遺構　1基	石槍・石鏃 スクレイパー	

秋田県文化財調査報告書第436集
鹿渡渉Ⅱ遺跡・樋向Ⅰ遺跡・樋向Ⅱ遺跡
樋向Ⅲ遺跡・大沢Ⅰ遺跡・大沢Ⅱ遺跡
－高速交通関連道路整備事業
県道能代五城目線に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－

印刷・発行　平成20年３月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014－0802　大仙市払田字牛嶋20番地
TEL(0187)69－3331　FAX(0187)69－3330

発　　行　秋田県教育委員会
〒010－8580　秋田市山王３丁目１番１号
TEL(018)860－5193

印　　刷　株式会社三森印刷